

鎮守府の床屋

おかび1129

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ズタボロに疲弊したとある鎮守府に所属する艦娘たちと、その鎮守府で店を開くことになった床屋さんの、のどかかつ戦時中な日々を描いた話です。

轟沈描写を含みますのでご注意ください。

色々とカツカツでピンチな鎮守府ですが、

そういうもんだと思っていただければ幸いです。

またその割にのどかなところですが、

そういうもんだと思っただければ幸いです。

また、作者は床屋さんではない為理解に乏しい面がございますが、そちらも大目に見ていただければと思います。

球磨好きの方、どうかひとつお手柔らかにお願い致します。

3 / 18 追記

『番外編 〽最期〽』を公開します。

本編では触れなかった轟沈の瞬間の話です。

本編に比べてやや辛い内容になってます。ご注意くださいませ。

3 / 21 追記

『番外編 〽夜戦トーナメント〽』を公開します。

全員が揃っていた時の、ある日の騒動を描きました。

本編に比べてかなりコメディ色の強い内容になってます。

また、今回は球磨はヒロインではなくラスボスです。

3 / 22 追記

『番外編 喫茶店のマスター』を公開します。

主人公はハルでも球磨でもなく、弱々しい大学生のトモくんです。トモくんから見た北上とハルのその後をご覧くださいただければ幸いです。

12/5追記

前日譚『星がこぼれる音を聞いたから』終了しました。

提督さんと隼鷹さんの馴れ初めです。よかったらご覧くださいまし。

<https://novel.syosetu.org/105199/>

なおこのお話は、下記サイトで同時掲載しています。

[pixiv \[http://www.pixiv.net/series.php?id=667373\]](http://pixiv.net/series.php?id=667373)

暁 [<http://tna.g.me/Chmwmw>]

目次

前編

1. 初対面はコークスクリュー | 1
2. 最初の客 | 4
3. 賑やかな人たち | 21
4. 初戦 | 39
5. 拉致。そして昼寝。 | 48
6. 戦後に向けて……職業調査 | 58
7. 提督だったら……いいよ | 70
8. 冗談はクレールだけにしろ | 84
9. 季節外れの恐怖 | 96
10. 祭だ祭だっ!! (前) | 114
11. 祭だ祭だっ!! (後) | 129
12. 忘れていたこと | 148

後編

1. ひとそれぞれ | 150
2. 合同作戦 | 164
3. 返事をしろ (前) | 174
4. 返事をしろ (後) | 179
5. ハッピーハロウィン!! | 192
6. カウントダウン | 212
7. 最後の客 | 232
8. 約束の行方 | 251
9. 店の名前は…… | 261

番外編 〜最期〜

帽子	267
閉じた門	275
私が守っていたもの	282
同じことが出来た	293
あたしの望み	302
番外編　　～夜戦トーナメント～	
お姫様はハル	311
一人前のれでいーvs海の向こうから来た日本人	322
妖怪夜戦女vs桜の木の下で眠る獅子	326
ハル、将来の危機	329
決勝戦・ラストバトル	334
ハルの膝は誰のモノか	343
番外編　　～喫茶店のマスター～	
前編	349
後編	361

前編

1. 初対面はコークスクリュー

自分がかつて通っていた小学校の正門のような年季の入ったポロスの正門を前に、俺は自分が持っていた鎮守府イコール最先端技術が所狭しと並んだ軍事基地……というイメージを変えざるを得なかった。

「やば……鎮守府ってこんなボロいところだったのか……」

深海棲艦と人類が戦い始めてもうずいぶん経つ。俺は自分の床屋を出すにあたり、自分の故郷から離れたこの鎮守府を選択した。確かに以前から貯金をしていたとはいえ、開店資金が乏しかった俺にとって、店舗の無料貸与でなく日々の売上にプラスして危険手当を毎月くれるという好待遇はありがたい。激戦地ゆえの好待遇という話だったが、それでも一刻も早く店を出して独り立ちしたかった俺にとってはありがたい話だった。

おえらいさんの話によると、鎮守府ってのは前線基地というよりは在りし日の米軍基地みたいな施設だそうだ。鎮守府には深海棲艦に唯一対抗し得る存在と言われている『艦娘』とかいう女の子たちが在籍していて、日々深海棲艦の脅威から俺達の平和と安全を守ってくれているらしい。化け物と戦える女ってどんなゴツい女なんだか……。

今回、その艦娘たちの慰安目的でこの鎮守府に床屋を建てる事になった。そんな募集要項が、自分の店を出そうと考えていた俺の目に止まった。思い立ったが吉日で軍の募集に応募した結果トントン拍子で話が進み、ついに鎮守府内に自分の店を出せることが決まった。

そして今日から俺は、晴れて正式にこの鎮守府内の床屋『バーバーちよもらんま』の店長として赴任することになる。店の名前が若干おかしいのは、今は亡きおれのじい様が『いつかチョモランマに登ってみたいなあ……』と耄碌しながら言っていたのを覚えていたからだ。おかしい名前なのは自覚してる。笑うな。

「こんちわー。バーバーちよもらんまの店長の吉田ハルです」

正門前の守衛室らしき部屋の窓を叩き、そう呼びかけるが返事はない。というか部屋の中に人の気配がまったくない。改めて窓ガラスを軽くノックしてみるが、返ってくるのは静寂ばかりで人の気配すらない。鎮守府って最新機密満載の軍事施設じゃないのか？ これじゃただのやる気ない小学校だぜ？ そら確かに一応門の扉は閉まってるけど、試しにちよつと扉を押してみたら簡単に開きやがったし……

軍事施設というにはガバガバなセキュリティに混乱しながら正門の扉を開くと、そこにいたのはセーラー服を来てやたらでつかいアホ毛を携えた、16歳ぐらいの女の子だった。いきなり出てくるから一瞬変な声が出た。

「へあつ?!」

「どちらさまクマ?」

「あ、ああ……:今日からバーバーちよもらんまの……」

「ここは関係者以外立入禁止クマよ?」

「いやだからバーバー……」

「怪しいヤツだクマ。不審人物クマ?」

「いやいやそう聞かれて『その通りですキリッ』とか答えるアホはおらんだらう」

「なるほど。確かにそのとおりだクマ」

いちいち語尾に変な言葉をつけながら、その女の子はジト目で俺を見据える。よく見ると巨大なアホ毛が俺に切られたがっているようにうにうにと動いていた。何なのこの子のアホ毛キモいんですけど。

「とりあえずちよつとこつち来るクマ」

その女の子はジト目のまま扉を開き、ちよいちよいと俺に手招きをして鎮守府に招き入れた。

「なんだよ立入禁止なんじゃないの?」

「そういう揚げ足取りはいいから早くこつち来るクマ」

「ほいほい」

女の子の手招きに応じて、俺が敷地内に入ったその瞬間だった。

「隙ありだクマツ!!」

その子は俺の右手を取ると……

「うおッ?!」

「覚悟するクマ不審者ああああアアッ!!」

素早く俺の懐に入り込み、女の子の癖に有り余るパワーで俺を一本背負いで投げやがった。投げられた俺は元々運動が苦手なこともあり、受け身も取れずモロに地面に叩きつけられ、痛みで一瞬息が止まった。

「うがッ?!! いでッ! マジいてええ?!!」

そうして俺が地面の上でジタバタしながら痛みを耐えていると、この女の子は思いつき握りしめた自身の右拳を……

「クマッ!」

「がふうッ?!!」

思いつき振りおろし、俺の腹にえぐり込むように刺し込んできやがった。『ドフッ』という音と共にコークスクリュー気味に突き刺さった拳のおかげで、俺の肺の中の空気はーシーシー残らず絞りだされ、おれは呼吸がままならなくなった。

「かひゅー……かひゅー……」

「ふっふっふっ……このクマが不審者を成敗したクマッ!!」

気を失う寸前、そんなセリフが聞こえてきた。だから不審者じゃない……説明させろ……と言いたかったのだが……言おうとしても、呼吸という人間にとって最も大切な行動が行えなくなっていた今、言葉を発するなんて高等な行為が行えるはずがない。俺の意識はそのまま別の世界に旅立っていった。

気のせいだと思いたいが、気を失う寸前、死んだじい様が川の向こう側でこの女の子と踊っている姿が見えた気がした。じい様……そんなところでその女とツイストなんて踊ってないで、孫の俺を助けて……

『コラーッ!! 球磨! その人は……』

『クマッ?!!』

これが、俺と球磨との出会いだった。

2. 最初の客

中々に激しいお出迎えを受けた俺は、そのまま意識を失ったらしい。気がついた時、俺は鎮守府施設内の医務室で寝かされていた。意識が戻った俺はそのまま執務室に連れて行かれ、この鎮守府の最高責任者である提督にまずは頭をこれでもかと下げられた。ファーストインプレッションこそ非常識極まりないものだったが、責任者は極めて常識的なようでありだ。

「すまん！ この鎮守府に来てくれただけでも大感謝すべきことなのに……まさかこんなことを球磨がやらかしてしまうとは……！」

俺の中のイメージだと、前線基地の司令官っていえば某鉄血宰相みたいなヒゲを蓄えたジジイが、上等な椅子に座って偉そうにふんぞり返ってるイメージがあつたのだが……

「いや、別に怒ってないからいいっすよ。それよりも提督さん、随分若いっすね」

「いやホンっとすまん!! 球磨には俺からもキツク言っとくから！」

ここの提督さんは、そう言っただけに深々と頭を下げていた。見た目も俺とそんなに変わらない年齢みたいで、どうやらいい友人になれそうな雰囲気の人だった。

「提督さん、部下思いのイイ人ですね」

「いやいやいや。まあ、とりあえずソファに座ってくれ」

「はー」

提督さんに促され、そばにあるソファに腰掛けた。色落ちしている革製の生地汚れ具合から、このソファが相当な年代物であることが見て取れる。でも物自体はともいいもののように、腰掛けると俺の身体をふわっと包み込むように支えてくれて、座り心地がとても良い。

「ところで吉田くん。司令部からこの鎮守府のことは聞いてるか？」

「詳しいことは何も。ただ深海棲艦と戦ってる基地だとか」

「その通りだ。もう長い間続いているが、ここは前線基地の一つだ。さつき吉田くん……んー座りが悪いな」

「ハルでいいですよ。みんなそう呼んでるし」

「了解だ。さつきハルに粗相を働いた子……球磨って言うんだが、あの子をはじめとした艦娘たちが、深海棲艦と戦ってくれている」

あの子が艦娘だったのか……深海棲艦がどんな奴か知らないけれど、化け物と戦う女の子だと聞いていたから、俺はもつとコマンドーみたいな女を想像してた……この鎮守府に来てから驚くことばかりだ……。

「まああれだ。俺も実際に提督として働く前はハルと同じ勘違いしてたしな。確かにあの子たちは兵器みたいなものだけど、付き合ってみたら普通の女の子と変わらん」

「普通の女の子は俺の腹にえぐり込むようにパンチしてこないけど……」

「確かにそうだ……」

さつきの惨劇を思い出し、俺と提督は苦笑いを浮かべた。

その後、提督は司令部のお偉いさんとは違って、この鎮守府が置かれた状況を詳しく、そしてわかりやすく教えてくれた。やはりこの鎮守府は、激戦区の鎮守府の一つらしい。その割に拠点の重要度はあまり高くないため、司令部からの支援はあまりアテにならないようだ。

おかげでこの鎮守府は常に資源が枯渇状態。だから施設の整備をする余裕も人員もなく、こうして施設内はズタボロの様相を呈しているとのことだった。まあ最近は深海棲艦のせいで資源も貴重になっているし、あまり重要でない土地なら、取られても痛手はない。そういう腹づもりなのだろう……と提督は少し悔しそうに語っていたのが印象的だった。

「で、せめてここで頑張る子たちのために、少しでも慰安施設を充実させたいと思ってな。艦娘たちからの要望も大きかった美容院を作りたいんだけど……」

「来たのは床屋の俺ってことか……」

「ああ。まあ髪を切ることに変わりはないし、ハルの経歴なら別にいいかなと思って」

テーブルに並べた俺の履歴書と職歴書をちらつと見たあと、提督は

そう言いながら手に持ったコーヒーをすすった。自慢じゃないが俺は一応美容師としての免許も持っていて、実際に美容師として働いていたこともある。バーバーちよもらんまで働くのは俺一人だし、理容室としても美容室としても機能させることは可能だ。

「ところで提督さん、俺の店は？」

「ああ、すでにテナントは開けてある。申請されていた必要品目や荷物はすべて到着しているから、あとはハルの方で準備を進めてくれ」「了解です。じゃあ早速テナントに行きますね」

「了解した。準備にはどれぐらいかかりそうだ？」

「俺一人ですから結構時間はかかると思えますよ。開店は明後日ぐらいを予定しています」

注文した設備や商品、道具やら何やらから計算すると、今が午前中だということ差し引いても、恐らく店作りにはそれぐらいの時間がかかるだろう。さっきの女の子……球磨って言ったっけ。あの子のアホ毛も気になるし、提督の髪もかなり伸び放題の様相を呈している。ここみんなにはもうしばらく待ってもらわなければ……などと考えていたら、提督の方から、まさに渡りに船な提案がされた。

「分かった。では球磨を手伝わせよう」

「え……いいんですか？ でも戦いで忙しいんでしょ？」

提督の提案は確かにありがたい。バーバーちよもらんまはこじんまりとした店舗ではあるけれど、さすがに一人で開店準備を進めているのは大変だ。お手伝いさんがいると作業もはかどって開店を早めることも出来る。

もちろん、今日明日と時間の開いている子がいれば、の話だが……構わんよ。今は戦闘も落ち着いている。今日と明日ぐらいなら戦力が少なくなってもどうとでもなるだろう。実はすでに球磨に話は通している」

「そうですか」

「それに、あの子達も楽しみにしてたんだ。早く開店させてやって欲しいしな」

そう語る提督の顔を見て、なんだか故郷のオヤジを思い出した。こ

の人にとっては、艦娘とかいう女の子は、単に敵と戦うための仲間というわけではなく、娘や家族のような存在なのだろう。うちのオヤジにそっくりな眼差しが、雄弁にそれを語ってくれた。

『とんとん。提督、球磨だクマ。呼ばれたから来たクマよ』

「おつかれさん。入ってくれ」

不意に執務室のドアをノックする音が聞こえ、ドアの向こうからは聞き覚えのある……っつかついさつき俺の腹に自慢の拳をねじ込んだ女の声が聞こえてきた。そいつは提督に促され入室し、俺と提督のところまでとことと歩いてくると、やる気のない敬礼をしながらアホ毛をぐにぐに動かしていた。

「球磨、すでに知っているな？ バーバーちよもらんまの店長、吉田ハルさんだ」

「最初っからそう言えばよかったクマツ」

言おうとしたら一本背負いからのコークスクリューパンチで致命攻撃を繰り出してきたのは誰だっけ？ というボヤキが俺の心の中で響いたのは秘密だ。

「……ともあれハルに一度謝れ」

「ゴメンナサイダクマ」

ダメだ。こいつ自分が悪いとは微塵も思っていない。

「仲直りに握手でもしたらどうだ？」

「よろしくだクマ。キリッ」

「お、おう……」

「仲良くやるクマ。キリッ」

「よ、よろしく……」

このアホ毛女……球磨は、相変わらずアホ毛をぐにぐに動かしながらキリリとした顔で、俺に右手を差し出して握手を求めてきた。ちなみに『キリッ』てのは、ちゃんといちいち口に出してやがった。ムカつくのは、こんなヤツでも握手する手は女の子らしい柔らかくて温かい、小さい手をしてやがることだ。こんな小さい手でさつきは俺に致命傷を与えたのか……。

「そんなわけでハル、この球磨をこき使ってくれて構わん」

「球磨はこき使われるのはゴメンだクマ」

「黙れ球磨。それじゃあ頼むぞハル」

「ういっす」

「球磨はこき使われるのはイヤだクマ」

その後提督から『床屋の開店はA S A Pで』と必要以上にカツコイイ横文字で煽られたこともあり、取り急ぎこのアホ毛女を引き連れて、バーバーちよもらんまの店舗に向かうことにした。

「球磨はアホ毛女じゃないクマ」

「だったらそのアホ毛なんとかしろよ……」

「床屋さんのハルがなんとかするクマ」

「んじゃ一刻も早くそのアホ毛を切るためにも、さっさと準備するかー」

「クマツ」

アホ毛おん……球磨の案内で到着したテナントはこのおんぼろ鎮守府の中では比較的キレイな部類に入る建物の1階にあった。店に入るとすでにたくさん荷物が搬入されていて、ダンボールが所狭しと並んでいる。ぶっちゃけ球磨がいてくれて助かった。この量の荷物を一人で片付けていくのはちよつと重労働過ぎる。

「ふっふっふ。球磨がいることに感謝するクマツ！」

「はいはい。とりあえずめぼしい箱をちよつと開けといてくれるか？」

「クマツ。ハルはどうするクマ?」

「おれは片付ける前に店の構造を把握する」

「了解だクマ」

ダンボールの開封を球磨に任せ、店内を見て回ると、聞いてた話の通り、シャンプー台が設置されている。何でも一度、美容師の男が一人、けっこう前にここで店を開いてたんだとか。

「そいつはなんで辞めちやったの?」

「仲よかった子が轟沈したんだクマ」

「? 轟沈?」

「わかりやすく言うと、戦死したクマ。それでやる気が無くなって、店

仕舞いしたんだクマ」

なるほどね。どうやら激戦区というのは間違いないらしい。今は比較的落ち着いているらしいけど、果たしてそれもいつまで持つかどうか……。つーか随分唐突にへビーな話だな……。

「お手伝いに来たわよッ!!」

唐突に入り口がドカンと開き、セーラー服を着たちゅちゅくて元気な女の子と、同じくセーラー服で背の高い黒髪の女の子が立っていた。背の高い女の子は球磨よりも見た目やや年上で、やたらと生気の感じられない眠そうな顔が印象的だ。

「おおく！ 暁！ 待ってたクマあ！」

「司令官に言われてお手伝いに来たわよ！ だって暁は一人前のレディーだから！」

そう言つて、えっへんと口に出しながら誇らしげに胸を張るこの子の名前は暁。白い帽子をかぶっていて、口を開けば『一人前のレディー!!』と言つてるそう。こんなちゅちゅやな子でも艦娘つてことは、この子も戦うんだよな……。

「暁に……言われてえ……手伝いにき……クカー……」

信じられないことに立ったまま眠り始めたこの美人のねぼすけさんの名前は加古。常時睡眠不足で、気がつくとも夢の中に落ちてしまっているらしい。この子も艦娘つてことは、やっぱり戦うんだよな。

……大丈夫なのココ？ 前線基地なんだよねえ？ こんな子たちが戦つてるの？

「そ、それはそうと手伝つてくれるのはうれしいよ。ありがとう。おれは吉田ハルです。よろしく」

「あなたが新しい床屋さんね？ 暁は一人前のレディーよ！」

俺が挨拶をすると、暁ちゃんは元気よくそう答え、おれと握手をしてくれた。ドコぞのアホ毛女と違って素直でいい子だ。

「クマッ！」

俺の心を読まれたのだろうか……。その直後おれは球磨に思いつきり横方向に張り倒された。バーバーちよもらんまの店内に、爆発音に似た『バゴオオオオン』という音が鳴り響いた。

「行って！ 何するんだ球磨!!」

「なんか失礼なことを言われた気がしたクマツ!」

「気のせいだ気のせいッ!!」

まったく……この暁ちゃんを見習って、お前も少しは一人前のレディーを目指し

「黙れクマツ!!」

再度俺の頭を球磨が張り倒し、『ドボツフ!!』というどう考えても破裂音にしか聞こえない音が、再度店内に鳴り響いた。

「いでええ!! だから人のことを軽々しく張り倒すのはやめろッ!!」

「なんか失礼なことを言われた気がしたクマツ!!」

「いいからダンボールを開けろよダンボールを!!」

半ギレの俺に促され、球磨は俺に背中を向けてダンボールを開け始めた。こちらに背中を向けていて表情は見えないが、球磨が怒りを押し殺しているのが手に取るように分かる。

「クマア……!!」

だつて背中から湯気出てるんだもん……こええよ……あとで何されるんだよこええよ母ちゃん……。

「そ、それはそうと……」

とりあえず噴火寸前の桜島のように全身から憤怒の煙を上げている球磨は放っておき、俺は加古に挨拶をするべく加古の方を見たのだが……

「くかー……」

だめだこりや。立ったままで熟睡してる……。

「んー……暁ちゃん、一つ頼まれてくれる?」

「いいわよ! なんせ暁は一人前のレディーなんだから!」

暁ちゃんという存在のありがたみが、傷だらけの俺のメンタルに染みこんでいく……一人はやたらとおれに暴力を振るう妖怪アホ毛女……もう一人は立ったまま眠る妖怪ねぼすけ女……暁ちゃんしかまともな子はいないのかこの鎮守府は。

「えーと……とりあえずこの加古ちゃんを、あつちの散髪台に連れて行って寝かせてあげて」

「ええ〜？ でも加古も手伝いに来たのよ？」

「手伝ってもらいたいのには山々だけど……」

俺は自然と加古の方に視線をやり、暁ちゃんもつられて加古の方を見た。加古は今、鼻から巨大な鼻提灯を出したり引っ込めたりしながら、直立の姿勢で眠っている。

「これじゃ仕事は無理だろう……」

「そ、そうね……じゃあ暁が加古の分まで働くわ！ だって一人前のレディーなんだから!!」

ありがとう、ありがとう。暁ちゃんの優しさが今の俺には何よりも貴重だ。背後には今まさに溶岩をたれ流さんばかりに怒り狂った妖怪アホ毛女が……

「……球磨のアホ毛が反応したクマツ?!」

やつべ。あいつは的確にツツコミを入れてくるからな……用心用心……

その後、夢の世界との間を漂う加古以外の俺達3人は、あまり作業効率は一人の時と変わらなかったものの、和気あいあいとした雰囲気の中で店舗の準備を進めていった。

「暁ちゃん、あっちにあるシャンプー取ってきてくれる?」

「分かったわ! 一人前のレディーに任せておいて!!」

暁ちゃんはフットワークも軽く、本当によく動いてくれる。出来るかどうかは置いておいて、暁ちゃんに頼めばがんばってくれるという安心感がたまらない。

「ハル、コンデイションナーを見つけたけどどうするクマ?」

「とりあえずそこ置いとけよ」

「……なぜ球磨に対してそんなに冷たいのか理解に苦しむクマ」

そもそも必要以上に暴力を振るってくるお前と、よく動いてくれる暁ちゃんを比べる方が無理つてもんだ。

「……よく動いてくれる暁ちゃんと同じ待遇を受けるつもりだったお前が理解に苦しむわ」

「了解だクマ。とりあえずあっちで見つけたハルのシザーバッグの中に入ってたハサミを、一本一本丁寧にひん曲げておけばいいクマ?」

球磨がそう言いながら、俺の商売道具のキャンバス生地のリザバグをぶらぶらさせながらニヤニヤしてやがる。こいつを破壊されてしまうと俺はこの地で商売が出来なくなってしまう。ちくしよ人質なんて卑怯だぞ。

「すいませんやめてくださいおねがいします」

「分かればいいクマ。球磨は優しいから勘弁してやるクマ」

ちくしよ。そのうち絶対こいつに一泡吹かせてやる……俺が球磨への復讐を心に固く誓った時、シャンプーを取りに行っていた曉ちゃんの悲鳴のような声が聞こえた。

「ハル〜！ シャンプー重くて持ってこれない〜!!」

「愛しの曉が呼んでるクマ」

「行って助けてこいよ妖怪アホ毛女」

「でもそれを運んでこそ一人前のレディイイ!!」

終始こんな感じでのどかに作業は進んでいく。途中、散髪台で惰眠を貪っていた加古が……

「おおああ……目が冴えてきたあああ」

と何の前触れもなく覚醒し、

「よおおおしー！ 私も手伝うよおおお!!」

と急にやる気を出してシャカシャカと動き出してくれたのはよかったのだが……その最中に俺の顔をまっすぐ見据えながら、「どころでき、あんた誰？」

と質問してきたのは正直力が抜けた。加古、お前何しに来たんだよ……妖怪アホ毛女は片付けに飽きたのか、勝手に霧吹きに水を入れて、それを俺の頭に吹きかけている始末。

「……ハル〜……飽きたクマ〜……」

「分かったからまずその無駄な霧吹きをやめろ。外は晴天なのに俺のところだけどしやぶりの雨じゃねーか……」

「クーマー……」

やべえ。こいつマジで片付けの戦力にならねえ……

「曉は一人前のレディーだからまだがんばれるわよ！」

「曉ちゃんだけだよ真面目に片付けてくれるの……」

「それは聞き捨てならんクマツ」

「お前はいちいち噛み付いてこなくていいんだよ」

「よおおおし！ この片付け終わったら寝るぞおおお!!」

とは言いながらも少しずつ店舗は出来上がり、やがていつちよまえの床屋さん `バーバーちよもらんま` は完成した。明後日完成予定だったこの店が今日中に仕上がったのは、なんだかんだでこいつらの手伝いのおかげだ。加古が起きて手伝ってくれたおかげで、作業効率が劇的に上がったしな。

「出来た……ここが俺の城、バーバーちよもらんま……!」

「長かったクマ……数々の苦難を乗り越え球磨たちが死力を尽くして血と汗を流し涙をこらえてがんばったおかげで……やっとなんか完成したクマツ……!」

「お前はただ俺の頭に霧吹きしてただけだろうが……」

俺の横で誇らしげなドヤ顔をしている妖怪霧吹き女はとりあえず置いておいて……

「ところでさ。片付けを手伝ってくれたしさ」

「ん？ ハルどうしたの？」

暁ちゃんがきよとんとした顔で俺を見る。球磨や加古に比べると、暁ちゃんは天使だなあ……重くて持てなかつたシャンプーのボトルを7回ぶちまけた事実はとりあえず無視するとして。

「みんなにはこの店のお客さん第一号になってもらいたい」

「え？ いいの?!」

「ホントクマ?!」

「うう……寝かせ……おお……」

「ホコリを落とす意味でも、シャンプーをサービスさせてくれ」

球磨はとりあえず置いておいて、実は暁ちゃんと加古が手伝いに来てくれた時から、この子たちに感謝の意味を込めて、このみんなで作りに上げた俺のバーバーちよもらんまの最初のお客になってほしいと思っていた。これは長い時間忙しく動きまわってくれたみんなへの、俺が出来る精一杯のお礼だ。

この提案をした瞬間、球磨と暁ちゃんの目がキラキラと輝いた。二

人のこの好奇心旺盛な反応を見る限り、シャンプーのサービスは受けがいいようで一安心だ。

「んじやー誰が最初だ?」

「ハイハイ! 球磨が一番だクマ!!」

「暁は最後でいいわよ! なんせ一人前のレディーなんだからツ!!」

「じゃあ私は2番目で……順番来たら起こし……クカー」

最初の予想では球磨と暁ちゃんの間で1番を取り合うという骨肉のバトルが繰り広げられると思っていたが、そこはさすが一人前のレディー。レディーの余裕のおかげで、晴れてバーバーちよもらんまの処女シャンプーは球磨となった。

「クマクマっ」

晴れてお客様第一号になった球磨をシャンプー台に案内し、俺は球磨を仰向けに寝かせ、球磨の顔にタオルを乗せた。元々この店舗に備え付けだったのはうつ伏せ式のシャンプー台だったが、仰向け式シャンプー台にこだわりのある俺は、わざわざ仰向け式のシャンプー台用のソファを発注していたのだ。

「かゆいところがあつたら言って下さいねお客様」

「了解だクマ」

この奇つ怪なアホ毛も含めて球磨の髪をシャワーで濡らし、シャンプーを泡立てて髪の汚れを落としていく。これだけすさまじいアホ毛の持ち主なくせに、彼女の髪は柔らかかくて触れていて心地いい、もふもふした肌触りの髪だ。

「お湯の温度はどうだ?」

「ちょうどいいクマ」

「そいつはよかった」

「おおあああ……たまらんクマあ……」

なんだかおっさんのようなだみ声を上げる球磨。少女にあるまじきデスボイスは問題だが、満足してくれているようで何よりだ。俺は指の腹を使って丁寧に、丹念に球磨の髪と頭皮の汚れを洗い流していった。

「かゆいところはないですかお客様?」

「左足の裏の親指の付け根から5ミリほど下がったところあたりが痒いクマ」

「自分でかけ」

「正直に言ったのにひどい仕打ちだクマ」

「どこに足の裏をかいてくれる床屋がいるんだよ」

「ハルは球磨の足の裏をかいてくれると信じているクマ。キリツ」

「たとえば世界中の床屋が足の裏をかいてくれても、俺だけはお前の足の裏を拒否し続けてやる」

「床屋の風上にも置けないヤツだクマ。提督に言いつけてやるクマ」
「言ってる」

一回目は髪の毛の汚れを落とし、二回目は頭皮の汚れを落とす。コンデイションナーで髪質を整えたら無事終了だ。球磨、お疲れさまでした。

「うむ。くるしゆうない。存分に堪能したクマっ」

「ちゃんと頭にバスタオル巻いとけよ」

「クマクマっ」

シャンプーを存分に堪能した球磨は、ほくほく顔で頭にタオルを巻いていた。……あと信じがたいことだが、この段階ですでに球磨のアホ毛はびよんと立ち上がっていた。なんだそのアホ毛は。別の生命体なのか？

「クマクマっ」

「球磨。とりあえず次の順番の加古を呼んできてくれ」

「髪の毛はまだ濡れてるクマ。ハルは乾かしてくれないクマ？」

「おれは加古の頭をシャンプーするんだ。すまんがドライヤーはあつちにあるから自分で乾かしてくれ」

「了解だクマ」

アホ毛をびよこびよこ動かしながら、球磨は一度シャンプー台から移動した。シャンプー台で待機している俺からは球磨と加古の姿は見えないが、二人の会話はよく聞こえる。

「加古ー。順番が回ってきたクマ」

「ああ……りょうか……行く……」

「仕方ないクマ。球磨が肩を貸すクマ」

しばらくぐそぐそという音が聞こえ、その後球磨に肩を借りた状態でかろうじてこちらの世界で意識を保っている加古がやってきた。加古、この短時間の間にうとうとしはじめたんかい……

「ハル。連れてきたクマよ」

「次はー……私のお……番……クカー」

「さんきゅー球磨。そのままシャンプー台に寝かせてくれ」

「球磨がこき使われてるクマっ！」

「ここまで連れてきたんだから最後まで責任もてよ……」

球磨はジト目でこちらを見つめながら、半分寝ている加古をシャンプー台に仰向けに寝かせ、その顔にタオルをかけた。鼻提灯のせいなのか、不自然にタオルが盛り上がり、生き物のように脈動していた。

「……タオル、キモいな」

「……キモいクマ」

初めて球磨と意見の統一が出来たことに驚きながら、俺は加古の髪をお湯で濡らし、丹念にシャンプーし始める。球磨はそんな俺の隣で加古の髪がシャンプーされている様をジツと見ていた。なんでお前ここにいるんだよ。

「さつさと髪を乾かさないと風邪引くぞ」

「余計なお世話だクマ」

「はいはい……かゆいところはないか加古？」

「右足のおく……小指の付け根の……クカー……」

「……おやすみ」

ついに完全に夢の世界にダイブしてしまった加古の髪を丹念に洗った後、もはや生ける屍と化した加古を球磨に任せ、次は暁ちゃん番だ。

「暁ちゃんお待ちせよ」

「待ちかねたわ！ いくら暁が一人前のレディーでも待たせすぎよ！

ぶんすか!!」

「ごめんね。おい球磨」

「クマ？」

「加古の髪の毛乾かしとけよ。風邪ひくから」

「なんで球磨がハルの助手みたいな扱いになってるクマツ!!」

「いいから自分の髪も一緒に乾かしてこいよ……」

怒りでアホ毛をグニグニ動かしながら加古の髪をドライヤーで乾かす球磨を尻目に、俺は暁ちゃんの髪をシャンプーしていく。球磨や加古に比べると髪が柔らかいのは、やっぱりおこちゃまだからか？

「かゆいところはないですかお客様?」

「右足の裏のかかとかから3センチぐらい上のところがかゆいわ!!」

……艦娘つてさ。床屋にかゆいところを聞かれたら足の裏を答えなきやいけない決まりでもあるの?」

「そういうところは自分でかいてね?」

「わかったわ! だって暁は一人前のレディー!!」

「そうだね。さすがは一人前のレディーだ」

「えっへん!」

一人前のレディーが果たして足の裏をボリボリとかくのだろうかという俺の疑問は付きないが、ともあれ暁ちゃんはさすがは一人前のレディー。どこかの妖怪霧吹き女とはえらい違いだ。

「湯加減はどうですかお客様?」

「一人前のレディーには丁度いい温度よ?」

「よかったです」

「ん〜! 気持ちいい!!」

他の二人に比べてやや指の力を抜いて暁ちゃんのシャンプーをやりとげた俺は、彼女の頭にバスタオルを巻いてあげ、シャンプー台から暁ちゃんをエスコートして散髪台まで連れてきてあげた。散髪台ブースの方では、球磨が居眠り中の加古をシートに座らせて、ドライヤーで熱風を当てて彼女の髪を乾かしている。意外と手慣れた手つきでちよつと驚いた。

「球磨にかかればこんなもんだクマ」

「んじや暁ちゃんは一人前のレディーだから俺が乾かしてあげよう」

「やった! やっぱり暁は一人前のレディーなのね!」

「そうだよ」

「暁と球磨の扱いの差に、球磨は無念の涙を禁じ得ないクマ」

「いいからお前は早く加古の髪を乾かしてやれよ」

「クーマー……」

こうして俺と球磨の手によって、暁ちゃんと加古の髪が乾かされていく。二人の髪が乾ききつたのはほぼ同時だった。

「はい。暁ちゃんお疲れさまでした！」

「んー気持ちよかったああー!! 髪もキレイになって、これで一人前のレディーー！」

「加古く。終わったクマく」

「……クカー」

髪のを落としてキレイになった暁ちゃんは、上機嫌で加古を引きずって帰っていった。しかし加古のねぼすけっぷりは筋金入りだな。暁ちゃんに引きずられても目覚めなかつたぞ？

「まあ、あれが加古だクマ」

「アイツっていつもあんな感じなの？」

「そうクマ。本格的に寝に入ったらそう簡単には起きないクマね」

「ほーん……艦娘って個性的だなあ」

「ホントそうだクマ。ついてけないクマ」

他人ごとのように球磨はこう答えるが、この場に1000人の人間がいれば、その全員が『お前が一番個性的だ』と思うに違いない。

「ところでなんで球磨を残したクマ？」

「いや、だってお前、まだ髪乾かしてないだろ？ 乾かしちやるから

シートに座りな」

「うむ。くるしゆうないクマ。球磨の髪を乾かすことが出来る権利をやるクマ」

「いいから黙ってさっさと座れよ」

散髪台のソファに座った球磨の、頭に巻かれたバスタオルを解いてやる。バスタオルが多少水分を吸ってはいたが、球磨の髪はまだまだぬれそぼっているようだ。

「さっきまで『自分でやれ』って言ったのにどういう風の吹き回しクマ？」

「だつてお前、他の二人よりも長い時間手伝つてくれてたろ？」

「そうクマ？」

「加古の髪も乾かしてくれたし」

こんなどうでもいい会話を繰り返しながら、ドライヤーの風を当てて球磨の髪を乾かしてやる。やっぱこいつの髪は他の二人に比べても、もふもふしてて手触りがいいな。

乾かしている最中、その直立不動のアホ毛が気になった。これだけ激しく風を当てているのに、一向になびく気配のないアホ毛。一体どんな育ち方をしたらこんな強靱なアホ毛が育つんだよ。

「いつかキレイに整えてやる」

「楽しみに待つてるクマ」

髪をキレイに乾かした後は、球磨の肩から首筋にかけてマッサージをしてやった。妖怪霧吹き女と化した時もあったが、一番長い時間手伝ってくれた球磨だけへの特別サービスだ。首筋をグリグリしたあとは、肩の筋肉のコリをほぐしてやる。

「一番がんばってくれたからな。特別サービスだ」

「おおあああ……たまらんクマ……」

気持ちよさそうなのはいいんだが、なぜおっさん声なんだお前は。お前は仮にも女だろ。

「仮にもとは失礼な言い草だクマ……うあああああああ」

「はいはい……」

球磨の肩をほぐしていて気付いたが、やはり少し硬くなっている。この硬さは日々戦闘を重ねる軍人だからか、それとも肩がこるほどの激務に追われているからか……

「なあ球磨」

「ああうううう……クマ？」

「お前さ。毎日大変なの？」

「大変といえば大変クマね。出撃があったら深海棲艦と戦わなきゃいけないクマ」

「そうだよなあ……死人が出てるって話だし、やっぱこいつも軍人なんだよなあ。」

「まあ艦娘だから仕方ないクマ」

マツサージも終わり、球磨の両肩をポンポンと叩いてやる。球磨、お疲れさま。

「ほい終了」

「おおぅ……もうおしまいクマ?」

「おう。気持ちよかったか?」

「気持ちよかったクマ。死力を尽くして倒れ伏すまで続けて欲しかったクマ」

「揉み起こしになるぞお前……」

こうして球磨を一番最初の客として、この『バーバーちよもらんま』の輝かしい歴史は幕を開けた。明日からは、この鎮守府のやつらの髪を整えまくって洗いまくって、キレイにしまくってやる……!! そんな野望を胸に秘め、俺の気持ちはこの時、かつてなく高ぶっていた。「揉み起こしなんかやらかした時は、元凶のハルを張り倒せば万事解決だクマ。キリッ」

「なんでもかんでもバイオレンスで解決しようとするのはよせ」

そしていつの日か、このアホ毛女のアホ毛を成敗してやる。

3. 賑やかな人たち

「というわけで、本日の午後から本格的に開店します」

店舗の準備を終えた翌日の朝、執務室に出向いた俺は提督さんにそう告げた。

「そうかよかった!! これでやっと艦娘たちも女の子らしく髪を整えてやる事が出来る!」

提督さんは俺の報告を受けて、嬉しそうな表情で開口一番そう答えた。年齢でいえば俺とさほど変わらないはずの提督さんだが、こういう時の表情は、俺に故郷のオヤジを思い出させた。

「3人の艦娘が手伝ってくれたおかげで、思ったより早く準備が整いました。最後の点検を済ませた後、開店です」

「そうか! ありがとうハル!!」

「礼なら暁ちゃんたちに言ってお下さい。彼女たちが手伝ってくれたから、開店を早める事が出来たんです」

約一名、俺の頭に霧吹きで水をかけ続けた妖怪アホ毛女もいたけどな。

「そうか! よかった……本当によかったよ!」

提督さんは素晴らしい、屈託のない朗らかな笑顔を俺に向けてくれる。人間、本当に嬉しい時ってこんな笑顔をするんだ……と妙に感心出来るほどの邪気のない笑顔だ。俺はこの笑顔を曇らせてしまうおそれのある、妖怪霧吹き女の霧吹きっぷりを提督さんに伝えることは、やめておくことにした。

「ん? どうした?」

「いや別に。ところで球磨はどうしたんですか?」

「ああ球磨か。球磨なら今日は朝から出撃だ。近海の哨戒任務についている」

この瞬間、俺の胸に不快な衝撃が走った。『ドクン』と心臓が一瞬高鳴り、痛いほどの鼓動が一拍だけ駆け抜けた。昨日の『戦死したクマ』という球磨のセリフが1回だけ、頭の中ではなく耳元で聞こえた気がした。

「哨戒……ですか」

「ああ。こここのところ目立った戦闘はないが、念の為だ。どうかしたか?」

「……いえ」

戦争してるんだもんな。あのアホ毛女が出撃することもあるんだもんな。慣れなきやな。

「みんなには俺から伝えておく。ハルは午後一から開店できるように準備を整えておいてくれ。俺も今日おじやまするよ」

「了解です。提督さんも髪が伸びてますからね。さっぱりさせますよ」

「あと床屋といえば髭剃りだな。そっちも頼む」

提督が往年のチャールズ・ブロンソンのように自身の顎に手をやってさすっている。注意深く見てみると、提督の無精髭が少々伸び気味なことに気付いた。

「了解です。カミソリ研いで待ってますね」

「ああ!」

「あ、ところで提督さん」

「ん?」

「提督さんを入れて、こここの鎮守府って何人いるんすか?」

「俺を入れて8人だ。艦娘だけで7人だな」

「意外と少ないっすね」

「まあ、な」

理由を聞こうと思ったが、提督さんの微妙に苦い表情を見て察しがついた俺は、それ以上この話題には触れまいと思った。

こうして予定通り、午後一にはサインポールを回してバーバーちよもらんまは開店。さて、正規のお客さんとしての第一号は誰が来るのか……

「ハル〜! お客さんを連れてきたわよ!」

おっ。最初にやってきたのは白い帽子が似合う一人前のレディー、暁ちゃんか。……と思つたら……

「ふ〜ん……ここが今日から開店する床屋さんなのね? 中々いい所

じゃない」

「暁ちゃんの隣には、えらくナイスバディな金髪美女がいた。

「おお、暁ちゃんかく。いらっしやいませ〜」

「ハルにお客さんを紹介してあげるわ！　だって私、一人前のレディーなんだから!!」

「うん。ありがと〜。ところで暁ちゃん、こちらの方の名前は？」

「私は戦艦ビスマルクよ!!」

「あーなるほど。海外の艦娘さんか。通りで髪がキレイな金髪をしてるんだな。

「紹介してくれてありがと。さすが暁ちゃんは一人前のレディーだ」

「えへへ……やっぱり私は一人前のレディー!」

「私のことも褒めていいのよ!!」

「……What?　今なんて言った？」

「だって見なさいよこの祖国ドイツの技術の粋の詰まった精悍なボディー!　このビスマルクを褒め称え、崇め奉るがいいわ!!」

「……オーライ分かった。つまるところ、あんたも艦娘ってことだな」

「艦娘ってさ。個性的なヤツしかいないのかな……」

「んじゃビスマルクさん、今日はどうするんですか？」

「ビス子も一人前のレディーだから、ビス子って呼べばいいわよ」

「待ってアカツキ。初対面のヤーパナーにまでビス子だなんて呼ばれたら、戦艦ビスマルクの名折れだわ」

「んじゃビス子さん、こっちの散髪台へ……」

「シャイセ……!!　これでは戦艦ビスマルクとしての威厳が……!!」

『んなもんねえよ……』と心の中で思いながら、ビス子さんとやらを散髪台に座らせ、髪の様子を見る。しかしホントにキレイな金髪だな。やっぱ染めた金髪と全然違うね。

「キレイな金髪だね〜……」

「当たり前でしょ?　いいのよもっと褒めても」

「彼女は褒めてもらいたがるクセがあるのかな?　どこぞの一人前のレディーにそっくりな気が……」

「へくちっ」

「どうしたのアカツキ？ 風邪？」

「んーん大丈夫よ。だって暁は一人前のレディーだからっ」

「そうねアカツキ。でも私だって一人前のレディーよ？」

「?! ……ということは……暁達二人は……?!」

「一人前のレディー!!」

あーはいそうですねーあなたたちは一人前のレディーですねー。

「えっへん！ この暁のこと、もつと褒めていいのよ！」

「そしてこの私のことも、もつと褒めていいのよ！」

やっぱこの二人似てるわ……。

ビス子が言うには、とりあえず傷んだ毛先を整えシャンプーしてくれば問題ないということだ。確かに潮風によく当たっているためか、よく見ると毛先が少し傷んでいる。傷んだ所を手際よくチョコキと切つていき、スツキリさせた後にシャンプー台に連れて行って、丹念にシャンプーしてあげることにする。

「ビス子。かゆいところはないか？」

「左足の裏の……」

「却下だ」

「まだ何も言っていないでしょ?!」

「たとえ最後まで言ったとしても却下は変わらない！」

ビス子のシャンプーが終わり、散髪台に再び座らせようとブースに戻ってくると、ソファに据わる暁ちゃんの隣に提督さんが座っていた。午前中に話していた通り、来店してくれたようだ。

「よっ。約束どおり来たぞハル」

「ありがとうございます。んじゃビス子の次ですね」

「おう」

「私のこと、もはやナチュラルにビス子って呼んでるわね……」

「ビス子もおれのことはハルでいいよ」

「了解よハル」

ドライヤーでビス子の髪を乾かしていく。もふもふの球磨や柔らかい暁ちゃんの髪とは異なり、彼女の髪はしなやかでさらさらだ。手に持つと、さらさらと手から落ちていく感じが心地いい。球磨とはま

た違う感じで、ずっと触っていたい気持ちになる髪だ。

……あれ？ 俺、今なんて思った？

——クマクマッ

「しっかしホント、キレイな金髪だなあ……」

「なんせ一人前のレディーだからね！ 当たり前よ!!」

「はいはい……よし。おわり！」

髪を乾かし終わり、ドライヤーを止めてビス子の両肩をぽんと叩いてあげる。ビス子は『ほっ!』と気持ちよさそうな声をあげたあと、立ち上がって提督さんの方を向き、得意げに髪をフアサツとなびかせていた。

「どお提督！ このビスマルク、より一層美しさに磨きをかけたわよ！」

「うん。今までろくに髪を整えることも出来なかったからな。キレイになったよビス子」

「よかったー！」

提督に褒められたのがよほどうれしかったようだ。ビス子は上機嫌で俺の方を振り返り、満面の笑顔でお礼を言ってくれた。

「これもハルのおかげね。D a n k e !」

「ごちらこそ。来てくれてありがとう。また来てくれ」

「もちろんよ！ また髪を整えてもらおう!!」

なんだ。こんなところも暁ちゃんと同じで素直でいい子じゃないか。ビス子は100万ドルの笑顔で暁ちゃんと共に店を後にした。足はスキップを踏み、手は暁ちゃんとなつないで、本当に弾むように帰っていった。そんな様子の客を見送るなんてそうそうないことだから、なんだか見ていると胸が暖かくなる。

「あんなに喜んでくれるとは思ってませんでした」

「言っただろ？ みんな心待ちにしてたんだ」

「ですね。来てよかった。床屋冥利に尽きますよ」

「そう言ってくれると、おれも嬉しい。……さて」

「次は提督さんっすね」

「ああ。頼む」

次は提督さん。まずは提督さんを座らせ、髪の様子を観察する。こうやって見ると、やはり男性にしては髪がやたら長くなっており、ピス子と同じく毛先が傷んでいる。これだけ長いと逆に毛先を整えて長髪を目指してもいいが……

「どうします?」

「バツサリやってくれ」

「了解です」

提督さん本人の了解をもらい、俺はガッツリと提督さんの髪にハサミを入れていく。提督さんが座る椅子の下にみるみる溜まっていく髪。十数分の後、提督さんの周囲にはおびただしい量の髪がこんもりと積もっていた。

「どうつすか?」

「いいね。さっぱりした。爽快だよ」

「んじゃ次は髭剃りします」

「頼むよ」

提督さんの顔に蒸しタオルを置き、ヒゲを蒸らして柔らかくする間、髭剃りクリームを泡立てて準備する。準備が整ったら髭の部分にクリームを塗り、慎重に髭を剃っていく……

「……」

「……」

剃られてる側からしてみれば、髭にカミソリが入る瞬間の感触は、まさに至福の瞬間。それだけに気は抜けない。身だしなみを整えるだけなら自分で剃ればいい。床屋に来て髭を剃るのは、それだけの理由がある……それを理容師は客に提供しなければならぬ……理容師としても尊敬できる、死んだじい様の口癖だった。

「……」

「……」

顔の右半分の髭を剃り終わった時だった。俺は残り半分の髭も剃るべく、カミソリの歯を提督さんの喉元に近づけた。

「……今がチャンスといったところか?」

心臓を握り締められたかのような衝撃が俺を襲った。まさかこの

男……俺が敵国のスパイであることをすべて察していた……?!

「行くかね。ざっくりと」

提督さんは冷静に、落ち着き払ってそう言う。この男は今、俺が少し刃を立ててまっすぐ横にカミソリを引いてしまえば、自身の命が奪われるというこの状況において、まったく動揺することなく佇んでいる。

「……なぜ分かった？」

「今のこの鎮守府の状況を知った上で、それでもなお店を構えようというアホがいるとは思えん」

「そうか……はじめからすべて見破られていたか……」

このセリフを言うのが精一杯だった。すでに俺の正体は割れていた。この男は、すべてを見破って、それでもなお俺を招き入れたというのか……。

「ああ……すべて……ブフツ」

「プツ……」

「おま……ブフオツ……お前の……」

「笑ったら台無しでしょやいとくさん……デユフツ……」

「ハルこそ……ここで笑ったら……オフツ……」

うん。いい人だ。この人いい人だ。こんな風に人とふざけあつてくれる人が、悪い人であるはずがない。

「んじや残り頼むよ」

「途中で笑ったペナルティです。残り半分はこのままで」

「かんべんしてくれええツ?!」

寸劇も終わり、残り半分の髭も剃り終わった後は、シャンプー台でシャンプーすることにする。

「提督さ〜ん」

「ん〜?」

「かゆいところはないですか?」

「左の」

「却下です」

「なぜツ?!」

「どうせ提督さんも足の裏がかゆいとか言うんでしょ。艦娘のみんな足の裏を俺にかかせようとしたんですから」

「いや、左のこめかみあたりがかゆいって言おうとしたんだけど……ずーん……」

「し、失礼しました……」

そして提督さんはこの鎮守府では数少ない常識人なようだ。少なくとも、シャンプー中に『かゆいところはないですか』と聞かれ、足の裏と答えない程度には常識をわきまえた人のようである。安心だ。

シャンプーも終わり髪を乾かしたあとは、ビス子の時と同じく両肩をぼんと叩いてあげる。『これで終わり!』という信号を身体に送ってあげる、優しいインパクトだ。

「はい! おしまいです!」

「ほっ!」

提督さんはスッキリした自身の髪型を鏡で確認し、十字に切り込みを入れて炭火で焼いたいたけのように目を輝かせ、おれの方を向いた。

「ハル! ありがとう! めっちゃスッキリした!!」

「いえいえ。これがおれの仕事ですから」

「心持ち、男子力が上がった気がするよ!!」

「そいつはよかったです。提督さん以外はみんな女の子ですからね。男子力は大切です」

「いやああよかった! ハルが来てくれてホントによかった!!」

よほどうれしかったのか感激したのか、提督さんは年不相応におれの手を取ってブンブンと上下に振っていた。正直大げさ過ぎないかとも思ったが……

「いやあホントにありがとう!」

この人のこの表情がウソや社交辞令とはどうしても思えない。ホントにうれしい人が見せる反応だ。艦娘たちだけじゃない。この人もずっと待ちわびてたんだなあ。

「ああそうだ。今哨戒任務についてる球磨たちなんだが」

「ほい」

「ここに来る前に通信があった。とりあえず帰路に着いたそうだ。夕方頃には戻ってこれるだろう」

「そうですか。よかった」

唐突な球磨の安否報告は何なんだろう？ 確かに艦娘の中では仲はいい方かもしれないけど、昨日初めて会った間柄ですよ？

「あーいや、午前中に球磨の話をちょこっとしたろ？」

「しましたね」

「その時のハルの様子が少しおかしかったからな。心配してるのかなーと」

この人するどいな……だてにこの鎮守府のトップに立っているわけではないようだ。戦力は乏しいけれど。

「まあ大丈夫だあの子たちなら。無事返ってくるよ」

「了解つす。提督さん、ありがとう」

「いや、彼女たちと仲良くしてくれるのは、俺も大歓迎だしな」

その後、スツキリさっぱりして気を良くした提督さんは、スキップを踏みながらバーバーちよもらんまを後にした。スキップを踏み、鼻歌を歌いつつ『スツキリ〜♪ スツキリ〜♪ あいつらも喜ぶぞ〜ふっふーん♪』とごきげんで床屋を出て行く男性を、俺は初めて見た……。

その後は本日は特に客も来ないまま閉店。いささか寂しい開店初日ではあるが、ビス子と提督さん、二人の極上の客に来てもらったのは、幸先の良いスタートといえる。あんなにうれしそうに店を後にしてくれる客なんて今までいなかった。なんだか初めて床屋として店に立った時のことを思い出させてくれた、うれしい初日だった。

この地に店を出せて、本当によかった。客数的には売上が厳しいが、軍から補助金と危険手当も出る。鎮守府の施設も使い放題だし、生活に困るということはないだろう。

日が陰ってきた頃、店を閉店するべくポールサインの回転を止めて後片付けをしている時の事だった。カランカランと入り口のドアが開く音が鳴り響いた。

「ごめんなさい。今日はもう……」

「ただいまだクマ〜」

入り口を開いた犯人はこの妖怪アホ……球磨だった。今日も今日とて強靱なアホ毛をびよこびよこ動かしながら、入り口で仁王立ちをしっている。

「なんだ球磨かよ。ここはお前の家じゃないぞ？」

「んなこと言われんでもわかってるクマ」

「んじやなんてただいまなんだよ」

「ヒドい床屋だクマ。せつかく任務から無事帰ってきたから挨拶してきたのにつ」

……そりゃ失礼しました。

「おかえり」

「クマクマっ」

おれのおかえりを聞いて満足したのか、球磨はホクホク顔でワゴンの上の霧吹きに手を伸ばし、それを俺に向けて発射し始めた。

「ハル〜。晩御飯食べに行くクマ」

「それはいいから、まず俺に霧吹きを吹きかけるのを止めろ」

「球磨姉〜。まだ〜？」

俺が球磨の霧吹き攻撃を甘んじて受けていると、再び入り口からカランコロンと音がなり、同じくセーラー服を着たおさげの子が店に入ってきた。えらく球磨と雰囲気が違うが、球磨のことを『球磨姉』と呼ぶあたり、ひよつとして球磨の妹か？

「その通りだクマ」

「人の心を読むなよ」

「あなたが新しい床屋さんのハル？」

俺に近づいてジト目で俺を見る彼女は、言われてみれば球磨にちよつと似た雰囲気を持っているような気がする。なんというかマイペースな感じというか、のほほんとした雰囲気が似ている……

「そうだよ。君は？」

「私は北上。よろしく〜」

このおさげの子、北上は俺の質問に対し、なんとも気の抜けた返事を返す。やっぱこの子あれだ。マイペースな感じは姉譲りだ。今ま

さに霧吹きでびしょぬれになった俺の頭をぐしゃぐしゃにして遊んでいる姉によく似た、マイペースっぷりだ。

「おうよろしく」

「提督から聞いたよ？ 初対面で球磨姉にぶん殴られたんだってね。災難だったね」

殴られたっつーか確実に殺しにかかってたけどな。この妖怪コークスクリュー女は。

「あれは早く言わないハルが悪いクマッ。球磨はハルの小賢しい罠にハマられたんだクマッ」

「まあいい加減ご飯食べに行こうよ。球磨姉もそろそろハルの髪の毛で遊ぶのやめたら？」

「そうだ言ってやれ言ってやれ。無理やり俺の頭に自分譲りのアホ毛を作ろうとするんじゃないっ」

「クマッ」

自身の妹にすら制止されたためか、球磨は素直に俺の頭にアホ毛を作り上げるのを諦め、俺達を先導するように店を出て行った。

俺はというと、球磨ではなく北上を待たせるのは悪いがさすがにびしょ濡れの髪のままでは具合が悪いということで、頭にタオルを巻いて北上と共に店を出た。店を出た途端……

「おそいクマッ！」

と球磨から盛大に頭を左に張り倒されたことを報告しておく。

食堂で提督さんの料理に舌鼓を打った後は大浴場で今日の疲れを癒やし、今日の仕事は全て終了。おんぼろ貧乏鎮守府ではあるのだが浴場だけは設備がしっかりしており、男女別に分かれた温泉で疲れを取る事が出来る。足を伸ばして風呂に入ることが、どれだけ贅沢なことか……ちなみに男湯と女湯は天井が繋がっており、両方の会話が筒抜けだ。昔の銭湯と同じスタイルってわけだ。じい様によく連れて行ってもらったなあ……

『球磨姉〜。せっけん取って〜』

『了解だクマ〜……あれ？ 見当たらないクマ……ハル〜？』

「お？ どした〜？」

『せっけんが手元がないからこっちに一個投げて欲しいクマー』
「あいよー。今投げるからなー」

せっけんみたいな固い固形物を投げるのは危険なような気もするが……まああいつらは戦闘経験豊富だし、うまくキャッチするだろう。俺は手元にある据え置きのをせっけんを、女湯の方に向かって全力で投げてやった。投げられたせっけんは勢いよく敷居を飛び越え、女湯の方に消えていく。

『あだッ?! 変なところに投げるなクマツ!!』

「どうした〜?」

『ハルの投げ方が下手くそだから変なとこに当たったクマツ!!』

……変な所……ゴクリ……

「そいつは悪かった。怪我したんならちやんと薬塗つとけよ」

『アホ毛なら怪我はないから大丈夫だクマ』

「張り倒すぞお前?!」

『クマクマツ』

クソツ……やつのアホ毛はそう遠くないうちに処分しなければ……

風呂から上がると、女湯の入り口のところで球磨と北上がラムネを持って待っていてくれた。女湯の方には冷蔵庫でキンキンに冷やしたラムネが置いてあるそう。あれだけ艦娘のことを大切にしている提督さんなら、多少施設に回す金を割いてでも、それぐらいのサービスはするだろうなあ……

「ほいハルの分。せっけんのお礼も兼ねて」

「おっ。さんきゅっ」

「どうせタダだしね〜」

牛乳もいいが、風呂あがりにはラムネってのがまたオツだね。……しかしあれだな。球磨のアホ毛は風呂あがりなのにもう立ってるんだな……

「ハルが投げたせっけんね……球磨姉のアホ毛に刺さったんだよ」

「マジか……」

「ただだけ頑丈な作りをしてるんだあのアホ毛は……あのせっけん

まだ全然固かったぞ？

「球磨のアホ毛を舐めてもらつちや困るクマ」

「舐めるどころか恐怖しか感じねえよ……」

その後は球磨たちと別れ、波音を聞きながら夜風で涼みつつ、自分の店に戻る。テナントはちようど店兼俺の居住地となっており、ちようどテナントの奥の方には俺の居住スペースがあるのだ。

「ふいっ。おつかれさくん……」

明日の準備ももう終わってるし飯と風呂も済ませた。時間も遅いし、あとはもう寝るだけだな……なんて考えていたら、カギを締め忘れたドアが開き、唐突に賑やかな声が店内に響いた。

「ヒヤツハアアアアアアアアア!!」

「?! 何事ッ?!」

急いで店の入り口に向かうと、日本酒の一升瓶を携えた中々にツンツンした髪型の女と、さつき別れたばかりの球磨と北上が仁王立ちをしていた。

「ハルー! 出てくるクマああああ!!」

「開店祝いだヒヤツハアアアアアア!!」

「ごめんね。どうしてもハルのところに行くって聞かなくてさ」

「それはいいんだけど……この淑女はどなた？」

「軽空母の隼鷹です! 床屋が出来たって聞いたから開店祝いに酒飲みに来たよおおお!!」

そう言いながら、このツンツン飲兵衛女……隼鷹は日本酒の一升瓶を高々と掲げていた……なあ、艦娘ってこんなにエキセントリックなヤツばつかなの？

「黙れクマツ!!」

さすがにそう何度も頭をひっぱたかれるわけには行かない。球磨の張り手を寸前のところで避けた俺は、その崩れた体勢を立て直し、空振りしたせいでバランスを崩した球磨の手を取ってやった。

「うん。まあ……ねえ。うちの球磨姉を筆頭に……ね」

「アンタがハルかあ。提督やビス子に聞くとところによると腕は確かみたいじゃーん。次はあたしも髪を切ってもらおうよお」

あれ？ ひよつとしてすでに酔ってる？

「ありがたい話だよ。んじや出撃がないときの昼にまた来てくれ」

「もちろん！ そして今日は、その前哨戦といこうぜハル!!」

「前哨戦だクマアアア!!」

そういつて肩を組み、一升瓶を高々と掲げる二人。よく見たら一升瓶の中の酒はすでに半分ほどなくなってる。

「……なあ北上」

「ん？」

「こいつらすでに飲んでるだろ？ 強いのか？」

「隼鷹は強いけど、球磨姉は弱いよ？」

「そうなの？ どれぐらい飲んでるんだよこれ？」

「球磨姉はおちよこ一杯だねえ」

よわッ！

「黙れクマツ!!」

よく見るとほんのりほっぺたの赤い球磨の張り手を再度避けて、3人を店内に招き入れ、居住スペースに案内する。さすがに店の中で酒盛りさせるわけには行かない。

居住スペースでテーブルを中心に適当なところに座ってもらったら、隼鷹と俺が酒を飲む用のコップを出し、球磨にはオレンジジュースを出してやった。つまみは……とりあえず裂きイカでも出すか。

「北上はどうする？」

「私も今日はジュースでいいかな」

「はいよっ」

「ありがとハル」

「球磨に酒をのまさんとは何様だクマツ」

「お前はもうダメだっ。オレンジジュースで我慢しとけっ」

「んじや、あたしとハルでさし向かいってとこだねえ」

「いやいや球磨たちがおるやん。さし向かいちやいますやん」

「クマア〜……」

悔しそうな球磨を尻目に、隼鷹が自分とおれのコップに日本酒を注ぐ。そして……

「では……バーバーちよもらんまの開店に……」

「「かんぱーい!!」だクマー!!」

と4人でコップを鳴らそうとした瞬間だった。

「やせーん!!」

そんな不穏な掛け声と共に窓が『ガターン!!』という音と共に勢い良く開き、べっぴんな女の子がフラッシュユライトのような笑顔を浮かべながら窓から侵入してきた。

「誰だお前ツ?!」

「おお、川内も来たのか。夜戦がてら一杯やるか?」

中々に艶っぽい表情を浮かべながら、隼鷹がそうつぶやく。そうか。この夜にあるまじき賑やかさと眩しい笑顔の女の子はセンダイって名前か。

「隼鷹! 夜戦なら私も呼んでよツ!」

「いや、夜戦じゃないんだけどね」

「まあいいや。ねえ床屋さん! 名前は?!」

「ん? ハルでいいよ」

「んじやハル!!」

この妖怪賑やかフラッシュユ女は自分の靴をポイと外に投げ捨てるど、どすとすと俺の目の前まで来て、俺の両肩にどすと手を起き、めちやくちや眩しい笑顔で俺を見た。

「夜は好き?!」

「……はあ……夜ですか?」

あまりに唐突で意味不明な質問に対し、つい反射的に敬語で返事してしまった今の俺を呪いたい……。

「川内は夜戦が好きなんだよねー」

球磨の横でコップに入ったオレンジジュースをくびくびと飲む北上がそうつぶやく。夜戦ってなんだ夜の戦い?

「そう夜戦!! いいよねえ、夜戦……ハルもそう思うでしょ?」

「いやすんません。マジわけわかんないっす」

わけわかんねえっすマジで。なんか気持ちあげんなりしてきた……確かにここはいいところだけど……ねえ艦娘ってこんなんばつ

かなの？ 善良な子なんて北上と暁ちゃんぐらいで、他の子はどこかしら変じゃない？

「黙れクマあ〜……」

三発目の球磨の張り手が来ると思ってた身構えたら、球磨は知らない内に顔マツカツカにしてくたばってやがる……お前、俺のコップの酒のんだだろ。俺口つけてないのに半分減ってるじゃねーか。

「飲んでないクマア〜……そんなこと言うハルは張り倒ひてやるクマア〜……」

もう好きにしろよ悪酔いしても知らんぞ……なんて球磨に注意を逸らしていたら、今さつき侵入してきた妖怪賑やか夜戦女は、知らない内におれの背後に回っていた。

「……ハツ?!」

気付いた時には遅かった。川内は俺の首にプロレスのチョークスリーパーを極め、容赦なく締め始めた。

「やーせーん!! ハルも！ 早く夜戦しようよ!!」

「ぐおお?! ちよつと待て川内とやらっ!」

やばいかなりいい感じにクビが締めあげられている……

「あれええ〜こんなところに穴が2つ空いてるぞおおく?」

かと思えば今度は隼鷹が俺の鼻の穴に興味津々だ。一升瓶を見ると中身が四分の一まで減っている。いつの間にこいつはこんなに酒を飲んでいたんだっ

「いやあ〜知らない間に減ったんだよね〜ひゃっひゃっひゃっ。とりあえずその穴に裂きイカでも突っ込んでくよあたしは〜」

今一焦点の定まらない目でケラケラ笑いながら、隼鷹は俺の鼻に裂きイカを突っ込んでくる。こら隼鷹。裂きイカはそんなところに突っ込むためのものじゃないっ。

「いいから夜戦！ ハル!! 夜戦いくよ!!」

川内は川内でスリーパーホールドをがちり決めたまま俺の頭を上下左右に振り回す。やめる川内！ 気持ち悪くなってくる……助ける球磨！

「無理だね〜。球磨姉そこでぴくぴくしてるし」

「ク……クマ……」

「いやいやだったからお前が助けてくれよ北上ッ」

「災難だったね。まあ運がなかったと思つてあきらめたら？」

「んな理不尽なッ!!」

川内には首をしめられ隼鷹には鼻に裂きイカを突つ込まれ……なんだこの地獄絵図は……ココに来たことを少し後悔し始めた俺の前に、唐突に目の据わつた球磨が立ちはだかつた。

「クマッ」

「ん？」

「どしたの球磨姉？」

「早く夜戦ッ!!」

球磨は俺をジツと見つめると、酒のせいだろうか……赤いほつぺたのまま……

「くまあ♪」

「……?!」

すさまじい破壊力のはにかんだ笑顔を見せてくれた。

「? 球磨姉？」

「くまくまあ♪」

白状する。この瞬間、俺はちよつとドキツとした。

そしてその直後……

「くまッ」

「がぶうッ?!」

左右から球磨の張り手が飛んできて、その張り手に挟まれた俺の顔は、逃げ場のない衝撃で脳を揺さぶられ、意識が遠のいていった。

「アツハツハツ。ハルが沈んでいくよおお」

「沈む前に夜戦!」

「災難だねえハル」

「くまあ」

鼻に裂きイカ突つ込んだりやたらガツチリとチョークスリーパー極めてきたり……かと思えば左右からおれの顔を思いつきり挟み込んだり……ちくしょうこいつら好き勝手やりやがって……特に球磨

……お前、やっぱり俺を殺す気マンマンだろ白状しろ……

「くぅ〜……まあ〜」

ちくしょうはにかんだ笑顔なんか見せてきやがって……ドキツとしたおれの純情を返せこの妖怪張り手女……

ここのやつらは面白い奴らだっことは認めてやる。賑やかなやつらだっことも認めてやる……でもお前ら……限度つてもものを勉強しろ限度つてもものを……

「くまくまっ♪」

翌日、俺が目を覚ました時、俺の部屋は、艦娘たちが酔いつぶれて眠りこける酒臭い地獄絵図と化していた。隼鷹の姿こそ見えないが、川内と北上が床の上で雑魚寝をしている。一升瓶が転がり、川内はよだれを垂らしながら『やせー……ん……』と呟いていた。隼鷹の姿が見えないのは、全員がくたばった後に一人で宿舎に帰ったのかも知れない。あるいは、隼鷹が帰った後も酒盛りがここで続いていたのか……

自分の口と鼻の中に充満する裂きイカの匂いに気付いた。何の気なしに鼻に触れてみると、俺の鼻には裂きイカが大量に刺さっていることに気付いた。刺さった裂きイカは鼻から口に抜けていて、抜き取るのに一苦労だった。

「んー……」

そして、昨夜核ミサイル級の破壊力を誇る笑顔で俺の純情を弄んだ妖怪ハニカミ女は……

「……重てえ」

「クマー……クマー……」

俺の腹を枕にして大の字で寝ていた。

4. 初戦

今日俺は、床屋としての一大決戦に挑む。

「ハサミ、よーし……カミソリ、よーし……コーム、よーし……」

自分のワゴンに並べられた商売道具のコンディションを点検する。昨夜の内に一本一本、俺は入念に道具の手入れをしておいた。おかげでコンディションは万全。今のおれのハサミならどのような髪でも思う様にカットできるし、今の俺のカミソリなら、たとえそれが中空から漂ってきた産毛であっても、またたく間に真つ二つに切断出来るほどの切れ味を誇る。コームを通せば、いかなる寝ぐせをもたちどころに整えることが出来、ブラシを使えばどのような毛の流れでも瞬時に揃えることが出来るであろう。

「ブラシ、よーし……鏡……よーし……いやダメだ。ここに落書きが残っている」

散髪台の鏡の汚れを確認し、その右隅に落書きが残っているのを見つけ、俺はその落書きをキレイに拭きとるべく、ワゴンから布巾を取る。これはあれだ。昨日の閉店間際にあの妖怪アホ毛女が……

——ここに球磨がアーティスティックなイラストを描いてやるクマ

とか言いながら自身の息で鏡をハアアと曇らせて、人差し指で描いていた落書きの痕だ。これが何のイラストなのかさっぱりわからないうが、人の顔からアホ毛が伸びてるその様子から、自画像のつもりなのかもしれない。

「よくわかったねえハル。私には毛が生えたりんごにしか見えなかったよ?」

「確かにそう見えなくもないけどな……でもあのアホ毛ならやりかねん」

「ふーん……ま、どっちでもいいけどね……」

待ってるお客さん用のソファに寝転がり、同じく待ってるお客さんの暇つぶし用に置いてある少年漫画を読みながら、北上が恐ろしく興味なさげな言い方でそう答えていた。言っとくけどお前、営業妨害み

たいなもんだからな？ そのマンガはお客さんのために置いてあるんだからな？

「ええ〜いいじゃん別に〜」

「良くないに決まってるだろうがあ!!」

「じゃあお客さんになるからさー。私がこれ読み終わった頃にシャンプーしてよ」

「今すぐやってやるからすぐ帰れ」

「最後まで読み終わるまで待ってよー」

「お前が読んでるの『う〇〇と〇ら』のまだ3巻じゃねーか！ 30巻分も待ってられるか!!」

まさか待ってる間の暇つぶしのマンガを読むための客が出来るとは思ってなかった俺を尻目に、北上はソファの全面を占領してマンガを冷めた目で読みあさっていた。その傍らには、20冊の単行本がすでに確保されていた。

……昨日の話だ。この鎮守府にバーバーちよもらんまをオープンさせ、俺が艦娘たちの非常識さに振り回され続けて2ヶ月ほど経ったのだが……毎度のごとくこいつらと飯を食い、風呂に入って自分の部屋に戻る時、球磨がポツリと呟いた。

「クマもそろそろ髪を切りたいクマ〜……」

この鎮守府でバーバーちよもらんまを開店させた当時から、『球磨のアホ毛を成敗すること』を悲願としていた俺の耳が、球磨のこのつぶやきを聞き漏らすはずがない。

「切るのか?! ついにアホ毛を切るのか?! 切るんだな?!」

「い、いや？ まだアホ毛を切るとは……」

「よっしゃ任せろ!! お前のアホ毛は俺が切ってやる!!」

「ど、どっちにしる床屋はバーバーちよもらんましかないクマ」

確かにそうだ。この鎮守府に所属する人間であれば、髪を切るところは俺のバーバーちよもらんま以外にはありえない。ということはこの妖怪アホ毛女は俺の店に散髪に来るわけだ……俺にそのアホ毛の引導を渡されるとも知らずに……。

「クツクツクツ……切れるぞ……ついにその忌々しいアホ毛が切れる

ぞ……クツクツクツ……又ハハハハハハ!!」

「おおっ」

「は、ハルがはじけたクマ……」

球磨たちと別れた後、俺は来たるべく翌日の球磨との決戦に備え、自身の道具のコンディションをチェックし、最高の状態にメンテナンスを施した。投げられたせっけんが突き刺さるほどの硬度を誇るあのアホ毛のことだ。ひよつとすると生半可なハサミや道具では切れないなんてこともあるかもしれんからな。相手は球磨だ。万全の状態で望まねばならない。おれは長い時間をかけ、自身の道具を隅々まで手入れしていった。

そして今日……: 昨晩から高ぶる俺の精神テンションは今、床屋になって初出勤する前の、あの時の興奮に似た高揚感で満ち溢れている。この鎮守府に来て二ヶ月……: この瞬間のために、ひよつとすると俺はこの地にバーバーちよもらんまを開いたのかも知れない……: 「待たせたクマツ!!」

初めてのデートの前に、期待と緊張が入り交じる複雑な心理状態で高鳴る胸を抑えきれない少女のような感覚で、俺が店を開いて数時間……: ついにヤツが来た。ヤツは高らかに来店を宣言すると、俺に向かって不敵な笑みを浮かべながら入り口で仁王立ちをしている。

「来たな……: 妖怪アホ毛女ああ!!」

「クツクツクツ……: この球磨のアホ毛がハルごときに切れるかどうか見ものだクマツ!!」

やってやる……: やってやるさ! そのために俺はこの地にバーバーちよもらんまを……: いやじい様の後を継いで床屋になったと言っても、過言ではないのだからツ!!

「いやあそれは大げさでしょ」

高ぶる俺の精神テンションに、冷め切ったツツコミを入れて水を差そうとしてくる妖怪マンガ女・北上を尻目に、俺と球磨は互いに近付き、視線を相手から逸らすことなく、ジツと相手を見据え、戦いの始まりを宣言した。

「いらっしやいませ……: 今日、どのように……:?!」

「……任せるクマ……球磨の髪を……ハルのセンスで整えるクマツ!!」

「かしこまりましたッ……!」

「まあ……いいけどさー」

球磨を厳かに散髪台に案内し、椅子に座らせる。座らせた後、シートを首に巻き、俺はキャリーのついた椅子に座って、球磨のアホ毛を観察した。

「見れば見るほど、切りたくなってくるアホ毛だ……」

アホ毛は、これから自身が球磨から切断されるといふ己の運命にまだ気付いてないのだろう……いつものようにピコピコと元気よく動き、その異様な存在感をこれでもかとおピールしている……

「……お客様」

「クマ?」

「このアホ毛……切ってもよろしいな?」

「あくまで客の同意を得た上で仕事しようというその心意気……クツクツクツ……あっぱれだクマ」

「お褒めいただき光栄だ」

「……任せるクマ……さあ、切ってみるがいいクマツ!!」

球磨の同意を得た俺は、おもむろにアホ毛に霧吹きを向け、ひたすらに水を吹きかけた。強靱に直立したアホ毛に水分が浸透し、今までは、乾燥したもふもふとした手触りを視覚から訴えていたアホ毛がしっとり濡れ、切られる準備が整ったことを告げる。

「では……切らせていただこうツ!!」

水分を含み、それでもまだそびえ立つアホ毛の根本に、俺はハサミを当てて……

——さくっ

ついにアホ毛を切断した。その瞬間俺の脳裏に浮かんだのは、ついに悲願を達成した喜びではなく、達成してしまった悲しみだった。

「やった……! ついに……ついに妖怪アホ毛女のアホ毛を……ついに……」

胸に去来する虚無感と共に俺の脳裏に浮かび上がったのは、今球磨

の足元に落ちたアホ毛との初めての出会い……俺の腹に拳を振じ込んで来た女の頭上でピコピコと動き、俺が投げたせつけんをその身に受け止め……憎きアホ毛女の頭上で、いつも俺をあざ笑うようにピコピコと動いていたアホ毛。おれはついに成敗した。この憎きアホ毛を成敗したのだ……それなのに……俺の胸に押し寄せるこの虚無感は何だ……この地に店を構えて約二ヶ月……こいつを切ることだけを……ただそれだけを恋焦がれるように待ちわびて……

「ハル―」

俺がアホ毛切断の儀式を終えたことで無駄に大げさな達成感を感じて陶醉していたら、読んでるマンガから目をそらさずに北上が声をかけてきた。邪魔をするなよ北上。

「なんだよ。邪魔するなよ今おれは仕事をやり終えた達成感に酔ってるんだから」

「いやー、それはいいんだけどさ」

「？」

「球磨姉の頭、見てみなよ」

「？ 頭、球磨の？」

「うん」

「……」

そうだ。俺は切られたアホ毛の方にばかり気が向いて、肝心の球磨の頭に……アホ毛跡にまったく気が向いてなかった。確認しなければ。確実に仕事を遂行するためには、確認をしなければならない。

「……」

「……?! ま、まさかこんなツ?!」

「クツクツクツ……!!」

信じられないことだが……アホ毛は再生していた。さつき俺が切ったその根本から……新たなアホ毛が悠然と伸び、そびえ立ち、存在を誇示していた。

「馬鹿なそんなツ！ 俺は切った……切ったはずだ!! それなのになぜだツ?!」

俺は再度アホ毛の根本にハサミを押し付け、その根本からアホ毛を

切断した。今度は確実に。切断したアホ毛が、一本目のアホ毛と同じく球磨の足元にぽとりと落ちていったことを俺は確認した。確実に。今度は確実に切ったはずだ。

「甘いクマ……球磨のアホ毛は永遠に不滅だクマ……!」

その直後、おれは信じられない光景を見た。アホ毛が無くなった球磨の、そのもふもふとした後ろ髪から、ひと束の髪の毛の塊がぐぐつと持ちあがり……

「たとい何人に何度切られようと……その度に第二第三のアホ毛が生まれ、その存在を誇示するために天高くそびえ立つクマ!」

その束がピコンと立ち上がって、新たなアホ毛として球磨の頭上に君臨した。

「バカなあああ!! そんなことがあつてたまるかああああ!!」

「ムハハハハ!! ハルごときに根絶されるほど球磨のアホ毛ではヤワではないクマツ!!」

俺は何度も……何度も球磨のアホ毛を切った。ハサミがダメならカミソリを使った……何度も生まれ変わるといふのならコームで寝かせ、ブラシで研いた……立ち上がる後ろ髪を抑制するため、ワックスや整髪料を使った……コシを失くすためにストレートパーマをかけた……思いつくありとあらゆる手段を講じて、この妖怪アホ毛女のアホ毛の根絶を試みた。

「甘いクマツ!! 縮毛矯正如きでクマのアホ毛は滅びぬクマああああ!!」

しかしその度にアホ毛は立ち上がり、そして俺の努力をあざ笑うかのように天空に向かってそびえ立った。

俺は……心が折れた。

「バカなっ……床屋が……髪の毛のプロである床屋が……アホ毛に負けるだどツ……?!」

「まあ、善戦したクマね。ただし、負けは負けクマツ!!」

「そんなバカな……俺の……俺の床屋としてのプライドがツ……!!」

「まあ……ハルも腕が悪いわけじゃないと思うよ。ただ相手が悪かったっただけで」

「クツクツクツ……」

じい様……俺があなたに憧れ、あなたの背中を追い求めるようになったてからのこの十数年間の努力は……この、たった一人の妖怪アホ毛女にぶち壊されてしまいました……。

『じいさま！ ハサミでちよきちよきするじいさまはカツコイイね！』

『んーそうか？ んじゃハルも床屋さんになるか？』

『うん！ なる！ ハルもじいさまになる!!』

『そーかそーか！ ハルも床屋さんになるか!!』

俺がまだ物心ついて間もない頃にじい様と交わした会話が、頭の中で何度も繰り返された。じい様……あなたへの道のりは、まだまだ遠いみたいだ……おれは一体いつになれば、あなたに匹敵する床屋になれるのだろうか……

その後、涙が流れ落ちてしまうのを必死にこらえながら、俺は球磨の髪の毛を整え、傷んでる部分をカットした後、シャンプーをするべくシャンプー台に案内した。

「おつかれさん……んじゃあとシャンプーするから、シャンプー台に行ってくれ……」

「了解だクマ」

「落ち込みすぎでしょハル……」

シャンプーをしたあとは、球磨の髪を乾かしてやる。ちくしように。勝ち誇ってやがる。こいつのアホ毛、無力感に打ちひしがれた俺のことをあざ笑うかのように、天空に向かってまっすぐに伸びてやがる……

「うん。だいぶスツキリしたクマ。ありがとクマ」

「はい……ありがとうございました……」

「まだ落ち込んでるクマ……あーそうそうハル」

「ん？ なんだよ」

「ちよつとシザーバッグを貸すクマ」

唐突に球磨はこう言い、ピコピコ動くアホ毛と同じリズムで、俺に向かって手招きをした。なんで商売道具を渡さにやいかんのだ。

「いいから敗者は勝者に従うクマ！」

「はいはい……」

一度言い出したらこいつは引かないからな……観念した俺は、自分の腰からシザーバッグを外し、それを球磨に手渡す。すると球磨は……

「撃墜されたマークだクマっ」

と言いなながら、油性ペンで俺のキャンパス地のシザーバッグに、ヘタクソな自分の似顔絵と『敗者だクマ』というセリフを書き込みやがった。

「あああああ?! お前、なんてことするんだー!!」

「フツフツフ。これぞ勝者の特権だクマ。撃墜マークを描いてやったクマ!!」

「ふぎけるな!! なに人様のシザーバッグに自分の似顔絵落書きしてるんだよ!!」

得意げに球磨が落書きした絵は、鏡に残っていた落書きの痕跡と同じく、絵心のないヘロヘロな自画像だった。

「ん? なにこれ? やっぱり毛の生えたりんご?」

北上がソファから移動して、シザーバッグに描かれた落書きを覗きこんでくる。こらどう見てもこの忌々しいアホ毛女の自画像だろうが。

「そうなの? 私には毛の生えたキモいりんごにしか見えないよ?」

「北上はこの球磨の妹なのに、姉の自画像も分からないクマ?」

「球磨姉の絵、今まで誰も正解したことないじゃん」

俺は正解したけどな……でもなんだこのうれしくない感じ。むしろ忌々しい。この絵の正体が分かってしまう自分が忌々しい。

「とりあえず向こう10年はこのシザーバッグを使うクマ!」

「言われなくても使うしかないだろうがー!!」

「ホント、災難だったねハル……」

そんなわけで、俺は翌日から、この球磨の落書き入りシザーバッグを使わざるを得ないハメに陥ってしまった……。

とはいうものの、実際に使ってみると意外とみんなの評判がいい。

むしろこのままバーバーちよもらんまのトレードマークにしてもいいんじゃないか……しばらく使い続けた頃、俺はそんなことを考え始めていた。

「……と思うんだが、北上どう思う?」

「まあー球磨姉が調子に乗るのは目に見えてるね」

あの屈辱の敗戦から数日経った頃、客として来店した北上の髪の毛を整えながら、球磨の似顔絵をトレードマークにするアイデアを相談していた。

「調子にはもう乗ってるんだよ。見てみろよ俺のシザーバック」

北上に俺のシザーバックを見せてやる。あの日球磨によって落書きされたシザーバックは、俺の目の届かないところで球磨に落書きされ続けているらしい。一人、また一人と落書きされている人数が増えている。

「ああ、増えてるね。描いてもらってるの?」

「いや、ヤツが勝手に俺の断りなく進めてるだけだ。鎮守府のみんなを描いてるみたいだな。この子は北上だろう」

俺はいつの間にか増殖していた落書きの中から、北上と思しきおさげの子の絵を指さした。それを見る北上の頭にはなマークが浮かんでいるように見えるのは、気のせいではないだろう。

「え? そうなの? 似てないでしょー」

「あいつからしてみれば北上はこんな風に見えるんだと思うぞ」

「ふーん……球磨姉の絵が何なのか分かるのかー。ふーん……」

「なんだその意味深でツツコんで下さいと言わんばかりの顔は?」

「別に。ニヤニヤ」

5. 拉致。そして昼寝。

大浴場女湯の床をデツキブラシでこすり終えた俺は、次に手桶と腰掛けを磨くべく、山積みになっていてるそれらに目をやった。

昨日、お客としてバーバーちよもらんまを訪れた隼鷹の髪を整えていた時のことだ。カットも終わりシャンプーも無事終わって、隼鷹のポリューミーな髪をドライヤーで乾かしていた。

「そーいやさ。ハルは明日は大掃除は参加するの？」

「なにそれ？ 初耳なんだけど」

「あれ？ ハルが来たのは……」

「半年前ぐらいだな」

「あーそーいやそつかー。もうすつかり馴染んでたから、数年前からずつといるような気がしてたよーアツハツハツ」

「お前といい川内といい球磨といい、ほぼ毎晩俺の店に酒盛りしにくるもんな。そんだけ毎晩酒盛りしてれば、そら随分長い付き合いだと勘違いもするだろう」

これは本当の話。特に隼鷹は、夜の出撃というのがほぼないらしい。球磨や川内なんかは夜の出撃とかぶって俺の店に遊びに来ないときもあるが、隼鷹はほぼ毎晩うちに酒の肴をせびりに来やがる。おかげでうちに備蓄している俺用のおやつがどんどんなくなっていく。そうじゃなくてもうちの食料は球磨にどんどん食われているというのに……まあほとんど提督さんからの横流し品なんだけど。あの人、なんでも自分で作っちゃうんだよな……自作ポテチのおすそわけなんて初めてだったぜ……。

「いやだってほら、あたしは夜戦が出来ないから夜は絶対に留守番でヒマでしょ？ んでハルもお店を開いてるのは昼だから、夜はヒマなんだろうなーなんて。だったら飲みに行ってもいいかなーなんて。タツハツハツ」

「いやいや別に文句があるわけじゃないから。それよりもその大掃除って何だ？」

「半年に1回……年の瀬と夏に1回ずつ、鎮守府の大掃除をやるんだ

よ。いつもは掃除出来るほどの余裕なんてないから、その日だけは私とビス子が哨戒任務を担当して、その間に残った子で鎮守府の大掃除をするんだよね」

「ふーん……」

確かに鎮守府の施設の掃除をしてるとこなんて今まで見たことなかったな……そして、自分がこの鎮守府に来て、知らない内に半年近く経過していたことにびっくりした。年を取ると時間が進むのが早く感じるとよく聞けけれど、なんだか一昨日ぐらいに店を構えた気がするんだけどなあ……自分で『来て半年』と言ったけど、自分の発言にびっくりだ。

「そりゃ言い過ぎでしょハル」

「そうか？ ……はい終わり！」

「ほっ！ ありがとう」

終わりの合図に、隼鷹の両肩をポンと叩いてあげた。隼鷹は鏡の前で改めて自身の髪の毛のチェックをすると、出来栄えに満足そうに力強く頷く。言われたとおりにあの髪型にしてるんだけど……隼鷹は顔が整ってるんだから、たまにはストレートにしてもキレイだと思うんだけどね。まあ本人はこの髪型にこだわりがあるのだろう。

「んでさっきの話だけだよ。ハルはどうすんの？ 明日は大掃除で忙しいから、誰もこつちにはこないと思うよ」

「だったら掃除の手伝いに行ってもいいなあ。うちの店はいつも掃除してるから平気だし」

「おっ助かる！ じゃああたしから提督に伝えとくよ」

「うん頼む。明日は朝に執務室に行くって言つといて」

「りょーかい」

というわけで今日、おれは鎮守府の大掃除をするべく、朝から執務室に顔を出した。今は提督さんの指示で、この大浴場の女湯を掃除している。俺に割り振られた担当は、女湯も含む大浴場すべての清掃。デッキブラシを使つての床掃除も浴槽の清掃も終了していて、今は手桶と腰掛けの掃除をしている。これが終われば、次は男湯の方の掃除だ。

実は俺は、この手の『無心になれる作業』というのが案外嫌いではない。何も考えず、ただひたすらに汚れを落としていく……こういう作業は、頭を空っぽに出来てとても気持ちがいい……」

「……」

手桶を一つひとつ丹念に磨いていき、さあ次は腰掛けにとりかかろうかと思つて、その一つを手を取った、まさにその時だった。

「クマツ!!」

「? 球磨?」

唐突に浴場の入り口が開き、球磨が浴場に入ってきた。その表情は真剣で、何か鬼気迫る顔つきをしている。肩で息をしている辺り、とても慌てているように見えるが……?

球磨は俺をちらつと見た後、周囲の様子を探るためか深刻な表情で顔をブンブンと左右に振っていた。

「……」

「なんだよ。お前確か宿舎の方の掃除担当だろー? こんなところで油売つてないで……」

俺がそう言いながら、手に持っていた腰掛けを床に起き、球磨に近づいたその時だった。

「クマツ!!」

「がふうつ?!」

唐突に、クマが拳を俺の腹に突き刺してきやがった。俗に言う腹パンというやつで、初対面の時に俺の腹に突き刺してきた拳と同じく、『ドフツ』というえらくリアリティ溢れる音と共に、コークスクリュー気味に俺の腹に拳がえぐり込んでいく。その拳は、初めて会ったあの時と同じく俺の肺から空気を1シーシー残らず絞り出し、俺の呼吸をストップさせた。

「かひゅー……な、なんてことを……かひゅー……」

「クマ……」

俺が、腹を殴られた痛みと呼吸の出来ない苦しみで床に倒れ伏して悶絶していると、球磨が周囲の様子を確認したのち、俺の服の襟を掴んで脱衣所に引きずっていった。そのまま高さが俺の身長ほどある

ロッカーを開いた球磨は、俺をそのロッカーの中に投げ入れ……

「クマッ！」

「ぐあっ?!」

自身も同じロッカーに入ってきて、ロッカーの扉を閉じた。この狭く苦しいロッカーの中に、俺は球磨と共に閉じ込められた。

「な、何をするんだ球磨……かひゅー……かひゅー……」

「シッ！ 今外に北上と暁がいるクマッ……!!」

耳を澄ましてみると、確かにロッカーの外から『あれ？ こつちに逃げてきたと思うんだけどな……』『ここで暁が球磨を見つけたら、きつと一人前のレディー!!』『確かにそうだね。んじやがんぼつて球磨姉さがそっか』という北上と暁ちゃんの会話が聞こえてくる。

「お前……なにやってんだよッ……かひゅー……」

「大掃除、飽きてきたから逃げたクマ。キリッ」

「何俳句のリズムに乗せてろくでもないこと言っただやってるんだ……!!」

「いいからちよつと黙るクマ！ 見つかるクマ……!!」

ロッカーの中は狭い。元々人が入るように設計されているわけじゃないから、人が一人ギリギリ入れるぐらいの広さでしかない。そんな中に大の大人……いや球磨はなんとくなくティーンな感じだけど……人間が二人も入ろうものなら、ロッカー内はぱっつんぱっつんになる。

「もぞもぞ動いちやダメだクマ……！ 外の二人にバレるクマ……!!」

「つったつてお前……！ 顔近いし身体密着してるんだぞ……!!」

そんなわけで、俺と球磨は今、ロッカーの中でありえないほどに密着してる。なんつーか抱きあってる感じって言えばいいのかこれは。お互いの顔がお互いの左耳のすぐそばにあつて、球磨がポソポソしゃべってる言葉が全部耳元でささやいてる言葉みたいになつてて、よろしくない。

「だつたらなんで俺と一緒にロッカーにぶち込んだんだよつ……!」

「こうしないと、北上と暁にバラされると思つたクマ……つーかこそ

ばゆいから耳元で話すなクマ……!!」

「お前が自分で撒いた種だろうがッ……!!」

上半身も妙に密着してて狭っ苦しさに拍車をかけてる感じだ。おまけに球磨のうなじがすぐ目の前にあって、いい匂いというか……妙に落ち着く匂いが鼻をくすぐってきて、よろしくない……非常によろしくない。

『ハルもいないね？ どこいったのかしらー？』

『そういやそうだね。ニヤニヤ』

『北上さんは何か知ってるの？』

『別に。でも球磨姉とハルは仲いいからね。二人でサボってるのかもね』

北上と暁ちゃんがこんな会話をロッカーの外で繰り広げている。やめろ。なんて勘違いをしているんだお前らは……俺はこんな妖怪ロッカー女とは仲良くなんかない!!

「北上！ 暁ちゃん!! 助けてろおおお!!」

「こ、コラッ！ 暴れるなクマッ……!!」

『ん?』

俺は狭っ苦しいロッカーの中で、あらん限りの力を駆使して身体を揺らしまくった。そんな俺を球磨は必死に制止するが、元々自由が効かない狭っ苦しいロッカーの中。球磨に俺を制止することは出来ず……

「うおおおッ!!」

「クマッ!!」

「ハル?!」

「球磨姉も?!」

俺の反動をつけた揺らしのおかげで、ついにロッカーが半壊し、ロッカーの扉が外れた。扉が外れたことで、俺と球磨はロッカーから投げ出され、北上と暁の目の前に、ちょうど二人で抱きあってるような体勢で倒れこんだ。

「ぐあっ……?!」

「クマッ……?!」

俺は自身の視界に北上と暁の二人の姿を捉えた。暁ちゃんは顔をマツカツカにして、両手で目を覆っている。でも両手の隙間からは、俺と球磨をぼつちりと見ている眼差しがよく見えた。

一方の北上は、俺と球磨の顔をニヤニヤとした、実にいやらしい眼差しで眺めている。やめろ。お前たち誤解するな。これは事件だ。俺は不幸な事件に巻き込まれただけなんだ。

「ふ、ふ、二人とも何やってるのよ!!」

暁ちゃんがマツカツカな顔で、自身の顔を両手で隠しながら言う。確かに暁ちゃんの気持ちは分かる。男女が抱きあつた姿勢でロツカーから突然現れたら、誰だってそういう勘違いをおこ

「クマツ!!」

「がふうツ?!」

唐突に、俺の腹に球磨が第二撃の腹パンを叩き込んだ。やはりその腹パンは確実に俺の急所をめぐり込み、俺は再度、痛みと呼吸出来ない苦しみで、その場にうずくまらざるを得なかった。

「かひゅー……かひゅー……」

「クマツ!!」

「あ。球磨姉がハルを強奪して逃げた」

「コラー!! 待たないと一人前のレディーにはなれないわよ!!」

そして球磨は、先ほどと同じようにうずくまる俺の襟を掴むと、そのまま俺を引きずり、大浴場から一目散に逃げていった。俺という大人の大人一人を引きずっている状態にも関わらず、その走るスピードは、一般人の全力疾走かそれ以上のスピードだった。

「はなせー!! 俺を巻き込むなー!!」

「ダメだクマ! ハルも一緒にいないと球磨が折檻されるクマ! ハルを盾にするクマツ!!」

「知るかー!!」

俺を引きずりながらとは思えない恐るべきスピードで、浴場を出て、建物を出て……港を通りぬけ……灯台を後にし……丘を登り……鎮守府全体を眼下に収める小高い丘の桜の木の下まで逃げてきた球磨。いかに人間離れた妖怪ロツカー女といえど、さすがにこの距離

を俺を引きずりながら走り続けるのは大変だったらしい。丘に到着するやいなや、俺の襟から手を離し、ゼハーゼハーと肩で息をしていた。

「さすがに……ゼハー……疲れた……クマ……」

「そろこんだけ走ったら疲れるだろうよ……つーか戻るぞ球磨。掃除がまだ終わつとらん」

「イヤだクマ。キリッ」

「お前どんだけわがままなんだよっ！ しかも俺まで巻き込んで!!」

「こうしないと球磨が折檻されるクマ……ゼハー……キリッ」

そんなに息を切らせちゃ、いくら口で『キリッ』とか言ってもどうにもしまらん。だが戻らなければ……この妖怪バカ力女は別にどうでもいいとして、おれには自分のノルマがある。

「あれ……球磨とハルじゃん……掃除終わったの……?」

桜の木の影から、なんだか眠そうな声が聞こえてきた。この声は……妖怪ねぼすけ女の加古か！

「加古クマ？ 姿が見えないと思ってたら、こんなところでサボってたクマ？」

「まあね……」

桜の木陰から、実に眠そうな顔が出てきた。このキレイな黒髪が片目にかかった髪型の女は、やはり妖怪ねぼすけ女。お前もここでサボってたのかっ。

「うん。……で寝るの好きなんだー。ふあ……」

加古は自身のサボりがバレたにも関わらず、実にのどかなあくびをし、再び桜の木の幹にもたれかかって眠りに入った。なんなの？ この大掃除つてこんなにサボりが横行してるの？ 一大行事じゃないの？

「ハルもちよつと寝転んでみたら？ きもちいいよ」

そうだな。どうせ後で戻るし、加古がそこまで昼寝場所として気に入るその気持ちよさも少し気になる……

「んじゃちよつとだけ寝転ばせてもらおうか。ちよつとだけ」

「はいはいどうぞ……クカー……」

加古と同じく、桜の幹を枕にして寝転んでみる。確かにこの桜の木の幹、枕として絶妙な高さで頭を支えてくれる上、寝転んだ時に漂ってくる草の香りが心地いい。

「おおっ……………これは……………」

「……………zzzzzzzzzz」

しかも日向の方にいるためか、お日様の光が身体に当たるのがぼかぼかとして心地よく、しかも顔はちょうど桜の木の影になって全く眩しくない。

「どんな感じだクマ?」

「やばいなこれ……………昼寝スポットにちょうどいいぞ……………」

「よし。球磨もちよつと寝転んで見るクマ!」

ついに球磨も衝動を抑えきれなくなったようだ。球磨は俺の隣にやってくる……………

「クマツ!」

「がふおツ?!」

何を思ったのか、俺の腹を枕にして寝転びやがった。しかも勢い良く倒れこんできたから、コークスクリューパンチほどではないが結構な衝撃が俺の腹に襲いかかった。

「おおおお!! 確かに気持ちいいクマ!!」

「キモチイイのは分かったから……………その、俺の腹にダメージを与えていくのはやめろツ」

「おおおお!! ハルの声が腹を通して頭に直接響くクマ……………!!」

「つーかなんで俺の腹なんだよつ……………お前も木を枕にしるよ……………」

「木の幹よりもハルの腹の方が球磨にはちようどいい枕だクマツ」

だめだこの女……………言ってる意味がさっぱり分からん……………あーでもお日様の光でぼかぼかして妙に気持ちいい……………なんだかうとうとしてきた……………ヤバイこのままでは寝ちまう……………球磨、起きるぞ。

「スー……………スー……………」

ヤバイ……………この妖怪アホ毛女……………もう熟睡したのか……………ヤバイ……………起きなきや……………。

俺は渾身の力を込めて起きようとするが、もはやお日様の温かさ

球磨の頭の心地いい圧迫感に捕まってしまい、まぶたが急激に重みを増して起きてられなくなつた。なんとかして頭を動かし、視界に加古が入った時、俺はなんだか不思議な光景を見た。

——加古……ハルさんもココを気に入ってくれてよかったね 私もううれしいよ

それは、桜の木の幹を枕にしているはずの加古に膝枕をしてあげている、加古によく似た……でも幾分加古よりも顔つきが優しくで柔らかい、左目が金色に輝いている女の子の姿だった。その女の子は、眠りこける加古の頭を、微笑みながら優しく丁寧に撫でていた。

「あれ……加古……誰それ……?」

俺は、加古にその子が誰なのかを必死に問いたただそうとしたが、もう限界だった……眠る加古と、その加古に膝枕する女の子……そして俺の腹を執拗に圧迫している球磨の頭の重みを感じながら、俺は夢の世界へと落ちていった……

その後、思いつきり熟睡してしまった俺と球磨、そしてここでサボっているのがバレた加古は、追いかけてきた北上と暁ちゃん、そして真面目に掃除を続けていた提督と川内にこつてりと絞られ……といつても俺は被害者だったからそこまで怒られなかったけど……球磨は宿舎の掃除に加えて浴場の残りを、加古は宿舎と執務室の掃除を罰として追加されていた。

俺はというと、女湯の腰掛けを磨き終わった後、提督さんと一緒に掃除が終わった食堂で一緒にコーヒを飲んでいた。他の艦娘のみんなはまだ掃除中らしい。特に球磨はサボりと俺の拉致の罰として担当箇所が増えてしまい、ヒーコラ言いながら掃除中だそうだ。いい気味だ。ざまーみる妖怪拉致監禁女。俺の腹に容赦なくコークスクリューを突き刺した罰だ。

「ところで提督さん」

「ん?」

「さつき球磨に拉致られてあの丘に行った時、ちよつと変な夢っつーか幻っつーか……妙なのを見たんですよね」

「?」

俺は、さつき丘の上で見た、加古を膝枕していた女の子の話をした。あの、加古の頭を優しく撫でる女の子の、あの神秘的な姿がどうしても気になって仕方がなかったからだ。

「……それは多分、古鷹だろう」

「？ フルタカ？」

「ああ。加古の姉でな。よく加古と古鷹は、あの丘で一緒にいたんだ。俺が二人を探しに行くと、あの丘でよく昼寝してたよ。古鷹が加古を膝枕してな」

「加古にはお姉ちゃんがいるんすね」

「ああ」

俺はオカルトなんて信用しない。でも今回は、なぜだか提督さんの話を聞いて、俺が見た女の子は、きつと古鷹という子で間違いないだろうと思えた。

なぜなら、次に提督さんが言った言葉が、俺にほんの少しの胸の痛みを残したからだだった。

「古鷹はな……轟沈したんだ……敵の砲弾の雨あられから、加古をかばって」

「……すみません提督さん。余計なことを聞いて……」

「いいさ。古鷹が今も加古を見守ってくれてるってわかったんだ。うれしいことだよ」

その言葉とは裏腹に提督さんの表情は、今にも大声で泣きだしてしまいそうな、そんな笑顔だった。

6. 戦後に向けて……職業調査

「すまんが、暁にハルを調査してもらおう」

ある日、珍しく執務室に呼ばれた俺は、挨拶もそこそこに提督からこんなことを言われた。

「俺を調査？ 身辺調査か何かですか？」

でも身辺調査ならココに来る前に色々やられたよな……国籍や経歴はもちろんのこと、反社会的活動への関与の有無とか……でもここに来て半年ぐらい経ってるもん。半年毎に情報更新したりするもんなのかな？

「あーいや、そういう堅苦しいものじゃない。言ってみれば小学校の頃の社会科見学で職業調査みたいなやつたる？ あれと同じノリだよ」

「あーなるほど。職業について色々調べて、発表会で『床屋さんの大変なところ』とかをプレゼンするあれですか」

「目的は違うが、ノリは概ねあんな感じだな」

提督は、戦争が終わった後の艦娘の職業選択の幅に関して、若干の懸念があるらしい。艦娘は生まれてから今まで、海上戦闘の経験しかない。戦争が終わり、艦娘が実社会で暮らすことになった時、社会のことを何も知らない状況で放り出すのは忍びないそうだ。

「まあある程度社会常識をレクチャーしてはいるんだが……それでも中々実社会とはかけ離れた生活が続いているだけに、浮世離れしてるヤツが多いのも事実だ」

「ですねぇ」

特に約一名……動物みたいな名前をしたアホがいますもんね……俺この前の大掃除の時、ナチュラルに営利誘拐されましたもんね……という言葉を、俺は必死にこらえた。

——クマッ

妖怪アホ毛女の邪悪なイメージが自分の背後に浮き出たような気がして、俺は背後に向かって手をパタパタと振った。

「何やってるんだ？」

「……いや、邪悪なイメージを払拭しようかと……」

「? ……まあいいか。特に暁に関しては、将来の適正を見極め、世の中への見識を深めるという意味で、昔はよくこの鎮守府に出入りしていた外部の人間の職業の詳細を調べさせていたんだ」

「なるほど。いろんな仕事を調べさせて、今の内に本人の興味が湧く仕事を見つけてさせて、戦争が終わった後で、自身が悩んだり困ったりしないようにしておくってことですね」

「その通りだ。人手不足と戦闘の激化からしばらくやめていたんだが、今は少し落ち着いてるし、ハルにも協力してもらおうかと思つてな」

真剣な眼差しでこう語り、艦娘たちの将来を真剣に憂いているこの人は、やはり優しい人だと言える。ここに来て痛感したが、確かに個人的な連中ではあるものの、接していると艦娘のやつらは人間と同じなんだと実感できる。

そんな存在だからこそ、提督さんはそこからさらに一歩進んで、彼女たちの将来に戦い以外の道を残してやりたいのだろう。それが例え本人たちが望んだことであっても、人生が戦いだけだなんて悲しすぎる。

「分かりました。お手伝いします」

「よかったありがとう。ちょうど明日、暁はローテーションから外れてる。明日の午前中は暁をハルの店に寄越すから、そのつもりでいてくれ」

「了解です」

「それから、保護者兼手伝いとして球磨をつける。こき使ってくれて構わない」

手伝いをつけてくれるのはありがたいのだが、なぜあの妖怪アホ毛女なのかが疑問だ……。

「あれ? 球磨と仲いいんじゃないの? 北上からそう聞いたからわざわざシフト変更したんだけど……」

「あの妖怪おさげ女め……根も葉もなく余計でどうでもいい間違つたことを……」

——ニヤリ

「まあ何はともあれ、明日はよろしく頼む。特に特別なことはしなくていい。いつもどおりの床屋の仕事ぶりを、暁に見せてやってくれ」
「了解っす」

それにしても、自分の働きっぷりを人に見せるだなんてなんだか緊張する。その日の夜は緊張して中々寝付くことが出来なかった。

俺はかつて、自分のじい様が真摯な態度で自身の仕事に取り組み、真剣に客の髪を整えるその仕事っぷりを見て、一生を決めた。幼いながらに、俺は自分の天職を見つけたんだ。たとえじい様本人にその気はなかったとしても、だ。

俺は明日、床屋としての自分の姿を、一人の子供に見せる。自分の人生の進路をまだ決めていない一人の純粋な可能性の塊である暁ちゃんに、床屋を代表して、床屋という仕事の生き方を見てもらうことになる。そしてそれは、彼女の人生を決定してしまうかもしれない行為なんだ。

おれは、そんな重大なことに恥じない、立派な床屋だろうか。あの日、俺の人生を決定づけたじい様のような、素晴らしい床屋でいられているのだろうか……

「やせーん!!!」

人が真剣に悩んでいるというのに……いつものように唐突に窓が開き、今日もその窓の向こう側では、川内がフラッシュライトのような眩しい満面の笑顔をしていた。

「ハル！ 夜戦!! 今日こそ夜戦!!!」

「うるせえ川内!! 毎晩毎晩夜10時過ぎた頃に俺の家を襲撃するな!!!」

そして翌日。睡眠不足の目をこすりながら俺が店を開けると、朝一番に川内がうちにやってきた。外が明るいうちから顔を見せるってどういう風の吹き回しだ。

「いらっしや……おお？ 川内?」

「やあハルおはよお〜!」

「川内が明るい内に顔を見せるだなんてめずらしいな」

「でしょ？ 今日が暁の職業調査って聞いて。面白そうだから、散髪がてらそれを見学しようと思って」

職業調査を見学とはこらまた妙な話になってきたな……

「いや、つつても何も出ないぞ？」

「いいじゃないじゃん。私にも見学させて？ ね？」

「まあいいんじゃないか？ どうせ部外者の球磨もいるしな」

暁に俺の仕事を見せるためには、散髪する対象がどうしても必要だ。球磨でもいいんだが、以前のアホ毛処理失敗のことを考えると、少なくともあの妖怪アホ毛女以外の方がよさそうだ。俺の心が折れる場面は人には見せたくないしな。

そんなことを考えていたら、件の暁ちゃんと球磨が店にやってきた。今日は勉強のためか、手提げバッグを持ってきている暁ちゃん。球磨はいつものように手ぶらだった。お前手荷物持ってきたことないよな……

「ハル！ 一人前のレディーが来たわよ!!」

「来たクマ〜」

「はいどうぞ。いらっしやいませ〜」

「今日はよろしくね！」

なにやら小学校低学年の子が持っているもおかしくないようなバッグの中からメモ帳と筆記用具を取り出し、俺のもとにやってくる暁ちゃん。いいねえ……この、結果はどうあれ頑張ろうという健気な心構え……引越し初日のことを思い出すなあ……

「球磨だって初日は頑張ったクマ」

「お前は俺に向かつて霧吹きしてただけじゃねーか今みたいにな」

『そんなことはないクマ』とふてくされながら、果敢に俺の頭に霧吹きを吹きかけている妖怪霧吹き女。霧吹きの一休何がお前をそこまで駆り立てるんだよ……

「それじゃハル、今日はよろしくお願いします！」

「ほいよろしく〜」

「それじゃあまず、床屋さんがどういう仕事なのか教えて！」

む……いきなり中々難問な質問だ……なんつーかこういう漠然と

した質問が一番答え辛かったりするんだ……ちゃんと答えなきゃいけないし……。

「えっと……床屋つてのは……」

「球磨のアホ毛が切れなくて、悔しさのあまりむせび泣くのが仕事だクマ。キリッ」

「お前は黙れよ」

「私と一緒に夜戦に付き合ってくれるのが仕事だとうれしいんだけどね！」

「お前も黙れ」

「? ??」

「あーごめんね暁ちゃん。混乱させちゃってるみたいだね……」

とりあえず、暁ちゃんには『床屋さんは、お客さんの髪型を整えてあげるのが仕事だクマ』と答えておいた。ちなみに語尾のクマは球磨が勝手に付け加えていた。

その後、その実演ということで、川内の髪を整えながら仕事内容の説明を行う。ある程度毛先を整えた後のシャンプーも、今日は暁ちゃんが隣にいる状態で行った。

「シャンプーの時は、お客さんにかゆいところがないか聞くんだよ」

「そーいや暁の時も聞いてたわね！」

「かゆいところはないか川内く？」

「右足の裏の……」

「却下！」

「だったら夜戦!!」

相つ変わらず艦娘のやつらは意味わかんねえ……。普通シャンプー中にかゆいところ聞かれたら頭を答えるだろうに。なんでみんな揃いも揃って足の裏を答えるんだよ……。

「ここに寝転ぶとかゆくなるんだから仕方ないクマ」

暁ちゃんと同じく、俺の隣でシャンプーを眺める球磨がこんなどうでもいいことを言いやがる。なんだそりゃ。このソファに座ると足の裏が痒くなる呪いにもかかるのか？ みんながいなくなっからちよつと座ってみるかな……

シャンプーが終わったら川内の髪を乾かしてあげれば終了だ。俺は髪を乾かし終わった川内の両肩をポンと叩いてやり、カットの終了を伝えた。

「はい！ おつかれさん！」

「ほっ！」

『これでまた夜戦がバリバリ出来るぞおお』と口走りながらバーバーちよもらんまを後にする川内。そしてそれを見送る俺達3人。いいねえ。どんな内容であれ、俺のカットでごきげんになったお客さんが帰っていくのを見送る時間は、やりがいを感じるなあ……。

「ねえハル〜」

「ん？」

「床屋さんの仕事って、シャンプーして髪の毛切ってあげて、それだけ？」

「これだけってわけじゃないけどなあ……」

「他には何かあるの?!」

いつぞやの提督のように、好奇心の塊となった両目で俺を見つめてくる暁ちゃん。ここままでまっすぐでワクワクした瞳で見られたら、何か見せなきゃいけないくなるわけだが……

「っていつてもなあ……例えば髭剃りとか？」

「髭剃り？ お客さんの髭を剃ってあげるの？」

「うん。でも基本、男にしかやってあげられないことだからねえ……

あ、ちよつと待て」

「？」

俺は、散髪台の方を見た。つられて暁ちゃんも散髪台の方に顔を向ける。俺達の視線の先には、散髪台の横のキャリー付きワゴンの上に載せられているごつい霧吹きに興味津々の球磨がいる。

「？ 何事クマ？」

「球磨、お前ちよつと実演台になれ」

「??」

いまいち事情が飲み込めてない球磨を尻目に、俺は髭剃りの準備を進める。といっても球磨は女の子で髭が生えてるわけじゃないから、

髭剃り実演っつーか顔剃りになるのかな？ 準備するのは髭剃りクリームと、じい様の代から愛用している、こだわりの職人が作った愛用のカミソリだ。恐るべき切れ味とサリサリした感触が楽しめる、じい様とおれが惚れ込んだ至高の逸品だ。

「ちよつと待つクマ。球磨に何するクマ？」

「いいからちよつとソファ座って寝転んで待ってろ」

「これから球磨にひげそりするの？」

「そうだよ。実際にはヒゲというか顔剃りになるのかな？」

「嫌だクマアア!! ハルに襲われるクマああ!!」

暴れる球磨を強引にシートに座らせ、顔中に熱々の髭剃りクリームを縫ってやる。

——ぺたぺた

「球磨がハルの……ん……毒牙に……ん……」

——ぺたぺた

「ん……熱々で気持ちいいクマ……」

球磨が髭剃りクリームの心地よさに悶絶し身悶えしリラックスし始めた頃、リクライニングを限界まで倒して、クリームを縫った顔全体に熱々の蒸しタオルを置いてあげる。

「クマあ……たまらん……クマア……」

髭剃りクリームと蒸しタオルの熱さがよほど心地よかったのか……いつかのようにおっさんのだみ声としか思えない声を漏らす球磨。まさかお前、女つてのは世を忍ぶ仮の姿で、実は中身おっさんつてわけじゃないよな？

「うおおお……この心地よさを堪能出来るなら、別に中身がおっさんでもいいクマあ……」

「マジかよ……」

「ねえハル。これは何をやってるの？」

「こうやってあつあつの髭剃りクリームと蒸しタオルで、髭を柔らかかくしてるんだ。こうしてやわらかくしたあとに剃ってあげるんだよ」「柔らかくしないと剃れないの？」

「今回は実験台が球磨だから今一分からんだろうけど、男の髭って

けっこう硬いんだよ。一度提督さんに触らせてもらってみ」

「でも最近の司令官、髭が伸びてることってほとんどないわよ?」

……よく考えてみたら、2日に1回ぐらいの割合でココに来てるかな提督さん……その度に髭剃りして昇天してるし……確かに最近
は伸びてるところ見たことないな……

そんなことを思いながら、『うああああ……』というおっさんのごとき唸り声をあげる球磨を尻目に、再度髭剃りクリームの準備をすめる俺。次はちよつと暁ちゃんにも塗らせてみようかと思い、めちやくちやたくさんクリームを作った。どうせ軍からの補助金で仕入れたやつで、元手もタダだしね。

「そろそろかな?」

もはや唸り声もあげずに少しようとし始めている球磨の顔に乗せられた蒸しタオルを少しどかせ、ほっぺたを撫でてみる。

「クマ……にへらあ〜……」

いい感じにほっぺたが柔らかい。なんだかずつとぷにぷに触りたい感じの心地いい肌だが、今はそうも言ってもらえん……

「暁ちゃん。もう1回クリーム塗るから、ちよつと塗ってみる?」

「え?! いいの?!」

「うん」

「やったー!! これで暁も一人前のレディー!!」

こうして暁ちゃんに髭剃りクリームがてんこ盛りの器を渡し、球磨の顔の蒸しタオルを剥がしてあげた。

「んじや、球磨の顔全体に、このハケでクリームをたっぷり塗ってあげてくれ」

「わかったわ! この一人前のレディーに任せて!!」

果たして一人前のレディーが髭剃りクリームを人に塗る機会があるのかどうかよく分からんけど、楽しそうに球磨の顔にクリームを塗って……いや、てんこ盛りにしていく暁ちゃんが楽しそうだからまあよしとしよう。

「ぺたぺた〜……」

「うんっ……ダメクマ……きもちい……クマ……」

暁ちゃんが球磨のほつぺたや顎にクリームをてんこ盛りにしていき、その度に球磨の口から気持ちよさそうなため息というか変な声が出ている。さっきのおっさんみたいな声はどうした妖怪だみ声女。急に女の子みみたいな声だしやがって。

「ハル！ 全部塗ったわよ!!」

「うん。まるで球磨ができたの悪いスケキヨみたいになってるね」

「？ スケキヨ？」

髭剃りクリームから蒸しタオル、そしてダメ押し of 髭剃りクリームという魅惑の3連続の心地いい感触に、球磨はすでに抵抗することなく昇天してしまったらしい。さっきから髪の毛の生えたスケキヨみたいに顔にクリームをてんこもりにされた状態のまま、まったく動かない。

「さて……んじややりますか」

髭剃りを構え、それを球磨のほつぺに当てる。

「球磨の髭剃りするの？」

「さつきも言ったけど、女の人の場合は髭剃りつつーか顔剃りだね。顔の産毛を剃って一人前のレディーにしてあげるんだよ」

「一人前のレディー……!!」

「じゃあちよつと危ないから、剃りが終わるまで俺と球磨に触らないでね」

「わ……わかったわ……なぜなら一人前のレディーだから……!」

とはいったものの、おれ女の人の顔剃りってしたことないんだよね……とりあえず髭剃りのときと同じ感じで、傷つけないように撫でてあげればいいかな。さつき触った感じだと、この妖怪ぶにぶに女はそんなに産毛も生えてないみたいだし……

とはいえ、カミソリの刃を当てる瞬間は緊張する。一步間違えただけで大怪我につながるからな。しかも相手は妖怪ぶにぶに女といえども女の子。顔に傷を付けるわけには行かない……つーか無理に球磨を実験台にしなくても、提督さんと呼ばばそれによかったような……？ まあいいか。いまさら言い出しても始まらない。

球磨のほつぺたに刃を当て、首筋まで慎重に、かつスピーディーに

カミソリを動かした、クリームがカミソリにこそげ取られ、同時に少ない球磨の産毛も剃れて……ないな。元々生えてないのか。羨ましいことだまつたく……。

「クマ？」

今の今まで熟睡してた球磨が目を覚ました。まためんどくさいタイミングで目を覚ます……俺は球磨が動き出すのをなんとかしたくて、球磨の頭を左手で抑え、目を真剣な眼差しで見つめて制止した。今動かれたら顔に傷がつく。いくら妖怪おっさん女といえども球磨は女の子だ。絶対に顔に傷を付けるわけには行かない。

「球磨、動くなよ。今お前の顔剃りをやってるからな。動いたら大怪我するぞ？」

「りよ、了解だ……クマ……」

鼻が当たるぐらいの距離まで迫った真剣な表情の俺の雰囲気にもまれたのか、球磨は意外にもすんなり俺の言うことを聞いた。そりそりしてる間中、ずっと俺の顔を伺ってたのが気になったけど……

「……」

「……」

「ク……クマ……」

一応、真剣に球磨の顔の全面を顔剃りしてみたのだが、特に産毛は取れなかったようだ。クリームを全部こそげとった後、なんだかポヤンとしている球磨のほっぺたを再度触ってみたのだが、やはりすべすべぶにぶにしているものの、産毛みたいなのは生えてない。

「はい球磨、おつかれ〜」

「ク、クマ〜……」

俺の終了の合図を受け、球磨はホツと一息ついたようだ。ほんのりほっぺたが赤くなってる気がするけど、別にカミソリ負けしたってわけじゃないよな……？

「なんか妙にしおらしいけど、どうかしたか？」

「だ、黙れクマ……ッ」

んー……なんか妙だな。別にいいけど。

「以上でひげそりは終了だ暁ちゃん。床屋の仕事はこんな感じかな？」

基本は髪切って、シャンプーして、髭剃りして……」

「これで終わり？」

「うん。あとはカラーリングとかもあるけど……それはどっちかという美容師さんの範疇だからね」

「床屋さんと美容師さんは違うの？」

「うん」

ここで俺は床屋と美容師の違いを簡単に説明したが、暁ちゃんはよく分かってないようだった。まあ俺もじい様に懇切丁寧に説明されてもよくわかんなくて、『よく分からのなら両方の免許を取れ』と最終的に逆ギレに近いアドバイスをされたんだもんなあ……。

「うー……よくわからないけど……お客さんをキレイにするのが美容師さんで、お客さんの身だしなみを整えてあげるのが床屋さん？」

「うん。そんな感じだね」

「これが分かれば一人前のレディー？」

「うん……？ まあ、分からなくても一人前のレディーかな？」

その後はがんばった暁ちゃんと、やけにポヤポヤ呆けている球磨とともに食堂に昼食に向かった。調理担当の提督さんが

「今日は暁の職業調査の再開記念だ!!」

と妙に張り切っていて、この日の昼食のメニューは全員お子様ランチになった。暁ちゃんの分はもちろんのこと、俺や球磨、飲兵衛の隼鷹やビス子たちまでお子様ランチだった。

「司令官！ 暁は一人前のレディーなんだから、お子様ランチなんていらないのよ！ ぶんすか!!」

とかわいく怒り狂っていた暁ちゃんだったが、全員の中で二番目にはしゃいでいたのは、他ならぬ暁ちゃん自身だった。

「ちよつと提督！ この夢のようなランチプレートは一体何なの?!

……えちよつと待つて!! このチキンライスに刺さってる国旗、私の祖国ドイツの国旗じゃない!! やだこのケチャップハンバーグ絶品だわ! 提督あなたホントにヤーパナーなの?! あーでも味噌汁がないのは減点だね……私、赤だしが飲みたかったわ……あでもこのお吸い物は絶品よ?」

あとこれは完全に余談だが、一番はしゃいでいたのはビス子だった。

……そしてちよつとした異変というか……あの顔剃り実演の後から、妙に球磨がちらちらこつちの様子を伺ってくるんだよね。

「……」

「……」

「……なんだよ?」

「な、なんでもないクマツ」

「?」

そういえば、球磨に顔剃りの感想を聞くのを忘れてた……

「お前さ、今日顔剃りしてやったろ?」

「そ、そうクマね」

? なんて顔赤くしとるんだこの妖怪アホ毛女は?

「一応感想聞いとくけど、どうだったよ?」

「うあ、べ、別に悪くなかったクマよ? サリサリして気持ちよかったクマ」

「ならよかった。つってもお前の顔、産毛生えてなくてすべすべでキレイなもんだったから、今一違いがなあ……」

「く、クマ……」

「とはいえ気持ちよかったなら、正式サービスにしてみるかなあ。顔剃りなら艦娘の子たちにも需要はあるだろうし……」

「キモチヨクナカツタクマ。ヤラナイホウガイイクマ」

「そ、そうか……」

こいつがそういうのなら、やらないほうがいいのかな? 今後球磨を実験台にして、色々ちよつとやってみるか。……ちよつと待て。なんかこの言い方、以前にも一回あったような……?」

「クマクマツ」

7. 提督だったら……いいよ

暁ちゃんの職業見学から数日が経ち、季節は夏真っ盛り。敷地内のいたるところに木が植えてあるこの鎮守府は、外を歩けばほぼ確実にセミがこちらに向かって飛んでくるといって、地獄の様相を呈している。

もつとも、球磨をはじめとしたごく一部の艦娘たちはその状況を待ち構えていたかのように、セミを捕獲してはバーバーちよもらんまに持ってくるという迷惑この上ない遊びで日々楽しそうに過ごしているが……

おかげで最近はその店の中においても安心できん。セミが自発的に店内に侵入してくるといふことはないが、あいつらが来たら絶対に店内にセミが解き放たれる……おかげで落ち着いて客の待機が出来ない。今日も今日とて、そわそわしながらコーヒを飲み、客の来店を待ちながら考え事をしていた。

実は、暁ちゃんの職業見学からこつち、俺の中でずつとひっかかっていたことがあった。

——床屋さんの仕事って、シャンプーして髪の毛切ってあげて、それだけ？

この鎮守府にきて約半年。人数そのものは少ないが、シャンプーをすれば必ず『足の裏がかゆい』と言い出すお客様たちにも恵まれ、バーちよもらんまは盛況とわかっていい。軍からもそう悪くない手当をもらっている。

だが、暁ちゃんのあの一言が、俺にはどうにもひっかかっていた。確かに言われてみれば、このバーバーちよもらんまが開店して以来、やっている事といえば……潮風で傷んだ髪の毛の散髪とトリートメント、そしてシャンプー……提督さんにはそれプラス髭剃り……そんな感じだ。別にいいといえはいんだが……

このバーバーちよもらんまは、もつとみんなが喜ぶサービスを提供できるのではないだろうか。日々命がけで戦う提督さんや球磨たち艦娘のみんなの慰安のために、このバーバーちよもらんまは営業して

いる。

ならば散髪やシャンプー、髭剃り以外にも、もっとみんなが喜ぶサービスを提供するべきではないだろうか？ もっともつと……新しく、みんなが喜びむせび泣くサービスを始めるべきではないだろうか……？ もつと艦娘のみんなが『ハルがきてくれてよかったよおおおいしいおいしいおおおいしい!!!』『ハルウウウウウウ!!!』球磨たちが間違ってたクマアアああ!!!』と喜んでくれるようなサービスを、提供すべきではないのだろうか……それがこのバーバーちよもらんまの使命なのではないだろうか。

しかし、いざ何か新しいことをやろうとしても、何がニーズがあるのかさっぱり分からん……一応『髪を染めたい!』というニーズにも応えられるようにブリーチなんかもおいてあるんだけど……ココの子たちってブリーチはおろか髪型を変えることすら抵抗があるのかないのか……一向に『髪を整える』『傷んだ部分を切る』『シャンプーする』『足の裏をかく』以外の注文がない。足の裏は断固拒否だが……こんな中で何か彼女たちが喜ぶサービスを提供出来ないだろうか……彼女たちは何を求めているのだろうか……そんなことを俺は最近、よく考えている。

——やせーん!!

何をすれば艦娘のみんなが喜ぶかってことを考えている時に、川内のこのシャウトがすぐ思い浮かぶ辺り、俺の頭もだいぶこの鎮守府に毒されているみたいだ。夜戦のどこが床屋の仕事だこんちくしょう……

いつそのことマッサージでもやっちゃるか？ 球磨もけつこう肩凝ってたし、他の子も日々の戦いで体中疲れきってるだろうし……以前に働いてた店でマッサージは仕込まれてるから、腕には自信がある。

でもさー……なんつーかこう……女の子をマッサージするって妙になまめかしいというか何というか……えっちなモノの見過ぎでしょうかしい様。

——えっちなクマツ!!

なぜか球磨のそんな怒号が聞こえた気がして慌てて背後を振り返るが、俺の背後には球磨はおろか誰もいない。

球磨で思い出した。そういや昨日、風呂上がりの球磨たちが……

『耳がぞわぞわするクマ。そろそろ耳掃除したいクマねえ』

『あたしはまだ大丈夫かな。ちよこちよこやってるし』

『お姉ちゃんの耳もやって欲しいクマ……』

『ヤダよ自分でやんなよ……』

こんなことを言っていた。ほーん……耳がぞわぞわ……耳掃除……ほーん……

この時、俺の頭の中で豆電球が灯った。次の瞬間、提督さんの許可を得て、本日は非番のはずの球磨を呼び出した。

「……で、球磨を呼び出した理由は何クマ?」

すさまじく機嫌が悪そうな球磨が、おれをジト目で睨みながらそう言う。なんでもあの丘で加古と一緒にうたた寝していたところを、呼びに来た提督さんにたたき起こされたらしい。

「新しいサービスを考えた。本格的に始める前に1回お前でテストしてみたいんだよ」

「つまり球磨は実験台でことクマ?」

「いえーす」

「却下だクマ」

「却下早くない?」

「実験台にされるのはゴメンだクマツ」

球磨はそういつてぶいっとそっぽを向いた。この前の顔剃りがそんなに気に食わなかったのか?

「べ、別に〜」

口を尖らせたまま、少しほっぺたを染めて球磨がそうつぶやく。なんだこいつ? こんなキャラだったっけ?

「ところで何を考えてるクマ?」

「耳掃除」

「クマツ?!」

お、アホ毛が反応したということは、少し食いついたな?

「いやさ、うちももうちよつとできるサービスを増やしていこうと思つてさ」

「なるほど」

「幸いなことに、俺は耳掃除がちよつと得意でな。自分用に耳掃除用ローションも使つてて……」

「話を続けるクマ」

「……あ、でもお前実験台はイヤなんだもんな。ごめんな……忘れてくれ……」

「続けろと言っているクマツ！」

よし。確実にやって欲しそうな感じだな。

「いや、昨日耳がぞわぞわするつてお前が言つてたからさ。だったら試しにやらせてもらおうかなあと思つたんだけどな」

「うう……た、確かに球磨の耳は今、ぞわぞわしているクマ……」

「嫌がつてるお前に、無理矢理やるわけにもいかないもんなあ……」

「……」

「……俺の耳かきテクニックと、とつておきの耳掃除用ローションを駆使した、それはそれはキモチイイ耳掃除なんか……さ」

「……?!」

クツクツクツ……妖怪アホ毛女のアホ毛が悔しさと葛藤でピクピクしている……こいつは今、戦っている。実験台はイヤだという気持ちと、それでも耳掃除をしてもらいたいという己が欲望のせめぎあいの渦中に、こいつは今いるのだ。

「ク……クマ……」

「……やつてみるか？」

「……うん」

妖怪アホ毛女、陥落。

俺は球磨を来客用のイスに座らせて待たせた。そして居住スペースに一度ひっこみ、新品の耳かきと綿棒と箱ティッシュ、そして愛用の耳掃除用ローションを持ってきて、球磨の右隣に座った。

「クマ？」

「お？」

「なんで球磨の隣に座るクマ？」

「だってそらお前……耳掃除って言ったら膝枕じゃないの？」

「普通、逆クマ。女の子が男の子に耳掃除してあげるのが普通クマ」

「お前の口から普通だなんてセリフが出てくるとは思わなかったな……」

確かに言われてみれば野郎が膝枕で女の子の耳掃除つつーのもちよつと変というか……

「ま、まあいいクマ」

あんなに躊躇していたはずの球磨が、唐突に俺の膝に自分の頭を預けてきた。少しほっぺたが赤くなってる気がするのは、俺の気のせいなのだろうか。

「照れてる？」

「あとで張り倒すクマツ!!」

「はいはい……」

もふもふの球磨の髪を耳にかけてやり、球磨の左耳を露わにする。耳そのものはキレイなものだが、やはり少し耳垢がたまってきているようだ。

「それじゃいくぞ〜」

「クマツ」

とりあえず、耳かきで球磨の耳の中を探ってみる。耳かきで触れていくと、やはり少し溜まってるみたいだ。酷いというほどではないが、やはりこれでは少々かゆいだろう。

「耳掃除けつこうやってなかったのか？」

「そうクマね。自分じゃめんどくさくて中々やらないクマ」

「北上にやってもらえばいいのに……」

「北上もめんどくさがりだからあんまりやってくれないクマ」

耳垢をカリカリこすつていく。途中、ちよつと引っかかった部分があった。どうやら皮膚と耳垢の境の部分のようだ。

「痛かったら言えよ〜」

「了解だクマ〜」

程々に力を加えつつ……でも決して必要以上に力を入れず……少

しずつ隙間を広げていく。手元に伝わるパリッパリッという手応え。
「おおおおお」

球磨がなんだか声を上げ始めている。少しずつ剥がれていくのが
気持ちいいのか？ このまま……

「おおおおお」

「よいしょーっ」

「うあああああ」

パリパリという手応えと共に、かなり大きな耳垢が取れた。これは
キモチイイ。されてる方はもちろん気持ちいいだろうが、してる方も
快感だ。俺はティツシュを一枚取ってそこにこのドデカい耳垢を取
り、球磨に見えないように隠した。

「なんか変な声出てたけど、大丈夫か？」

「いや、かなり爽快だったクマ……」

その後も耳の中に残った大きめの耳垢を耳かきで掬いとった。細
かいやつに関してはあとで取る。

「それじゃ反対だな」

「了解だクマ」

クマは何食わぬ顔で俺の腹の方に顔を向けた。これが男女逆だっ
たら、男の方はかなりドキドキするシチュエーションだよな……

「とりあえず球磨がハルにドキドキすることはないから安心するク
マ」

「されたらされたで逆に困るわ」

「クマあ……」

反対の右耳は右耳で、やはり大きめな耳垢がこびりついている。こ
んな状態をよく今まで放置してたなあ球磨。

「だからぞわぞわするって言ってたクマっ」

「だからさー。そうなる前に北上にやってもらえって……」

「今ハルにやってもらってるからいいクマ」

「確かに」

先ほどと同じく、耳垢をカリカリ耳かきでひっかきつつ、耳垢と肌
の境界を探っていく……

「んっ……っく……」

「なんだかこつちの耳になってから、球磨が身悶えしてるんだが……なんだそんなに気持ちいいのか？」

「き、キモチイイクマ……」

「そいつはよかった」

境界に耳かきをひっかけ、バリバリと耳垢を剥がし、こそげとってはすくい上げていく……その作業を繰り返して耳垢をそっくり取り除いたらお約束だ。

「ほい取った。フツ！」

「クマツ?!」

思いの外ビクンとした球磨を見て、なんだか少し面白くなってきた。

「と……ところでハル」

「んー？」

「さつき持ってきてきた小瓶は何クマ？」

「あーこれ？ 今から使うんだよ」

これは俺が愛用している耳掃除用のローションだ。どちらかというと、掃除というよりはリラクゼーション用に近いというか……

このローションは小瓶の口に綿棒を突っ込めるようになっていて、綿棒をローションに浸せるようになってる。これを浸した綿棒で細かい耳垢を取り除きつつ、ローションの感触を楽しんでいただくというのが、俺の魂胆だ。割とさらさらしてて、乾いてもベタベタしない。むしろ乾いた後耳の感触が気持ちよくなる。

「というわけでこれからローションつけた綿棒で耳の中をフキフキしていくからなー。ちよつとひやつとするかもしれないぞー」

「り、了解だク……ひやああ」

「いちいち反応が新鮮だな今日の妖怪リアクション女は……ローションをたっぷり浸した綿棒で球磨の耳の中をフキフキしながら、そんなことを考えた。」

「んー……ッ……んー……ッ!!」

「なんだか普段の球磨にあるまじき反応をしてやがる。ここのまですい

つもと違うリアクションをされると正直少し心配になってくるが……

「大丈夫？」

「大丈夫だクマ……これきもちいクマ……ひやーってしてジーン……てしてきもちいクマ……んー……ッ」

「そいつはよかった」

確かにこれ初めて使った時は、俺もその妙な刺激で昇天しかけたもんな……なんつーかこのひやーってしてピリピリ……ジーン……てする感触がたまらないんだよね。

残った汚れをひと通り取ったところで右耳は終了、球磨、はんたーい。

「ま……まだあるクマ……?!」

「当たり前だ。まだ左耳を拭いてない」

「うう……了解だクマ……」

なんだかへトへトでクタツとしている球磨の頭を持ち上げて無理やり反対側を向かせ、今度は左耳をローションで拭いてあげる。新品の綿棒をローションに浸し、その綿棒で左耳の残りの細かい耳垢をフキキして差し上げる。

「んーッ……ジーンとするクマア……んーっ……!」

相変わらず身悶えしてる球磨に容赦無い仕打ちを加えていく俺。……て言っても単に耳をローションで拭いてあげてるだけなんだけど……ともあれ気持ちよさそうだなにより。

「ほい終わり。球磨、おつかれ」

「ク……クマ……」

耳掃除中盤から妙に身体がこわばっていた球磨の全身から、ぷしゅーと力が抜けていくのが分かった。全身がクタツとなるほどにこのローションは気持ちよかったらしい。

「や、ヤバかったクマ……うう……」

俺の膝枕から頭をどかそうとせず、そのまま仰向けになって俺にそう答えてくれた球磨のほっぺたは、少し赤くなっていた。

「このローション、ヤバイだろ？」

「ヤバいクマ……恐るべき破壊力を秘めてたクマ……」

「んじや決まりだな。正式サービスつてことで」

「こ……これはウソつけないクマね……」

ウソ？ なんのこつちや？

「べ、別に何でもないクマ……」

そういつて球磨は、俺から視線を逸らして口を尖らせていた。少々機嫌が悪そうにも見えるが、俺の膝から一向にどこうとしなかった。

その後、夕食と入浴が済ませた後、隼鷹と川内の襲撃前に、綿棒と耳掃除用ローション、ついでに艦娘みんなの分の耳かきを追加発注しておいた。ローションは業務用のデカいやつを注文しておいたから、正式サービスとしてスタートしても、当面の間は問題ないはずだ。

「ひやつはあああああ!!! ハル〜!! 今晚も酒盛りしようぜええええ!!」

「ハルー!! やせーん!!!」

今晚は二人の襲撃がほぼ同時か。しかも隼鷹が半分寝てる加古を引きずつてやがる……それにしても、久々に手応えのある一日だった。散髪で艦娘のみんなが喜んでくれることはうれしいが……明日から新たなサービスとして耳掃除も取り入れてみることにしよう……今晚はいい酒が飲めそうだ。

「あ、そういや今晚球磨と北上は？」

「あの二人は深夜の哨戒任務だよ」

「私も夜戦がしたかったッ!!」

「私はあ……自分のおお……部屋で……寝かせ……クカー……」

隼鷹もえげつないことするなあ……加古はココに来るヒマがあったら寝たかっただろうに……しかし球磨がいないのは残念だ。改めて耳掃除の感想を球磨に詳しく聞いてみたかったが……まあ明日でいいか。

「加古、とりあえず寝てていいから。クッション貸しちやる」

「サンキュ……ハ……クカー……」

加古は夢の世界へログインしていった。一方、毎度のごとく夜戦夜戦と騒いでいる川内を尻目に、隼鷹が何やら妙な眼差しでニヤニヤし

ながら俺のことを見ていた。

「ん？ なんだよ隼鷹？」

「んー？ なんでもないよ？ ニヤニヤ」

なんでもなくはないだろうその顔は……と思ったが、突っ込んだらなんだかメンドクサイことになりそうだったので、突っ込みたくなる衝動を必死に抑えた。

そして翌日。朝一で『髭を剃ってくれ』とやってきた提督さんに、耳掃除のことを話してみた。ほんのり酒臭いのは、昨日酒盛りしたからか？ 一人で飲んでるのならうちに来てもいいだろうに。隼鷹やら川内やらにぎやかグループてんこもりだよ？

「そーいや提督さん」

「んー？」

「今日からうちの新サービスで、耳掃除をやってみることにしたんすよ」

「ほう。興味あるね」

「髭剃りのあと、やってみます？」

「そんなに汚れてはないだろうけど頼むよ」

というわけで、正式サービス開始後のお客第一号は提督さんとなった。髭剃りとシャンプーを済ませた後、提督さんを散髪台に座らせ、リクライニングを限界まで倒し、提督さんの耳の中を観察する。確かに耳垢があまりなくて、キレイなものだ。奥の方にすこーしだけ湿った黄色い耳垢が見える。

「キレイなもんすね提督さん。湿ってるな……猫耳なんすか？」

「なんだそのかつての萌えキャラの標準装備。……俺に萌えてるの？」

「いや、耳垢が湿ってるタイプの耳のこと猫耳って言いませんか？」

「初耳だなあ」

「そうっすか……最近耳掃除しました？」

「あー……一昨日に……隼鷹が……」

あー……なるほどね。隼鷹が酒盛りしたあとも律儀にキチンと帰るのはそれが理由か……。提督さんを見ると、ほんのり顔が赤い。

「なに照れてるんすか」

「べ、別に〜」

「んなことだからかうなんて思春期なことしませんよ」

「うちのみんながハルみたいなヤツだったらどんなによかったことか……」

「んじゃローションと綿棒で軽く拭き取る程度にしときますよ」

「よろしく」

綿棒をローションに浸し、それで提督さんの右耳を拭いてやる。確かに掃除されたばかりの耳らしく、キレイな耳からは耳垢はほとんど取れない。

「ん〜……確かにこのローションはヤバイ」

「でしょ？ 今度余分に仕入れて隼鷹に一本渡しときます。使って下さい」

「いいの？」

「リフレッシュしてくれりやそれでいいんすよ。隼鷹の耳も掃除してあげてください」

「ありがと。そうするよ」

右耳が終了した後は左耳。新しい綿棒をローションに浸してそのまま左耳を掃除する。球磨ほどではなかったが、提督さんも『うあああ……耳が……ジーン……』と悶絶していた。おそるべきローションの威力。

「はい。終了です」

「おう。ありがと」

左耳の掃除も無事終わり、提督さんに耳掃除の終了を告げたその時だった。

「なにやってるクマああ!!」

妖怪アホ毛女の球磨が店に乱入してきやがった。怒り狂ってるのか何なのか、アホ毛が怒髪天を突くとも言いたげに、まっすぐに空高くそびえ立っていた。

「おっ。球磨、いらっしやーい」

「すまん。耳掃除は今終わったから、すぐにどくぞ」

「そういうことを言ってるんじゃないクマツ!!」

球磨がどこかの逆転系弁護士のように、俺達の方に人差し指をびしっと向ける。どうということよ? 意味分からのんだけど。

「昨日、球磨の耳掃除をやったときは膝枕だったクマ!!」

「だなあ」

「ならなぜ今日は提督を膝枕しないクマ!!」

いや確かにお前の言うことは筋は通るけど、男が男に膝枕って変じゃない?

「変じゃないクマ!! 提督も膝枕をハルに催促するクマツ!!」

「ええッ?!」

提督さんが驚嘆の声を上げながら、困った顔で上体を起こして俺を見る。

——なんてキレイな目をした人なんだろう……

俺は、今初めて提督さんの目のキレイさに気付いた。いけない。この人には心に決めた人がいるのに……でも、俺の胸の高鳴りを抑えられない。俺の心と身体が、この人を求めている。

「提督だったら……いいよ?」

ここまで言うのが精一杯だった。俺はこの短い言葉に、ありったけの気持ちを込めて提督さんに伝えた。

「えっ……でも俺には……」

提督さんが、頬を染めて……でも困ったような顔で、俺をその綺麗な瞳で見つめる。……提督さん、俺はあなたが好きです。でもあなたには、隼鷹という心に決めた人がいるのは知っています。でもせめて、せめて耳掃除の時だけは、俺に膝枕をさせて下さい……その時だけ、俺だけの提督さんでいて下さい……提督さんだけの俺になりますから……

「うへえ……キモいクマ……球磨が悪かったクマ」

「分かればよろしい」

「うむ。すまんなハル。うちの球磨が粗相をして」

「いえ。大丈夫です」

わかりやーいいんだわかりやー……提督がごきげんで店を出て

行った後、まだ腑に落ちないといった表情をしてみすつとしていた球磨に、俺は特別サービスとして梵天で耳の中をふわふわしてやることにした。

「ほら球磨、散髪台まできて座れよ。梵天やってるから」

「クマア〜……」

やはり梵天の魅力には勝てなかったらしい球磨は、思いの外素直に散髪台にやってきて椅子に寝転んだ後、自ら右耳を見せた。……と思っただら……

「やっぱり膝枕の方が座りがいいクマ」

「マジかい……」

「しゃーない。こいつは言ったら聞かんからな……んじやソファ来いよ。」

「クマクマツ」

昨日の耳掃除の時と同じく、お客さん用の長ソファに隣り合って座り、球磨が俺の膝に自分の頭を預けた。言っとくけど梵天だけだぞ？

「了解だクマ〜……」

「うつ伏せになって顔だけ横向けなよ。胸の下にクッション敷け。その方が楽だから」

「クマツ」

球磨の髪を耳にかけてあげ、左耳を顕にした後、梵天で耳をふわふわと掃除してあげる。球磨は実に気持ちよさそうに……

「クマア〜……きもちいいクマ……」

と反応していた。左耳終了だ。はんたーい。

「クマ……」

素直に頭を反転させ、俺の腹の方に顔を向ける球磨。こいつがここまで素直に俺の言うことを聞いたことなんて今まであっただろうか……そんなことを思いながら、梵天で右耳をふわふわと掃除する。

「球磨ー」

「……」

あれ……さつきまであれだけうるさかったのに、なんだか急に反応が無くなったな……。

「球磨ー。終わったぞー」

「……スー……スー……」

どうにも反応がないと思ったら……いつの間にか球磨は寝ていたらしく、静かな寝息が聞こえてきた。そういや昨夜は哨戒任務でずつと出撃してたんだっけ。そら眠いはずだわな……

「……球磨、おつかれ」

「スー……スー……」

戦士の休息ってやつか。野郎の膝枕で申し訳ないが、それでいいならゆつくり寝てくれ。

「ハル〜？ 球磨姉しらなーい？」

タイミングよく北上が入店してきた。北上は俺と球磨を見るなり

……

「ぷっ……球磨姉……なんか多摩姉みたいじゃん」

と言っていた。多摩姉って誰だ？

「ああ、私の姉で、球磨姉の妹。私達姉妹の次女」

「あーなるほどな」

「まあ、轟沈しちゃったんだけどね〜」

「……やなこと思い出させちゃったな。すまん」

「別にハルが謝ることじゃないよ。戦争だしね」

「……」

「でもさ。ホント多摩姉そっくり。多摩姉もうれしいかもね。自分の姉が自分にそっくりだって分かってさ」

ほーん……こいつにそんな妹がね……。

気持ちよさそうにアホ毛をなびかせながら眠りこける妖怪アホ毛女を眺める。こいつの寝姿を見ると妙に頭を撫でたくなる衝動にかられるが、北上の手前、その衝動は必死に抑えた。……どっちにしろ今日はもう閉店だな。

「ハル」

「ん？」

「我慢しないで撫でてあげれば？」

「アホ」

8. 冗談はクレープだけにしろ

「ところでさー」

「んー？」

「今更だけど、球磨姉のことどう思ってるの？」

季節は初秋。残暑はまだ厳しいが、夏の間あれだけ猛威を振るっていたセミたちがその戦慄の求愛ソングを歌うのもやめはじめ、地上に平穏が戻り始める季節。

毎日のように店に来ては、待つてる客用の漫画を次々読破していく北上は今日、読んでる漫画から目線を外さず、いつものように気の抜けた話し方で、俺にこんなとんでもない質問をしてきた。俺はこの時、客が来ないのをいい事に道具の手入れをしていたのだが……質問をされた時、俺は気分がひどくげんなりして、手入れを続ける気が萎えた。

「……どういう意味だそりゃ？」

「そのまんまの意味だよ」

「なんでまた突然そんな思春期な質問してくるんだよ」

「だってさー。二人とも仲いいじゃん」

思い当たるフシは全くない。そういえば提督さんにも以前に妙なこと吹き込んでたなあこの妖怪漫画女は。

「あの妖怪アホ毛女のことなぞなんとも思ったことないぞ？」

まあ、仲いいのかがどうかは知らんが……みんなの中でも割と気を使わなくていいから、付き合ってたて楽だけだな。

「それを仲いいって言うんだよハル……」

「そうか？ そういう意味で仲いいってのはさ……もつとこう、妙に甘いというか何というか……」

「たとえば？」

「例えば？ うーん……」

俺は自身の想像力をフル回転させ、『そういう意味で仲のいい二人』というのを、俺と球磨でイメージしてみた。その結果……

——球磨……俺は、お前を愛している……（イケメンボイス）

球磨も、ハルを愛してるクマ……（陸奥（って誰だ？）みたいな色っぽい声）

という、俺と球磨にまったく似つかわしくないイメージ映像が脳内で流れ、ひどくげんなりした気持ちを抱えてしまった。北上も同じく妙にげんなりした表情をしている辺り、まったく同じイメージを想像していたのかもしれない。

「似合わないな……」

「だよね……特に球磨姉は……」

しかもなんだ？ そんな甘い雰囲気の時ですら、あの妖怪アホ毛女は語尾に『クマ』ってつけるんか？

「それは球磨姉だから仕方ないよねー」

「妹の北上がそう言うのと、説得力あるな」

「でしょ？」

でも北上は、なんだって突然そんなこと聞くのか？

「いや、だつてさ。耳掃除の時にわざわざ膝枕してあげてるの、球磨姉だけでしょ？」

「だなあ……」

言われてみればそうだ。正式サービスとして耳掃除を始めた後は、初めての客である提督さんと同じように、散髪台のシートのリクライニングを限界まで倒して耳掃除してるもんな。球磨の時は不思議と『耳掃除なら膝枕だな』って何の疑問も持たずに膝枕してるし。

「しかもハル、他の子に膝枕を頼まれても、頑として断ってるじゃん」
こいつよく知ってるなあ。確かに暁ちゃんトビス子がやたら『一人前のレディーを膝枕してもいいのよ？』て迫ってくるけど、そこは断ってるんだよね。

「そらそうだろうー。男が女の子を膝枕するってどうなのよ？ 逆ならまだわかるけど」

「でも球磨姉はやってあげてるよねえ？」

「あのアホは一度言い出したら聞かないからな」

「でもそれってさ、仲いい証拠じゃない？」

まあ、そういう意味では仲いいのかもなあ。でもお前が言うような

仲じゃないぞ俺と球磨は。

「まあ、乙女になつてる球磨姉は想像出来ないね」

「だろ？ 仕方ないから仲いいのは認めるけどな」

「ふーん……」

幾分回復しつつあったモチベーションを大事にするため、再度おれは道具の手入れに勤しむことにする。北上は北上で、中断していた漫画の読破に再度意識を向けたようだ。のどかな時間が過ぎていく。何も無い、何もしなくていい時間。こんな時間が最高の贅沢だと、俺は思うんだ。

……あれ？ 店としてダメじゃね？

「いいんじゃない？ 私は好きだよ？ ヒマな時間を持て余すこのバーバーちよもらんま」

なんだか店として一番言われてはいけない類の罵倒を言われた気がしたのだが、気にしないことにしておこう。

そうして北上の暴言の存在を忘却の彼方へと捨て去った時、樽をすれば何とやら……あの妖怪アホ毛女こと球磨が、入り口のドアを乱暴に開けて来店してきた。

「ハルッ！ そろそろ買い出しに行くクマツ!!」

「いい加減来る度にドアを破壊しかねん勢いで開けるのは止める!!」

……つーか買い出し?」

「お？ 北上から聞いてないクマ？ 今日ハルは球磨と秋祭りの買い出しに行くクマ」

……いえ。まったく存じ上げませんが……?」

「あーごめんごめん。私元々それをハルに伝えるためにここ来たんだっただ」

そう言つて北上は、漫画から手を離さずにケラケラと笑う。お前、こんな大切なことをなんで今まで忘れてたんだよ。お前、開店したときからずっといたよな？ 今は昼過ぎだぞ?」

「最初は私と球磨姉が行く予定だったんだけどねー。メンドクサイから提督に頼んでハルと変えてもらったんだー」

そういうことを聞いてるんじゃない。5 WITHは今は問題じゃな

い。お前が言付けを忘れてたのが問題なんだ。

「北上が『私が伝えとくよー。キリッ』て言ったから提督も『なら任せたッ』て言ったんだクマ……」

まー誰だつて言付けぐらい『任せろ』つて言われたら、それで済んだと思うよなあ……北上く……そういう大切なことはちゃんと確実に伝えろよ……。

「ごめんごめん。まあ二人とも久しぶりの市街地なんだから、楽しんでくれば？　店番なら私がやつとくから」

「やつとくつて言つてもあれだろ？　客が来たら『今日はハルはいないよー』つて言うだけだろ？」

「しかも漫画から目を離さずに言うに決まってるクマ」

「二人で息ぴつたりで罵倒してくるなんてちよつと酷くない？」

何が息ぴつたりだアホ。そら久々に街に行けるのはいいけど、この妖怪アホ毛女といっしよだなんてどんな罰ゲームだよつ。

「……まあいい分かった。これは提督さんの指示なんだな？」

「そうクマ」

「そうだよー」

「んじゃとりあえず店じまいだけしとくか。北上、俺達が戻るまで留守番頼む」

「あいよー」

そうだ。ここどうだうだ言い出しても始まらない。軍人ではないとはいえ、俺も鎮守府の一員。ならば提督さんの指示には従うべきだ。今日は店はもう閉店。これから買い出しに行くんだつ。

「ところで球磨」

「クマ？」

「買い出しつて何を買に行くんだよ。秋祭りとか言つてたな？」

「それは道すがら説明するクマ。とりあえず出発準備を急ぐクマ」

「あいよ」

球磨に煽られながら準備を整え、バーバーちよもらんまのポールサインの回転を止めた後、おれと球磨は市街地へと出発する。鎮守府は人の居住圏からは少々離れた位置にあって、鎮守府と市街地の間には

大きな山がある。市街地は海に面しているので、ならば直接海をわたって移動したほうが早い。俺は球磨が準備してくれていたボートに乗り、そのボートを球磨が牽引する形で市街地に向かった。

市街地に向かう途中、球磨が簡単に説明してくれた。なんでも、この鎮守府では毎年1回、提督さんが主催で秋祭りを行うらしい。一応祭らしく、提督さんが露店を出店するそう。そのための買い出しらしい。

「荷物自体は業者に運ばせるから、球磨たちは注文だけすればいいクマ！」

「なるほどね」

「毎年その日は夜の哨戒任務も最低限にして、みんな楽しんでるクマ！」

確かにそいつは楽しみだ。提督さんはああ見えて料理がうまい。最初は鎮守府の食事を提督さんが準備していると聞いて何の冗談かと思っただけ、あの人って何を作らせても上手だ。大量に作るのって段取り力とかスピードとか色々要求されるけど、それをこなせるだけのスキルが、提督さんにはあるんだよね。

「そいつは楽しみだ！ 提督さんの焼きそばとかりんごあめとか、きつとうまいんだろな！」

「美味しいクマよ？ 提督の料理は鳳翔直伝だクマ！」

「？ 鳳翔？ 艦娘か？」

「昔、ココにいた軽空母の艦娘だクマ！ 料理屋を開けるぐらいに料理のうまい人だったクマ！」

「そっか！ なら提督さんが料理がうまいのも納得だな！」

「クマクマ!!」

その人も、きつと以前に轟沈したのだろう。そのことには、敢えて触れないようにした。

港に到着したら陸に上がり、市街地で買い物……というか仕入れをする。この街はそこまで大きい街ではないが、街のメインストリートになる商店街はそこそこ発展していて、日々の買い物には困らない。今回はその八百屋、魚屋、肉屋、果物屋、乾物屋に寄って、必

要な食材を色々仕入れる予定になっていた。

「んじや、ハルは八百屋と果物屋に行くクマ」

「お前はとうするんだよ」

「球磨は魚屋と肉屋に行つてくるクマ。これが提督から預かったメモだクマ」

球磨はそう言つて、提督さんのメモを渡してくれた。ふんふん。祭の露店を出すのにこの食材の量で足りるのか……と疑問に思ったが、よく考えれば鎮守府の面子は俺を入れても10人いないもんな。こんなもんでいいのか……

「んじや乾物屋で待ち合わせするクマ」

片手をピラピラさせながら、球磨は肉屋の方角に消えていく。あのふざけたアホ毛女に買物が出るのか不安で仕方がないが、今までこうやって、毎年祭の度に食材を手配してきたことを考えると、それも問題ないだろう。

俺はその後八百屋と果物屋に出向き、提督さんの指示通りに食材を手配した。一人の客が購入する量にしては少々多すぎるため……

「お客さん……そんなにたくさんキャベツ、どうすんの？」

と店番しているおっちゃんになにやら疑われたが、配達先で鎮守府の名前を出した途端に、

「ああ、あんたあの海軍鎮守府の関係者か。いつもご苦労さん。あんたも苦労してんだろ？」

と急に態度が軟化し、妙な心配をされ始めた。苦労ってなんすか？

「いや、この界限つて相当な激戦地なんだろ？」

「らしいっすね。今一信じられませんが」

「ああ、んじや今は落ち着いたのかな？ 一時期はホントにひどかったよ。艦娘の子たちの入れ替わりも激しかったし、設立当初からいた艦娘の子も戦死しちゃったりとかで……」

「はあ……」

今の鎮守府の、あののどかっぷりからすれば、まったく信じられない話だ……。

だが、それが事実であることを俺は知っている。あの鎮守府にいる

と、時々、球磨たちの戦死した仲間の話をする必要がある。皆、率先して話そうとはしないが、はかなくも悲しい思い出として、みんなの脳裏に刻まれているようだ。

「……まあ、大丈夫つす」

「そうかい？ まあ注文の件はわかったよ。当日にキッチンと届けるから」

あの鎮守府で、艦娘のやつらと一緒にいると忘れがちなんだけど、やっぱ戦争やってるんだよな……。――

同じような会話を果物屋さんでも繰り広げつつ、必要なものを注文し終わり、その後乾物屋に向かう。乾物屋を見ると、まだ球磨は来てないようだ。

「……ちよつと様子を見に行ってみるか。別に心配とかつまらんとかそういうわけじゃないんだからなっ」

誰に言うでもない言い訳が口について出る。出発前に北上が妙なことを口走りやがったからだ。

――ニヤリ

魚の匂いが漂う魚屋さんに到着する。球磨は……いやがった。なんか店頭に並べられている魚をぼんやりと眺めているようだ。

「なにやってんだよ」

「クマっ?! 果物屋と八百屋は?」

「もう行って注文済ませてきたよ」

「中々早いクマね」

「お前が遅いんだよ」

こんな風に俺と球磨は軽口を叩き合うが、球磨は自身が見つけているものから視線をはずさない。この妖怪棒立ち女の視線の先を追ってみる。

「……鮭?」

「クマっ」

この妖怪アホ毛女の視線の先にあったのは、一匹の鮭だった。そいつは丸々一尾そのまま売られていた。こんなもんが欲しいのか球磨……

「欲しいクマね。クマだけに」

「さっぱりわからん……」

「知らないクマ？ 熊はよく川で……」

「今の段階で属性てんこもりなのに、まだ足りないのかお前は……」

「シヤレの通じない堅物だクマ」

と口ではちよつとごきげんななめなことを言いながらも、本人は大してへそを曲げているようには見えなかった。さっぱり意味が分からん。とりあえずこの地上最大の哺乳類のことは放っておいて、俺は魚屋の大将に注文したい品々を注文する。といつてもイカぐらいだけだな。

「はいまいどー!! らっしえ! らっしえ!!」

威勢のよい大将の柏手に負けそうになりながら、イカの注文をするおれ。球磨、お前肉屋の方は？

「終わったクマよ？ ハルが来るのが早いんだクマ」

「お前が終わらせるのが遅いだろう……」

「ハルー」

「んー？」

「この鮭も買っていくクマ」

「いらん」

「女の子にプレゼントもあげないとはなんという男だクマツ!!」

そう言つて憤慨している球磨だが、どこに鮭一尾まるごとを欲しがる女がいるのかと小一時間説教をくれてやりたい。

「ここにいるクマっ」

お前は除外だ……。

大将にイカの発注も終わり、乾物屋に行つて調味料諸々を注文して、今回の出張は終わりだ。球磨、お疲れさまでした。

「ちよつとサボつてから帰るクマ」

鼻の穴を広げながら、こんな提案をする球磨。確かに市街地に出るのは久しぶりだし、ちよつとばかしサボつてもいいかもしれん。

「そうだな。たまにはちよつとサボるか」

「クマクマっ」

ちょうど今しがた出た乾物屋の向かいには、クレープ屋さんがある。ちよつと買い食いしてくか。久々に甘いものも食べたいしな。

「ハルのおごりで」

「こういう時だけしっかりしてやがる……」

というわけで、色気のない妖怪シヤケ女を引き連れてクレープ屋さんに向かう。店に近づくなり、俺達の鼻に漂ってくるクレープの甘い香り……うーん……こういう香りをかぐと、いい感じに腹が刺激されるね。

「はいいらつしやい。何にします?」

クレープ屋さんの気のいいアンちゃんにそう促され、メニューから一番シンプルそうなやつを選択する。こういう時はシンプルなものに限る。変にゴテゴテしたものじゃなくて、純粋にクレープの味が楽しめるからな。

「俺はカスタードと生クリームのやつを」

「球磨はカタストロフチョコバナナデンジャラスカスタードベリーダブルアイスヘーゼルナッツアイリツシユキャラメルサンデースペインシャルをお願いするクマ」

「んなもんあるわけないだろ。なんだそのスタバの極限カスタマイズ以上に物騒なオーダーは」

「あるクマ」

そうやってメニューの中の項目の一部分を球磨が指さした。んなクソたわけたメニューがあるわけ……

「ある……だと……?」

「フッフッフツ。そんなんだからハルは球磨のアホ毛も切れないんだクマ」

「うるせー妖怪アホ毛女!!」

こんな漫才を繰り広げながら、オーダーしたクレープが出来上がるのを待つ。比較的シンプルな注文内容の俺のクレープが先に出来上がり、店員のおんちゃんに笑顔で手渡された。その後、待つこと数分。

「おまたせしました。カタストロフチョコバナ(略)です」

「クマツ?!」

「でけええッ?!」

球磨が注文したクソたわけたクレープは、店員のおんちゃん顔の3倍ぐらいでかいシロモノだった。縦幅も横幅もおんちゃんの顔がすっぽり収まるぐらいのデカさのクレープの中には、バナナやらチョコやらアイスやら何やらがてんこもりになっている。

「マジかよ……球磨、お前それ一人で食えるの?」

「よ、余裕だクマツ……」

笑顔でそう答え、その化け物クレープを受け取る球磨の額に、うっすら冷や汗が浮かんでいたのを俺は見逃さなかった。……よく見たらショートケーキがまるまる一個入ってるぜこれ……なんでぶどうが一房丸ごと入ってるんだよ……

「す、すみません。これカップル用なんですよ」

「ま、マジっすか……」

「きつと二人でたべるものとはかり……」

いやそれにしても限度つつーのがあるだろう……だいたい俺は俺で個別に注文してるんだから……

「いや、だからお兄さんがよっぽどの甘党なのかなと思ひまして……」

「甘党でもさすがに余計にもう一個注文はしないでしょ……だいたい俺とこいつは別に付き合ってるわけじゃないし……」

「すみません……でもお二人、すごく仲がいいから」

「冗談はクレープだけにしろ!!」するクマ!!」

笑えない冗談だ。おんちゃん、ギャグセンスをもう少し磨くべきだ。あと人を見る目もな。でないとな長生き出来んぜ。

「そうなんですか? お二人すごく仲いいですし、お似合いですよ……」

「ハル、このおんちゃん張り倒していいクマ? いいクマ?」

「俺が許可する。寝言しか言わないおんちゃんには一度覚醒していただく必要があるようだ」

「か、かんべんしてくださいよお……」

おんちゃんいじめも程々に、俺と球磨はその凶悪やクレープを食いながらお店を後にする。……あ、当然というか何というか、俺のおごりだった。球磨が持つクレープは、その大きさこそすさまじい呪いの

アイテムみたいないな代物だったが、味の方は確かなようで……

「確かにデカすぎだけど味はいいクマ」

と球磨は上機嫌でガツガツとクレープを平らげていった。俺が注文したカスタードと生クリームのクレープも味は絶品。おかしな誤解を受けはしたが、あのあんちゃんの腕は確かなようだ。一時は永遠にクレープ屋が開けないようにしてやろうかとも思ったが、これだけの腕の職人、失うには惜しい。生きながらえさせてやることに決めた。

「ハル」

口の周りにちよちよことクリームをつけて、球磨が上機嫌で俺を呼ぶ。

「ん？ なんだ？」

「ちよつと食べるクマ？」

「お、くれるの？」

「やらんクマ」

「だったら聞くな妖怪クレープ女」

「欲しいクマ？」

「……白状すると、ちよつと食ってみたい」

「んじや一口だけやるクマ」

口周りにクリームをつけた球磨が、100万ドルの笑顔と食べかけのクレープを俺に向けた。その時の球磨の表情は俺に、いつぞやの妖怪ハニカミ女を思い出させた。

球磨がこちらにつきだした、くそたわけた名前のクレープを一口だけもらおう。奇しくも、あのクレープ屋のあんちゃんが言った通り、この凶悪なクレープは俺と球磨の二人で食べることになった。

「……ん。んまい」

「んふふー。これを注文した球磨に感謝するクマ!!」

「味がどうこうとかじゃなくて、あのふぎけたネーミングが気になつて注文したんだろ？」

「確かにそうだけど、結果が正解なのは確かだクマ！ もうあげないクマ」

確かに、こいつがサボると言い出したおかげでおいしいクレープ屋さんを見つけたことが出来たし、こいつが注文したから、この美味しい凶悪クレープを食べることが出来た。これは、この球磨の功績と言ってもいいだろう。

「おう。ナイスだ球磨。さすが妖怪アホ毛女」

「その呼び名はムカつくとしても、素直に賞賛を送ったハルを褒めてつかわすクマ」

「はいよ」

どうせ今日は店じまいしたし、もう少しサボってから帰ってもいいだろう。相手が球磨じゃ、色気もへったくれもないが……

「クマクマっ」

ああやって上機嫌で巨大クレープを食いながら歩く妖怪クレープ女を眺めながら、のんびりと散歩するのも、悪くない午後の過ごし方だ。

「これは素晴らしいクレープ屋を見つけたクマ！ ハル！ また今度おごるクマ!!」

少し傾いてきた太陽に照らされた球磨は、鼻にクリームをつけたままそう言っ、おれを恐喝していた。

「……鼻にクリームついてんぞ」

「クマツ?!」

9. 季節外れの恐怖

「そーういや昨日の夜さー。裏の林に火の玉が飛んでたんだよねー
……」

「?!」

「バカなツ?!」

「クマツ?!」

「ねむ……」

「やせ……」

「……頭痛い……」

秋祭りまであと数日というある日の朝、北上がいつものように気が抜けた調子で、そんな驚愕の報告をあげ、全員に緊張が走った。と同時に、俺達の朝飯を乗せたテーブルがガタガタと震えだした。

「地震ツ?!」

「ふあああ……揺れて……クカー……」

「朝は眠いね……やっぱり夜戦が……」

「天変地異だクマツ?!」

「……デカイ声出さないで……頭に響くから揺らさないでよー……」

なんだこの対照的な反応は……反応したのは暁ちゃんと球磨だけで、加古と川内はノーリアクションか。加古と川内の二人が朝弱いのはまあいつものことだけど……つーか加古は24時間フル稼働で眠そうだけどな。あと隼鷹は二日酔いなのだろうか……頭を抑えてテーブルに伏せていた。

そーういや、こんな時に一番大騒ぎしそーうなビス子が騒いでないのが意外だ。日本人にとっては慣れてる地震であっても、外国人にとってはまさにハルマゲドンレベルの大パニック災害だと聞いたことがある。ならばドイツ人？ ドイツ艦？ のビス子はこの中で一番大騒ぎしそーうなものだが……不思議に思っただけ俺はビス子に目をやった。

「ひ……火の玉なんて、怖くないわよ?! なんせわた、わた、私は、一人前ままえのれれれれでいー!!」

ビス子は完全に青ざめ、身体をガタガタ震わせながら笑顔で納豆を

かき混ぜていた。あーなるほど。この地震の震源地は、北上の話に恐れおののいて身体を震わせているビス子だったのか……それなら納得だ。納豆の糸が周囲に飛び散り、その糸が朝日に照らされてキラキラと輝いていた。納豆の糸を美しいと思う日が来ようとは……俺の感性も、まだまだ成長し続けているということか……。

その後北上に詳しく話を聞いた所、昨日夜遅く……といっても10時ぐらいだが……北上が夜間の哨戒に出ようと宿舎を出ようとした時、宿舎の裏の林で、宙をふわふわと漂う光を見たという……

「それホントクマ？」

「ホントだよー。姉のくせに妹を信じられないの？」

「信じてほしかったら普段から信頼を得られるように行動するクマッ」

球磨の言うことは至極正論だが、人の腹をえぐるパンチをかましたり、平気で人を恐喝するような女にそのセリフを吐く資格はない……というセリフが喉まで出かかったが、おれはそれを提督さんお手製の絶品味噌汁で流し込んだ。

「……提督さんの味噌汁って美味しいなー」

「ホントだねー……」

お前が事の発端なのに、何他人ごとみたいに味噌汁堪能してるんだ北上。

「しかしそれが本当だとしたら、聞き捨てならん話だ」

制服の上から割烹着を着て、頭には三角巾という妙なスタイルで提督さんが自分の分の朝食を持ってテーブルにやってくる。隼鷹の隣に座り、震えるテーブルに朝食のおぼんを載せるのに少々苦労した後、自身が作った味噌汁を飲んでホッと一息ついていた。

「そうですか？」

「ああ。鎮守府のセキュリティ面から考えると、正体を突き止める必要がある。ひよっとすると得体の知れないものが鎮守府の敷地内にいるのかもしれない」

と、ご飯を口に頬張りながら至極まっとうな反応を返す提督さん。考えてみたらそうだよなあ……夜にフワフワと漂う光……一番疑う

べきは侵入者のライトだもんなあ。

「よし。今晚ちよつと探ってみよう。今夜の哨戒任務のシフトは誰だ？」

「私〜」

「あと……あた……ぐう……」

「よし。北上と加古の二人はそのまま今晚の哨戒任務についてくれ」

「はーい」

「ぐう……」

「残った五人で、今晚火の玉の調査をしよう。……でも五人じゃ多いな……隼鷹は夜では戦力にならないから除外。暁は基本的に9時を過ぎると寝てしまう……てことは……」

提督さんのそのつぶやきを聞いた途端、今まで眠そうにうつらうつらと船を漕いでいた川内の目に光が灯った。

「てことは?!」

「だな。川内、ビス子、球磨の三人で、今晚林の調査をしてもらいたい」「やったあああああ!!! 待ちに待った夜戦だあああああ!!!」

「了解だクマ」

「えッ?! わた、わたし、わたし 私も行くの?!」

川内は急に席を立ち、『あそーれや! セ! ん!! あはーいや!

せ! ん!!』と意味不明なボン・フェスティバル・ダンスを舞い、ビス子を震源とする局所的な地震が震度をあげた。おれは波打つ味噌汁のお椀を手に取り、ビス子にこぼされる前に逸品の味噌汁を堪能する。

「はく……味噌汁おいしい」

「恐ろしく他人事クマね」

「そらそうだろう。お前らにとつてバーバーちよもらんまの経営状況が他人事であることと同様、お前たちの仕事は俺にとつては手の出しようなない他人事だ。いくらお前たちのことが心配でもな」
「なるほど」

静かに味噌汁の味を堪能しつつ、ご飯を頬張って日本人に生まれた喜びをかみしめていると、提督さんと目が合った。提督さんは、なに

か言いたげな目で俺を見つめている。やだ……そんなに見つめられたら俺……

「そういう茶番劇は耳掃除の時だけで充分だクマ」

「さいですか。……んで、提督さんなんです？」

「ああ。実はハルにも同行してもらいたいんだが……」

What? あいべつぐゆおーぱーどうん?

「ぷぷー。これで他人事ではなくなったクマ。ニヤリ」

「いや、本来なら民間人を巻き込むことは控えたいんだが……」

提督さんは、非常に申し訳無さそうな目で俺を見た後、川内とビス子の方に視線を向けた。視線の先には、テンション高く『や！ せ！ん!! や！ せ！ん!!』とシユプレヒコールを上げて、元気よく右拳を振り上げている川内と、その傍らで不憫になるほど震え上がリ、周囲に糸を撒き散らしながら納豆をご飯にかけているビス子の姿があった。よく聞くと、ビス子は『はは……大丈夫……私は戦艦ビスマルクなのよ……ガイストなんかに恐れおののくわけないわ……』とうわ事のように何度も呟いていた。

「球磨だけであいつらを統制するのは無理がありそうだ……どうも安心して任せることが出来ない……。俺は執務室を動くわけにはいかんし……」

「なるほど。確かに納得です」

「万が一、正体が敵性勢力だった場合は、戦闘は川内とビス子に任せて逃げて構わない。三人を任せたいが、いいだろうか？」

「それはいいんですが……んー……でも俺が出て行くことで足手まといになりませんか？ いやいいんですが……」

じい様……床屋風情のこの俺が、軍人である艦娘と共に、今晚、生まれて初めて出撃することになりそうです……

「よかった。……球磨」

「ほいクマ」

「提督として厳命する。ハルに張り付いて、万が一の際の危険からハルを守れ。戦闘が発生しても、お前はハルの身の安全を最優先に動け。復唱しろ」

「了解だクマ。球磨はハルに張り付くクマ。戦闘が発生した場合は、ハルの安全を最優先に動くクマ」

やべえ。なんかしらんけど、妙に球磨が頼もしい。……そうか。これが球磨型軽巡洋艦一番艦、艦娘の球磨なのか。いつも妖怪アホ毛女としての球磨しか見てなかったから、こんな側面に全く気が付かなかった。

一方……

「頼むぞ。……川内!! ビス子!!」

「はいッ!」

「わたわたわたわたし?!」

「お前たち二人は、戦闘が発生した場合は、可能であれば情報を探った上で敵の排除をしろ。無理だと思ったら即座に撤退。いつものように生還が最優先任務だからな」

「了解! 夜戦なら任せておいて!!」

「わわわわわわわわわわわわ! このこの一人前前まえのレディーはビス子で私アカツキだからツ!!」

「じゃ、じゃあ暁は誰なのツ?!」

「グヒヒヒヒヒ……夜戦……夜戦がツ!!」

頼りねえ……大丈夫かこいつら……。特にビス子、動揺しまくりだろう……

「大丈夫クマ。ああ見えてビス子はうちの鎮守府の中でも夜戦が一番得意なんだクマ」

アホ毛がおれの脳内ツツコミに反応したのか、球磨はそう言って俺にビス子のフォローを入れつつ、たくわんをボリボリ食べている……でもさ……

「大丈夫よ!! も、し何かが出てきたら、私がハルを張り倒して終わりだから!! もっとわたわた私を褒めてもいいのよ!! 要ハサミよ!!!
ガクガクガク……」

もうなんか必死すぎて逆に何言ってるかわからなくなってるんだろ……言ってることが混乱しすぎて……

「よおおおおおし!! 今晩は夜戦だあああああ!!」

一方の川内は川内で、窓のそばに立ち、外に向かつてなにやら雄叫びを上げている始末……これは安心しろって言う方が無理ではないだろうか……提督さん、やめてもいいですか？

「すまんハル。まあ大丈夫だろうとは思う。それに球磨がハルを守ってくれる。危険はない」

「軍人じゃないのに……ぐすっ」

「球磨が張り付いてるから、何があっても大丈夫だクマ」

妖怪アホ毛女の言葉に心強さを感じる日が来るとは思ってもみなかったな……ちなみに食事後、北上から『球磨姉と二人じゃなくて残念だったねー……』とこっそり言われた。アホかお前……妖怪アホ毛女と二人で夜の散歩なんぞ恐ろしいわ。

そして今日も、ばーばーちよもらんまはつつがなく開店。開店後しばらくして暁ちゃんや川内、ビス子や北上といったいつもの面子がやってきては、シャンプーの時に足の裏をかくのを催促され、提督さんには髭剃りを頼まれるといういつもの如き営業サイクルをこなし、やがて閉店を迎えた。

ああ、そうそう。ビス子はいつものようにシャンプーでうちに来た時……

『怖くなんかないわよ……この戦艦ビスマルクが恐れおのくはずなんてないわ……ゾンビとか妖怪の類が出てきても怖くなんかないわよ……一反木綿なんかこわくないわよ……しょうけらなんてただ覗いてくるだけじゃない……あずきあらいなんてただ小豆を洗ってるだけよビス子……』

とうわ言のように呟いていた。顔も朝と動揺真つ青だったのが、見ているこっちも不憫になってきた……それにしてもその日本の妖怪の知識は一体どこで身に付けたんだか……。ついでに言うとうちの自分を『私』ではなく『ビス子』と呼んでしまっていた。どれだけ余裕がないんだ……。

そしていつものように閉店後は球磨と北上がやってきて、一緒に夕ごはんを食べ、時間まではみんなと食堂でだらだらとおしゃべりし……ついにその時がきた。夕食後しばらくして、俺と球磨、川内とビ

ス子の四人は、提督さんの待つ執務室に向かった。

「うし。時間だな。では四人とも、よろしく頼む」

「了解!!」だクマツ」

「ハル、三人を頼む」

「了解つす」

「球磨、ハルを頼むぞ」

「任せるクマ」

「川内、ビス子、期待してるからな」

「了解！ 夜戦なら負けなによツ!!」

「ぬぬぬぬぬりかべが出てきたらおいおい払ってあげげるわよわよこのビス子がか!!」

ビス子の様子を見て、俺は不安しか感じなかった。

執務室を出発した俺達は、そのまま艦娘たちの居住区域になる宿舎に向かい、その裏口から外に出る。裏口から出ると、そのまま林にながっており、俺達四人はそこから林に侵入する。すでに時間は午後10時。昨日、北上が自分の部屋から火の玉を見たと言った時間だ。

それにしても、艦娘の三人は皆、対照的な反応をしていた。各々が万が一の戦いに備えて、戦闘がこなせるだけの必要最低限の艤装で武装してはいるが……

「にひひひひひ……夜戦が出来る……夜戦……夜戦……!!」

川内は、夜戦が楽しみで楽しみで仕方ないといった感じで目をギラギラと輝かせ、舌なめずりすらしている。お前はそんなに夜戦がしたいのか。俺なんかは出来れば何事もなく終わりたいのに。

一方のビス子は深刻だ。

「べとべとさんが出てきたら……おかえりくださいませご主人様とか言えばいいのよね……ぬらりひよんが出てきたらどうすればいいの……知らないうちに上から目線で説教されるわ……恐ろしい……」

と昼間と同じくぶつぶつとうわ言のように、妖怪に出くわした時の対処法を反芻していた。まるで、今まさに定期試験が始まる寸前の中学生のようだ……でもビス子、なんで妖怪に出くわしたときの対策

ばっかり取ってるんだよ……。

「クマー。楽ちんだクマー」

一方で、意味不明かつ横暴なのはこいつだ。この妖怪おぶさり女は、提督さんからの『ハルに貼り付け』という命令を忠実に守って俺の背中におぶさっており、おれはちょうど球磨をおんぶして歩いている形になっている。

「なんで俺がお前をおんぶせにやいかんだ」

「提督の命令だクマ。球磨はハルに張り付くのが任務だクマ。キリッ」

「自分で歩けよ。今のお前、艤装つけてるから若干重いんだよ」

「周囲の索敵で歩くヒマもない球磨に歩けとは、横暴な床屋だクマツ！」

「横暴はお前じゃねーか!! この妖怪おぶさり女めがツ!!」

「妖怪?! 妖怪が出たの?! 妖怪おぶさり女ってなに?!」

「なに夜戦?! おぶさり女と夜戦?!」

方や自分で歩こうともしない妖怪ものぐさ女……夜の戦いが一番強いはずのビス子は妖怪の影に恐れおののく非力な少女……挙句の果てに『妖怪』と『夜戦』、似ても似つかぬ2つの言葉を強引に聞き間違えるほどに夜戦に命をかける妖怪夜戦女……提督さんすんません……俺にとつては、これは荷が重すぎる任務です。

林の探索をはじめてはや十分。球磨をおんぶしているせいで早くも俺に疲れが見え始めた頃……

「はははははははははははハル」

突然、ビス子が見ないで、少し涙目で話しかけてきた。

「ん? どうした?」

「あなた……ひよひよひよとして、ちよつと恐れおののののいてるんじゃない?」

「? いや?」

「な、なんだったら……この私のが、手をつなつなつないであげてもいいのよ……?」

……あーなるほどね。怖いから手を繋ぎたいのね。

「分かった。実を言うとおちよつとこわい。手をつないでくれ」
「パアアアアア……分かったわ！ この私が手をつないであげてもいいわよ!!」

普段は化け物と戦っていても、こういう部分は女の子なんだなあ……と俺がビス子と手をつなごうとしたその時……

「クマツ!!」

突然球磨が俺の頭をバチコーンと張り倒しやがった。

「いつて！ 何するんだこの妖怪張り倒し女ツ!!」

「なんかムカついたクマツ!!」

「お前の機嫌なぞ知るか!」

「大体ハルは球磨をおんぶしてるから、ビス子とは手を繋げられないクマツ!!」

「だったら降りろよこの妖怪おぶさり女!!」

「球磨は索敵に忙しいから降りられないクマツ!!」

「アホ抜かせ!!」

「ちよつとみんなみんな!!」

俺が球磨と不毛なバトルを続けていると、急に川内に呼び止められたので、川内の方を見ようとそつちに目をやった途端……

「うおッ?!」

「眩しいクマツ?!」

「なにこれッ?! 妖怪なの?! 妖怪が出たのッ?!」

恐るべき眩しさが俺達三人を襲った。今まで暗闇の中にいたため瞳孔が開きつぱなしの俺達にはこの光の襲撃は強烈すぎる……目を細めてよく見ると、川内の太ももあたりが眩しく光っている。川内の顔は、そのライトの眩しさに負けないぐらいの眩しい笑顔だ。でもその眩しい笑顔が今は最高にムカつく。

「なにやっつてんだ川内!!」

「暗くて見えづらいからさ。探照灯つけてみたんだー。これで夜戦も大丈夫でしょ? ニヒンッ」

「そういうのは切り札にとつとけつて! 今は懐中電灯で充分だツ!!」

「ちえ〜……せつかく夜戦に備えて持ってきたのに……」

口をとがらせ、へそを曲げた川内がぶつくさいながら自身のふとももに手を伸ばし、探照灯のスイッチを切った。だいたいなんてところに装着してるんだお前は。スカートいつも短いなあと思っただら、それが理由か！ 手に持つとかしろよそんなきわどいところじゃなく。

「クマツ!!」

おんぶしているために避けようのない俺の頭を、球磨が再度張り倒してきた。だから痛いつて言っただろ!!

「なんかムカつくクマツ!!」

「わけわかんねえ!! わけわかんねえよ!!」

「は、ハルう〜……」

「今度は何だビス子?!

「こ、こわがっただらあ〜……わだ、わだじが〜……手をつないであげても……いいのよ〜……ぬらりひよんがあ〜……べとべとさんがあ〜……」

なんだこの惨状は?! お前ら本当に軍人なのか?! これ本当に軍の任務なのか?! 俺からしてみれば、どうみても中学生の時の林間学校の肝試しにしか思えないぞ?!

「分かった! しがみつけ!! 怖いから! 俺怖いから!!」

「パアアアアア……し、仕方ないわね! この私が生がみついてあげるわ!!」

「ムカつくクマツ!!」

「張り倒したときや張り倒せ! その代わり次張り倒したらこの場でお前を下ろすからな!!」

「う……イヤだクマ……」

「川内もむやみに探照灯を点けるな! いざつてときにとっておけ!!」

「ぶーぶー!!」

くっそなんだこいつら!! ただの小学生たちの肝試し初体験じゃないかツ!! 軍人じゃないのかつ常日頃命がけの戦いをしてるん

じゃないのかッ!! ……ハッ?!

——球磨だけであいつらを統制するのは無理がありそうだ……二ヤリ

まさか提督さんは、このことを予見して俺にこいつらの保護者を頼んだとでも言うのかッ……?!

そうして俺が、三人のフリーダム過ぎるデカイ小学生女子どもに手を焼き、探索開始から30分と立たずに疲れ果てた頃のことだった。

「……ちよつと待て」

「ん?」

「クマ?」

「ちよつと何?! 子泣き爺が出たの?!」

「今なんか光ったぞ?」

俺達の間には緊張と、約一名の背中に悪寒と恐怖が走った。俺は見ただ。俺から見てずーつとまつすぐ前に……ゆらつと動く光のようなものが……

「いやああああ?!! 洗われる! あずきあらいに私の肉体がッ?!!」

「落ち着けビス子!! 球磨、なんか見えたか?」

「球磨には何も見えなかったクマね」

「川内、ちよつと探照灯で前を照らしてみてくれ」

「りようかいしたよ!」

俺の指示を受け、川内が再び探照灯のスイッチを入れて前方を照らした。探照灯の光の強さは相当なもので、俺達の前方を真昼のように明るく照らします。でも、怪しい物はなく、怪しい人影もない。

「なにもないね……」

「仕方ない。先に進むか。ビス子、怖かったら帰るか?」

「い、いやよ……私がいないとハルもこわいわいわいでしょしよしよ?」

「……分かった」

俺しか見てないとはいえ、見間違いや気のせいとも思えない。ならば任せられた以上、ここで見なかったフリをするわけにもいかない。確認しなければ……俺達はそのまま先に進み、俺が見た光の正体を突き

止めることにした。

「クマ……」

相変わらず俺におんぶされたままの球磨が、俺の背中であんなにかごそごそやっている。

「球磨？」

「念の為クマ」

球磨はそう言いながら、自身が持ってきた艤装の単装砲を構えていた。正体を確認するということは、ひよつとすると戦闘に発展するかもしれないということか……。

「もしもの時は頼むぞ妖怪アホ毛女」

「ハルは球磨が守るクマ。ハルは黙って球磨をおんぶしてればいいクマ」

おんぶのくだりがなければ、ものすごく頼りがいのあるセリフだったんだけどなあ……

しばらく先に進んだところで、再びゆらつとうごめく怪しい光が見えた。今度は割とハッキリと見えたが……

「また光った！　今度はみんなも見ただろ？」

「んーん……私は見てないよ？」

「わたわたわたわたしも見てないわよわよわよ？」

「球磨も見えないクマよ？」

あれ？　なんで俺だけに見えるんだ？

「……まあいい。このまままっすぐ進もう」

「りようかい！　夜戦出来るかなあ……」

疑問を感じながらもまっすぐ進む。その先々で何度もゆらめく光を見たが、それは俺にしか見えてないようだ。しかも『ゆらめく』と言っただけで、その光は宙をふわふわと漂っているためにそう見えるだけで、よく見ると、実際は光そのものはかなりくつきりとしている。

「うーん……夜戦出来るかなあ……」

そう。その光は、妖怪夜戦女の太ももに取り付けられた探照灯のよきな光だ。そんな光が、まるで俺達を導くように、チカツチカツと輝

いてふわふわと漂いながら、まるで俺達を……いや、それが唯一見えている俺を導いている。

「お前たち、ホントにあの光が見えないの?」

「見えないクマ。見えてたら単装砲ぶっぱなしてるクマ」

「うん」

「ぎゃー!」

もうビス子のことは放っておいて……なんで俺にだけ見えるんだ……?

ついに光は、弱々しいながらも消えることなく漂い始めた。その光を追いかける俺と、そんな俺に必死についてくる川内とビス子。その光を追いかけてしばらく歩いたところ……

「おお?」

「クマ……」

「……?!」

「ひいいいッ?! ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいいい」

少し開けた場所に出た。広さそのものはバーバーちよらんまの敷地と変わらないぐらいだが、古ぼけた鳥居が建てられ、奥には小さな社があった。その社は小さなプレハブ小屋程度の大きさの社で、狭いながらも2〜3人は人が中に入れる程度の大きさのようだ。光は吸い込まれるように社に入っていく、その直後、社の中がぼんやりと輝き始めた。

なんだこれ……しゃれにならんぞ。おれにしか見えない光に導かれて来た場所には、古ぼけた鳥居と社……ヤバいオカルト臭満載だ。これはあながちビス子が妖怪について調べてきたのも間違いじゃないかもしれない……次第に恐怖で足がすくんできたが、背中には球磨もいる。足に力を込め、ガクガクとした震えをなんとか抑えつつ、俺は生唾を飲み込んで球磨に囁いた。

「球磨……」

「クマ?」

「なんかあつたら、絶対守ってくれよ?」

「任せるクマ」

俺の背中で、球磨が単装砲を構える音が聞こえた。そんな頼もしい音を聞き、背中越しに感じる球磨の体温に勇気をもらった俺は……

「いくぞ球磨!!」

「クマああ!!」

球磨をかついだまま、ビス子と川内をその場に置き去りにして、社に向かつて走って行き、入り口を乱暴に開け、中に入った。

——よかった 姉さんたちが来てくれたから、もう安心ですよ

その時、社の中には、誰かの服によく似た服を着た、二人の女の子がいた。一人は凜とした出で立ちが美しい、どことなく武士のような強さと芯の強さを感じさせる女性で……

——誘導がうまくいったね キラリーン

もう一人は、服装こそ似ているが、明るく元気なアイドルのような女の子だった。理由はよくわからないが、その顔を見ているとなぜか張り倒したくなる感じの子だった。

「ハル?!」

「だだだだいじょうぶ?!」

俺達からワンテンポ遅れて、川内とビス子の二人が社に入ってきた。そうだ。この女の子たちの服装、どことなく川内の服装に似てないか? アレンジこそ違うが、ベースは川内の服と一緒じゃないか? 社の中にいた二人の女の子は、俺達の姿を見て安心したような、ホツとしたような笑顔を見せると、すうっと消えていった。

「球磨」

「クマ?」

「今の見たか?」

「?」

やっぱり見えたのは俺だけか……。

改めて、社の中を懐中電灯で照らしてみる。すると、足元に臨戦態勢の白い猫が一匹いた。

「フーツ! フーツ!!」

見た所、成人している子のようだが……思いつきり毛を逆立てて、

こちらのことを殺る気満々のように見える。

そして、猫の背後にいるのは……

「子猫がいるな」

「ぐったりしてるクマね」

同じく白い子猫が一匹、横になつていた。かろうじて胸が上下して
いるのは見て取れるが、ぐったりしていて元気がないように見える。

「よし。ちよつと見てみるか」

球磨を強引に下ろし、子猫に近づいて様子を見ようとしたその時
だった。

「フギヤー!!」

「ちよつと待て！ 俺は様子を見たいだけだ!!」

殺る気満々で臨戦態勢バツチりだった方の猫が俺に襲いかかつて
きた。ひよつとしたらこいつは、このぐったりしている子猫の母親か
もしれない。自身の子供を守るのに必死になっているのか……思
いっきり爪を立ててバリバリ引っ掻いてくるから、腕やら顔やらに生
傷ができまくって痛い痛い……

「うう……い、痛い……」

「んふふー。球磨を地に立たせた罰だクマ!」

「んじや私が見てみよつか」

川内がそう言いながら子猫に近づいた。一瞬、俺のように襲われて
傷だらけになるんじゃないかと心配したが……

「ねーハルー。やっぱりこの子、具合が悪いみたい。ぐったりしてる
よ」

「……つーかなんでお前、襲われないんだよ?」

「いや、わかんないけど……?」

驚いたことに、川内は母猫には襲われなかった。川内は今、ぐった
りした子猫を抱きかかえているが、それでも母猫は、そんな川内を攻
撃するどころか、その足元でただひたすらに子猫を心配そうに見てい
るだけだった。

「んー……分かった。その親子を連れて一度鎮守府に戻るか」

「調査はいいクマ?」

「ああ、光の正体は大体分かった。川内？」

「ほい？」

「悪いけど、その親子を運んでくれ。川内以外が運ぶと、その母親が牙を剥きそうだ」

「りようかい。夜戦出来ないのは残念だけど、任せといて！」

というわけで、俺達四人の肝試しは終了した。やはり俺の読みは正しかったようで、川内が子猫を抱えている間、その母親は川内の頭の上で静かに彼女の頭にしがみついていた。途中、球磨が好奇心で母親にちよつかいを出してみたが……

「ふしゃー!!!」

「いだいクマツ?!」

母猫からねこぱんちを食らって泣きそうな顔をしていた。ざまーみる妖怪おぶさり女。

「ハル〜……怪我したクマ。歩けないクマ。おんぶして欲しいクマあ〜……」

「そう言いながら元気いっぱい歩いてるじゃねーか……」

次第に鎮守府が近づいてきて明かりが見え始めると共に、ビス子の顔には血色が戻ってきて……

「よかった……小豆あらいに身体を洗われることはなかった……ぬらりひよんにも説教されなかったし、しようけらにも覗かれなかったわ……世界の平和は守られたのね……私たちの勝利よ……ッ!!」

と無駄に壮大な独り言を言っていた。

鎮守府に戻ったら、今回の結果を提督さんに報告し、早速白猫親子を市街地の動物病院に連れて行く手はずを整えた。輸送任務についたのは、川内と球磨の二人で、終始震え上がっていたビス子と俺は、ここでお役御免となった。

「んじゃ、ちよつと行ってくるね！」

手には大切に守るように抱きかかえた子猫。頭の上にはその母猫という出で立ちで、川内はフラッシュライトのような笑顔を浮かべながら球磨と共に出発していった。

俺はというと、さつき見た二人の女の子のことを提督さんに話した

くて、その後執務室に残っていた。提督さんは俺の説明を聞くなり、机の中の引き出しの中から、一枚の写真を取り出し、それを俺に見せた。

「提督さん、これは？」

「以前、この鎮守府に所属している艦娘のみんなで撮った記念写真だ。今も残っている面子は半分以下だよ……その写真を撮った時でさえ、全盛期の十分の一以下の人数だけだよ……」

なるほど……今いる面子も合わせて倍以上の人数の女の子たちが、この写真には写っている。加古の隣にいる女の子は……以前に俺が寝ぼけながら幻を見た子だ。古鷹だったかな。

暁ちゃんの周囲には、彼女によく似たちっちゃい子が三人、仲良さそうにはしゃいでいた。

「その子たちは暁の妹たちだ。それぞれ、響、雷、電だな。響は本名はヴェールヌイと言うんだが……皆からは響と呼ばれていたよ」

「提督さん、この帽子……」

「ああ。今暁がかぶってる帽子は、響の形見だ」

この子たちがみんな……戦死したのか……。

川内の両隣にいるのが、おれが今回見た女の子たちで間違いないようだ。川内と同じベースの服を着て、一人は凜とした美しさの女の子、もう一人がとても明るくて……それでいてどこか張り倒したくなるムカついた笑顔をしている女の子だ。

「その子たちは、神通と那珂だ。二人とも川内の妹だよ。もう轟沈してだいぶ経つ。二人とも戦闘になればそれこそ目を見張る強さだったが……それ以上にとても優しい子たちだった……」

そう言つて提督さんは、窓の外を眺めた。その目はどこか遠いところを、懐かしそうに眺めていた。

「そつか……お前たちが猫をか……変わらないな……お前たちらしいなあ……優しいなあ……」

「……なんかすみません。余計なことを聞いて……」

「謝るようなことじゃないさ。この前も言っただけど、俺は嬉しいんだ。古鷹は加古を見守ってくれてるし、神通と那珂の二人は、今も変わら

ない二人だった。こんなうれしいことはないよ」

それはウソだと言う言葉が喉まで出かかったが、おれはその言葉を吐いてしまうことを必死にこらえた。

なぜなら、もしそれを言ってしまったら、わざわざ隠すように写真を引き出しにしまっていた提督さんの気持ちを踏みにじってしまうような気がしたからだ。

「そうか……二人がか……うれしいなあ……」

今にも泣き出しそうな笑顔で思い出せる人を、唐突に失う時の気持ちには俺にはまだ分からない。でも、そんなにつらい思いで失ってしまった仲間を思い出すときの気持ちは、きつと嬉しさだけじゃない。つてのは、俺でも分かる。

それでも必死に、涙声で『うれしいなあ』と自分に言い聞かせる提督さんの後ろ姿が、見ている俺にはとても辛かった。

10. 祭だ祭だっ!! (前)

あの、小学生のようにフリーダムな球磨たちとの戦慄の肝試しから数日後、猫の親子はそれぞれ『ミア(親)』『リリー(子)』と名付けられ、市街地で里親を探し、無事猫好きなご夫婦、井上さんに引き取られていった。あの日林で親子を見つけた俺と球磨、そして実際に病院まで子猫たちを運んだ川内の三人で、猫の親子を井上さんご夫婦の家まで送り届けてあげた。

「ありがとうございます。ミアとリリー、幸せにしてあげてください」「こちらこそ。こんなかわいい親子を譲っていただき、感謝します。また会いに来てやって下さい」

「にゃー」

「もー……そんなにくつつかれたら私も離れられなくなっちゃうよー……」

ミアとリリーにとっても、自分たちを助けてくれた川内との別れは名残惜しかったようで、二匹は最後まで川内の足元や頭から、中々離れようとはしなかった。実際にこの親子を助け俺達にピンチを知らせたのは今は亡き神通と那珂だけど、その二人の姉である川内には、この子たちも素直に心を開いたのだろう。

「球磨たちに感謝しつつ、残りの人生を生きるクマ。キリッ」

「ふしゃー!!!」

必要以上に恩義を強調してくる妖怪アホ毛女に対し、ミアとリリーが最後まで懐くことはなかった。球磨は近づいて手を差し伸べる度に、ミアにねこぱんちを食らっていた。

「ハル〜……球磨も猫達と戯れたかったクマ……」

「お前はまず接し方から勉強しろ……」

そんなわけで里親さんたちの家を後にし、俺達は自分たちの鎮守府へと戻った。

それから数日は、何も無い日々が続く。バーバーちよもらんまには毎日のように艦娘たちが訪れ、『足の裏がかゆい』と暴言を吐き、夕方には球磨と北上が晩御飯に誘いに来る。風呂に入って一日の疲れを

癒やした後は、球磨たちが俺の居住スペースに訪れて酒盛り。時にはその面子に提督さんも加わるようになり、バーバーちよもらんまの酒盛りは毎日の終わりの恒例になりつつあった。

そして、秋祭を明日に控えた日の晩。この日もいつものように、艦娘のみんなが俺の居住スペースにやってきて、みんなで酒やジュースを飲みながら楽しくおしゃべりをしていた。この日は提督さんもめずらしくいい感じに酔っ払っていて顔もほんのり赤い。

球磨は相変わらずで、おちよこ一杯の日本酒でいい感じに酔っ払っていた。午前中の出撃で敵と戦闘になり、轟沈寸前まで追い込まれたというのに、風呂に入れば元気いっぱいってどういうことだ？

「くう〜……まあ〜……」

「?! 誰だ球磨に酒を飲ませたのはツ?!」

「くまあ〜」

「ぶおツ?!」

「あらら〜……今日も腹パンされるなんて、ついてなかったね〜ハル。ニヤニヤ」

「ちくしょう……かひゅー……轟沈寸前で帰ってきやがったのに……風呂に入って傷を癒やした時は必ず……かひゅー……酒を飲んで俺に腹パンを突き刺してきやがる……ツ!!」

「ひやつひやつひやつ! 提督見てみなよ。ハルと球磨は仲がいいねえ」

片方が片方にぶん殴られてるこの状況を見て、仲がいいように見えるその目はどれだけ節穴なんだ隼鷹!!

「だなあ。いやあーハルが来てくれてよかった! ホント、来てくれたのがハルでよかった!!」

提督さん、あなたも酔っ払ってるでしょ。仲いいヤツをぶん殴ってくる女なんかどこにいるんですかツ!

「いやあ、それが球磨の愛情表現なんだよ。きつとさ」

「誰がハルと仲良ひだクマあ〜」

「ちくしよツ!! その有り余る凶暴さで川内とこれから夜戦とかしてこいよツ!!」

「なに夜戦?!! ハルが私と夜戦してくれるの?!!」

「どこをどう聞き間違えたら俺が川内と夜戦することになるんだよツ!!」

「ハルとの夜戦は許さんクマア〜……ハルの夜戦の相手はこの球磨だクマア〜!!」

球磨のこの言葉を聞いた瞬間、ちょうど日本酒を口に含んでいた提督と隼鷹が同時に酒を吹き出し、北上はニヤリとほくそ笑んで、雑魚寝していた加古は上体をガバツと起こした。

「なに?!… なんか今私の目が一気に冴える一言が聞こえた気がしたんだけど?!」

「いやちよつと球磨姉……それは大胆発言すぎるでしょ……」

「何が大胆だクマア〜。この球磨が直々にハルの相手をひてやるクマア〜」

「まったくだ……まさか球磨がそんなことを口走る日が来ようとは

……ハル」

「はい？」

提督さんは立ち上がり、急に俺の前まで来ると、俺の両肩をガシツと掴み、まっすぐに俺の方を見て、真剣な眼差しで……でもほっぺた赤いけど……至極真面目なトーンでこう言い放った。ほっぺた赤いけど。

「この鎮守府の提督として……いやもはや一人の男としてのお願いだ!! 球磨の心意気に応えてやってくれツ!!」

「……ハイ？」

「いい子なんだ! いい子なんだ球磨は! 隼鷹には負けるけど、魅力的な子なんだよこの球磨は! 隼鷹には負けるけど!!」

唐突な提督さんの大胆発言を受け、今度は隼鷹が顔を真っ赤にして『ハアツ?!』と悲鳴を上げている。なるほど……北上、お前がよくニヤニヤしてる気持ちがあった気がする。

「ちよつと何言ってるんの提督!」

「マイスニートハニー隼鷹に比べたら全然だけど、球磨はいい子なんだよハル!!」

「ちよつとやめてマジで恥ずかしいから！」

「昨日だつてハルからもらつた耳掃除用ローションで丹念に俺の耳を掃除してくれたし、おれがしてあげたら顔真っ赤にして『ありがと』ていつてくれたりして隼鷹そらもうすんげーカワイイ俺だけの天使だけど、球磨もいい子なんだよ!!」

「まじかー。いやー提督さん、うらやましいっすニヤニヤ」

「隼鷹、愛されてるねニヤニヤ」

「そら私の目も冴えるわ。さすが商船改装空母だねえ隼鷹ニヤニヤ」
「〜ツツ!!」

ついに隼鷹は堪忍袋の緒が切れたのか……

「提督〜。ちよつと外行こつか〜」

「おお！ 俺の天使隼鷹の頼みとあらば、地獄までついていくぞ!!」

と提督さんとともに外に出て行つた。その直後……

『ものどもかかれえええ!!』

『ぎやああああああ?!』 俺は隼鷹の可愛さを……グホツ……皆に……ガフツ?!』

という戦闘意欲満々の隼鷹の咆哮と、ブウウンというプロペラ機が飛び立つ時のような音、そして爆発音に紛れて提督さんの悲鳴が聞こえてきた。その悲鳴を聞いた川内は『いいな提督〜……夜戦してる……』と物欲しそうな眼差しで外に続くドアを眺めていた。

「平和だなあ〜……」

「ピースフルだねえ〜……」

俺と北上は急にスローペースになつた時間の中で、息を合わせてこう呟いた。平和だ……ここが激戦地とは思えないほどに……確かにこいつらしよつちゆう戦いに向いてはちよくちよく怪我して戻つてくるけど……平和だなあ……。

「いつぞやのようにハルの背中に張り付いてやるクマ……ハルの身の安全は球磨が守るクマア〜……」

知らないうちに俺の背後に周り、俺の背中に抱きついてアホ毛で俺の頭をつついている球磨さえいなきや完璧だつたんだがな……。抱きつくのはかまわんけど背中に頼ずりするのはやめてくれるか球磨

？

「ハルく。この球磨が根性を叩きなおひてやるクマア〜……ん〜……
いい匂い……」

「意味わからん……そういやさ。暁ちゃんはともかくビス子は1回も
顔見せてないよな」

「ビス子も暁と同じで、任務がない時は9時を過ぎたら眠くなるタチ
だからね。まあ私はいつも眠いけど」

夜9時過ぎたら眠くなるって、どんだけ小学生なんだよ……ヘタし
たら幼稚園児レベルだぞ……。この前の肝試し探索の時は恐怖と緊
張で目が冴えて眠れなかったの感じだったのか？

「前に1回、加古と一緒にビス子が無理やり連れてこようとしたこと
あるんだよ」

と北上が遠い目をして語り始めた。なんつーかその人選が間違っ
てる気もするけどな。

「そしたらさあ……『あら……私は遠慮してお……くわキタカ……ミ
……お肌が……スー……スー……』て寝始めちゃってさ」

「そしたら私も眠くなっちゃって、その日はビス子の部屋で寝たんだ
よね〜……」

それ、ただの加古二号じゃねーか……。

「またそんな失礼な……あ……ヤバ……」

おいおいこんなに話が盛り上がってるところでも寝ちやうのか
……

「ごめ……明日も……あるし……もう……ねか……せ……クカ〜
……」

「ダメだコリヤ……」

おれは今まさに倒れ伏してしまう加古の頭のところにクッション
を敷いてやり、加古が気持ちよく眠れるように配慮してやった。しか
し加古自身がこのことに気づくことは永遠に来ないであろう。

一方、さつきまで執拗に俺の背中に張り付いていた球磨も、夢の世
界にダイブしてしまったようだ。今は俺の膝を枕にして、気持ちよさ
そうな顔で眠っている。

「スー……スー……張り……倒ひて……スー……」

「なんでこいつはすぐ俺の膝を枕にするんだよ……」

「プツ……ハルに甘えてるんじゃない？」

「アホ言うなよ。こいつがか」

「うん。ハルといる時の球磨姉はね、なんとなくはしゃいでる感じがするんだよね。いつもハルといると楽しそう」

「そう？」

「うん」

夜戦に滾る血を抑えきれなくなったのか、いつの間にか川内もいなくなっていた。隼鷹と提督さんはさつき外に出て行ったきり戻ってこない。加古と球磨は就寝中。残されたのは俺と北上。静かな時間は、チクタクという時計の音だけを俺と北上に届けた。

「ねー」

「ん？」

「球磨姉のことよろしくねー」

「なんだそりゃ」

「いつの日か義理の兄になるかもしれない人への、義理の妹からのお願い」

「妖怪アホ毛女なんか惚れるかいっ」

「そお？」

「こいつだって俺のことおもちゃ程度にしか思っていないだろう」

「二人ともいいセン行ってると思うんだけどなあ」

「かんべんしてくれ……」

なんとなく、俺の膝で気持ちよさそうに寝ている球磨の頭に手が行った。そのまま頭を撫で、もふもふの髪を手櫛でとかしてやる。量は多くてコシも強いのに、意外にも手櫛には素直だ。本人もこれぐらい素直ならいいのに……。

「ん……スー……」

球磨の髪を耳にかけてやる。最近俺が耳掃除してやってるから、耳もキレイなもんだ。そのまま髪を撫でてみた。こんなに髪は素直なのに、なんでアホ毛が出来るかね……

「ストップ」

唐突に北上が俺にそう告げた。どうした北上？

「それ以上は球磨姉が起きてて、二人でいる時にやってあげて」

誰がやるかいこんなこと。球磨だって起きてる時はこんなことし
ようもんなら張り倒してきそうだしな。

「ハルも球磨姉のこと言えないねー……」

「？」

よく分からん……でも俺、なんで急に球磨の髪を撫でたくなったん
だろうねえ？

次の日。提督さんと艦娘のみんなはとても忙しそうだった。隼鷹
とビス子の二人は哨戒任務に出て、他のみんなは秋祭の準備に勤しん
でいた。

「昨日は提督にあるまじき醜態をさらしてしまったからな！ 今日
は提督らしく、夜店で大活躍するぞお!!」

提督さんはそう言いながら、夜店で出すやきそばやイカ焼き、わた
あめなんかの料理の準備で大忙しだ。宿舎の調理室を覗くと、提督さ
んが通常の3倍ぐらいのスピードでせわしなく動き回っていた。
……お約束だが、別に赤くはなかった。いつものように制服の上から
割烹着を着て、頭には三角巾を巻いていただけだ。

「提督さん？」

「おっ！ ハル!!」

「忙しそうっすね」

「まあな！ 今晚はみんなが楽しみにしてた秋祭りだ！ 昨日の醜態
の分を取り返さなきゃいかん!!」

提督さんはいいい人だ。こんないい人が忙しそうに立ちまわって
ると、こちらも何か手伝わなきゃいけない気がするが……

「んふっふ。イカ焼き……やきつそば……りんごあめ……」

こんな鼻歌を歌いながら実に楽しそうにされてると、なんだか邪魔
するのも悪い気がする……でも一応聞いてみるか。

「提督さん、なんか手伝うことあります？」

「あ、いや!! ハルには一つ頼みたいことがあるんだ!!」

イカ焼き用のイカをさばく手を止め、水道で手をジャバジャバと洗った後、割烹着のすそでその手を拭きながら提督さんが近づいてきた。今までイカをさばいてた割に、身体から魚介類の匂いが漂ってこないのは、さばいてたイカが新鮮だからか？

「ハル。今日は艦娘みんなの髪を整えて欲しい」

「ほえ。全員ですか」

「ああ。みんなにはもう伝えてある。何人かは浴衣を着るそうさ。浴衣に似合う髪型にしてあげてくれ。出来るか？」

「了解です」

「代金は別枠で鎮守府に請求してくれ」

「いいつすよ。今日は無料でやります」

今日はお祭りなんだ。だったら俺だってお祭りでいこうじゃないか。……なんてことを考えてたら、提督さんはそんな俺を見て、急にニヤリとする。悪巧みしてる時の、やんちゃ坊主の男の子みたいな笑顔だった。

「いいんだハル。今日の祭にかかった費用は、ゼーんぶ必要経費として司令部に請求するから」

「……そんなズルをやっていいんすか？」

「いいんだよ。この鎮守府は常日頃司令部に振り回されてるんだ。これぐらいでも足りないぐらいだよ」

汗だくの提督さんは、そう言いながら川内のような眩しい笑顔を見せてくれた。なんとという剛気……この秋祭の費用を全部というと、中々バカに出来ない金額になるはずなんだが……逆に言えば、それだけこの鎮守府の運営が厳しいのかもしれない。

以前に球磨から聞いたことがあるが、かつてはこの鎮守府も、司令部からの支給品が潤沢に届いていた時期があったんだそうさ。それがいつの頃からか支給品がなくなり、資材の補充もなくなり、鎮守府の経営状況は悪化し……今では独自の補給線を確認し、残り少ない艦娘でなんとか鎮守府を機能させてる状況だと聞いた。必要経費も雀の涙ほどしか認められないため、こんなハレの日に一気に請求しているらしい。

「了解つす。んじゃ思いっきり高く請求しますね」

「よろしく頼む。……さあー俺は仕込みの続きだああ!!」

提督さんはそう言うと、再びイカをさばき始めた。うーん……あのイカをさばくスピード……さすがだね。

「ホッ！ ホッ！ ホッ!!」

昨晚、嫁の隼鷹に完膚なきまで叩きのめされた人だとは思えないなあ。

「ハル」

「はい？」

「それは言うな」

「提督さんも俺を球磨のことでからかわないのならやめます。ニヤニヤ」

ハッスルしながらイカをさばいていた提督さんに別れを告げ、祭の会場になる鎮守府中庭に足を運ぶ。意外にも本格的に準備が進んでおり、球磨と川内が櫓を組み立て、北上と加古がやぐらと木の間にちようちんをひっかけたワイヤーを渡していた。暁ちゃんも提督さんの夜店の準備をしているようだった。りんごあめを夜店の一角に並べていたのが見える。

「あ！ ハル〜!!」

やぐらの上の球磨が、こつちに気付いて100万ドルの笑顔で手を降っていた。なんだかえらく輝いて見える笑顔だなあ。

「球磨〜!! 何か手伝うことはあるか〜?!」

「そろそろ暁の仕事が終わるクマ!! そしたらハルは暁の髪を整えて欲しいクマ!」

おおなるほど。すでに提督さんのプランはみんなにも周知されるようだ。球磨の方もあらかた準備は終わりつつあるようで、後を川内に任せて、やぐらの上から『クマツ!』と言いながら飛び降りてきた。俺の目の前で『ドスン』と着地し、『ふしゅうく……』と鼻から水蒸気を出して余計な圧力を抜いたように見えたのは、おれだけじゃないはずだ。

「分かった。お前たちは？」

「球磨たちも終わり次第、順繰りにハルのところに行くクマ。今日はハルも大忙しクマよ?」

「分かった。……お前も浴衣着るの?」

「んふふ。着るクマ!!」

胸を張り、得意げにこう答える球磨を見ながら、『どうせ猿に烏帽子だろ……』と思ってしまった俺は悪い子でしようかじい様……。

「なーにー? やっぱり自分の嫁の浴衣姿が気になるの? ニヤニヤ」

木の上から北上が、ニヤニヤしながら見ていた。

「アホなこと言うな!!」

「誰が嫁だクマツ!!」

「えー。球磨姉に決まってんじやん」

「よし。ちよつと降りてくるクマ。ねえちゃんが魂のこもった熱い折檻をしてやるクマ」

「やーだよ。球磨姉に張り倒されちゃうからね」

「クマア……」

一瞬だけ俺も頭に血が上ったが、木の上で球磨をからかう北上と、木の下でからかわれる球磨ののどかな光景を見て、そんな気持ちもなんだか萎えた。平和だなあ……。

「ハル! 私、行けるわよ!!」

俺がピースフルな気持ちで仁義なき姉妹ゲンカを眺めていたら、夜の店の準備が終わったと思いき暁ちゃんが話しかけてきた。

「おつ。暁ちゃんおつかれ」

「途中、りんごあめをつまみぐいしそうになったけど、なんとか持ちこたえたわ!!」

つまみぐい? りんごあめをつまみぐい? それはつまみぐいというより失敬というやつではないのか? ありやつまみぐいで済むものか? 軍ではギンバイって言うんだっけ?

「……ま、まあいいか」

「えっへん! さすがは一人前のれでいー?」

「そだね。さすが暁ちゃんだね。一人前のレディーだ」

「パアアアア!!」

うーん……なんて素直な暁ちゃん。どこぞの妖怪アホ毛女とは……

「アホ毛がああッ?!」

おっ。久々にアホ毛レーダーが反応してるな。さっさと行こう暁ちゃん。

球磨のアホ毛レーダーの圏外に逃げるべく、急いで暁ちゃんと共にバーバーちよもらんまに避難した。店についたら、まずは暁ちゃんを散髪台のシートにちよこんと座らせ、暁ちゃんの予定を聞く。

「暁ちゃんは今日は浴衣は着るの?」

「着るわよ」

「どんな色の浴衣?」

「あずき色で、白いお花の絵が描いてあるわ!」

「てことは……んー……牡丹模様かな?」

「あと、この帽子もかぶりたい!!」

暁ちゃんにとつての思い出の帽子だもんな。そら、肌身離さずかぶりたいよな。今日みたいな日は特に……。

「了解。浴衣に帽子つてのは斬新だけど、髪の方は任せてくれ」

「お願いしますっ」

その後はいつものように、霧吹きで暁ちゃんの髪をシュツシュしたら散髪。髪を整え終わったところで、一度シャンプーをしてあげる。

「暁ちゃん」

「なーに?」

「かゆいところは?」

「左足の裏の……」

「自分でかいてね」

「それをするのが一人前のれでいー!!」

その後は髪を乾かしてつつがなく終了。……しかし、こんな時まで足の裏か……。

「じゃあハル! またあとでね!!」

そう言つて、髪を整え終わった暁ちゃんは店を後にし、入れ違いで

今度はビス子が来た。哨戒任務も無事終了したみたいで何よりだ。

「次は私ね」

「おう、いらつしやい。ビス子は浴衣は着るの?」

「私は着ないわね」

「あらもつたない。ビス子も似合うと思うけどな」

「そうかしら?」

「うん。ビス子なら似合うと思うけどね」

「んじや来年に着てみるわ。……あ、でもね。今年は私、ディアンドル着ようと思ってるの」

「ディアンドル?」

ん? なんだそりや? 初めて聞くな。

「知らない? ドイツの民族衣装なんだけど」

「いや分からんな……実物見れば分かるかも」

「そお? じゃあ楽しみにしててね! そして私の美しさにひれ伏すがいいわ!!」

そう言つて『ふんす』と鼻から水蒸気を吹き出すビス子を見て、ホントにこの前の肝試しの時のビス子と同一人物なのかと疑わしくなった。いやまあ同一人物なんだろうけど。

「? どうしたの?」

「いや別に」

その後も散髪が終わる度に隼鷹、川内、加古、北上、提督さん……と次々にお客さんが押し寄せてくる。基本的に一日の客数が少ないバーバーちよもらんまにおいて、これだけの人数の客が一日に来るのはまれで、7人もの客を短時間の間にさばいたのは随分久しぶりだった。おかげで俺もなんだか心がウキウキしている。

話を聞いてみた結果、浴衣を着るのは暁ちゃんと川内、そして妖怪アホ毛女の三人で、ビス子はディアンドルというドイツの服を着るみたいだ。この時点ではまだみんなに話を聞いてみただけで、誰がどんな服を着てくるのかは分からない。なんだかんだでみんなかわいくて美人だから、それぞれ似合っているんだろう。今から楽しみだ。……今日の前にいる、こいつ以外は。

「というわけで、今日のラストを締めくくるのは球磨だクマ」

「お前がラストか……」

そして今日のラストは、この妖怪アホ毛女で締めくくられる。こいつのアホ毛、どうしてくれよう……。

「おい球磨」

「クマ？」

「お前もたしか浴衣着るんだよな。どんな色のやつ着るんだよ」

「紺色の古式ゆかしい浴衣だクマ。似た感じの色の羽織も着るクマ」

「了解した。アホ毛はどうする？」

「切れるものなら切ってみるといいクマ」

「放置しとくか……」

床屋としてはシャクだけどな……こいつのアホ毛にかまけていたら、秋祭に遅れるかもしれないからな。一度球磨の頭をシャンプーしてやり、その後髪を整えてやる。びよんと立ち上がるアホ毛に屈辱を感じながら、丁寧……

「なあ球磨」

「クマ？」

「うなじ見せたりしないの？」

「しないクマ。キリッ」

丁寧……

「なあ球磨」

「クマ？」

「うなじ」

「見せないクマっ」

それはそれは丁寧……

「球磨ー」

「しつこいクマッー」

だってうなじしつかり見せた方が浴衣はカワイイんだもん……

……あれ？ 俺もこんなにムキになる必要なくね？

——やっぱり自分の嫁の浴衣姿が気になるの？

うるせー北上。ここにきて妙なこと言っただけ俺を意識させるんじや

ないッ。

——ニヤリ

俺は自分の頭の上で右手を。パタパタと振り、俺に余計な邪念を送り込もうと企む北上の邪悪なイメージを振り払った。

「何やってるクマ?」

「心配いらん。悪のイメージを振り払っているだけだ」
「?」

髪を球磨の要望どおりに整えたら、最後はいつものように両肩をポンと叩いて終了だ。球磨、おつかれさまでしたっ。

「ほっ!」

いつもならここで耳掃除もやってやるんだが、今日は別にいいだろう。本人も、今日はいつもみたいに『耳掃除もやるクマ!』って言うてこないしな。

「ところでお前ら、着付けは出来るの?」

「隼鷹が出来るから問題ないクマ」

あの妖怪飲んだくれ女にして提督さんのスイートハニーの隼鷹がか。なんか意外だな。日本酒飲みながら『ひゃっはああああ!!』ってしてるイメージしかなかったから。

「ああ見えて隼鷹はお嬢様だから着付けはお手の物クマ。毎年隼鷹にやってもらってるクマね」

「当の本人は浴衣を着ないっつーのになあ」

「気合が入った服ってのはあまり好きじゃないみたいクマ。カクテルドレス着たこともあったけど、本人嫌がってすぐ脱いでたクマね」

「……カクテルドレス着るような機会があったことに驚きだよ」

「提督夫人的な感じで。なんかすんごく様になってたけど、鎮守府戻ってからすぐ着替えてたクマ」

ひとしきり雑談を終えた後、球磨は『そろそろ浴衣を着るクマっ』と言い残して店を後にした。球磨の浴衣姿か……うなじもしっかり見せてないし、どうせ浴衣を来てもちんちくりんだろう。

——準備が出来たら北上と誘いに来るから、ここで待ってるクマ! そんなことを言っていたから、似合ってたなかつたら盛大にちやかし

てやろう。

「よおおおおし!! 残り1時間でやきそば準備だああああ!!」

提督さんが、たくさんの荷物を積んだりヤカーを引いて、祭会場の中庭に駆け抜けていく姿が見えた。手伝おうかとも思ったが……

「やきそばだああああ!! 待ってるよおお!!」

ねじり鉢巻をして祭りのハツピを着て、満面の笑顔で駆け抜けていった提督さんを見ると、無理に手伝ってしまった提督さんの楽しみを奪ってしまうのもなんだか忍びない気がした。第一、球磨との約束もある。俺はこのまま、球磨と北上が見せに来るのを待つとしてよう。

祭が、もうすぐ始まる。

11. 祭だ祭だっ!! (後)

『言葉を失う』という状態は、きつとこういうことを言うのだろう。俺は、球磨の浴衣姿を見ながらそんなことを考えていた。

「ど……どうクマ?」

「……」

「ちゃ……ちゃんとうなじも出したクマ……」

「お、おう……」

正直、俺はこの妖怪アホ毛女を舐めていた。俺は、この球磨のことだから、浴衣を着ても猿に烏帽子でちんちくりんな出で立ちにしかならんだろうとたかを括っていた。

「……お、おうだけじゃ分かんないクマ……」

紅をさした球磨が、俺の所に近づいてきて袖のさきつちよをつまみ、伏し目がちにこう言った。髪を整えてた時はあんなに拒絶してたのに、いっちょよまえに髪を上げてうなじも見せていた。

白状する。まさかとは思ったが……めちやくちや似合っつてて可愛かった。

「……似合っつてると思うぞ」

「ほんとクマ?」

「おう……」

「よかったクマ!」

球磨は心底うれしそうに100万ドルの笑顔を浮かべながら、俺の右手を取って左右にぶんぶんと振り回していた。ちくしよう。かわいいじゃねーか……。手が柔らかくてあったかいだなんて不意打ちだぞ……。

「ね? 言ったとおりだったでしょ?」

周囲にカワイイ光線を振りまいて上機嫌の球磨に、いつもと変わらない服を来た北上が近づいてきて、こう話しかけていた。

「似合っつてるって言っただじゃん」

「そうクマね! 北上の言うこともたまには信じられるクマ!!」

敢えて突っ込まないが、そのセリフも中々酷い言い草だと思うぞ。

「多摩姉も喜んでるかもね」

「そうクマね」

ん？ 多摩姉？ 多摩っていえば確か……

「この浴衣は多摩の大切な形見だから、今日着て、ハルに見せたかったクマ。似合ってたよかったクマ」

笑顔でそう語る球磨を見て俺は、自分の心臓が一拍だけ強くドキンと脈打ったことを感じた。なんだか心地いい胸の締め付けを感じ、顔が紅潮してきたのが分かった。そんな自分がなんだか恥ずかしくなり、俺は球磨の目をまっすぐ見ることが出来なくなった。

「よ、よーしそろそろ行くぞー！」

「了解だクマー！」

「行こーう。しゅっぱーつ」

三人でバーバーちよもらんまをあとにしようと店のドアを開けたその時だった。ドアの開閉を知らせる『カランカラン』という音に混じって、聞きなれない声が聞こえた気がした。

——よく似合ってるニヤ ありがとニヤ

「ん？」

「クマ？」

「んー……」

「クマ……」

ん？ なんか二人とも様子がおかしいような？

「どうかしたか？」

「あ……んーん。なんでもないクマ」

「そか」

「クマっ」

……まあ偶然だろう。

店を出た後は、三人で中庭まで歩く。季節はもう秋で、お日様が落ちればとても涼しい。道すがら鈴虫やコオロギがリンリンと鳴いてるし、空を見上げればキレイなお月様が顔を覗かせている。

「いいねえ。風情があるねえ」

「おっさんくさいこと言ってるな北上……」

とはいえ北上の言う通りだ。秋の風情が漂う、素敵な道のりだ。中庭に近づくに連れ、次第にみんなのぎやーぎやー騒いでいる声が聞こえてきた。でもまだ距離は離れていて、喧騒の中の静寂という感じがとても心地いい。

「ついたクマー!!」

祭り会場に到着。会場は市政の祭会場は違ってハンドメイド感溢れる作りだ。櫓には……恐らく妖怪浴衣アホ毛が描いたであろう『あきまつりだクマ』と描かれたヘタクソな看板が張り付いていた。

「早速提督のわたあめを食べに行くクマー!!」

球磨はそう言うと、一目散に提督さんが待ち構える夜店に向かって走っていった。浴衣で走るだなんてこけないか心配だったが、器用に足を浴衣の裾から出してもものすごいスピードで走っていった。

「ハルは行かないの?」

「この前のサボりの時に散々甘いものは食ったからな。今日は見送りだ」

「ああ。球磨姉とデートした日か。楽しそうに話してくれたよ」

「誤解を招きそうな言い方はやめろ」

夜店に到着した球磨は、大はしゃぎでわたあめを提督さんに催促していた。……見とれてなんかないからな。マジで。

「ハル!」

ビス子の呼び声が聞こえ、ビス子の方を向くと、ビス子は何やらヨーロッパの町娘みたいな……でもおしゃれでかわいらしくアレنجされた服を着ていた。胸元が大きく開いて強調された服のせいか、ただでさえナイスバディなビス子が、今夜はいつにも増してセクシーに見える。色気のあるヨーロッパの町娘といったところか。キレイな中にも茶目っ気と可愛げがあるところがビス子っぽくて大変よろしい。

「どお? これがダイヤモンドよ?」

そういつてビス子は髪をファサツとかきあげ、得意げに胸を張っていた。

「おう。よく似合ってるよ。そっか。その服の名前がダイヤモンドっ

「言うのか」

「そうよ？ 名前は知らなくても、見たことぐらいはあるでしょ？」

「おう。でもビス子にその服、よく似あってるなあ」

「パアアアアアア!! ホント？」

「おう。いつも凜々しい戦闘服ばかりだもんな。でもそういう柔らかい服もよく似合うよ」

「そんな私は？」

「そう！」

「一人前のれでいー!!」

ビス子と息を合わせてハイタッチ！ その後ビス子は『アカツキのうちわを振り回してくるわ！』と言い、向こうで大きなうちわを仰いでいる暁ちゃんの方に駆けていった。ホント、あの二人仲がいいね。

北上もいつの間にならなくなったし、俺は球磨のところにでも行こうかね……と夜店の方を見たその時……

「ハルううう!!」

背後から抱きついてくるヤツがいた。この酒臭い匂いは、妖怪飲んだくれ女の隼鷹か!!

「そらちよつと酷いでしょハル!! ひやつひやつひやつ!!」

振り返ると、隼鷹はビールのジョッキ片手にすでに顔マツカツカな状態で少しフラフラしていた。なんだ隼鷹、提督さんの手伝いしないでいいのか？

「そらああたしだって艦娘ですから？ 愛する男の手伝いをしたい気持ちはあるよ？ でもさー……」

なんだか予想外な反応だな……隼鷹は口を尖らせ、ちよつと残念そうに夜店の方を指さした。そこにいるのは……

「提督！ 球磨のわたあめはまだクマ?!」

「待ってるー!! 今作ってる!!」

「司令官！ 一人前のレディーは早く焼きそば食べたい!!」

「はいよ任せろー！ わたあめ作り終わったらすぐとりかかる！ そのいちごあめ一個食べていいぞー!!」

「やったー！ でも一人前のれでいーはこれぐらいでは待てないわよ

!!

「く、球磨もいちごあめと言わず、りんごあめが欲しいクマ!!」

「わたあめかりんごあめ、どっちかにしろー!!」

「提督?! 私、この『すぱいひえん・だー・ごるとふいっし』ってアクティビティをやりたいわ!!」

「おう! 出来るだけたくさんのお金を掬ってやってくれ!!」

「やっべ……提督さんめちやくちや忙しそう……でも幸せそうだなあ提督さん。心底楽しそうだ。」

「あんな楽しそうな顔されちやあねえ。邪魔出来ないよねえ」

と妙に殊勝なことを言う隼鷹の横顔は、なんだかちよつと色つぼく見えた。

提督さんはきつと、元々あまり戦いを好まない性格なのだろう。確かに執務室や仕事に見せている顔は軍人の表情をしているが、俺には、今楽しそうに艦娘に振り回されてる提督さんの方が、本質に近い気がした。

そして、そんな提督さんががんばりを眺める隼鷹の顔も、口を尖らせながらもどこかうれしそうだった。きつとこの隼鷹も、軍人としての凛々しい提督さんよりも、こういう平和の中で生き生きと動き回る提督さんを見て、惹かれていったんだろう。

「提督さ。ハルにすごく感謝してるみたいだよ?」

「お? なんだ突然?」

「ハルも聞いてると思うけど、この鎮守府つてもうボロボロでしょ?」

少ない資金をやりくりして、私達のために司令部にひたすら頭下げて、やつと慰安施設として美容院を準備できるってなつて……でも一回ダメになつちやつて……だから今回不安だったらしいんだよね。『来ても、みんなと仲良くやってくれるのか』とか、『また前みたいにダメになつたりしないだろうか』とか、ハルが来る前はよく言つてたよ」

そっか。だから俺が初めてここに来た時や無事店を開いた時、あんなに嬉しそうにしてたのか……。

「そしたらハルが来てくれて、みんなに馴染むどころかこんなに仲良

くなってくれて。昨日の夜、提督喜んでたよー」

「昨日って……ああ、珍しく提督さんが『マイスイートハニー隼鷹』で暴走してたときか」

「こそ。球磨の爆弾発言聞けて、『そんなに仲良くなってくれたのか!!』てすごくうれしくて調子に乗っちゃったみたい。ガッツリ締めといたけどね! ヒヤッヒヤッヒヤッ!!」

そっかー……あの妖怪アホ毛女の爆弾発言は置いておいて……そう思われてるのはうれしいね。

「まあーこれからもひとつ、この鎮守府のみんなをよろしくね!! あたしや金魚すくいしてるビス子にちよっかい出してくるよ!!」

「あ、待て。俺も夜店に行く」

「んじやハルも一緒に行こっか!! いくぞものども〜!!」

隼鷹の、提督を想う意外な一面……つーか付き合ってるんだから当たり前か……が見れてなんだか新鮮な気分だ。今俺の横でビールを飲みながら上機嫌でケラケラ笑うこの隼鷹、お嬢様って話もびっくりだし……色々な横顔を持つてるんだね。

「ハル! わたあめだクマ!!」

夜店に到着すると、球磨がドデカいわたあめを持って100万ドルの笑顔で待ち構えていた。球磨のためのわたあめのように、なんとなく熊の顔っぽいつくりのわたあめだった。提督さん器用だなあ。

「でもこの、頭から上に伸びてるツノみたいなのはなんだ?」

「アホ毛! 球磨のわたあめだから特別につけてもらったクマ!」

心底楽しそうにそう答える球磨を見て、俺も自然と顔がほころんでくる。……にやけてるんじやないからな。

「お! ハル!! 来てくれたか!!」

夜店の方から、提督さんの威勢のいい声が聞こえた。見ると提督さんは、今まさにやきそばを作っている最中で、大量のそばと具をフライ返しでひっくり返しまくっていた。ねじり鉢巻に祭のハッピーという祭り装備完璧な提督さんが、笑顔で焼きそばをひっくり返すその光景は、見ていてかなりの迫力がある。

「来ましたよ。妖怪アホ毛女のがままなんか聞かなくてもいいの

に」

「誰が妖怪だクマツ!!」

「いや、これぐらいしなきやな! 球磨のわたあめにアホ毛をつけるぐらいわけではないよー!」

「提督は男前だクマッ……」

「特別扱いなぞ球磨にはもつたいない。その分のリソースは隼鷹に割いてあげてくださいよ」

「もちろん、隼鷹には別に色々……でもハルもあれだろ? 北上から聞いたぞ?」

お? 北上から一体何を聞いたというのか?

「球磨にだけは耳掃除の時に膝枕してるんだってな!」

「?!」

「え?!」

「クマ?!」

「ちよっ!? この一人前のれでいーを差し置いて……?!」

提督さんの突然の暴露を受け、その場でいちごあめを食べていた曉ちゃんと金魚すくいに勤しむビス子が驚愕の表情を浮かべ、隼鷹は飲んでるビールを吹いた。

「あれ? 言ったらダメだったの……?」

周知の事実だとも思っていたのだろうか……皆の反応を見て提督さんは困惑していたが、それでもやきそばをひっくり返す手を休めないのはさすがだ。

「提督さん」

「お、おう……どうしたハル……」

「あとで話があります。工場裏行きましょっか」

「球磨も話があるから一緒に工場裏に行くクマ」

提督さん……久しぶりに切れちまいましたよ。

「球磨も……久しぶりにキレたクマ」

気が合うな妖怪アホ毛女。よし。一緒に提督さんをかわいがつてやろうじゃないか。

「そうクマね。とりあえず張り倒すクマ」

「いやいや！ この時点ですでに息ぴったりで仲いいじゃないかッ!!」

う……ひ、否定できん……いや仲がいいというのは論外だが、息ぴったりってのは……

「た、確かにそうクマ……」

お前も急に顔を真っ赤にしてうつむくんじやないっ!!

「それはそれとして、球磨ばっかり膝枕して、私たちを膝枕しないのはどういう了見なの？ ぜひじっくり話を聞きたいわねハル……?」

「そうよ！ 私たちは一人前のれでいーなのよ？ ぶんすか!!」

「い、いやそれは……球磨は一度言い出したら聞かないというか……」
「んふ……にへらア……」

「お前もキモいニヤニヤを浮かべてるだけじゃなくて何か言い返せよ妖怪にやけ女！」

ヤバい……暁ちゃんが頭の上に青筋を立てながら迫ってきている……ビス子はビス子で暁ちゃんの背後で怒り狂いながら『吹き飛ばされるがいいわ!!』と言わんばかりに、暁ちゃんの背後で『祭』と大きく描かれた巨大うちわでこっちをおおいでいる……これは絶体絶命だ……まさかここに来て日頃膝枕を断り続けた報いが来ようとは……?!

唐突に、『ジュウウウウウ』という大きな音が鳴り、周囲にソースの焦げたいい匂いが立ち込めた。そのソースの匂いに反応し、俺と球磨、ビス子と暁……俺達全員の腹の音も盛大に鳴った。

「やきそばッ?!」

「待ちかねたわッ!!」

「あ、青のりはたくさんかけるクマッ!!」

「お、俺も！ 青のりを！ もっと青のりを!!」

提督さんの方を見ると、提督さんの隣で隼鷹がソースを焼きそばにかけていた。うーん……さすが提督さんのスイートハニー隼鷹。ナチュラルに提督さんを手伝うその様子が様になっている……

「だろ？ これがマイルスイートハニー隼鷹だッ!!」

「ほら提督！ ボサツとしてるとやきそばコゲるよ!!」

なんかもうさ、長年連れ添った熟年夫婦みたいな安定感があるね。
この二人。

「そうクマね……なんかもうナチュラルだクマ」

「お前もそう思うか」

「思うクマ」

「ハーツハツハツハツ!!」

唐突に悪の総大将のような高笑いが聞こえた。この焼きそばが焼ける音に負けないほどの音量が、周囲にこだまをまき散らしつつ、どこから聞こえてくる。音の方向から察するに……

「やぐらかッ?!」

「クマッ?!」

俺と球磨は憤怒の表情で睨ちやんとビス子から迫られてる現実から逃避するようにやぐらの方を向いた。そこにいるのは……

「浴衣姿の川内いいイイイイ!!」

「ハーツハツハツハツ!!! 今宵は祭……これぞまさに夜戦!!! これからは私の時間だよッ!!」

いや、すみません川内さん。意味わかりません。ほんと、意味わかりません。

「意味わかんないクマ……」

「とうッ!」

もはや呆れを通り越して困惑の感情しか沸かない俺達を尻目に、川内は浴衣姿のままやぐらからジャンプして飛び降りた。クアツドコーク1800ばりのきりもみ回転をしつつ地面に着地すると、そのセクシーな太ももをサツと浴衣で隠した。なんでお前今日も探照灯を装備してるんだよ?

「えっちいクマッ!」

『バゴオオオオン』という炸裂音と共に久々の球磨のツツコミが俺の頭に炸裂し、俺の脳が揺さぶられたのと同時に、川内が俺達にそのフラッシュユライトのような笑顔を向けていた。

「だって祭といったら夜戦だからね! 探照灯はつけてなきや!!」

「いや……ほんとにみわかんないっす。すみません川内先輩。意味わ

「かないっす」

ホントこいつは……顔は整ってるんだからもうちよつとおしとやかになればいいのに……せつかく浴衣も似合ってるんだから。

「そらあ神通の浴衣だからね！ 神通おしとやかだったし、これでもおしとやか度が……」

「いや全然アップしてないから。仮にアップしてもおてんば度がさらに跳ね上がっててトータルマイナスですから」

「まあいいじゃん！ 私も焼きそばほしいな」

未だに脳震盪を起こしている俺と、アホ毛から水蒸気を吹き出してぶんすか怒っている球磨を無視して、川内は焼きそばを焼く提督さん夫妻の元に行き、『青のり！ 青のり!!』と言っていた。

「ところでさー球磨」

「クマ？」

「なんでやぐらなんか建てたんだよ？ 今んとこ川内の登場シーンにしか使われてないぞ？」

「クツクツクツ……よくぞ聞いたクマ！ ……加古ッ！」

まるでその質問を待っていたかのように、球磨が加古の名を叫ぶ。つっても加古なんかどこにも見当たらんぞ？ また自分の部屋で寝てるんじゃない？

「うああ……祭つーのは……わかったから……寝かせ……」

いやがった……やぐらの上で、会社勤めのお父さんの休日みたいな感じで寝てやがった……なんてやつだ……祭の当日、会場のどまんなかで眠りこけるとは……しかも俺がいるところからは、ぴくぴくと緩慢に動く加古の腕しか見えない。その様はさながらホラー映画のゾンビのようにも見えた。

「加古ー。そろそろはじめるクマッ!!」

「おー……これやったら私は……ねる……ぞ……」

『あーあー……まいくです。まいくです』

なんだか突然北上のアナウンスが始まった。さつきから姿が見えないと思つたら……どこにいやがるんだ北上は。

「北上?! どこにいるんだ北上?!」

『まあどこだっていいじゃん。球磨姉のコールも入ったし、ボン・フェスティバル・ダンスはじめるよー』

どこにいるかもしれない北上がこう告げると同時に、会場内に盆踊りの音楽が鳴り響いた。なんだか聞いたことない感じの演歌調の曲だったが、中々にノリがよくていい曲だ。『百万石のく……』とか言ってるから、加賀金沢に関係してる曲なのかな？

「ハルも一緒にぼんおどるクマ!!」

そう言っつて妖怪盆踊り女に手を引つ張られ、抵抗むなしくやぐらの下まで強引に連れて来られてしまった俺に盆踊りなんか出来るはずもない……おいどうするんだよおれ盆踊れないぞ？

「いいからテキトーにボンつとけばいいクマ!!」

そういつて妖怪盆踊り女は、どう見ても盆踊りとは思えない不可解な動きでこちらのマジックポイントを吸収しはじめた。ちくしよう負けてられん。こちらも奇妙な踊りで対抗するしかない。

「こ、ここうか？」

「そうそう！ その調子クマ!!」

見様見真似で球磨の動きを真似してみる。傍から見ると妙な動きにしか見えなかったが、自分がいざやっていると、これが妙にハードで踊りがいのあるダンスだ。そうか……これが……

「これがボン・フェスティバル・ダンス……!!」

「いや、よくわかんないクマ。多分違う気がするクマ」

「せっかく俺がノツてきたところで急に冷めるなよ……妙に気恥ずかしくなるだろう」

「クマクマツ！」

といいながらも、俺と球磨は並んで一緒にボン・フェスティバル・ダンスでひたすら盆踊る。小さい頃に見た盆踊りとは根本的に違う踊りなような気もするが、これはこれで踊っていると段々楽しくなってきた。

「夜の盆踊り……夜戦だ!! 私も夜戦を盆踊る！」

「私も踊るわ！ だって一人前のれでいーんだから!!」

「よーし。やきそばも出来たし、ちよいと一休みするかー」

「あたしも一休みするよ。疲れたる？ ほら飲んで」

「さんきゅー隼鷹」

提督さんが焼きそばを焼く手を止め、汗を拭きながらベンチに腰掛けた。その横に隼鷹が寄り添うように座り、二人はビールを煽り合っていた。川内と暁ちゃんも奇妙な踊りの戦列に加わり、俺達鎮守府に巣食うあやしい者共が、その奇妙な踊りで精神力を吸い取る相手を探してやぐらの周囲をぐるぐると踊りながら回り始めた。

フト、一人足りないことに気がついた。

「あり？」

「ビス子が盆踊ってないクマ！」

ビス子を見ると、赤面しながらこつちを見ていた。

「どうしたビス子?! 盆踊らないのか?!」

「え……だ、だって私、こんなタンツ知らないわよ……?」

「俺だって知らん! そもそも球磨が踊ってる怪しい踊りを真似してるだけだ!!」

「で、でも……」

顔を真っ赤にしてうつむくビス子を見てフト気づく。これはあれだ。多分ビス子はきっかけが欲しいんだ。中々踏ん切りがつかないから、きつと誰かが強引に誘い込んだら踊りだすぞきつと。

「出来なくても大丈夫よビス子! だからこつち来て!」

「え……でも……」

よしいいぞ暁ちゃん! さすが一人前のれでいー!!

「仕方ないわね……じゃあ暁が教えてあげるわよ!!」

暁ちゃんはそう言うと、楽しそうにビス子のそばまで走って行き、その手を取って強引に輪の中に連れ込んできた。

「わ、わからないわ?! どうやって盆踊ればいいの?」

「ほら! こうやって踊ればいいのよ!!」

暁ちゃんがそう言い泣がら、球磨のそれによく似た不思議な踊りを踊り、ビス子もそれを見様見真似で踊り始めた。最初こそ赤面して抵抗を感じているようなビス子だったが、次第にその表情も段々とほころびはじめ、ついには満面の笑顔になっていった。

「こ、こっぴつら暁?！」

「そうよ!　これでビス子も一人前のれでいーね!」

果たして一人前のれでいーという職業に、奇妙な踊りで人の精神力を吸い取るなんて特殊能力があるかどうかは疑問だが……それでもビス子も暁ちゃんも楽しそうで何よりだ。

「だんだん楽しくなってきたわ!」

「そら何よりだ!!」

「これで私も一人前のれでいーね!!」

「だな!!」

毎度のごとく『あほーれや!　せ!!　ん!!!　あはーいや!　せ!!　ん!!』とありえない合の手を撃ちながら盆踊りをエンジョイしている川内を筆頭に、まさか俺までこんなに盆踊りを楽しめるとは思ってもみなかった。

「盆踊ってるー?」

「おおー。北上かー?」

頭上から声が聞こえたので、両手をリズムに乗せてくねらせながら頭上を見上げた。そこにいたのは、いつもと同じくとぼた感じだけど、少し楽しそうに見える北上がいた。なるほど。俺のツツコミが聞こえてたのは、やぐらの上にいたからか。そして加古はやぐらの手すりにのしかかるように寝ていた。よくそんな器用な真似が出来るなと感心したが、そんなことはもはやどうでもいい。

「そうだよー。球磨姉と一緒に楽しそうじゃん」

「楽しいな!　まさかこの妖怪アホ毛女と盆踊る日が来るとは思わなかったけど楽しいな!!」

「球磨は妖怪じゃないクマツ!!」

「そらよかった。その調子で球磨姉のこともよろしく」

普段ならここは『たわけがツ!!』とキレるところだが……もうどうでもよくなってきた。だって今、楽しいから。盆踊りなんてやったことなかったけど、めっちゃくちゃ楽しいから。そして……

「クマクマ〜」

まあそれは今はいいや。気付かなかったことにしておこう。この

妖怪アホ毛女を調子づかせないためにも。

そうして曲が終わった。盆踊りを終えた俺達は自然と拍手し合い、互いの奇妙な踊りを讃え合った。……イヤ別にそんな大層なものじゃないけど、妙に盛り上がったあとって自然と拍手が出るよね。

「ああく楽しかったクマ!!」

意見が一致するのはシヤクだが、それには同意せざるをえん。

「だな。ありがとう。お前が強引にさそってくれたおかげだ」

「クマに感謝するクマ!!」

だな。今日ばかりはお前に感謝だ妖怪アホ毛女。

「みんなうまいじゃないか! 見てて楽しかったぞー!」

提督さんと隼鷹さんもやってきた。提督さんは暁ちゃんが持っていた大きなうちわをかついでおり、祭印のハッピーと相まって、日本の祭男の様相を呈していた。

「あ、司令官! 暁のうちわ持ってきてくれてありがとう!!」

「おう! 一人前のレディーから預かった大事なうちわだからな!!」

それに、今日はビス子に盆踊りを教えるという大役を自ら買って出て、見事それをやり通したもんね。暁ちゃんもはや、自他ともに認める一人前のれでいーと言っても過言ではないだろう。

提督さんは笑顔で暁ちゃんにうちわを返し、暁ちゃんもそれを10万ドルの笑顔で受け取っていた。球磨の笑顔には負けるが、それでも暁ちゃんの笑顔もまた、お日様のように暖かい笑顔だった。その笑顔のまま、暁ちゃんはこちらに来てく歩いてくると、笑顔で俺に話しかけてきた。

「ハル! 暁は一人前のれでいー?」

「だね。暁ちゃんがいなかったらビス子は今日、盆踊れなかったもんね」

チラツとビス子の方を見ると、エキサイティングなボン・フェスティバル・ダンスをエンジョイした後だからだろうか。肩で息をしながら、ほっぺたを赤くしてそれでも清々しい笑顔をしていた。

「でもハルは、そんな一人前のレディーでも膝枕してくれないのよね」
う……それは妖怪アホ毛女が悪いのです……と言いつい訳しようとし

たときだった。暁ちゃんの身体がひよいと宙に浮いた。いつの間にか暁ちゃんの背後に来ていた提督さんが、暁ちゃんを抱え上げたからだった。

「きやッ?!」

「じゃあその一人前のれでいーの暁は、司令官であるこの俺が直々に肩車をしてやろう!」

「こ、こら司令官! 暁は一人前のれでいーなんだから、子供扱いしないでよ!!」

提督さんは暁ちゃんをそのまま肩車し、その暁ちゃんはぽかぽかと提督さんの頭を叩いていた。でもほっぺたが赤くてどこかニヤニヤしているから、きつと口では嫌がっていても、提督さんの肩車がうれしいのだろう。

「なッ?! は、ハル……私だって一人前のレディーよ?!」

「お前は俺に何をさせるつもりだビス子ッ!」

「わ、私だって肩車を……」

「まさかおれに肩車させるつもりじゃないだろうなッ?!」

「は、ハルがどうしてもしたいというのなら……させてあげてもいいわよ?」

いやビス子さん、あなたスカートですよん……それに、もし仮にこれが肩車したいと思っててもできませんぜ……なんせ……

「そんなに肩車したかったら球磨を肩車すればいいクマッ!!」

妖怪おぶさり女が俺ににらみを効かせてますから……っーかお前、

おんぶだけでは飽きたらず、俺に肩車までさせようってのか?!

「肝試しの時は球磨は索敵で忙しかったんだクマ!!」

「お前俺の背中で『楽ちんだクマー』て言ってたよな確か!!」

「知らないクマ」

「おーおー。もう夫婦ゲンカか?」

「提督さん、冗談は隼鷹の裂きイカだけにしてくださいよ」

「暁っ! このご夫婦を雷のうちわで仰いで差し上げろッ!」

「了解! 一人前のれでいーにまかせて!!」

唐突に、提督さんの方に担がれている暁ちゃんがその巨大うちわで

俺と球磨のことを仰ぎだした。巨大なうちわで生み出される風は意外に強く、気を抜くと吹き飛ばされそうさ。

「球磨ッ！ 助けるッ!! 俺の盾になれッ!!」

こんな時こそ俺を助けなくてどうするんだッ!! この前見せた頼もしさを今、もう一度見せてくれッ!!

「くまあ……夫婦だなんて球磨にはまだ……」

なに顔真つ赤にしてぐにんぐにんしてるんだよ……なんだかこっちまで無駄に恥ずかしくなってくるだろうが……。

そうだ。お嬢様にして提督さんの嫁である隼鷹なら、こいつらの暴走を止めてくれるかもしれん……!!

「隼鷹！ 提督さんとこいつらを止めてくれッ!!」

「ええ〜いいじゃん別に〜。そろそろあたしたち以外にからかわれてくれるヤツがいてもいいと思うんだよね〜ニヤニヤ」

「隼鷹なら止めてくれると思ったのにッ?!」

やぐらの上では北上がニヤニヤとほくそ笑みながら俺と球磨を見下ろし、加古が鼻提灯を膨らましながら熟睡している。そのいやらしい顔でこつちを見るのを止める北上ッ!

「ええ〜もういい加減観念して素直になりなよハル兄さん」

「俺を兄さんと呼ぶなッ!」

「だつてさハル、気付いてる?」

「何がだッ?!」

「確かにハル、さつきからみんなにからかわれて怒ってるけどさ。球磨姉とのことは全然嫌がってないよね? ニヤニヤ」

あ……確かに……。

「く……くまっ……」

おい。そこで顔真つ赤にするなよ妖怪アホ毛女。

「い、いや……だつてハル……」

「い、いつもみたいに『張り倒してやるクマ!!』とか言つて乱暴狼藉を働けよ……」

「は、ハルこそ『この妖怪アホ毛女!!』とか言つて嫌がればいいクマ……」

なんだこの空気……ええい！　こうなったら……!!

「川内!!　加古が夜戦してくれるってよ!!」

「なに夜戦?!　加古が夜戦してくれるの?!」

「?!　なんで私ツ?!」

俺が『夜戦』と口走るやいなや、やぐらの反対側から猛スピードで迫ってきた川内は、唐突に身に覚えのないとばっちりを受けて目を覚ました加古をギラギラして眼差しで見つめると……

「クツクツクツ……ついに夜戦が出来る……!!」

と言いながら、浴衣を着てるつてのにおみ足をおしみなく露出させ、ふとももに装備した探照灯をフラッシュユキさせて加古に浴びせていた。

「うわっ?!　まぶしっ?!」

「覚悟ー!!　やせーん!!!」

「だからなんで私ツ?!」

信じられない跳躍力によるきりもみジャンプでやぐらの上に到達した川内と、一瞬で飛び起き、やぐらの下に飛び降りた加古の、はげしくもしよぼい鬼ごっこがはじまった。みんなの注意が俺と球磨から、川内と加古の二人にそれた。よし今の内に……

「逃げるぞ球磨ー!」

「クマっ?!」

「今の内に逃げるんだよツ!!」

「りよ、了解だクマー!」

球磨の手を引き、その場から逃げようとする俺と、それに抵抗することなくついてこようとする球磨。……あれ?　これこそなんだか思春期って感じじゃない?

「あー!　球磨とハルが逃げようとしてるツ!」

「ヤバいッ 暁ちゃんに見つかつた!!」

「なんだとツ!　暁!　二人を逃がすな!!」

「了解したわ!　くらえ一人前のれでいーの風ツ!!」

不意に暁ちゃんが仰いだ強風をもらに浴びてしまい、俺は身体を持っていかれてしまった。勢いよく吹き飛ばされた俺は、そのままバ

ランスを崩し、やぐらに頭をぶつけて地面に倒れてモロに腰を打ち、痛みで呼吸がままならなくなった。

「かひゅー……かひゅー……」

「危ないクマツ?!」

そしてそんなおれの腹の上に、同じく不意の強風に吹き飛ばされた球磨が乗っかってきた。呼吸が出来ない俺の腹への一撃は、いつぞやのコークスクリューパンチよりも強烈に感じた。

「ぐふおっ?!」

「ぐ、ごめんクマツ?!」

「か、かまわん……大切な浴衣……だからな……」

「結局最後まで嫌がらなかったねえ二人とも。ニヤリ」

やぐらの上から俺と球磨を見下ろした北上が、そう言いながらニヤリと笑ったのが見えた。助ける。俺のことを義理の兄とのたまうのなら、今まさにピンチな姉夫婦の旦那のほうを助ける。

「やーだね。まだ兄さんじゃないんだし。ニヤニヤ」

「だな。そういうことはゴールインしてから言つてやれ。おれとマイスイートハニー隼鷹のようにな」

隼鷹の『ものどもかかれえく!』という声と、提督の苦悶とも歓喜ともいえる叫び声が聞こえた。提督さん、あなたまだ懲りないんですか……

「なぜだ隼鷹ツ?! 俺は……ゲフツ……お前の……グハツ?!」

「きゃー! 司令官がああああ」

同時に、提督さんに肩車されていたはずの暁ちゃんの声も聞こえた……なにやっってるんだ……隼鷹に何をされてるんだ提督さんは……

「ハル? 楽しかったクマ?」

「ああ……かひゅー……ラストはひどかったけど……今日は楽しかったな……かひゅー……」

「よかったクマ!」

こういうこと言うのもシヤクだしめちやくちや悔しいが……いつかの核ミサイル級のはにかんだ笑顔以上の破壊力を誇る満面の笑顔を俺に見せてくれた球磨は、今まで見てきたどの球磨よりも、輝いて

見えた。

「球磨も楽しかったクマ！ クマクマっ!!」

そしてそんな球磨の声は、今まで聞いたどの声よりもよろしくない、本当に楽しそうな声だった。声を聞いただけで、顔がほころんで聞いているこっちまでうれしくなるような、そんな声だった。

まあ、こんな日があってもいいか。今日だけは素直に認める。今日の妖怪アホ毛女はカワイイ。

その日の最後、俺達はやぐらの前で集合写真を撮った。隼鷹に爆撃されていたらしい提督さんは、ズタボロの状態でドリフのコントのよな髪型になっていたが、満面の笑みで隼鷹と共に写っていた。暁ちゃんとビス子は最前線で手をつなぎ、くったくのない笑顔を見せていた。加古と川内は未だ夜戦が続いていたみたいで、写真の隅っこのほうにいた。川内が加古の肩にまたがって、彼女の髪の毛をくしゃくしゃにしていた。

北上と球磨は俺の両隣にいた。俺の顔に球磨のアホ毛が刺さり、それはそれはうっとおしかった。

12. 忘れていたこと

俺は、大切なことを忘れていた。

ここにいる面子は、素晴らしい人たちだ。提督さんは部下思いの優しい人だ。時々調子に乗って余計なことを口走っては、自身の相方に折檻されるのが玉に瑕だが、それもまた提督さんの魅力と言える。

艦娘たちもいい子だ。隼鷹は飲んだくれだが愛する提督さんのことを本当に大切に思っているのが見て取れるし、ビス子は子供っぽいけど、よく言えば純真。加古は度し難いねぼすけさんだが、みんなの中では割と常識人だ。川内も、夜戦夜戦とにぎやかなところを除けば、優しくて明るい魅力的な女の子だし、北上は自身の姉を大切に思っているのがこちらにも伝わってくる。やたらと俺と球磨をくっつけたがるのはどうかとは思うが。

球磨に関しては色々と思うところもあるけれど……あの肝試しの時、ただ一人真剣に戦闘の準備を行っていたのが印象的だった。他の奴らが怖がったり夜戦でハッスルしてた中、球磨はたった一人、俺を守るために戦闘に備えていた。あの、背中から聞こえた球磨が単装砲を構える音が……背中から伝わる球磨の体温が、俺にとってどれだけ心強かったことか、あいつは知らないだろう。

この鎮守府での生活は、本当に楽しくて充実していた。店を開けば、面白いやつらが客としてやってくる。閉店後はそいつらと飯を食い、風呂から上がれば酒を飲み、笑顔で一日が終わる……充実していた。笑顔に溢れた、素晴らしい日々だった。

だから俺は、今が戦時中だということを忘れていた。この鎮守府が激戦区で、度重なる戦闘に疲弊した、ボロボロの軍事施設であることを忘れていた。

片鱗は見えていた。時々大怪我をして任務から帰還する艦娘のみんな……昔話としてみんなの口から語られる、戦死したかつての仲間たち……そして稀に遭遇する、かつてこの鎮守府に所属していた艦娘たちの幻……笑顔に溢れ充実した楽しい毎日の端々に、かすかにだが確実に、ありえないほどに身近に存在している『死』の現実が、チラ

チラと見え隠れしていた。

初めて球磨が哨戒任務に出たと聞かされた時は、今までとは比べ物にならないほど近くに存在していた『死』という言葉を意識せざるを得なかった。だが、ここにいるみんなとの楽しくて充実した生活が、いつの間にか俺の意識からその現実を遠ざけていた。怪我をして帰ってきた球磨が、『入渠』と称して風呂に入り、全快している光景を何度も何度も見て、いつの間にか俺の意識の中から『死』が消えていた。

俺は、『死』を今日まで忘れていた。意識的に目を逸らしていたのではない。本当に忘れていた。普通に……今日寝て明日起きれば、またみんなの笑顔に囲まれた新しい一日が始まるものだと思っていた。

あの秋祭からしばらく経った今日、遠征任務に出ていた暁ちゃんが轟沈した。暁ちゃんは死んだ。

前編終わり。

後編

1. ひとそれぞれ

暁ちゃんが轟沈してから1週間ほど経過した。轟沈した直後はそれこそ鎮守府の雰囲気は最悪だったが、今では皆、気持ちがいぶ落ち着いたみたいだ。

ただ、ビス子は少し変わった。

「ハル！ 今日もしャンプーしてもらいに来たわよ！」

「おう。んじゃシャンプー台に行ってくれー」

今日もビス子は、バーバーちよもらんまに来店した。その笑顔は以前と同じく明るいものではあったが、少し陰がさすようになった。そして頭には、以前からかぶっていた黒の帽子ではなく、暁ちゃんの白い帽子がかぶられていた。

ビス子は暁ちゃんが沈む様を間近で見たと聞いた。帰還したときのビス子の様子は悲惨だった。

『アカツキ……あなた半人前よ……だから……だから帰ってきてアカツキ……!!』

彼女は、暁ちゃん本人から受け継いだ帽子を大事そうに抱え、怪我をした幼女のように泣き喚いていた。何度も何度も暁ちゃんの名を呼びながら泣き続け、その日は誰も彼女に声をかけることが出来なかった。

その後立ち直った彼女は、暁ちゃんの形見の帽子をかぶるようになった。

『アカツキは半人前のレディーだったけど、私がアカツキと共にいてあげれば、合わせて一人前のレディーになれるでしょ?』

ビス子は、俺達に笑顔でそう言った。暁ちゃんを助けられなかった自分は、半人前のレディーだと彼女は考えたらしい。でもそれを、今は亡き暁ちゃんに補おう、そうして、暁ちゃんのみまで一人前のレディーとして生きよう……そう決意したそうだ。

シャンプーとトリートメントを済ませたビス子の髪をドライヤー

で乾かしてあげる。俺の気のせいなのかも知れないが、あの日以来、ビス子の髪質が少し変わった。元々サラサラでしなやかだった彼女の髪が、少し柔らかくなったというか……女性の髪というよりは……「なービス子」

「ん？ どうかした？」

「お前さ。自分でも髪をトリートメントしたりしてる？」

「特にしてないわよ？ どうして？」

「いや、こうして乾かしていると少し髪質が変わったというか……柔らかくなった？」

「へえ。特に自分ではそう思ったことはないわよ？」

そう。女性の髪というよりは、子供の髪質に近い感じになった気がする。誤解を恐れずに言えば、暁ちゃんの髪質に近いというか……

「そうなの？」

「うん。辛いことを思い出させてしまって申し訳ないけど……」

「いいえ。アカツキの髪質に近くなったのならうれしいことよ。D a n k e」

髪を乾かす俺を鏡越しに見つめるビス子の顔は嬉しそうに微笑んでいたが、変わらず陰が差していた。悲しみを含んだ笑顔ではない。提督さんのような泣きだしてしまうような笑顔でもない。心からの笑顔であることに変わりはない。ただ、陰が差していた。

「はい終わり！ ビス子、おつかれ！」

「ほっ！」

ビス子の髪を乾かし終わり、両肩をポンと叩いてやる。今までと同じく、ビス子の身体に終了を告げる俺なりの優しいインパクト。

「ふう気持ちよかった！ ハル、D a n k e！ 今日はいからどうするの？」

「一旦執務室に行った後、球磨が店に来る予定だ。久しぶりに耳掃除したいんだと」

「相変わらず仲がいいのね。今日も膝枕かしら？」

「勘弁してくれ……」

「仕方ないわね。一人前のレディーの私はこれ以上はからかわないわ

よ」

そして……ビス子は、以前よりも大人になった。本人が気付いてるかどうかは分からないが、以前に比べてほんの少しだけ、周囲の人間との距離を測るようになった。

ビス子が店を後にした後、俺は提督さんが待つ執務室に向かう。今日は売上の請求というか……基本的にバーバーちよもらんまは鎮守府の面子から代金をもらってない。その代わり売上は一週間に一度、鎮守府に一定額を一括で請求する形を取っている。そうすることで、俺は安定した売上を上げ、鎮守府側は店を好きにだけ利用出来る仕組みだ。

「……てなわけで、今週の請求書です」

「確かに受け取った。支払いは雑費を差し引いた額を来週ということだ」

「ういっす」

売上といっても丸々もらうわけではない。俺は俺で、鎮守府での入浴施設の利用や食費、光熱費などを支払っている。最初はその都度金のやりとりをしていたのだが、お互い『金のやりとりがめんどくさい』という理由で、今では、毎週の売上請求額から雑費と称してそれらの生活費を差し引いた額を請求する形を取らせてもらっている。

「ふーっ……」

「おつかれですね提督さん」

「暁が轟沈したからな……事後処理やらなんやらで、ここしばらくは眠れなかったよ」

眠れない理由はそれじゃないだろう。暁ちゃんが轟沈してから今日まで、努めて冷静に振舞っている提督さんだが……俺は知っている。提督さんは、誰も見てないところで一人で声を上げて泣いていたと隼鷹が教えてくれた。最近夜中によくうなされて睡眠が取れてないようだとも教えてくれた。隼鷹は隼鷹なりに、愛する提督さんのことが心配なようだ。

「あー……おれの心配してくれるのはいいんだけどなハル。お前にはもつと心配する相手がいるだろう」

「……ひよつとして、あの妖怪アホ毛女のこと言ってます?」

「ああ」

最初は、自身のメンタルヘルスの不調をはぐらかすためのからかいだと思っただのだが、提督さんはそんな風に話をはぐらかしたり、遠回しに物事を伝えるということが苦手だ。彼の言葉には裏はない。提督さんが『球磨が心配だ』といった時は、彼は本当に球磨を心配している時だ。

そして、実はあの妖怪アホ毛女に関しては、俺も少々気がかりな点がある。

「……暁の件の知らせを受けた時の球磨、覚えてるか?」

「はい。妙に達観した感じでしたよね?」

「ああ」

忘れたくとも忘れられない。あの時のことは今でもよく覚えていてる。ビス子たちからの報告を受けた川内は絶句し、提督さんは努めて冷静に振舞っていた。北上は『そっか……暁……』とぼそつと寂しそうに呟いていた。

「戦争なんだから仕方ないクマ。轟沈くらい出るクマ」

球磨のその発言を聞いて、俺は自分の耳を疑った。

暁ちゃんはお前の仲間じゃなかったのか? 今まで楽しい日や苦しい日と一緒にくぐり抜けてきた仲間じゃなかったのか? そんな仲間の死をそこまでドライに受け止めることが出来るこの球磨という女に対し、俺は瞬間的に不快な衝動を抱えた。

「お前なあ……!!」

頭に血が上った状態の俺は、この妖怪冷血女の襟を掴み、思い切りねじり上げた。仲間の死にそんな感想しか持てないこの女と、一時でも仲良くなってしまう自分を恥だと思ったし、瞬間、こいつのことを心底軽蔑した。

「……なにをするクマ?」

球磨は酷く冷静な表情のまま、怒り心頭で襟をねじり上げる俺を見つめ返した。この女……ふざけきってやがる……仲間が死んだっつーのに……!!

——すまない　でも球磨姉も悲しんでることだけは分かってやってくれ

そんなやけに凜々しい女性の声が、俺の耳元で聞こえた気がした。誰の声かは分からない。でも、その声は、俺の頭から怒気を抜くには充分だった。

「……いや」

「……」

「悪かった。すまん」

「……別にいいクマ」

冷静に考えみれば、そろそくだよな。この妖怪アホ毛女は、俺以上に長い時間を、暁ちゃんと一緒に過ごしてきたんだ。たくさんの思い出を共有して、楽しい時だけじゃなくて、悲しい時や辛い時も、ずっと一緒にいた仲間だもんな。そんなお前が悲しくないはずだよな。

北上に目をやる。さっきまでそっけない素振りを見せていた北上は今、わなわなと震え始めた。

「……そんなこと言わないでよ……我慢してたのに……仕方ないことだから、我慢しようとしたのに……」

その様子を見ていた球磨は、すぐに北上のそばに向かい、彼女の肩を後ろから支えてあげていた。

「北上。大丈夫クマ？」

「球磨姉……私、もう泣かないって決めてたのに……大井つちが……大井つちが……!!」

「大井が北上を支えてくれたクマ？」

「大井つちが……我慢しないでいいって……泣いていいなんて言うから……!!」

ついに心が決壊したかのようにわんわんと泣きはじめた北上を後ろから抱き支え、球磨が妹を案ずる姉の表情で俺を見た。俺は黙って領き、球磨が北上のそばについていてやることを肯定した。

「姉ちゃんがついていてやるクマ。今日は帰るクマ」

北上は返事をすることなく、球磨に連れられてその場を離れていった。

あの日の球磨を思い出す度に不思議に思う。あの時の球磨は冷静に振舞っていた。仲間を失った悲しみを抱えていただろうとは思いますが、暁が轟沈したことを悲しむよりも、生きているみんなのことを心配していた。

あの空間にいたら、誰もが暁の死を悲しむだろう。でも球磨はそうしなかった。もう帰ってこない仲間のことを悼む気持ちよりも、自身の妹をはじめ、残った仲間のことを優先していた。理屈で考えれば非常に理にかなった行動ではあるのだが……

事実、あの日以降哨戒任務が手につかないビス子や川内たちに比べて、球磨は1回たりとも哨戒任務を休むことはなかった。気持ちも沈んで哨戒任務に出られない子がいれば、自らすすんで代わりに哨戒任務に従事した。場合によっては24時間哨戒任務に出ることもあった。遭遇戦で、今一精彩を欠く加古を庇って大怪我をして帰ってきたこともあった。

みんなが暁ちゃんとの別れに打ちひしがれている中、球磨だけはただ一人、気丈に振舞っていた。みんなが苦しんでいる分その穴を埋めるように、球磨はみんなを支えてがんばっていた。

普通出来るだろうか。あの悲しみを味わわされたその直後、生きている仲間のことを優先して動くことが……悲しみに吞まれることなく、その悲しみに押し潰されそうな他の仲間のことを心配し、支えることが……

「あいつは今、気が張ってるんだと思う」

「でしょうね。あの時は俺も頭に血が上りましたが、今なら、あいつが必死に皆の支えになれるよう冷静でいたことが理解出来ます」

「ああ。いつか限界が来て、糸が切れたように悲しみに襲われるかもしれない」

俺もそれを一番心配している。一番悲しい時に無理をしていたんだ。その分、あとで糸が切れた時の反動に襲われた時の悲しみは、その比ではないだろう。

「ハル。もし球磨が折れそうになった時は、支えになってやって欲しい。あいつはきつと、北上には弱い自分を見せられないはずだ。もし

あいつが寄り添える相手がいるとすれば、それはきつとハルだ」

「……」

「あいつが助けを求めてきた時は、頼む」

もちろんだ。自惚れるつもりはないし、あいつが妖怪アホ毛女であることに変わりはないが、あいつはおれの大切な仲間だ。もし泣いて助けを求めてくるようなことがあれば、俺は喜んで力を貸す。俺でなければダメだというのなら、俺は球磨を受け止める。

今日はあいつが店に来る。様子を見る意味でも、球磨の予約は外せなかった。

執務室での話も終わり、自分の店に戻る道すがら、加古お気に入り
の昼寝ポイントに足を運んでみた。今日は天気も良くて日差しが気
持ちはいい。こんな日なら、今日は休みの加古がいるかもしれない。球
磨の予約まではまだ時間がある。少し足を伸ばしてみることにした。

昼寝ポイントの木の下までたどり着く。加古は……いた。今日も
今日とて、温かい日差しに包まれて気持ちよさそうに寝ており、加古
の鼻の頭には一匹の黄色いちょうちよがとまっていて、羽を休めてい
た。加古の傍らには日本酒の一升瓶が置いてあり、それが違和感を
放っていた。

「加古」

「んああ……ああ、ハルか。おはよー」

俺の言葉で目を覚ました加古はむくりと立ち上がり、鼻にとまって
いたちょうちよがヒラヒラと飛び、加古の頭に移動していた。

「今日も昼寝か？」

「うん。寝たら暁にも会えるかなーなんて思ってた」

「そっか」

「ビス子と違って、私は最期には間に合わなかったからさ……でも
まあさううまくは行かなかったよ」

眠そうに加古はそういい、恥ずかしそうに苦笑いを浮かべていた。
そんな加古と話をしつつ、おれは加古の隣りに座る。この場所は今日
も風が心地よく、お日様の光が温かい。気を抜くと、俺も寝転んで草
の香りに包まれたくなってしまう。

加古はあの日、隼鷹、ビス子と一緒に暁ちゃんの救援に向かったメンバーの一人だった。ビス子と違って暁ちゃんが沈む場には居合わせなかったらしく、そのことをずっと悔やんでいたと聞いている。

「その一升瓶は？」

「隼鷹が。私が暁と会うんなら、これ置いてくつて。二人で飲めつて」
……暁ちゃんて、子どもだったよな……子どもに酒飲ますつてどんな神経しとるんだあいつは……。

「知らない。でも隼鷹が言うには、『旨い酒を吞まらずに轟沈させるのは忍びない』つてさ」

「なんだその男前なセリフ」

「ハルもそう思う？」

「加古もか？」

「うん」

加古と二人で、隼鷹の差し入れの一升瓶に目をやった。……少し減ってるよなこれ？

『あたしも暁と吞みたかったから』つて言つて、私にくれる時にその場で開けて、一杯だけ呑んでた」

「妖怪飲兵衛女だなあ。セリフがいちいち酒臭い」

「そうだね。でもさ。隼鷹らしいよね」

「だな」

真っ赤な顔をして日本酒をカップパカップと飲み干していく隼鷹と、その傍らでコップにちよびつとだけ入った日本酒を前に、期待と緊張と恐怖が入り混じった冷や汗混じりの表情を浮かべる暁ちゃんを想像し、俺と加古は互いに目を合わせた。目があつた途端にお互いプツと吹き出したあたり、おそらく加古も俺と同じ想像をしたはずだ。

「ハルも二人が飲んでるとこ想像したでしょ」

「お前も想像したろ」

「……とりあえず隼鷹には内緒にしとこう」

「そうしよう。バレたら大変そうだ」

その後、『もう一回チャレンジしてみる』と再び寝転んだ加古をその場に残し、俺は昼寝ポイントを後にした。立ち去る時、加古によく似

た女の子……古鷹だったかな？ その子が俺に向かって、笑顔で頭を下げている姿が見えた気がした。姉ちゃんがついてるなら、加古は大丈夫だろう。今話した限りだと、比較的落ち着いてるみたいだしな。俺は反射的に、その古鷹の幻に右手を揚げて挨拶をしていた。

店に戻って一時間ほど経過した夕方頃……

「ハル〜。来たクマ〜」

予定の時間をだいぶオーバーして球磨が来店した。提督さんからの電話で球磨が無事なのは知っていたが……やはり予定時間を過ぎると少々心配にはなる。まあ怪我もしてないようでは何よりだ。

「閉店寸前だぞー」

「仕方ないクマ。哨戒任務がちよっと伸びたんだクマっ」

あら珍し。いつもは哨戒任務は時間きっかりに済ませてるから、今日は余計心配だったのに。そんなことを考えながら、球磨の来店に合わせて表のポールサインを止めた。今日はもう客も来ないだろう。後は妖怪アホ毛女の貸し切りだ。

「川内と一緒に暁が轟沈した海域に寄ってたんだクマ」

「あーなるほど。近くを通ったのか」

「クマっ」

哨戒任務の最中に、川内が暁ちゃんの轟沈地点に寄り道することを提案したらしい。川内はポイントに到着した後、自身の太ももに装備してあった探照灯を外し、それを海に沈めたそうさ。

『暁も夜戦が得意でしょ？ これ持って行って使って』

なんとも夜戦が好きなの川内らしい甲い方だと思った。普段は夜になると眠くなってしまう暁ちゃんだが、本来駆逐艦の子たちは夜の戦いが得意なんだそうさ。暁ちゃんも任務で夜戦に出た時などは、川内に負けじと探照灯を照らし、戦場を駆け巡っていたらしい。

暁ちゃんは、探照灯を装備する必要のない昼の戦場で轟沈した。夜戦が得意なはずの暁ちゃんが探照灯を持たずに轟沈してしまったことが、川内は気がかりだったんだそうさ。

「でも自分の探照灯を暁ちゃんに渡しちゃったら、自分の分はどうするんだらうなあ？」

「神通や那珂ちゃんが残した探照灯があるらしいクマ」

「そっか」

「クマっ」

球磨の頭をシャンプーし、髪を乾かしてやる。ビス子の髪はなんとなく暁ちやんの髪質に近づいていたが、逆に球磨の髪は、以前に比べて少し痛みが激しくなっていた。といっても毛先だけだし、相変わらずもふもふしているのは変わらないが……。これが本人が無理しているのが原因でなければいいんだけど……。

「耳掃除もー」

「……今日も膝枕か？」

「うん」

もう毎度のこととはいえ、日中にビス子にからかわれたせいか、少し意識してしまう自分が少々情けない……。だが、こいつが一度言い出したことを撤回するとも思えないし、何より……

「ハル、さっさと準備してこっち来るクマ」

「はいはい」

おれが葛藤を抱えている間にすでにソファに座って膝枕を待ち構えていた。こうなってしまうとは球磨を止めることなど誰にもできない。少々呆れながらも、耳掃除の道具一式を準備することにした。

久しぶりの球磨の耳は、意外と綺麗なもんだった。ところどころ汚れてはいたが、耳掃除をしなかった期間が長い割には、汚れはそんなにひどくない。

「自分で耳掃除したのか？」

「ちよつとやってみただけど、ハルみたいにくまく出来ないクマ」

「そらそうだろう。人にやってもらったほうが汚れも綺麗に取れるしな」

会話もそこそこに、球磨の耳を綺麗にしてやる。綺麗にしたあとは、いつものようにローションを浸した綿棒で綺麗に汚れを拭き取れば終わりだ。

「耳かきは終わったぞ。次はローションいくからな」

「クマっ」

普段ならローションに浸した綿棒を耳に突っ込んだ途端『ひあああ』と悲鳴を上げる球磨だが、今日の球磨は無言のままだった。違和感を覚えながらもそのまま耳を綺麗に拭いてやり、久しぶりの耳掃除は無事終了。球磨、お疲れ様でした。

「クマ……」

「おい。終わったぞー」

「うん」

俺の方に後頭部を向けたまま、球磨は動かなかった。

「ハル」

「ん？」

「北上は元気になったクマ」

「そつか。よかったな」

「大井が北上を支えてくれたらしいクマ」

あの日泣き崩れていた北上は、意外と立ち直るのも早かった。あの時我慢せず、思いつきり泣いて感情を発散させたのが功を奏したのかもしれない。大井つて子に感謝だな。球磨と北上の妹だと聞いた。いい妹だ。

「川内ももう元気だクマ」

「だな。暁ちゃんの死を受け止めたからこそ、探照灯を沈めたんだろうな」

「他の子はどうかクマ？ ビス子は？」

「ビス子は今日店に来たけど、ちゃんと受け止めてたな。加古と隼鷹も多分大丈夫だ」

「よかったクマ」

球磨は変わらず、俺の膝を枕にしたまま、俺からそっぽを向いていた。そのため今、球磨がどんな表情をしているのかは俺には分からない。い。

でも俺は、今日この時ほど、この妖怪アホ毛女の後ろ姿を小さいと思っただけではない。

球磨は艦娘という名の軍人だ。歴戦の強者だし、いざというときには頼りになる存在だ。そして不自然なアホ毛をなびかせ、俺に暴力を

振るつては俺を振り回す、迷惑この上ない存在だ。

でも、球磨はこんなに小さい女の子だ。こんなに小さい女の子が、仲間の死に直面した他の子たちを支えるため、自分は気持ちを押し殺して気丈に振舞っていたんだ。逆に言えば、どれだけ気丈に振舞っていても、球磨はこんなに小さな女の子だ。このアホ毛女が暁ちゃんのを死を悼む気持ちは、他の艦娘の子たちとなんら代わりはない。

「球磨」

「クマ?」

「みんな立ち直った。元気になった。だからもういいぞ」

「……いいクマ?」

未だにそっぽを向いている球磨の頭をなでてやる。球磨の身体が少し縮こまり、球磨の声が涙目になったのが分かった。俺の太ももに涙がポロポロ落ちたのが、じんわりと伝わってきた。

「みんなを支える役目は終わった。だからそろそろ、お前も肩の力抜いていいぞ」

「今……ハル以外は誰もいないクマ?」

「誰もいない。店ももう閉めた。誰も来ないから安心しろ」

「ひぐつ……いいクマ? もう……いいクマ?」

「いいよ。もう泣いていい」

「ひぐつ……」

球磨は俺に顔を見せないように、俺の太ももに自身の顔を押し付けるように一度うつぶせになって、そのままこっちを向いた。その後俺の腰にしがみつくように手を回して、顔を俺の身体に押し付けた。球磨が顔を押し付けた部分の服の生地がじんわりと暖かく濡れ、涙がとどまることなく流れていることを感じた。

「暁……いつもみたい……ひぐつ……帰って来ると思ってたクマ……」

「だな」

「みんなが落ち込んだから……ここで球磨も落ち込んだらいけないと思つて……ひぐつ……ずっと我慢してたクマ」

「分かつてたよ。お前が無理してたのは」

「多摩にも言われたクマ…… 球磨姉は無理しすぎてて心配」って言われたクマ。ひぐつ……」

多摩って確か、昔に沈んだ球磨の妹だったな。こいつは昔っから、こんなことがある度に妹に心配かけるほどがんばってたのか……それとも古鷹みたいに、球磨のことが心配で姿を見せたのだろうか。どちらにせよ、姉思いの妹であることに変わりはない。

「いい妹じゃんか」

「でも沈んだクマ……みんな沈んでいくクマ……ひぐつ……」

「でもお前が守ってくれてたおかげで、ここんとこずつとみんな無事だろ？」

「もうヤダクマ……ひぐつ……沈むのはヤダクマ……」

「だな。ヤだな」

「暁に帰ってきて欲しいクマ……ひぐつ……みんなに帰ってきて欲しい……クマ……ひぐつ」

「そうだな……帰ってきてほしいな」

俺にしがみつく球磨の手に、さらに力がこもった。俺は球磨に抵抗することなく、その頭を少しだけ乱暴に撫でてやった。いつもは天高くそびえるアホ毛も、今日ばかりは俺の手の動きに逆らうことなくびいていた。

「……なでなでするなクマ……ひぐつ」

「こういう時は素直に撫でられとけ妖怪ぬいぐるみ女」

「ひぐつ……球磨はぬいぐるみじゃないクマっ」

球磨はこの日、今まで我慢していた反動もあって一晩中俺にしがみついて泣き続け、俺はそんな球磨の頭を一晩中撫で続けていた。こいつはずっと一人で懸命に強がっていたんだ。みんなが悲しみに打ちひしがれている間、たった一人で自分に鞭打ってがんばっていたんだ。少しぐらいはいいだろう。これぐらいのわがままなら聞いてやる。

「ハル……ごめん」

「？」

「迷惑かけてるクマ……」

「お前が俺に迷惑かけない時なんてあったか？ 今更だ今更」

「黙れクマあ……ひぐっ」

「ホント……今更だ」

次の日も、球磨は哨戒任務を休んで一日中うちにいた。俺はバーバーちよもらんまを休みにして球磨についてやることにし、提督さんもそれを了承した。その日は、ずっと球磨といっしょにいた。

「ハル」

「ん？」

「ありがとクマ」

2. 合同作戦

『当鎮守府が疲弊しきっているのはご存知でしょう?! 物資の補給も満足に受けられず戦力の補充もない……運営に必要な不可欠な妖精たちすらいない……当方をこのような苛烈な状況に追い込んだのはあなたがたなのですよ?!』

朝っぱらから提督さんに呼ばれ執務室の前まで来た時、室内からこんな怒号ともいえる提督さんの叫び声が聞こえてきた。これからノックしようとしていた矢先のこの怒号に、なんだか俺はノックする気が失せたが……そうも言ってもらえん……

「とんとん。提督さーん。ハルです」

『あ、いいよー入ってー』

提督さんの代わりに隼鷹の返事が聞こえた。あんな怒号の後に入るのも気が引けるが、仕方あるまい。意を決してドアを開いた途端、また提督さんの怒号が俺に襲いかかった。

「だから先ほどから何度も申し上げております! 資源と戦力の補充が無理なら、せめて今回の作戦から当鎮守府は外していただきたい! 近海の哨戒すらやっとの状況で、そのような作戦への参加なぞ不能です!!」

電話の受話器を持った提督さんは、受話器に対してものすごい剣幕でそう怒鳴っていた。隼鷹の方を見ると、彼女も心配そうに提督さんを見守っていたが、俺の視線に気がつくのと、苦笑いを浮かべながら俺の方を向いた。

「どうした?」

「上とケンカしてる。どうも上から無理な注文されてるみたいだね……タハハ……」

「それは当方の艦娘に沈めという命令ですかッ?!」

さつきから提督さんが言っているセリフがいちいち物騒だ。それに、ここまで怒りを顕にした提督さんも初めて見る。軍人は上の命令には絶対服従とは聞くけど、その軍人の提督さんがここまで抵抗するほどの無茶な注文をされてるのだろうか……

「俺、なんなら改めようか？」

「あー大丈夫大丈夫。電話もうすぐ終わるから多分」

と隼鷹は苦笑するが、彼女も提督さんの様子が気になって仕方がないようで、提督さんの様子をチラチラと伺っている。

「ですから！ ……中将?! 中将!! ……クソツ!!」

提督さんと受話器の向こう側との熱いバトルは終了したようだ。提督さんは受話器を乱暴に電話に戻し、イライラを周囲に振りまきつつ、頭をボリボリとかいて自身の席に座った。

「ああ、すまん。見苦しいところを見せた」

「いやあ。べつにそんなことないでしょう」

「いや、呼んだのは俺なのにな。 ……隼鷹」

「ほい？」

「すまんがコーヒーを淹れてくれ」

「はいよー」

隼鷹は立ち上がり、執務室備え付けのコーヒーサイホンで器用にコーヒーを淹れ始めた。執務室内に心地良いコーヒーの香りがたちこめ、提督さんも次第に落ち着きを取り戻してきたようだ。

3人分のコーヒーを淹れ終わり、隼鷹は俺達のもとにコーヒーカップを置いてくれた。香りだけで、これが絶品のコーヒーだということが分かる。口に含んでみると、その素晴らしい香りが鼻から抜けていき、やはり想像どおりの ……いや想像以上に素晴らしいコーヒーだ。

「うまいなー隼鷹」

「だろー？ コーヒーなら提督にも負ける気がしないよ」

「だな。料理全般なら俺も自信があるが、コーヒーに関しては隼鷹の方が旨い」

提督さんは実にうまそうに隼鷹のコーヒーを楽しんでいた。その後、すっかり冷静になった提督さんはコーヒーカップを起き、至極真剣な表情で俺を見つめた。

「ハル。今日来てもらったのは他でもない。今後のことで話がある」

「今後？」

「ああ。今後のことだ」

提督さんの話というのは、バーバーちよらんまの今後についてだった。提督さん曰く、バーバーちよらんまはもはやこの鎮守府にとってはなくてはならない存在といってもよいらしく、同様におれもまた、この鎮守府のメンバーとして、必要不可欠な存在だとみんなには認識されているらしい。

「そんなわけで、ハルには感謝してる。来てくれたのがハルで本当によかった」

「はあ。ありがとうございます」

「んで、重要なのはここからだ」

次の言葉は、俺にとっては予想外だった。口に出す前の提督さんが少々まごついていたあたり、恐らく提督さん自身も、最後まで言うか言うまいか迷ったに違いない。

「ハル。正直に答えてほしい。この鎮守府に来て、後悔はしてないか？」

「? どういうことですか?」

「この前暁が轟沈したろ?」

「はい」

「あれでハルは少なからずショックを受けたはずだ。今までとは比べ物にならないほど、死というものを身近に感じたはずだ」

確かに提督さんの言う通りだ。暁ちゃんが轟沈したあの日、おれは改めて、この鎮守府という場所か、いかに『理不尽な死』に近い場所であるかを実感した。病院のような納得のいく死ではない。ある日突然、理不尽に命をもぎ取られる死だ。

「また誰かが轟沈するかもしれない。あるいはこのオンボロ鎮守府のことだ。ひよっとすると敵に攻めこまれるかもしれない。そうなる」と、次に暁と同じ目に遭うのは、ハルかもしれない。ハルではなくとも、大切な誰かかもしれない」

「……」

「奇しくも今日、この鎮守府に新たな作戦命令が下った。今のこの鎮守府からすれば、過酷すぎる任務だ。誰かが轟沈するかもしれない。もしかすると、作戦参加者は全滅するかもしれない。それほどまでに

過酷な任務だ」

「……何が言いたいんですか？」

珍しく、提督さんが本題に入らない。よほど次の言葉が言い辛いに違いないようで、提督さんはテーブルの下に手をやり、握り拳を作っていた。その手に力が籠っているのが、俺が見てもよく分かった。

……ほーん。なんとなく提督さんが言いたいことが読めてきた。もしその通りなら、俺は即答して提督さんをびっくりさせよう。

「……もし、辛くなったら……」

「却下です」

提督さんの隣で、隼鷹がコーヒーを吹いていた。心持ち、提督さんの鼻の下が伸び、鼻水が垂れているように見えた。

「む……最後まで言わせるよーこっちは覚悟して言ってるんだから」

「どうせあれでしょ。『辛くなったら出て行ってくれていいんだぞ』とか言うんでしょ。優しい提督さんのことだ。気を使ったつもりになってるんでしょ。違いますか？」

「む……言い方は気に入らんけど、その通りだ」

「だったら却下です。こんな面白い奴らが揃うところ、出て行く理由がありません」

「……そうか」

そうとも。暁ちゃんが轟沈してからも、店じまいして鎮守府を出て行くななんて考えたことすらない。もしそんなことを考えていたら、提督さんに言われなくても勝手に出て行く。どれだけ止められようとも問答無用で出て行くさ。

でも、不思議とそういう気にならない。ここにいるみんなは楽しい奴らだし、俺に床屋としての初心と床屋として働く喜びを思い出させてくれた、かけがえのない奴らだ。そんなやつらを置いて、俺だけ出て行くななんて出来るわけ無いだろう。

言い方を変えれば、こんな面白いやつらと別れる理由がない。そんなつもりはさらさらないんだ提督さん。

「しかしなハル……自分の命は一つだぞ」

「他にも理由はあります。俺はまだ球磨のアホ毛を切ってない。あいつのアホ毛を切るまでは出て行く気はありません」

これは本当。この鎮守府で、あの妖怪アホ毛女の異様な存在感で自己アピールしているアホ毛を切ってやると亡くなったじい様に誓ってからこつち……俺は今まで何度もチャレンジしては失敗している。そんなアホ毛は、俺の追いかけるべき目標だ。俺は真剣にそのことを話したのだが、提督さんは今一理解しきれなかったようだった。

「ま、まあ分かった……とりあえず今後もちよくちよくこういうことがあるとは思うが」

「全部却下です」

「ぶふっ……分かった。覚えておくよ」

俺が執務室に顔を出してから、今はじめて提督さんの顔に笑顔が戻った。……いや戻ったというよりは、俺が無理矢理笑わせたのかもしれないが……ともあれ、額にシワをずっと作っている提督さんよりは、今ぐらいゆるーく構えている提督さんの方が、俺は好きだ。

「ああ、それから」

「？ まだ何か？」

「提督としてハルに礼を言いたい。うちの艦娘、球磨を支えてくれてありがとう。おかげで球磨は、潰れずに済んだ」

「俺は大したことは何も。多分、沈んだあいつの姉妹たちのおかげです」

「……また誰か見たのか？」

「見てはいませんが、多摩と大井つち……それとあと一人、えらく男前なヤツがあいつら姉妹を支えてたんですよ。声が聞こえました」

「そうか。そいつは多分キソーだな」

「キソー？」

——キソーじゃない 木曾だ

「キソーじゃなくて？」

「ああ。木曾だ。でもみんなキソーって呼んでてな。球磨か北上にでも聞いてみるといい」

「了解です」

執務室を後にし、俺は自分の店に向かう。午前中はもう潰れたから、今日は午後からの開店になる。

……キソーか。本人も嫌がってるあたり、苦勞人っぽい感じだなあ……

——うるせえ

そう言うなよ。あの日俺を静かに諫めてくれたお前には感謝してるんだ。キソーって呼ぶのは信頼の証だと思ってくれ。

——チツ

……だけど、なんで俺だけ声が聞こえて見えるんだろうなあ……そんな疑問を抱えたまま、店へと急いだ。

そしてそのまま店を開き、何事も無く一日が終了。いつもなら球磨と北上が晩飯に迎えに来るわけだが、今日はいつもに比べてやや遅い。鎮守府にいることは分かりきってたから、別段心配はしなかったけど。

「ハル〜。晩ごはん食べに行くクマ〜」

「ハル兄さ〜ん。行くよ〜」

「兄さんはやめるクマ」

店の入り口が開いてカランカランと音が鳴り、いつものごとく球磨と北上の声が聞こえてきた。北上の聞き捨てならないボケには球磨が突っ込んでいたので、おれは余計な波風を立てないことにしておく。

「おつかれ。今日はまた遅かったなあ」

「今度行われる合同作戦のブリーフィングがあつたクマ」

なるほどね。提督さんが午前中に上とバトツてたやつかな。その後3人で提督さんの料理に舌鼓を打ちながら、その合同作戦とやらの話を球磨と北上から聞いた。なんでも夜に敵の怪物どもに戦いを挑む、近隣の鎮守府総出撃の一大作戦らしい。

「なんか川内が大喜びしそうな作戦だな」

「そうだねー。川内すごく大はしやぎしてたよ」

『あそーれや！ せ！ ん!! あはーいや！ せ！ ん!!』

あの妖怪夜戦女が狂喜乱舞している様が目に浮かぶ……フと思っ

だが、こいつらは夜戦は得意なのだろうか。

「お前らはさ、夜戦はどうなの？」

「北上は夜戦は大得意だクマ」

「球磨姉だつて別に苦手つてわけじゃないじゃん」

「そうだけど北上には負けるクマ」

「夜戦演習で散々私を張り倒しといてよく言うよ……」

「こいつらも夜戦は得意なタイプか……なら心配はいらないのかな？」

「んじや特に心配することはなさそうだな」

「そうでもないクマよ？ 次の作戦は隼鷹以外の全員が出るクマ」

「ほう」

「ついでに言うと、気を抜いたら即アウトなのが夜戦だクマ」

『アウトつて何だよ』と聞こうとしたが、それが轟沈を差していることに気がついた。ほんの些細な判断ミスが死に繋がるデッド・オア・アライブつてわけか……。

「とはいえビス子や加古たちも一緒なんだろう？ なら大丈夫だ」

「もちろんだクマ。ちゃんと帰ってくるから安心するクマ！」

そう答える球磨の笑顔が心強い。あの肝試しの時のような心強さと安心が、俺の心に広がっていく。あの肝試し以来、この妖怪アホ毛女に妙な安心感というか頼りがいを感じつつある自分が少々恥ずかしかったが……それも仕方ない。頼りがいがあるこいつが悪い。

「ハル、とりあえず球磨におかわりをよこすクマ！」

「自分でよそつてこい。俺は自分の飯を食うのに忙しいんだ」

「床屋の風上にもおけないヤツだクマツ！」

「どこに晩飯の配膳が仕事の床屋がいるんだ?! ビス子を見てもろ！今まさに自分で飯をよそいに言ってるぞ!!」

そう言いながら、お茶碗を手に持つて立ち上がるビス子を指さした。油断していたためなのか、ビス子は俺に指さされた途端、必要以上でビクンとしていた。

「え?! わ、私はどうしたの?!」

「ハルがおかわりをよそつてくれないクマ!!」

「言つてやれビス子！ 艦娘なら自分の飯のおかわりぐらい自分でよそに行けと行ってやるんだツ!!」

ビス子はしばらく考える素振りを見せ、お茶碗をテーブルに置いた。その後、急にニヤーっとほくそ笑み、美人な顔をひどく歪ませて、こつちをニヤニヤと見つめた。やばい。これは反撃される。しかもメンタル的な意味で。

「相変わらず仲いいわねー。これが日本の夫婦げんかってやつかしら？」

「う……うるせー妖怪ゲルマン女！ だいたいなんでドイツ人のお前がそんなにうまそうに日本食食ってるんだよ!! お前がところてん食いながら『ノリの香りがたまらないわ』て口走った日にはカルチャーショックを感じたわ逆に!!」

「そ……そうだクマ!! だいたいドイツ人の分際でたまごかけごはんを平気な顔で食べるのは止めるクマ！ もうちよつと納豆に拒否反応を示せクマ!!」

「そうだ球磨！ 言つてやれ!! ドイツ人のくせに俺に『納豆の食べ方を知らないのねハル』とか言つて納豆を語るな!!」

「ステーキに迷わずわさび醤油つけて食べて『生醤油が五臓六腑に染みこんでいくわ……』ておっさん声で口走るドイツ人なんて聞いたことないクマツ!!」

俺達をからかってくるビス子に罵詈雑言を浴びせる俺と球磨だが、それらすべてを涼しい顔で受け流したビス子は……

「……ま、仲良きことは美しきかなつてやつね。どちらにしる痴話喧嘩に周囲を巻き込むのもほどほどにするのよ」

と言いつつ、再びお茶碗を手にとっておかわりに向かっていった。俺と球磨は、ビス子の余裕の前に一矢も報いることが出来ず、完全に敗北した。

「う……」

「ク、クマ……」

「……ずず……あーお味噌汁おいし……球磨姉、おかわりはいいの?」

「……あ、い、いくクマ」

「……お、俺が行こうか？」

「い、いや、自分で行くクマ」

理由はさっぱりわからんが、ビス子とやりあったあと妙に気恥ずかしい気分になった。それは妖怪アホ毛女も同じようで、なんだか妙にしおらしくなって自分でおかわりに向かっていった。

球磨がおかわりに向かっている最中、テーブルには俺と北上が残された。北上は実に美味しそうに、落ち着いて味噌汁を堪能している。今日の味噌汁は提督さん手作りの田舎味噌で作った素朴な味噌汁。提督さんの味噌汁レパートリーの中でも、赤だしの次ぐくらいに絶品なやつだ。

「ずず……ハル」

「ん？」

「もう素直に認めちゃったら？」

「何をだよ」

「球磨姉、ちよつと変だけどおすすめだよハル兄さん？」

「兄さんは止めろ」

「じゃあハルお兄ちゃん？ それとも『くまねえ』みたいな感じでハルにい？」

「全部却下だ」

自然と球磨に目が行く俺と北上。球磨はビス子とともにおひつにしゃもじを突っ込んでいたが、ビス子に何かを耳打ちされた後、『そつ……そんなんじゃないクマツ!!』とうろたえていた。

「平和だね……ずずつ」

「俺の心は地獄絵図だけどな」

「よく言うよ。まあお幸せに。義理の妹として応援してるからねー」

「アホ」

とはいえ、確かに平和だ。数日後は合同作戦が控えているというのに、皆落ち着き払い、日常を楽しんでいた。

あるいは、意識して楽しんでいるのかもしれない。こうやって晩飯時に馬鹿騒ぎをするのも、風呂上がりみんなでラムネを楽しむのも……夜になったらおれの居住スペースに集まって酒を飲みながら楽

しく過ごすのも、明日命をもぎ取られるかも知れないからこそ、意識して今日の生を満喫しているのかもしれない。

ビス子にからかわれて、顔を真つ赤にしながらぷんすか怒っている球磨を眺めながら、おれはそんなことを思っていた。暁ちゃんという身近な存在の理不尽な死を経験して、そんなことを考えるようになって俺だった。

合同作戦は、数日後だ。

3. 返事をしろ（前）

作戦開始を本日深夜に控えた今日、『夜戦に向けて髪を整えて!!』と鼻から水蒸気を吹き出していた川内の髪を整えていたら、川内がフとこんなことを言い出した。

「そーいやさ。夜戦に向けて昼寝ポイントで昼寝しようと思って行っただけど……」

「夜戦に向けてっつーか、お前いつも夜になると元気じゃんか……でどうした?」

「そしたらね。加古がいたんだけど、寝てなかったんだよ」

この真っ昼間に寝ないのが普通なはずなのだが、加古に限っては1日24時間常に眠りこける筋金入りの妖怪ねぼすけ女のため、そんな当たり前のことが大ニュースになる。

「ほー。あいつなら夜戦に備えるなんて大義名分なんかなくても普段から寝てるのにな」

「うん。寝転んではいたんだけど、目はパッチリ開いてたんだよね」

「話したのか?」

『『寝てないのー?』て聞いたら『うん』って』

そら寝てないんだから、そう聞かれたら『うん』としか言えんわなあ……と突っ込むのは野暮だろうか……。

とはいえ少し気になるな。あとで球磨と一緒にちよつと昼寝ポイントに行ってみようか。現在進行形で『夜までヒマダクマ』とか言いながら霧吹きで店に過剰に湿気を供給している妖怪霧吹き女のことだから、多分『来いよ』と言えば来るだろう。

「おい球磨」

「クマ?」

「ちよつと手伝え。霧吹きでここんとこ吹いてくれ」

俺は、今も無駄に店内に水分を撒き散らす妖怪霧吹き女に、川内の襟足を霧吹きで湿らせるよう命じた。

「イヤダクマツ。キリッ」

「キリッ。じゃなくてやれよ。霧吹きが手元にないから散髪出来んだ

ろうが」

「口でぷーって吹きかけてやればいいクマ」

「誰がんなことやるかアホ。お前になら喜んでやってやるわ」

「んなことやってきたらハルの頭を波平カットにしたあとで、残り一本の貴重なアホ毛を毛根からむしりちぎってやるクマ」

「ぷっ……仲いいねー二人とも」

「黙れ妖怪夜戦女!!」クマツ!!」

その後なんとか無事に霧吹きを奪い返して川内の散髪を終わらせた俺は、球磨を引き連れて加古の様子を見に行くことにした。

考えてみれば、今年は寒くなるのが早い気がする。まだそこまでではないとはいえ、こうやって外を出歩くと若干肌寒く感じるほどには、気温も下がってきている。

「クマー……」

こいつは裾の短いセーラー服を着ているためか、初めて出会ったその日から若干の妖怪へそ出し女だが……っーか寒くないの？ 腹冷えないの？

「特にそんなことはないクマね。風邪ひいたことはあるけど、腹を壊したことはないクマ」

「マジかい……」

見てるこつちが寒くなるんだよなあそういう格好は……

「それはそうと、なんで加古は寝てないんだろうな？」

「わかんないけど……古鷹は知ってるクマ？」

「話だけならな。加古の姉ちゃんなんだろう？」

「そうクマ。その古鷹は、夜戦で沈んでるクマ」

そっか。なら今回の作戦は、何か思い入れみたいなのが生まれてもおかしくはないかもな。

球磨とそんな話をしながら二人で昼寝ポイントに向かうと、加古はまだいた。川内の言う通り寝転んだ体勢で、目はパッチリと開いていた。頭には、黄色いちようちよが停まっていた。

「加古」

「ああ、ハルと球磨じゃん。二人で昼寝しに来たの？」

「昼寝しにきたっつーよりはお前の様子を見に来た。昼寝してないって聞いたから」

「私だつて寝ないで真面目に考え事してる時もあるっつーのに……」
ちようちよがヒラヒラと飛び立ち、加古は自身の頭をポリポリとかいた。よく見たら、そんな加古の傍らには今日は一升瓶ではなく、艦装の一つである連装砲が置いてあった。

「……随分ぶつそうなモンを傍らに置いてるなあ」
「何か心配事でもあるクマ？」

その連装砲を手に取りつつ、俺と球磨は、加古を挟むように彼女の隣りに座った。

「あー……いやその連装砲、古鷹の連装砲なんだよね。今晚の作戦で使おうと思つて」

「へー……」

「ハルは古鷹つて知つてたっけ？」

「話だけは聞いている」

「この昼寝ポイントで何回か幻を見たことはあるけどな……」。

「古鷹、夜戦が得意でさー」

「確かに夜戦が得意な子だったクマ」

「……だから私も、これ持つていって、古鷹の力を借りるんだー」

恥ずかしそうにはにかみながらそう語る加古の傍らには、困ったような笑顔を浮かべている古鷹がいた。大丈夫だ。それがこの連装砲のおかげなのかどうかは分からないが、加古は古鷹が守ってくれる。加古は大丈夫だ。

作戦開始直前まではこの場所に一人でいたいという加古の要望を受け入れ、おれたちは昼寝ポイントをあとにした。加古、お前気づいてないだろ。お前は一人だと思つているようだが、そばには古鷹がいるんだぜ。言つたらいけないような気がするから言わないけどな。

その後も作戦開始までは静かな時間が流れた。いつものように馬鹿話を繰り広げながら飯を食い、その後は一人で風呂に向かう。いつもは球磨と北上と三人で浴場まで行くのだが、今晚は出撃があるため、みんなは風呂には入らないそうだ。

「ハル。じゃあ行ってくるクマ」

「気をつけるよ」

「大丈夫クマ。ちゃんと帰ってくるクマ」

「北上、球磨を頼むぞ」

「ハル兄さんのお願いとあらば、この北上さん、聞いちゃいましょー」

「アホ。……みんな、無事で」

「ほいクマ」

「まかせてー」

そう言い残し、夕食後に球磨と北上は執務室に入っていた。……
ちゃんと帰ってこいよ……。

風呂から上がり、今日は球磨と北上がいないからラムネが飲めないことを思い出した。それを少し残念に思いつつ、自分の居住スペースに戻る。今日は新月。街灯と灯台がなければ、帰り道はとても暗い。

—— 気を抜いたら即アウトなのが夜戦だクマ

うるせえ。そんなセリフを今更思い出させるな。あいつらは全員ちゃんと帰ってくるんだ。怪我までは許す。大怪我もまあ仕方ない。でも轟沈したなんて言ったら許さんからなお前ら。仲間が死ぬのは、もう充分だ。

灯台のそばまで来た時、海を見た。フル装備の球磨たちが、真つ暗な大海原に向かって探照灯を灯し、出撃していくのが見えた。

「球磨!!」

聞こえるわけない。届くはずがないのは分かってるけど、なぜか叫ばずにはいられなかった。

「くまああああ!!」

もう一度、あらん限りの声を絞り出して球磨の名を呼んだ。何かを伝えたかったわけじゃない。何か言いたいことがあったわけでもない。ただ、名前を呼びたかった。そして、出来れば振り返って返事をして欲しかった。

「くまああああああ!!」

「クマ?」

こちらに背を向けたまま、球磨のアホ毛が反応したのが見えた。こ

んなに真つ暗闇だが探照灯の明るさのため、すでに遠くにいる球磨とそのアホ毛の姿がよく見えた。あいつは俺の声が聞こえたのか、それともアホ毛が反応したからなのか、海面の上を滑りながらこつちを振り返り、笑顔で右手をぶんぶんと振っていた。

「ハルうううううう!!!」

「くまあああああ!!!」

「行ってくるクマああああああ!!!」

「負けんなあああああ!!!」

「もちろんだクマああああああ!!!」

「早く帰ってこいよおおお!!! 朝飯食わずに待ってるからなあああああ!!!」

「了解だクマああああああ!!!」

4. 返事をしろ（後）

大規模合同作戦という事実や、以前の提督さんの怒気のこもった通話が俺の不安をかきたてたのか……いつもの哨戒任務とは異なり、今日の俺は自室に戻ってから大変だった。何をやっても気が散って集中出来ない。

—— 気を抜いたら即アウトなのが夜戦だクマ

球磨のこのセリフが頭から離れず、何度も何度も繰り返し返された。テレビを見ている最中、本を読んでいる最中、道具の手入れをしている最中……何度でも何度でも俺の耳元で聞こえ、やっと作業に集中出来るという頃、おれを現実に引き戻す。

忘れようとしても忘れられない、暁ちゃんが轟沈したあの日の衝撃を思い出し、おれの胸に不快な心拍が一拍だけ襲いかかる。心臓を鷲掴みにされたかのような不安感。もし明日、あいつらの誰かが轟沈したとしたら……

—— もうヤダクマ……ひぐつ……沈むのはヤダクマ……

あいつは……あの妖怪アホ毛女はこんなことを言いながら泣いていた。あいつはみんなが沈み込んでいた時、自身が傷つくことも恐れずみんなを庇っていた。

……もしそれが、今回もあったとしたら……仲間の誰かの油断や判断ミスに敵がつけこみ、絶妙のタイミングで攻撃してきたら……もし、それを球磨がかばって被弾したら……そしてもし、当たり前どころが悪くてそれが致命傷となったら……ネガティブ妄想の悪循環が止まらない。

不意に、店の入口が開くカランカランという音が鳴り響いた。慌てて店内の方を覗くと、そこにいたのは、一升瓶を抱えた隼鷹だった。

「よーハル。あたしやちよつとヒマなんだ。サシ飲みやろう」

「……作戦中にいいのか？ ダンナ抜きで男とサシ飲みってどういうこつちや？」

「いいんだよ。提督からも『ハルが不安になってたら、話相手になってやってくれ』って言われたんだから」

そうかい。んじやたまにはサシ飲みでもやるか。……提督さん、隼鷹、ありがとう。

一升瓶の蓋を開け、日本酒をグラスに注ぎ、二人で乾杯する。つまみは裂きイカだ。

「初めて一緒に飲んだ時、たしかお前に裂きイカを鼻に突っ込まれたな」

「懐かしいね〜……もう何年も前な気がするよ。それだけハルがここに馴染んでくれたってことだね」

二人で裂きイカをつまみながら、静かに酒を飲む。しばらく飲み進めていくと隼鷹のほっぺたに朱が差し、色つぼさに拍車がかかった。色つぼさ……なんか違うな。隼鷹の場合は艶って言えばいいのかな？

「……提督ね。喜んでたよ？」

「ん？　なんかやったっけ？」

「あの、『却下です』ってやつ。提督、ハルが執務室出て行ったあと『そっかー……残ってくれるか……却下してくれるか……』って、何度も何度も嬉しそうに呟いてたよ」

意外だ……そんなことでそんなに喜ぶものなのか提督さんは。

「ハルは知らないんだよ。この数年、提督がどれだけの相手と戦って、どれだけの仲間を失ってきたか……」

「……隼鷹は、誰か身内は轟沈したのか？」

「姉の飛鷹と、一番しんどい時を一緒にくぐり抜けた空母のみんな……ていえばいいかなあ」

隼鷹はそういい、幾分艶つぽい眼差しで、手に取ったグラスの中の透明な日本酒を見つめた。その目には懐かしさと、いくばくかの悲しみがこもっていた。

「なあ隼鷹、もう一つ聞きたい」

「なに？」

「加古は連装砲を古鷹から受け継いでた。川内は探照灯、ビス子は暁ちゃんの帽子……」

「だねえ」

「お前は何か形見を受け継いだのか？」

「持つてるよ。見る？」

「よかったら」

隼鷹はグラスを置き、自身の懐から大きな巻物のようなものを取り出してそれを広げた。開いた巻物には飛行甲板のような絵柄が描かれていて、それが艦娘独特の道具であることが分かった。

隼鷹がぼそぼそと何か呪文のようにも聞こえる言葉を唱えた。その巻物から人の形をした紙切れが4枚ほど浮かび上がり、それらが室内に飛び放たれる。放たれた紙は次第に飛行機へと姿を変え、やがて俺と隼鷹の目の前に着陸した。

「巻物は元々飛鷹のものさ。飛鷹はあたしと同じ陰陽術で艦載機を飛ばしてたから、そのままあたしが使わせてもらってる」

「こ、これが空母の飛行機つてやつか……びっくりした……」

「艦載機。んでこの艦載機もね。沈んだみんなが愛用してた艦載機なんだ。瑞鳳の天山、千歳と千代田の零式艦戦たち、瑞鶴の彗星……みんなから一機ずつ。空母のみんなは他にもいたけど、艦載機を受け継いだのは、そんなところかな」

「そっか……」

「別にね。みんなのことを忘れたくないとか、みんなとずっと一緒にいたいとかじゃないんだ」

「……」

「ただ、みんなのことを背負って、みんなと戦いたい……そしてみんなが成し得なかったことを、みんなの艦載機を使って、あたしが代わりに成し遂げたい。他のみんなはどういうつもりなのかは知らないけど、あたしはそう思って、みんなの艦載機を使わせてもらってる」

普段こそ『ヒヤッハアアアア!!』とにぎやかでうるさい隼鷹だが、こういった側面もあったのかと驚かざるを得ない。でも、隼鷹がみんなと成し遂げたいことってなんだろう……

「隼鷹が成し遂げたいことって何だよ？」

「んー……そんな大げさなことじゃないよ。ただ、生き残りたいのさ。生きて平和な世界で人生を楽しんでみたいんだよ」

「……」

「幸いあたしは、惚れた男と結ばれる事が出来た。……なら、戦いのその先の人生を惚れた男と歩きたいじゃん。亡くなったみんなの分まで……戦いだけのまま逝ったみんなの分まで、普通の人生を堪能したいじゃん。だからさ……」

酔いが回って、さつきよりさらに赤くなった顔で隼鷹がそう言った。夢や希望……隼鷹はそういったものを今語っていたはずだが、その表情は、そんなポジティブなことを語っている顔ではなかった。

グラスに入った日本酒に口をつけた隼鷹は、遙か遠くにいる誰かの背中を眺めながら、軽いため息をついた。その仕草は艶っぽく、そして見ているこっちの目に涙が溜まるほど、憂いを帯びていた。

「今度はあたしが聞いていい？」

幾分明るくなった声と少しだけ輝きが戻った眼差しで、隼鷹が俺を見つめた。今の彼女の目に宿っているのは好奇心。

「なんだよ？」

「球磨とはどうなのさ？」

いつもならここで『うるせえこの妖怪飲兵衛女!!』て言うところだが、さっきの話を聞いてからだと、さすがにそうも言えない。

「……どう、とは？」

「あんたたち、仲いいだろ？」

「まあ……なあ」

「ハッキリしないねえ……」

俺のハッキリしない返答にがっかりしたのか何なのか……釈然としていないような表情を隼鷹は見せた。

でもさ。正直よくわかんないんだよ。確かにあいつといると面白いし、退屈しなくて楽しい。あいつとどうでもいいことで言い合えるのも楽しいし、あいつを見てドキツとしたこともある。

「でもあいつと俺の関係ってさ。やっぱ仲間なんだろうなーと思うよ」

「あたしらと同じってこと？」

「同じじゃないだろうな……」一番仲いいし。でも、多分今はそれが一

「番しつくりくる」

「かあ〜……ッ」

さつきまで艶っぽい顔を見せていたとは思えないようなおっさん吐息を吐き出す隼鷹。おいどうした妖怪飲兵衛女。さつきまでの艶っぽい隼鷹はどこ行つたんだよ。

「いやあ、素直じゃないねえと思つてさ」

「そうかねえ……?」

「うん。北上の言つてた通りだね」

「あのアホ……なんて言つてたんだよ」

『早く素直になればいいのに』って。『そしたらくつつくの』って」

あのバカヤロウ……なんつーことをいちいちみんなに話してるんだ……。

「北上は北上で心配なんだよ」

「心配?」

「うん」

面白がつてるだけだと思つてたら……心配つてどういうことだ?

俺と球磨の関係性が心配?

「うん。北上としては早くくつついてほしいんだろうね」

「なんで?」

「んー……まあ単純に姉に幸せになつてほしいっつーのもあるんだろ
うけど……」

「けど?」

「ハルの周りは女の子がいっぱいってことだよ。これ以上は言わな
い」

「? ??」

「見てる子は見てるっつーか……ねえ」

意味がさっぱり分からん……

「そーいや北上が『球磨姉はおすすめ』って言つてたな」

「だろー? 第一あんたら二人、傍から見たらもう恋人同士みたいな
もんでしょ」

ヤバいまったく自覚がない……そんなにいちやいちやしてるよう

に見えるのか俺と球磨は……。

「ま、マジで……？俺達そんなに仲良さそうに見える？」

「仲良さそうっつーか、心が繋がってる感じって言えばいいかなあ……分かり合ってるって言うか……」

「マジかよ……」

空になった俺のグラスに、隼鷹が日本酒を注いでくれた。グラス半分ほどまで注がれたところで、俺は手のひらで隼鷹を静止し、隼鷹もそれで注ぐのをやめる。

「だつてさ。暁が沈んでしばらくした時のこと、覚えてる？」

「ああ。球磨がココに一晩中いた時のことだろ？」

「球磨はあんたを頼ったし、あんたもそれに応えたんだよねえ？」

「まあなあ……」

隼鷹が注いでくれた日本酒を一気に飲み干したあと、グラス越しに隼鷹を見た。グラスを通してだからなのかは分からないが、隼鷹の頭の上には、落書きのようなもじや線が見える。いまいちハツキりしない俺の態度に釈然としないらしい。

「でもさハル。いつかは決断を迫られるかもしれないよ？」

「……」

「素直にならざるを得ない瞬間があるかもしれない」

「……どんな時だよ」

「自分で考えるんだね」

少しイライラしながら、隼鷹は自分の頭をボリボリと搔いたあと、自分のグラスに残った酒を飲み干し、次を注いだ。お前、飲むなあ……

「まあねー。今日はサシ飲みって言ったじゃん。とことん付き合ってもらうよー」

「決断を迫られる時ってどんな時だよ……」

「さあねえ……でも案外、つい素直になっちゃう瞬間が来るのかもね。意識して素直になったり、決断が迫られるんじやなくてさ」

おかわりを注ぎ終わり、裂きイカを口に啜えて上下にピラピラ動かす隼鷹。ちつくししよう。こいつを艶っぽいか思ってた数分前の自

分を張り倒したい。ただのイヂワル女だこいつは……。

「ハルはもういいの？ もっと飲もうぜー」

「……酒臭い息でアイツを抱きしめたくないっ」

「言うねえ」

「うるせー……ちよつと酔ったかな……」

「それぐらい素直になりやいいのに」

「黙れ妖怪艶女」

ちくしょう……どいつもこいつも俺と球磨をくつつけようとしてやがる……。

「ハル。これだけ言っとく」

「んあ？」

「あたしたちみんな、あんたと球磨のこと、応援してるから」
「……」

「あんたと球磨がくつついたら、こんなにうれしいことはないよ。提督も喜ぶ。みんなも祝福してくれるさ」

「そっか……」

その後、隼鷹は色々な話を聞かせてくれた。俺の前にこの鎮守府に来た美容師のアキツグさんと川内の妹、神通との悲恋……かつて北上と無敵のコンビ『ハイパーズ』として活躍していた大井つち……隼鷹の姉、飛鷹の最期……隼鷹と提督さんの馴れ初め……

「マジかく……まさか提督さんからだとは思わなかった」

「ひどっ。でもまあうれしかったよ。あたしを選んでくれてさ」

「提督さんもうれしかっただろうな。黙っててもにじみ出てるもん。隼鷹大好きオーラみたいなの」

「ほんつと勘弁してほしい。恥ずかしい」

「その割には顔にやけてるぜ？」

「ハルこそさつさと球磨とくつつきなよ」

「冗談は裂きイカだけにしとけよ隼鷹」

「ヒヤッヒヤッヒヤッ」

深夜4時を過ぎた頃、隼鷹は眠った。今日は作戦への出撃が控えているみんなの代わりに、一日中索敵に出ていたという話だ。その上こ

んな時間まで俺に付き合ってくれてたんだ。そら疲れただろう……。眠りこける隼鷹に毛布をかけてやり、書き置きをして店を出る。向かう先は執務室だ。

執務室の前に到着する。室内は静かだが、部屋に明かりが付いているのは外から見て確認済みだ。俺は少しだけ勇気を振り絞り、ドアをノックした。

「とんとん。提督さん、ハルです」

『おう。こんな夜中にどうした？』

「酔い覚ましに。隼鷹は疲れて寝ちやつたんで」

『そうか。……ちようど作戦も終わったし、入るか？』

「いいですか？」

『ああ』

提督さんの許しを得て、執務室のドアを開いて中に入った。中の様子は普段とは少しだけ違い、提督さんの席の前に大きなホワイトボードが立てられ、その前で提督さんはホワイトボードを見つめていた。

「提督さん、お疲れさまです」

「ああおつかれ。……気は紛れたか？」

「おかげさまで」

「ならよかった。……隼鷹は？」

「俺の部屋で寝てます。書き置きを置いといたんで、起きたら来ると思っています」

「そうか。気を使ってくれてありがとう」

「いえ、提督さんこそ」

俺とこんな会話をした後、再び提督さんの視線はホワイトボードに移った。提督さんのクセの強い文字と、近海の地図のような図が描かれている。何に関する記述なのかはよく読み取れないが、何度も描いては消し描いては消しを繰り返した痕跡が残っていた。

「これ、俺が見てもいいんですか？」

「ああ。いいよ」

「作戦、しんどかったですか？」

「……相当にしんどかったな」

「マジですか……」

「とはいえ、なんとか成功はした」

「ならよかったです……」

不意に、提督さんの机の上に置いてある無線機がピーピーと鳴り出した。提督さんはその音を聞くとすみやかに自分の席に戻り、無線機のマイクを取った。

……気のせいだろうか。提督さんの顔が険しい。

『提督……今帰投した……』

「おつかれさん川内」

『うん……』

「そのまま入渠してくれ。みんなにもそう伝えるんだ」

『わかった……』

なんだこの川内の沈んだ空気は……不快な胸騒ぎが止まらない。足が震える。手から力が抜ける。心臓が痛い。鼓動するだけで痛い。

「球磨のことは残念だった」

『うん……』

この会話を聞いた直後、俺は震える手で提督さんからマイクを奪い取っていた。

「川内ツ!!」

『え……?! ハル?!』

「球磨のことが残念ってどういうことだ川内!!」

『え……ちよつと待って……なんで執務室にハルがいるの?』

「いいから答える夜戦女!! 球磨がどうした?! 何があった?!」

『落ち着いてハル? ね?』

「落ち着けるか!! 今どこにいるんだ!!」

『ドックだけど……』

「ドックだな?!」

マイクを投げ捨てた俺は、そのまま川内からの無線の続きを聞かず、執務室を飛び出した。提督さんが『落ち着けハル!!』と俺の背後で言っていたが、どう落ち着けというのか。球磨の身に何があった? あの妖怪夜戦女が夜戦から帰ってくるなり元気がなくなるような

ことって何だ？

—— 気を抜いたら即アウトなのが夜戦だクマ

うるせえ今はそんなこと思い出させるな。イヤな予感しかしない。ふざけるな妖怪アホ毛女。俺はお前が沈むなんて聞いてないぞ。もし俺の許しなしで沈んだのなら絶対許さん。

俺は全速力でドックまで走った。足に力が入らず、何度も何度も足がもつれてこけそうになった。力が入らない手はバランスが取れず、何度も何度も身体が手の反動でフラフラした。心臓は変わらず痛いほどの鼓動を繰り返していて、胸はおろか全身の血管が鼓動の度に痛い。

それでも俺はドックまで走った。あの妖怪アホ毛女に何があった?! なにがあつたんだ?!

—— もうヤダクマ……ひぐつ……沈むのはヤダクマ……

お前そう言ったよな?! 沈みたくないって言ってたよな?! なら沈んでないだろうな?!

なんとかドックの前に到着した俺は、意を決してドックに続く扉を勢い良く開いた。初めてドックに入ったが、ドックは意外と広く、老朽化が進んではいるが、設備の整った施設だというのが見て取れた。そのドックの中央……海へと続く出入口のところに、あいつらがいるみんなの姿がよく見えない。

「ゼハー……ゼハー……ハー……球磨あああ! ……くまあああああ!!!」

たまらず、息が乱れたまま球磨の名を叫んだ。返事しろ妖怪アホ毛女!! 出撃したときみたいに、俺の声にちゃんと返事しろ!!

「ハル? ドックまで来たの?」

ビス子が俺に気付いた。すまんが俺が聞きたいのはお前の返事じゃない。

「ビス子!! 球磨はどうした?!! 無事なんだろうな?!! 答えろ!!!」

「え……あの……」

「まごつくな!! 球磨は無事だと言え!! 生きてると言え!! 返事し

ろ球磨!!」

聞かせるな……球磨が沈んだなんて聞きたくない……無事だと答えろビス子……早く返事をしろ!! 球磨!!

「……ただいまだクマ」

その声は、ビス子の背後から唐突に聞こえた。緊張感のかけらもない、いつものあの、俺を振り回すときの妖怪アホ毛女の声だった。

「……球磨か?」

「……思ったより、早く帰ってこれたクマ」

「無事……か……?」

「無事ではないクマ。怪我してるクマ」

球磨に言われて気付いた。球磨の艦装が煙を噴いていて、服が少し破けていた。顔も少し汚れていて、なるほど言われてみれば怪我といえなくもない。

「どういうことだよ……川内言ってたぞ? お前のことが残念だったって……」

「ああ、それクマ?」

「ああ……」

「言うのも屈辱だクマ。アホ毛が……」

「アホ毛?」

「クマ」

球磨が口惜しそうに、自身の頭の上を指さした。球磨の頭を見ると、アホ毛がなくなっていた。

「まさかお前……」

「戦闘中にアホ毛が敵の砲弾でふっとんだクマ」

「残念なことって……それか?」

「そうクマ」

「だから落ち着いてって言ったのに」

川内はそういうと、少しバツが悪そうにほっぺたをぽりぽりと掻いた。球磨は球磨で、残念そうにアホ毛の痕を撫でていた。

俺はというと、今までの張り詰めた精神テンションが一気に緩んで全身から力が抜けた。俺は、球磨が轟沈したと早とちりしてここまで

走ってきた。不安で不安で仕方なかった。だから纏れそうな足を必死に動かし、痛いほどの鼓動を繰り返す胸の不快感を我慢してここまで走ってきた。

だから球磨が無事だとわかった今、俺の全身から力がすべて抜けた。体中の緊張が一気に緩み、両足に力が入らない。膝から崩れ落ちた俺は、そのままその場にへたりこんだ。

「はは……そっか……よかった」

「よくないクマっ。アホ毛が戦闘中に吹っ飛んだのは初めてだクマっ！」

「よかった……よかったよお……」

「……っ？」

ホツとしたら涙すら出てきた。さっきまでとは違う原因で手の震えが止まらない。涙を袖で拭きたいのだが、それがままならないほどに身体に力が入らない。喉が震える。うまく声が出せない。

「俺……お前が……沈んだと思って……」

「ハル？」

「よかった……ひぐっ……本当に……」

やっと手が動くようになってきた。袖口で涙を吹く。情けない。こんなところアホ毛女に見せたらなんて言われるか……

球磨が臙装を外し、主機を脱いで俺のそばまで歩いてきた。そのまましゃがんで俺の両肩を掴み、俺の顔をまっすぐに見据えて、今まで見せたことが無いほどの優しい笑顔になった。右手で俺のほっぺたに優しく触れ、目から流れた涙を親指で拭ってくれた。

「……ハル」

「お？ ああ……すまん。なんか安心したら涙出てきちゃって……」

そしてそのまま俺の首に手を回し、球磨は俺をしつかりと抱きしめてくれた。一瞬だけ戸惑ったが、球磨の身体のぬくもりと感触は、俺にそれ以上の安心と落ち着きをくれた。

「ただいまだクマ」

この数時間の間、一番聞きたかった声で、一番聞きたかったセリフだった。俺は球磨の感触とぬくもりをもっと感じたくて、まだうまく

力が入らない両手で、球磨の身体を抱き寄せた。

「……おかえり、妖怪アホ毛女」

「うん。ただいまだクマ」

「アホ毛、残念だったな」

「大丈夫クマ。しばらくすればまた元に戻るクマ」

「そっか……ならよかったな」

「うん」

球磨を抱きしめながら球磨に抱きしめられ、俺は隼鷹のセリフを思い出していた。

——案外、つい素直になっちゃう瞬間が来るのかもね。

意識して素直になったり、決断が迫られるんじゃないやなくてさ。

これか？　これが隼鷹が言ってた、『つい素直になっちゃう瞬間』なのか？

そんなことを考えていたら、北上の呆れたようなセリフが耳に入ってきた。

「なにこれ？　私たちそっちのけ？」

本当はツツコミを入れたいが……今はいい。この妖怪アホ毛女を抱きしめることのほうが大切だから。

俺達がそうして安心しあっている最中、アホ毛がビヨンと再生していた。

5. ハッピーハロウィン!!

あの夜間の作戦は、後に提督さんに話を聞いた所、なんとか無事成功したとのことだった。

この鎮守府に与えられた任務は、陽動とおびき出しだったそう。他の鎮守府と比べて人数が少なく、しかしながら練度が高くてチームワークも良いこの子たちは、その任務にぴったりだったということだ。少人数での陽動とおびき出し……提督さんが電話で『沈めということですか?!』とキレていたのは、それが理由だったそう。

あの日、抱き合って喜ぶという今思い出すだけで恥ずかしいことをしでかしてしまった俺と球磨だが、その後はいつもと変わることのない日々を過ごしている。

「もう球磨姉たち、意思表示したようなもんじゃん……それなのにさー……」

と最近をよく北上が口を尖らせて言っているが、俺と球磨がそうなつてるところって、実は俺でも想像出来なかつたりする。どうも、あの妖怪アホ毛女と、そういう雰囲気になつてるところが想像できんというか……

そういえばあの作戦の後、提督さんは隼鷹にこつてりと絞られたそう。うだ。なんでも、隼鷹は目を覚ました後に執務室に直行し、提督さんとともにドックに向かった所、俺と球磨が抱きあつて喜んでる場面にいくわしたそう……。

最初は『やつと素直になつたか』と喜んでいたのだが、その原因が提督さんと川内の紛らわしい事この上ない通信内容にあったということ聞きつけ……

『通信は誰が何をどうしたのか明瞭に伝えなきゃダメでしょ!』

『だって! 球磨に何があつたかおれはすでに聞いているし……!!』

『同じ部屋にハルがいるんだから! それ聞いてハルが動揺しないはずないでしょ!!』

『いやでもだって終わりよければ全てよしでいいじゃない!!』

『それとこれとは話が別! ものどもかかれえええ!!』

『さて隼鷹……ガフツ……俺は……グホツ……?!』

と執務室で阿鼻叫喚の地獄絵図が展開されていたそうだ。

話は変わるが、明日はハロウィンらしい。球磨曰く……

『仮装はしないけど、お菓子をせびりに行くから覚悟しとくクマツ!!』
と物騒この上ないことを言われた俺は今、『床屋での必要備品の買出し』と称して市街地まで足を伸ばしている。他のみんなには内緒だから、自分でモーターボートを運転しながらやってきた。いくら提督さんのレクチャーを受けたとはいえ、運転したことのないモーターボートの一人での運転は恐ろしかったぜ……

秋祭りの時に世話になった乾物屋に足を運んでみる。乾物屋には色々な駄菓子も取り揃えてあり、小分けにされたハロウィンパックなるものも売られていた。ハロウィンパックと言われると聞こえはいのだが、中を確認すると、なぜかおまんじゅうや金つば、大福といった和風なものばかりだ。

「いらっしえ〜」

店の奥から頭がキレイに禿げ上がった店主のおっさんが出てきた。

「どうも。今日はお菓子を買いに来ました〜」

「ああ鎮守府の。その節はどうも」

「はいこちらこそ」

お互いに軽く会釈する俺達。サービス業を営む物同士の、礼節の取れた客と店員の関係は気持ち良い。

「ところで今日は何の入用で？」

「ハロウィンなんで、お菓子を買いにきたんですよ」

「ほう」

「とはいえ、このハロウィンパックは……」

「和菓子だけだからね……我ながら申し訳ない……」

店主も頭を抱えるようなラインナップのものを、なぜ店頭に並べるのかが理解に苦しいが……何か理由があるのだろうかとう無理やり自分を納得させる俺だった。

……よし。普通のお菓子は諦めた。

「大将。ここって他の店とも顔なじみ？」

「顔なじみだよー。どこに何が売ってるかはだいたい把握してるさ」
「んじやさ……」

その後は大将に導かれ、酒屋、洋菓子屋、寝具店、電気屋、本屋、ドラッグストア、そして魚屋に向かって買い物を済ませた。最後に乾物屋の大将が……

「うちでも何か買ってよ……」

と恨めしい表情で見てきたので、裂きイカーキ口をその場で購入。店主は涙を流して喜んでいたが……食いきれるかなあ……

鎮守府に戻ったら、その日は何事もなく終了。球磨と北上と俺の三人で晩飯を食ってた時、

「すんすん……なんかハルから妙な匂いがするクマ……」

と言われて体の匂いを嗅がれた時は時はちよつとキモを冷やした。買ったものがバレませんように……。

「……まあいいクマ」

ほっ……

「でもやっぱ気になるクマっ」

ぎくっ?!

「でもまあいいクマ」

ふう……

「でもやっぱり気になるクマっ!」

「俺で遊ぶのはやめろ妖怪アホ毛女!!」

「ブアブアブアブア!!! 今日ハルの反応がいちいち面白いクマ!!」

「いちやいちやしないで早くご飯食べたらく?」

「黙れ妖怪おさげ女!!」クマツ!!」

その後は風呂に入り、自分の居住スペースに戻る。今日買った品物がバレるわけにもいかなないので、今日は隼鷹たちが酒盛りに来ないように、入り口に鍵をかけた。

「……ふう。よし……これで明日のトリック・オア・トリートの準備は……」

「やせー」

唐突に川内が窓を開けて侵入しようとしてきたので、すぐさま窓を

閉めて鍵をかけた。あぶねーあぶねー……バレるところだったぜ……。
『ハルウウウウウ!!! やせーんー!!!』

外で窓をガンガンと叩く川内。ヤバいこの光景だけ切り取ったら夜中にゾンビに襲われてるようにしか見えん。

『ハアアアアアルウウウウウ!!! やーせーんー!!!』

「うるせえ妖怪ゾンビ女!! 今晚はバーバーちよもらんまは休みだツ!!」

『なんでー?!!! いいじゃん夜戦しようよおおおおお!!』

「加古に夜戦演習してもらえよ!」

『ハルがいいのおおおお!!! ハルとやせんー!!!』

しつこく窓をガンガンと叩く川内の姿に恐怖を感じながら、『そういや昔、こんな感じで怖くて放送禁止になったテレビCMがあったなあ……』とぼんやり思った。

そして翌日。何事もなくお店も営業し、晩飯を食い終わって風呂から上がった後、風呂上がりで頭とアホ毛から湯気をもくもく出している球磨が言った。

「あとでハルのところにみんなでトリック・オア・トリートしていくクマツ!」

「……なんだよいつもの酒盛りと変わんないじゃんか……提督さんは? 来るのか?」

「提督は忙しくて来られないらしいクマ。でもパンプキンパイを焼いてくれたらしいから、行く時に持っていくクマ」

提督さんのパンプキンパイ……じゅるり。

「あの人、何でも作るんだなあ……」

「割と失敗せずに何でも見様見真似で作るクマね」

「じゃあ今日はいたずらする側もお菓子を持ってきてくれるってわけか」

「ふっふっふ。球磨たちに感謝するクマ!!」

「……いや作ったのは提督さんで、お前じゃないだろう……?」

「まあいいか」

「?」

俺はそのまま居住スペースに戻った。そしてその数十分後……、入り口が開く『カランカラン』という音とともに、子悪魔どもが俺から菓子を強奪するべく来店してきた。

「ヒヤツハアアアアアアアアアア!!!」

「クマアアアアアアアアアア!!!」

「トリツク・オア・トリートだヒヤツハアアアアアア!!!」

「この一人前のレディーにお菓子をよこすのよおおお!!!」

「お菓子をくれなきや張り倒すクマアアアアアア!!!」

「それともやせえええええん!!! 今晚こそやせええええん!!!」

「うあああ……イタズラ……されなくなかったら……寝かせ……クカー」

「それがいやならお菓子出しちゃってー」

なんとという物騒この上ない奴らだ……まさか艦娘みんなで押し寄せてくるとは思ってなかった……特に隼鷹、お前提督さんをほっぽっぽといていいのかよ?

「今日は提督の代理でもあるんだぜひやつはああああ!!!」

「?」

「提督から伝言だよ! 『日頃の感謝も込めてかぼちやのパイ焼いたから食べて♪』」

やだ……どきつてしちゃう……そんなことされたら俺……好きになっっちゃうよお……

「いい加減キモい茶番はやめるクマ」

「茶番もクソも遊んでただけだろうが……とりあえず隼鷹、提督さんにはお礼を言っといってくれ。俺からも言うけど」

「はいよー。でもそんなことよりハル! 早くお菓子をよこすんだよおおお!!!」

作戦の日にサシ飲みした妖怪艶女と同一人物とは思えん……

「お菓子じゃなきやダメか?」

「? どういうこと?」

「まあ待ってろよ……」

「? 球磨姉なんか聞いてる?」

「聞いてないクマ……」

「ぐう……」

「ひよっとして……夜戦……?!」

約二名を除いて、みなが俺の唐突の発言にあっけにとられているようだ。……クツクツクツ。昨日買い出しした甲斐があるってものだ。

俺は店の奥に隠してあった、『Danger!!』と描かれた1メートル四方の大きな木箱を持ってきた。この中には、昨日おれが乾物屋の店主と共に市街地で集めたこいつらへのプレゼントが入っている。

「クツクツクツ……約一名を除き、お菓子ではない。お菓子ではないんだがなお前ら……」

「い、一体何を準備したんだクマ……?!」

「クツクツクツ……慌てるな妖怪ハロウィン女。……まずはお前からだ隼鷹!!」

「?! あたし?!」

「妖怪飲んだくれ女にはこいつだツ!!」

俺はもつたいぶつて、木箱の中から隼鷹のプレゼントをおずおずと取り出した。

「こっ……これは……?!」

「むはははは!! 喜びでむせび泣け隼鷹!!」

俺が隼鷹のために準備しておいたプレゼント……それは、酒屋で『おすすめ下さい』と言っておすすめされた珠玉の銘柄……

「磯○慢だツ!!」

「酒?! マジでツ?! しかも磯○慢ツ?!」

俺が木箱から取り出した一升瓶を見て、隼鷹が口を大きく開けてマジで驚いている。クツクツクツ……驚け隼鷹!! これ高かったんだぞ?!

「当たり前だよ磯○慢って言えばけっこう値の張るヤツじゃん!! マジでいいの?!」

「構わん! そのために買ってきたんだからなツ!! 提督さんと楽しめ!!」

「うわああああんマジでありがとうハル!!」

恋する乙女みたいな顔で、俺が手渡した一升瓶の磯○慢に頼ずりしている隼鷹を見て、どう鼻肩目に見ても飲んだくれのおっさんにしか見えんと思っただのは、永久に秘密にしておこう……提督さんと楽しんでくれ。

「そして続いてはお前だ加古ッ!!」

「え……何……?　ぐう……」

「いつもいつも眠りこげやがってこの妖怪ねぼすけ女ッ!!」

そして俺は次に、加古へのプレゼントを木箱から出してやった。加古へのプレゼント……それは、ふかふかの低反発素材で作られた、珠玉の枕。

「テ○○ユールの枕だっ!!」

「え……てん……なに?　くかー……」

「驚けよもつと……いいからちよつとこの枕使ってみろ」

そう言っただけ俺は、木箱から取り出した四角い枕を、うとうとしている加古に渡した。加古はふらふらしながら俺から枕を受け取った途端、急に目をカッと見開き、俺をその驚愕の眼差しで見つめた。

「ちよつとハルなにこれ!　ふかふかだ!!」

「だろ?　おれが寝具店のお姉さんに頼み込んで色々試してみた結果、これが一番ふかふかで使い心地がよかったからな!」

「ちよつと……ちよつと使わせて!!」

「構わん!　順番待ち用の長ソファァで思う様眠りこけろ!!」

「ありがとうハル!!」

隼鷹と同じく、恋する乙女の眼差しで枕を抱きしめる加古は、そのまま順番待ち用ソファァまで行き、寝転んで枕を使い始めた。そしてその途端、

「おおおおお!!　この枕すげーイイ!　頭を包み込んで……あ……ヤバ……クカー……」

と秒単位で夢の世界に陥落していった。恐るべきテ○○ユール……我ながら戦慄のまくらをプレゼントしてしまった……クツクツクツ……。

「ハル!!　私は?!　ひよつとして夜戦?!」

「そう急くな川内……妖怪夜戦女には、その称号にふさわしいものを用意している……クツクツクツ……」

逸る気持ちを抑えられない川内へのプレゼント。それは電気屋の主御用達、暗い場所でも手を塞ぐことなく明かりを使える素晴らしい逸品だ。

「それはこれだ!! 登山用シオルダーライト!!」

「え……登山用って……え?」

「慌てるな川内。お前のその探照灯を貸してみろ」

「は、はい」

『登山用』という部分がひっかかるのか……川内は頭にはてなマークを浮かべながら、自分の太ももから探照灯を外し、それを俺に渡した。俺はその探照灯をシオルダーライトのライト部分につけかえ、川内の肩に装着してやった。

「川内、ふとももだけだと心細かろう。妹二人からは2つの探照灯を受け継いだとも聞く。これから夜戦をする時は、一つはふとももにもうひとつはこのシオルダーライトに装着して肩に装備するといい」「なるほど!! これなら2つ一緒に使えて便利だね!」

「その通りだ! 今以上にさらに夜戦で活躍できる事だろう!!」

「やった! ありがとうハル!! 大事にする!! 神通の探照灯は今ままでどおり太ももに装着して、那珂の探照灯はこれで使うようにするよ!!」

「照らせ!! 夜戦の闇を!! このシオルダー那珂ちゃん探照灯で照らすのだ!!」

俺にシオルダーライトを与えられた川内は、早速眠りこける加古をそのシオルダー那珂ちゃん探照灯で照らしていた。突然強烈な光を照射された加古は『まぶしツ?! 何事ツ?!』と悲鳴を上げていた。

そして次は……クツクツクツ……

「お前だビス子おおお!!」

「え?! 私?!」

「いつもいつも日本人の俺に『納豆の食べ方を知らないのね』だの『クサヤの香りが楽しめない』とはヤーパナー失格よ』だの『酒盗の良さが

わからないとはおこちゃまね』だの言いやがってこの妖怪国籍詐称女
!! お前実は日本人だろ?!」

「そんなことあるわけ無いでしょ!!」

「だったらこれ食べて祖国ドイツを思い出せゲルマン女!!」

俺は木箱からビス子へのプレゼントを取り出した。こいつだけは……こいつへのプレゼントだけはお菓子だが、タダのお菓子ではないんだよ。見ろこのゴージャスな包装を……!!

「ちよつとハル! これひよつとしてド○イマ○スターじゃない?!」

「その通りだ!! 祖国を思い出したかビス子!!」

「思い出すも何も中々買えない代物よ?! これどうやって手に入れたの?!」

「む、ムハハハハ!!」

……言えません。たまたま洋菓子屋にあったやつを見つけて、急いで買ったなんて言えません……。

「どちらにせよありがたく大切に食べさせていただくわ。ドイツを思い出すわ……ハル、D a n k e s c h n !」

「ムハハハ!! その調子で自分がドイツ人であることを思い出すが
イイ!!」

いやー気持ちいい。みんながこんなに喜んでくれるとものすごく
気持ちいい!!

「ねーハルー。あ、いやハル兄さん」

「あ? なんだ北上」

「そろそろ私の番でこといい?」

「もちろんだ北上。次はお前の番だな!」

クツクツクツ……俺は知ってるぞ北上。順番待ち用に俺が準備していた少年漫画の中でも、お前は特に槍を持った少年と金色の妖怪が
タッグを組んで戦うアノ話が好きだということ……!!

「そらあこのバーバーちよもらんまで3回通して読んだからね。でもよく見てるね。さすがハル兄さん」

「うるさい兄さんと呼ぶな」

「じゃあハルお兄ちゃん」

「それもやめろ」

「じゃあハル兄？」

「兄と呼ぶこと自体却下だ。そしてお前へのプレゼントは……」

北上、お前へのプレゼントはもはやこれしかあるまい。あの漫画を
楽しめたお前だ。ならばこの漫画も楽しめるだろうッ!! 俺は総数
23冊に渡る豪華な装丁の漫画本を木箱から取り出し、それを北上に
見せた。

「北上！ お前にはこの『か〇〇りサー〇ス』のワイド版一式をくれて
やろう!!」

「え……なにこれ……漫画？」

「バカヤロウ絵柄をよく見てみる」

「えーでも私も食べ物とか……ハッ!? これひよつとして……?!」

「クツクツクツ……その通りだ北上。この『か〇〇りサー〇ス』はな、
お前がハマっていた『う〇〇と〇ら』と同じ作者だ！ そしてその面
白さは折り紙つきだッ!!」

「へえ〜そうなんだ……よし読んでみよう。ハル、ありがと♪」

俺からワイド版一式を受け取った北上は早速、さっきまで加古が寝
転んでいた長ソファーに寝転び、そこでワイド版を一から読み始め
た。加古はというと、川内とじゃれすぎて疲れ果てたのか、今は散髪
台のシートのリクライニングを倒してそっちに枕を移して眠ってい
る。川内は『やせーん!!』と叫びながら店を出て行った。隼鷹は相変
わらず初恋が成就した女子中学生のような表情で磯〇慢の一升瓶に
頬ずりしていた。

「ハル」

「ん？ どうした妖怪アホ毛女」

「そ、そろそろ球磨の番クマ？ ……そわそわ」

「そうだな。お前にはとびきりのものをプレゼントしてやろう」

「な、何をくれるクマ……わくわくするクマ……!」

「クツクツクツ……以前にお前が欲しがっていたものだ……」

俺は、自分へのプレゼントを待ちわびて血湧き肉踊っている球磨へ
のプレゼントを木箱から引っ張り出す。こいつへのプレゼントは

……

「これだツ!!」

「……クマ?」

「クツクツクツ……」

「これは何クマ?」

「え……だってお前、前に欲しがってた……」

俺が木箱から出したのは、今まさに旬の、まるまる一尾の秋鮭。秋祭りの買い出しに行った時に、こいつが一尾まるまるの鮭を物欲しそうな目で見つめ、『欲しい』て言ってたのを俺は覚えていた。だから今回、こいつへのプレゼントはこれしかあるまいと思って買ってきたのだが……

……ヤバイ何この雰囲気。俺はてつきり大喜びしてくれるものだとばかり思っていたのに。なんだこの『お前へのプレゼントはないんだよーいやーい』的イタズラをやってしまった感……ちくしょうお前へのプレゼントだけは、生臭い匂いが中に充満するのを我慢して冷蔵庫に保存しておいたのに……

「ま、まあいいクマ。この秋鮭はありがたくいただいておくクマ」

「お、おう……」

球磨はそう言いながら、俺が準備しておいた秋鮭一尾のしっぽをつかみ、それをひよいと背負い込んだ。

「あのー……妖怪アホ毛女さん」

「クマ?」

「なんか……すまん……」

「謝るようなことなんかしたクマ?」

「い、いや……」

「なら謝る必要なんかないクマ。これは明日にでも提督にさばいてもらってみんなで食べるクマ」

口ではそう答えていたが、球磨の顔は笑ってなかった……やっべ……なんでこんなショック受けてるんだ俺……なんか泣きそうなんですけど……

俺がプレゼントした『か〇〇りサー〇ス』に没頭するためなのか何

なのか、気がついたら北上は長ソファーからいなくなっていた。加古は散髪台でこの上なく熟睡しているのが、生成されている鼻提灯からも見て取れる。外からは川内の『やせーん!!』という叫び声が聞こえ、隼鷹もいつの間にか消えていた。提督さんのところに行ったのかもしれん。

「……なんかみんな、しらん内にいなくなってるな」

「そうクマね」

「そうねー……でも私もそろそろ帰るわ。これ以上起きてるとお肌に悪いし、そろそろ眠いしね……」

「お、おう」

「クマ」

「ハル、Danke。明日みんなド○イマ○スター食べましょ……ぐーてなはと……」

ビス子はビス子でそう言うと、眠そうに大あくびをした後、うなだれて店を出て行った。俺は、背中からあんなに『私は眠い』オーラを振りまく人を初めて見た。あれは加古以上だ……。

「……んで、残ったのはお前だけか」

「そうクマね」

「……」

「どうしたクマ?」

「……いや」

「?」

「……提督さんのパイ、食うか」

「クマっ」

俺は球磨と共に居住スペースに戻り、提督さんのパンプキンパイを二人で切り分け、その旨さに感動した。素朴でありながら充分な甘み……かぼちやの風味が十二分に堪能出来るかぼちやペーストと、それに絶妙に合うホイップクリーム……すべてが素晴らしい。

「美味しいクマ! さすが提督クマ!!」

「うまいな……うまいな球磨……ぐすっ」

「? なんて泣いてるクマ?」

「うるさい妖怪アホ毛女あ……ひぐつ……」

俺はなあ……あの秋鮭でお前が喜んでくれると思ったんだよお……ひぐつ……

「ひぐつ……いいから食おうぜ」

「ま、まあいいクマ……」

「うまいなあ……提督さんのパンプキンパイ、甘くて少ししょっぱくて、美味しいよなあ球磨……ひぐつ……ひぐつ……ひぐつ……」

「??
??」

こうしてこの鎮守府でのハロウィンは、失意のうちに幕を閉じた。しかしこの秋鮭が、翌日ちよつとした騒動を巻き起こすこととなる。

翌日の朝、球磨から秋鮭一尾を受け取った割烹着姿の提督が、食堂で朝飯が出来上がるのを待ちわびていた俺と球磨を調理室に呼び出した。

「ハル、球磨。ちよつと来てくれるか?」

「ほいほい?」

「クマ?」

提督さんと呼ばれて調理室に向かうと、味噌汁のいい香りが調理室に充滿していて、ただでさえぺっこぺこだった腹減り具合に拍車がかかった。おなかと背中がくつきそうってこういう状態のことを言ううんだろうなあ……なんてことを思いながら、球磨と共に調理室の提督さんのそばに向かう。

「すんすん……いいにおいだクマあー……」

「すんすん……ホントだなあ……」

「似た者夫婦的反応はいいから、ちよつと俺の話聞いてくれ」

「そんなこと言うなら隼鷹に『提督さんが俺に隼鷹の可愛さをこれでもかと力説してた』ってあることないこと言いふらしますよ提督さん」

「すいませんやめてくださいおねがいます」

「寸劇はいいから、早く用件を言うクマ」

球磨に促され、提督さんはまな板の上に視線をやった。俺と球磨も提督さんにつられてまな板の上を見ると、昨日俺が球磨にプレゼント

して顰蹙をかった、秋鮭一尾がドデンと置かれている。すでに腹は開かれていて、今まさに三枚におろされている最中のようだ。

「球磨の秋鮭だクマ」

「だな」

「これ、買ったのは誰だ？」

「俺です」

「球磨はハルからもらったただけだクマ」

「ハル、正直に答えてほしい。これ、いくらした？」

「はい？ プレゼントの値段を聞くつてのはちよつと提督さん……」

「いや、真面目に」

プレゼントの値段を言うつてのは、マナー上ありえないことだと分かってはいるのだが……なんつーか提督さん、妙に真剣なんだよな……

「えーと……そんなに高くはなかったですよ？ 一尾まるまるなんでそれなりの値段ではありませんでしたけど……」

「だよなあ……」

「？」

「どうしたクマ？」

「いやこいつな。鮭児なんだよ」

「けいじ？」クマ？」

不覚にも、俺と球磨は同じタイミングで同じ方向も同じ角度に顔を向け、頭の上にはてなマークを浮かべた。

「俺と同じタイミングで首をかしげるなよ妖怪ユニゾン女」

「ハルこそ球磨とシンクロしてハーモニーを奏でなくてもいいクマッ」

「夫婦ゲンカもほどほどにして俺の話を聞いてくれ」

鮭児。それは通称『幻の鮭』と呼ばれ、一尾十万円はくだらない高級食材。読んで字のごとく未成熟の鮭らしくて、脂の乗り具合が普通の鮭とは比較にならないレベル。食べればさしずめトロの如き味と鮭独特の香り。

「取れる数も年間で千本いかないほどの貴重品だ。俺みたいな料理好

きなやつなら知らないヤツのいない、憧れと幻の超高級食材だな」

提督さんは、ツバをペペペとまき散らしながらこの鮭児の説明をしてくれた。ここまで興奮させるほどの魅力が、この鮭児にはあるようだ。男をここまで興奮させるほどの魅力が、この鮭児にはあるようだ。

「うーん……つまりどういうことクマ？」

「ハルがお前にくれたこの鮭は、すさまじくうまい鮭だということだ」

「おおおおおー!! ハルー!! よくやったクマ!!」

「ハハハ……どういたしまして」

昨日はあんなに落胆してたくせに……ゲンキなやつだ……

そうして俺が昨日球磨に渡した鮭児は、『気合を入れて調理しなければ鮭児に失礼だ……!!』という、提督さんのいつも以上の気合の元で調理され、絶品の塩焼きという形で艦娘たちと俺に振る舞われた。ちなみに刺し身ではなく塩焼きなのは、『旨い魚を一番うまく食べたいのなら、塩焼き一択』という提督さんの妙なこだわりらしい。

「……これは?！」

「おいしいクマツ!! こんな鮭食べたことないクマ!!」

「いいわね……鮭の香りが身体を目覚めさせるわ……」

「この塩焼き絶品だなー……磯〇慢が欲しくなるよー……」

「こんなおいしいシヤケ食べたら……今晚は夜戦が……!!」

「うま……うますぎて……眠く……な……ぐー」

皆口々に、この鮭児の感想を述べ、舌鼓を打っていた。……旨すぎて眠くなるってどういう状況なの？

「ハル、感謝するクマ! みんなでうまいご飯が食べられたクマ」

「昨日はあんなに微妙な反応してたくせに……」

「それとこれとは話が別だクマっ」

「はいはい……」

しかしホントにうまいな……また強めに塩が振ってあるから、白飯がすすむすすむ……とぼくぼく白飯を口にかっこんでいたら、北上が俺をじっと見ていた。

「ん? どうした北上?」

「いやあ、ハル兄さんも豪快さんだなあと思ってさ」

「兄さんは止めろ。……つーか豪快さん？」

「うん。球磨姉のためにわざわざ超高級食材を買ってきたんでしょ？」

ホントにそうならかつこよかったんだけどな……当の本人の球磨は涼しい顔して味噌汁飲んでるし。

「これは本当に偶然だ。鮭児つてのは、さばいてみないとそれが鮭児かどうかは分からんものらしい。確かめることすらしなかった漁師と、それを確かめることなく仕入れた魚屋の落ち度的幸運だな」

「へえ〜……そうなんだ」

「だからハルの手柄じゃないクマ。球磨の日頃の行いが良かったから、神様がご褒美をくれたんだクマ。ずず……」

「またそうやって球磨姉は照れ隠しで心にもないことを……」

「ブホッ!!」

北上がそう口走った途端、球磨が口に含んでいた味噌汁を吹いていた。んん？ 照れ隠し？ どういうことだ？

「いやね。昨日あのあと、『ハルが覚えててくれた』って喜んでたらしいよっ。」

「うわーうわー!!」

「もらった瞬間は、あまりに予想外のチョイスだったせいであつげにとられてぶつきらぼうになっちゃったらしいけど、後からじんわりうれしくなってきたみたい」

「ダメクマ!! 言っちゃダメクマツ!!」

「マジか」

「なんかね。二人で出かけた時のことを覚えててくれたとか、みんなの中で自分だけ『欲しい』って言ってたものがプレゼントされたってのがうれしかったみたい」

「ぐああああああ……屈辱だクマ……すべてバラされているクマ……ッ?!」

……いやいやお前ら、聞いてる俺の恥ずかしさも大概だぞこれ。なんか顔がカッカカッカしてきた……

「んでさ。私はあのままマンガに没頭したくて帰ったけど、あのあと

球磨姉と二人で提督のパイ食べたんでしょ?」

「ヴオオオオオオ!!」　だ、誰にも言っていないのになぜだクマツ?!」

なんつー悲鳴を上げてるんだこの妖怪慟哭女は……。そもそもそうやって過剰反応しなきゃ『そんなことないクマ』とか言ってるらばつくれることもできたろうに。

「なんで知ってるんだろうねー?　ねー大井っちー」

「大井クマ?!　大井のしわざクマ?!」

「多摩姉かもねー。キソーかもよ?」

「うがー!!!」

ん?　なんか二人の会話が少し妙なような……。でもそんなことより、なんだこの恥ずかしい空間……。すんごく逃げたいんですけど……

……。あ、そういえば。今日は球磨とビス子に頼みたいことがあったことを思い出した。

「それはそうと球磨」

「妹達がそろって姉に反旗をひるがえ……。クマ?」

「今日ちよつと頼みたいことがあるんだけど、今日は空いてるか?」

「哨戒任務はあるけど、午後からなら空いてるクマ」

「よかった」

球磨のスケジュールを確認した後俺は、少し離れた所に座り、箸を器用に使って鮭児の塩焼きを丹念にほぐしてご飯の上に乗せ、ほくほく顔でそれを頬張るビス子にも声をかけた。

「ビス子!」

「んー……。鮭の香りがたまらない……。あらハル、どうしたの?」

「ビス子は今日の予定は空いてるか?」

「私は今日は一日オフよ?」

「よかった。ならビス子もちよつと付き合ってくれ。行きたいところがある」

「?」

朝食後、球磨が哨戒任務から戻ってくるのを待ってから、俺は球磨とビス子にボートを曳航してもらい、暁ちゃんが轟沈したポイントに

連れて行ってもらった。理由はひとつ。俺の大切な仲間だった暁ちゃんにも、ハロウインのお菓子の代わりにプレゼントを渡すためだ。

「暁にもプレゼントを買ってたのは驚きだクマ！」

「暁ちゃんも大切な仲間だからな。お前たちに買うなら、暁ちゃんにも買わないとって思ってた」

「アカツキには何をプレゼントするの？」

「一人前のレディーには必要不可欠なものだ」

「？」

「クマ？」

轟沈ポイントに到着した。今日は波も風で、空は雲ひとつない、いい天気。

暁ちゃんが轟沈した日は、今日のようにいい天気だったことを思い出した。空を見上げれば、眩しいほどに照りつける秋の太陽があった。あの日もこんな風に、暁ちゃんは太陽を見上げていたのだろうか……

俺は手荷物の中から、暁ちゃんへのプレゼントである、化粧道具一式を詰めたポーチを取り出した。全部が大人も使える一級品。ファンデーションからチークまでひと通り揃えてある。これらを使ってお化粧すれば、暁ちゃんはナチュラルメイクが美しい一人前のレディーになれるはずだ。

「そっか。アカツキ、一人前のレディーだものね」

「だよな。強いて言えばちゃんとメイクの方法を教えられればよかったけど……せめて道具ぐらいはあげたいと思って」

「……アカツキ、喜んでるわよきつと。なんせレディーの必需品なんだから」

「そうクマね」

「だといいんだが……」

「よかったわねアカツキ。あなた、名実ともに一人前のレディーになれるわよ」

ビス子と球磨に轟沈ポイントを教えてもらい、俺はポーチを静かに

海に沈めた。暁ちゃん、ポーチにはお化粧の仕方を書いた紙も入れている。これでごんばってお化粧して、さらなる一人前のレディーを指してくれ。

「ハル」

「ん？」

帰り際、ビス子に声をかけられた。ビス子の頭には今日も暁ちゃんの帽子がかぶられている。その帽子のせいかどうかはわからないが、ビス子の笑顔は時々暁ちゃんそっくりに見えることもあった。

「ありがと。私たちだけじゃなくて、アカツキのことも考えてくれて」「こんなん別になんてことない。自己満足だよ自己満足」

これは本当。別に『暁ちゃんのために』とか、『みんなのために』とかそんなことは考えてない。ただ、みんなにプレゼントをあげるなら、暁ちゃんにもあげないとスッキリしないよな……て感じの感覚に襲われたからだ。

「そうクマ。ハルはきつとそこまで考えてないクマ。キリッ」

「お前はうるさいんだよ」

「ぶふっ……ホント仲いいわよね二人とも」

「冗談は国籍だけにしろ!!」するクマ!!」

怒り心頭でツツコミを入れる俺と球磨を眺めながら、ビス子はなんとも母性に溢れた笑顔を見せた。なんだかやんちゃな子供を見守るお母さんみみたいな慈愛に満ちた優しい笑顔だ。……あれ？　ビス子にそんな目で見られてるっておかしくね？

「んーん。私は本当にうれしいの。……それに私ね、アカツキの分まで生きるためにも、絶対に轟沈なんかしない」

「急になんつー話をはじめるとだよビス子」

「そうクマ」

「んー……なぜかしら。でも、あなたたちの行く末もちゃんと見届けたいし」

「ハル、この妖怪ゲルマン女を張り倒してもいいクマ？　いいクマ？」「俺が許す。ビス子は昼寝から目を醒ましていただく必要があるよっただ」

「ぶっ……まあいいわ。でも、アカツキの仇は取るわよ。キチンとね」
そう語るビス子の目は、前をまっすぐ見て、おれたちから見えてい
る範囲の、さらに先を見据えているように見えた。さつきまで笑顔
だったはずのビス子の眼差しだけから、笑顔が消えていた。

「ビス子……」

「無茶はやめるクマよ?」

「分かっている。無茶はしないわ。私だって轟沈したくないし、ちゃん
とマンを見つけて幸せになりたいもの。あなたたちみたいだね」

「やつぱり張り倒していいクマ? いいクマ?」

「だな。そろそろ長い眠りから覚醒していただく必要があるそうだ」

「やれるもんならやってみなさい。私はクマには負けないわよ」

「夜戦に持ち込めば球磨にもワンチャンあるクマ!!」

「あら。私だって夜戦は得意よ? 戦艦たちの中で唯一、夜戦で真価
を発揮する艦娘であることを忘れないでねクマ?」

「うがー!!!」

二人のこのやりとりに、俺は笑いをこらえることが出来なかった。
一瞬、ビス子の話にハツとしたが、別にビス子は自暴自棄になってい
るわけではなく、暁ちゃんの轟沈を経て、生き残る意識を固めたよう
だった。暁ちゃんのためにも、この戦いを生き残っていくと決めたら
しい。ならば俺は、もう何も言うことはない。ビス子ならきつと、力
強く生き抜いていくことだろう。

一つ懸念があるとすれば、それは『仇を取る』と言い切ったことだ。
それだけが、ほんの少しだけ、爪の根本に一つだけ出来たささくれの
ように、俺の心に残り続けた。

6. カウンtdown

「ハル、この前はうまい日本酒をありがとう。隼鷹と共に堪能させてもらった」

ハロウインの日から一週間ほどたった今日、俺は執務室に呼ばれ、提督さんからそう言われて頭を下げられた。

「いやいや、いつか提督さんにもお礼をしたいって俺思ってた。んで隼鷹も喜んでくれるものというのと、やっぱ酒かなあと思っただんでよ」

「おかげで隼鷹も喜んでたぞ」

「ならよかったです」

加古や川内、北上とは違い、球磨とビス子、そして隼鷹は食い物をプレゼントしている。球磨とビス子は、他のみんなにも自分のプレゼントのおすそ分けをしていた。球磨に上げた鮭児は提督さんに料理してもらい皆に振る舞われた。朝は塩焼き、夜には石狩鍋。その日の夜食に鮭茶漬け……と鮭尽くしの一日を堪能させてもらった。おかげで『体中から鮭の匂いがぶんぶんするクマ』とは、一番うまい部位を優先的に食わせてもらった球磨の弁だ。

一方のビス子も、ド○イマ○スターのチョコレートを他のみんなにおすそ分けしていた。『このチョコはわが祖国ドイツが誇る珠玉のチョコなのよ』というビス子の言葉通り、確かに絶品のチョコだった。普段あまりチョコを食わない俺でも、そこいらのチョコとは比べ物にならないうまさだと言うのは感じた。

隼鷹は、他のみんなには自身の磯○慢をおすそ分けすることはなく、提督さんと静かに楽しんだらしい。あの晩、隼鷹はそそくさといなくなっていた。俺の部屋から提督さんの待つ執務室に直行して、二人で楽しんだのかも知れない。昨日も飲んだということ、かつぱかつぱ飲むような事はせず、二人で静かにじっくり楽しんでいるようだ。

「昨日も飲んだんですか？」

「ああ。昨日はつまみも趣向を凝らしてな。絶品だったよ」

「つまみは何だったんですか？」

「この前、球磨の鮭児をさばいたろ？ その時に余った部位を使って塩辛作つといたんだ。あとでハルにも渡すよ。球磨と食べるといい」「ありがとうございます。提督さんお手製の塩辛ならうまそうだ」

「いい酒といい肴……素晴らしい夜景……隣には惚れた女……幸せだった」

そう言いながら、提督さんが恍惚の表情で目を閉じ、昨晚の思い出を反芻していた。気持ちは分かるがけど、そういうことは一人の時にやって欲しいっす提督さん。

「いやー……だって……旨い酒飲みながらマイスイートハニー隼鷹と共に月を眺め、波の音に包まれる幸せ……ああ……」

「提督さん、そろそろ幸せの反芻はやめましょうよ」

「む……そうだな。とにかくありがとう。うれしいサプライズだった」

「いやいやこちらこそ。パンプキンパイ、絶品でした」

俺は、あの日食った提督さんのパンプキンパイを思い出し、その味を反芻した。あの日の晩、妖怪アホ毛女とともに堪能した提督さんのパンプキンパイ……うまい食い物を大切な仲間と共に楽しむ時間って、大切に珠玉だよなあ……ハッ?!

「幸せの反芻はそれぐらいにしとこうかハル？ ニヤニヤ」

「……意趣返しですか提督。ニヤリ」

「だな。ニヤリ」

なんかもう、俺と提督さんって親友みたいな間柄になってきたなあ

……

「だな。この歳で親友が出来るとは思わなかったよ」

「俺もです」

「だったら敬語なんか使わなくていいぞ？」

「それはそれ。これはこれです」

「そっか」

朝っぱらから提督さんに執務室に呼ばれたからなんだろうと思つて身構えて行つてみたら、結局提督さんの惚気を聞いて終わるとい

なんとも言いがたい朝だった。

提督さんとの話も終わり、居住スペースに戻って店を開ける。ばーばーちよもらんまは基本的に店休日がなく、毎日が営業中だ。そこだけ聞くととんだブラックちよもらんまだろうが、実際は店を開いていてもヒマな時間が多い。今日も今日とて、まだ客らしい客は来ず……来訪者といえば、今も長ソファに寝転んでこの前おれがプレゼントしたワイド版のマンガを読み耽る北上ぐらいだ。

「あー……ハル、喉乾いたからお茶欲しいなー」

「百歩譲って茶はくれてやる。だから自分で淹れろ」

「えー……今いいところなんだよー。ル〇ー〇さんがドツ〇ー〇をバシバシ追い込んでるところで目が離せないんだよー」

「確かに熱いシーンだな」

「でしょー？ だから淹れてきてよハルお兄ちゃん」

「今、赤ちゃんの足の小指の爪ほどには存在していた。茶を淹れてやろう」という気持ちが吹き飛んだわ。自分で淹れろ」

「ひどっ」

「つーか自分の部屋で読めよ自分の部屋で」

「えー……ここの長ソファ寝転び心地がいいんだよね」

「そこはお前の指定席じゃないぞ？」

「いいじゃんどうせ客来ないんだし」

『うるせー妖怪プル〇〇ルラ!!!』と叫ぼうとしたその時、店の入口がカランカランと開き、川内が客としてやってきた。

「ハルくおはよー!」

「おーういらっしやーい。……ニヤリ」

「いや別に『俺の勝ちだな北上』みたいな顔しなくていいじゃん」

川内は昨晩夜の哨戒任務に出ており、今晚も哨戒任務に出るため、寝る前にシャンプーしてもらってスッキリしようと思っただけらしい。川内の肩口には、シオルダー那珂ちゃん探照灯がつけられていた。

「俺が渡したシオルダーライトはどうだ？ シオルダー那珂ちゃん探照灯は順調か？」

「順調順調！ ハルのおかげで夜戦もバッチリだよ！」

——床屋さん ありがとう キラリーン

他の奴らと違って、随分張り倒したくなる子だったんだなあ那珂ちゃんて子は。

——ちよつと酷くない?!

「ぶつ……」

北上がなんだか吹き出していた。あいつが今読んではるところで、吹き出すようなシーンってあったっけ……?!

「んじゃハル、シャンプーお願い！ ちよつとスッキリしたいしね！」
「あいよ。んじゃシャンプー台で待っていてくれ」

川内を先にシャンプー台に向かわせ、俺はタオルを準備して川内のシャンプーの準備をする。……しかしあれだなあ。思わずツツコミをしてしまうほど、みんなの幻がナチュラルな存在になりつつある。……大丈夫か俺。スピリチュアルスキルでもあったのか？

——すみません 姉と妹がご迷惑をおかけしています

別にそんなことは思っていないよ。だから気にせず出てきてくれ。つーか出来れば川内の前に出てくれ。

恐らくは神通って子と思われる声と意思疎通をしながら、川内のシャンプーをしていく。肩につけた那珂ちゃんシヨルダー探照灯はやはり軍用用の道具らしく、防水バッチリな仕様のようだ。こうやってシャンプーしている最中ちよこちよ湯がかかってしまっているが、問題なく稼働するようだ。

「どこかかゆいところはないか川内く?」

「左の足の裏の……」

「却下だ!!」

「だったら夜戦!!」

「やるかたわけがツ!!」

「やーせーんー!!!」

「却下だと言ってるだろう妖怪夜戦女!!」

「ハルと夜戦したいのー!!!」

「つたく……どいつもこいつも……なんで足の裏がかゆくなるんだよ……つーかなんで俺に足の裏をかかせようとするんだよ……」

その後はいつもの如くシャンプーは終了。充分に髪を乾かした後
は、両肩をポンと叩いてあげて終了だ。

「ほい。川内おつかれさん！」

「ほっ！……あ、そうだハル」

「ん？」

「あのさ。今度私、井上さんところに行くんだけど、よかつたら一緒に行
く？」

『井上さん』ってのは、以前の肝試しの時に助けた猫の親子、ミアと
リリーを引き取ってくれたご夫婦だ。川内はミア達に懐かれたので、
こうやって時々会いに行ってるらしい。

「行くのは構わんし俺も行きたいけど、今度っていつ頃だ？ それに
もよるなあ」

「とりあえず来週末あたりになりそう」

「だったら大丈夫だな。あとは球磨の予定も確認しとくか……大丈夫
だとは思うけど」

「……そうだね！ 球磨にはハルが聞いて!!」

川内と違って俺はミアとリリーに会うのは久々だからな。今回は
ちゃんと懐いてくれるといいんだが……あーあとあのアホ毛女にも
自分に猫が懐いてくれないことにショックを感じてみたいだし。

「あー……ところでハル」

「ん？ まだなんかあるのか？」

「別にいいとは思うんだけど……なんだかもう球磨と一緒にいるのが
自然みたいな感じ？」

「なんでだよ……」

失礼なことを言い出すヤツだ。なんで俺が妖怪アホ毛女と一緒に
いるのが自然なことになってるのか。

「ハル兄さん、自覚がないんだね……」

「あ、北上も気付いた？」

「うん」

なにになにこれどういうこと？ 北上と川内って共通認識持つてる
の？

「だつてさ。私、何も言っていないのに『誘っていいか?』って聞くこともしないで『球磨の予定も確認しとく』って」

「言ったよねー」

「こっちはハルと球磨は……セツトみたいな扱いだから、まあ……別に、いいんだけど」

「いい加減くつついてくれないと妹の私も気が気じゃないわー」

「うわー……言われてみれば確かに……何も考えずナチュラルに一緒に行くつもりでいたわ……」

「自覚無しってところがまた重症だね」

「二人そろって何というか……」

「まったく……球磨が今哨戒任務で助かったぜ……こんなところ見られたらアイツに何言われるかわかったもんじゃない……」

「……ま、二人そろってそろそろ観念しろってことだね」

「そうだよハル兄さん」

「だから兄さんはやめろ」

「りようかーいハル兄さん」

「私もハル兄さんと夜戦!!」

「お前まで俺を兄さんと呼ぶな!!」

「しかし……なんつーか無意識レベルだったな……」

その後は取り立てて何事もなく一日が終了。夕方頃には『ただいまだクマ〜』といつものごとく球磨が北上を引き連れて店に來た。晩飯のお誘いだ。

「ハル〜。晩御飯食べに行くクマ」

「はいはい。ちよつと待ってる今片付けてるから」

「どれぐらいかかるクマ?」

「今日は片付けが多いから5分ぐらいいかな? ……あーそうだ。川内が来週末にあのミア&リリー親子に会いに行くそうだ。誘われてるんだけど、お前も来るよな?」

「そうクマねえ……球磨も行くクマっ」

「了解。んじゃあとで川内に伝えとくか」

まあ予想通りの結果だな……と思つたら、北上がニヤニヤしながら

俺を見ている。……そのいやらしい顔はやめろよもう……さっきの発言は俺自身びっくりしててるんだから。

「私は別に何も言っていないけどね。ニヤニヤ」
「うるせえ」

そして今日も今日とて、飯を食い終わったら風呂に入り、上がった俺の部屋で酒盛りとなる。変わらない。いつもと変わらない、のどか過ぎる一日だ……。

今日の酒盛りのメンバーは、いつもの隼鷹と球磨、そしてなぜか川内がいた。お前は夜間の哨戒任務じゃなかったのか？

「そうだよ？ 今晩は私とビス子なんだよね！ 今晩は夜戦できるかなー……ニツシツシ……」

「んじやなんでこんなところいるんだよ」

「だってまだ出撃まで時間あるし。あそうそう。球磨には聞いてくれた？」

まあな。この妖怪アホ毛女は、お前同様、自分もあのミア&リリー親子と仲良くなりたそう。ちなみにその本人、妖怪アホ毛女は今、俺の膝を枕にしてすでに眠ってしまった。おちよこ一杯で酔っ払う体質は健在のようだ。

「了解したよ！ んじや三人だね！ ……あ、でもどうする？」

川内の質問の意図がイマイチ読めない。しかし俺をからかおうという魂胆は隠しきれていない。

「どうするどうするー？ ほらほら〜」

だって今のこの川内、妙にニヤニヤしながらこっち見てるし……ついでに言う人と人差し指でおれのほっぺたグリグリしてくるのはやめてくれませんか川内さん……。

「？ どういうこと？」

「いやあのね……隼鷹ちょっと耳貸して？」

「ほいほい」

「クマー……クマー……」

やっぱそっち方向で責めてくるのか……悪い予感が的中した。

「ハルがさー……」

「んんー?」

隼鷹が川内に自分の右耳を向け、川内がぼそぼそと耳打ちをしていた。知らん。もう知らん。裂きイカ食いながらお茶でものもーっと。球磨を膝枕してるから動けないしな今は……。

「……だつて!!」

「やったな球磨ああああ!! あとで提督にこのことキチンと伝えとくよー!!」

「クマー……クマー……」

「ハルう。もうあたしは何も言うことはないわ。未永くお幸せに」

「結婚式では私と夜戦してよ?!」

隼鷹のセリフはもう仕方ないとして……川内さん、意味わかりません。なぜ結婚式であなたと夜戦をしなければならぬのでしょうか……いやそれ以前に、俺と球磨が将来を約束した仲であること前提で話が続いていることに納得がいかなのだけど……。

と近年珍しいガールズトークで盛り上がっていた時だった。この時間に来るには珍しい客が、このバーバーちよらんまに来店してきた。

「センダーイ? いるー?」

そう。今晚川内と共に哨戒任務に出る予定のビス子だ。

「はーい。もうそんな時間?」

「そうよー。出撃する時間まであと十分ないわよ?」

ビス子にそう促され、川内は時計を見た。今は午後十時十分前。確か以前に北上が十時頃から夜間の哨戒任務の開始って言ってたから、確かにそろそろ出撃時間っぽいな。

「そうだね。じゃあ私はそろそろ哨戒任務に行ってくるよ!」

「あい。いってらっさい」

「球磨にもよろしく言つといて!!」

川内は立ち上がり、窓の外の暗闇に向けてシヨルダー那珂ちゃん探照灯をつけたり消したりして動作確認をした後、ビス子の元に駆けていった。

「よし! 夜戦の準備万端!! ビス子、行こう!」

「ええ。今晚もよろしくねセンダイ？」

「夜戦になったら任せてね!!」

「二人とも哨戒任務おつかれ!」

「ありがとハル! じゃ、行ってくるね!!」

「帰ってきたら、髪を洗ってもらわ!!」

そう言いながら、ビス子と川内は店から出て行った。しばらく歩いたところで二人の姿がチカツチカツと輝いていたところを見ると、川内が時々探照灯をつけたり消したりして遊んでいるようだ。あのシオルダーライト、けっこう気に入ってくれたみたいだな。

「しかし……ヒヤツヒヤツヒヤツ……ハルがねえ……」

川内とビス子が店から出て行った後は、残っているのは球磨を除けば隼鷹だ。その隼鷹が今、いやらしい笑みを浮かべて俺の顔を見ている。ちくしょう。今日の昼は一生の不覚だった……

「いやー。あたしと提督ですらその境地には達してないよ? それなのにもうあたしたちよりナチュラルな関係になってるってのがねえー。ニヤニヤ」

「だ、だまれ妖怪飲んだくれ女!!」

「いやー、仲よきことは美しきかなってやつだよー。めでたいなあ〜」
そう言いながら大口を開けてゲハゲハと笑う隼鷹。ほんつとき。

あの日サシ飲みした妖怪艶女と同一人物だと思えないんですけど……。

「……さーて……そろそろあたしは帰るとするかねー。惚れた男のところじゃ」

「おお? 今日はやけに退散が早いな」

「だって……さっきの話を提督に……ブホッ」

「やめてマジで……」

「照れるな照れるなー。まあいいと思うよー。一緒にいるのが自然つてぎ。ヒヤツヒヤツヒヤツ」

「……お前、別に酔っ払ってはないよなあ?」

「どうだろうねえ〜いつも通りさ〜。……あー、そうだ」
「ん?」

「そろそろハッキリしときなよ。自覚無しつてのは意外と残酷だからね」

「? ??」

隼鷹は立ち上がり、俺に膝枕されて寝転んでいる球磨をまたぐと、その球磨の頭を優しくなでた後、ヒヤッヒヤッヒヤッと軽い笑いを吹き出しながら店を出て行った。その後、外から『さーて。提督。あんたの天使の隼鷹さんがこれから帰るよお』と高らかな声が聞こえてきた。酔っ払ってるなやっぱり……。最後の「自覚無しは残酷」って何だろうねえ？

さて……

「クマー……クマー……」

この妖怪アホ毛女、どうしてくれよう……。寝顔を見ると実に気持ちよさそうに寝てやがる……。いびきが『クマー……クマー……』って、どんだけ個性の塊なんだこの妖怪オリジナリティ女は……。

「むふー……張り……倒ひて……やるクマー……」

黙ってればかわいいのに……。寝言とはいえ口を開いた途端にこれだ……。自然と球磨の頭を撫でている自分が憎い……。髪を耳にかけてやる自分がもうイヤだ。

「ん……多摩……」

球磨が、自身の妹の多摩の名を呼んだ。そして次のセリフは、赤ちゃんが轟沈した時の球磨を、俺に思い出させた。

「行っちゃだクマー……大井……キソー……」

こいつの頭を撫でる俺の手が止まる。

「……あれ……ハル？」

「おう。起こしちゃったか……すまん」

「んや……別にいい……クマー……」

「まだ眠いのか？」

「うん……でも帰らなきゃ……」

「いいよ。そのまま寝とけ」

「いいクマー？」

「いいよ」

「んじやそうする……クマ……」

俺と一言二言言葉を交わしてホツとしたのか、球磨は眠そうに大あくびをした後、再度俺の膝で眠り始めた。今度は俺の腰に両手を回し、ちよūdど俺の腰にしがみついているような体勢だ。……よく見るとアホ毛もしなびている。

無意識のうちに球磨の頭を撫でている自分がいる。髪ももふもふの割に抵抗はなく、俺の手櫛に素直にすかれていた。

「……スー……スー……」

球磨の頭を撫でた途端、さつきまでのいびきはなくなり、妖怪熟睡女の寝息だけが部屋の中に鳴り響いた。

「なんでいびきがおさまったんだ……?」

さつきまであんなに賑やかだったのに、今のこの室内は水を打ったかのように静かだ。部屋の中に響く音は、時計の時を刻む『チクタク』という音と、球磨の寝息だけだ。

球磨の髪を耳にかけ、その耳に目をやる。最近はおれが頻繁に耳掃除をしてやっているおかげでキレイなものだ。耳に触れた途端、球磨が『ん……』と反応していた。

「……まあいいか」

球磨のそばにあるブランケットをかけてやり、風邪引かないようにしてやった。そのあと、誰もおらず一人で球磨の頭を撫でながら酒を飲んでいたので……知らないうちに睡魔に襲われたらしい。次第にまぶたが重くなってきた……

……

……

……

俺は球磨と二人で海岸線を歩いていた。海の波は風で、波も低くとても静かだ。波の音が心地よく、ゆったりしたリズムで聞いている心地よい。

「球磨、今度はミアとリリーに懐かれるといいな」

俺は球磨の顔を見たが、なぜか今日は球磨の目が彼女の前髪に隠れ、球磨の表情を見ることが出来なかった。

フト、球磨が海の方向に目をやった。夕焼けが眩しいせいか……それとも何か他に理由があるのか、海は真つ赤に染まっていた。そしてやはり、球磨の顔はちょうど髪に隠れて表情が見えなかった。

「球磨?」

「行かなきゃ」

いつになく真剣な……というより感情を感じられない声で、球磨はこう呟いた。

「……どこにだよ?」

「みんなが待つてるクマ」

いつの間にか、球磨は艀装を装備していた。

「……いつの間に艀装つけたんだ?」

「さつき。みんなも行くから。……みんなと行かなきゃ」

そう言いながら、球磨は意識の感じられない足取りで、海の中に足を入れ、そのままぎぶぎぶと海の中に入っていく。主機つて名前の鉄製の靴みたいなのを履いてるのに、海面に立たず、そのままぎぶぎぶと海の中を歩いていく。

「……なんで浮かないんだよ?」

「もう球磨は浮けないからクマ」

「だったらこつちこいよ。寒いだろ?」

「だってみんなと行かなきゃ。みんなが待つてるから」

そのままぎぶぎぶと海に入っていく球磨の手を取ろうとしたが、うまく手に力が入らなくて捕まえ損ねた。球磨を追いかけようと足を動かそうとするが、上手く動かせない。

「まて球磨。戻れ」

「ダメクマ。行くクマ」

「……あーそうかい。好きにしてくれ」

「うん。行くクマ」

球磨の足取りは変わらず、下半身が全部海に浸かった状態でぎぶぎぶと沖に向かって歩いていく。……何か嫌な予感がする。球磨を止めなければ行けない気がする。

「戻れ! そつち行くな!! なんかヤバイ!!!」

「ダメクマ。みんな行くクマ。みんな待つてるクマ。だから球磨も行くクマ」

球磨はこつちを向かない。さつきから俺は球磨の後ろ姿しか見えない。どうした妖怪アホ毛女。こつちを見ろ。

「戻れ！俺の言うことを聞け!!」

必死に球磨を言葉で制止しようとする俺の両脇を、同じく北上や隼鷹、川内や加古、ビス子が追い抜いていった。そいつらも俺には後ろ姿しか見せず、顔を見せない。表情が読めない。

「……行くクマ」

提督さんが俺を追いぬき、みんなと同じようにぎぶぎぶと海の中に足を踏み入れていった。俺は海の中に入っていくこいつらを止めたくて必死に足を動かそうとするが、やはり足は動かず、俺はその場から動けない。

フト、球磨のはるか前方にいる人影が目に着いた。全身水浸しで海面に立ち、今は帽子を被ってない上、こちらに背中を見せてはいるが、それが誰かはひと目で分かった。

「暁ちゃん!!」

こちらに背中を向けている暁ちゃんは、俺の呼びかけに答えることもなく、ただその場にずっと佇んでいる。よく見たら、その身体には穴が空いていた。

「行くな……いやだ……」

ヤバイ。このまま行かせたらあいつらは……球磨は帰ってこなくなる。そんな気がする。球磨が俺の隣から永遠に姿を消す。俺の前からいなくなる。俺に迷惑をかけなくなる……球磨と口喧嘩できなくなる。

「返事しろ!! 球磨!! 球磨ああああ!!」

あの時のように、何度も何度も球磨の名を呼び、動かない足を引きずって前に進もうとした。だけど俺の足は根っこでも張ったかのようにならなから動かすことが出来ない。あいつらは……球磨は俺の声に反応せず、身体が沈んでいることも厭わずひたすらぎぶぎぶと海の中を歩いて行く。

「戻れ!! 行くな加古!! 北上!!!」

当然のように誰も反応しなかった。あいつらはただひたすら、前に進んでいた。

「那珂ちゃん探照灯使うんだろ川内!! 暁ちゃん分まで生きるんじやなかったのかビス子!!!」

誰も振り返らない。俺の声に誰も反応ない。皆、フラフラと海の中に歩いていく。比較的足の進みが遅い球磨と北上を他の皆が追い抜きつつ、皆沖の方へと歩いて行く。

「惚れた男と平和な世界を生きるんじやなかったのか隼鷹!! 隼鷹と一緒に月を見るのが楽しいんでしょ提督さん!!! 戻れ!! 戻れみな!!!」

ついに川内の身体が海の中に沈み、姿を消した。ついでビス子、加古、隼鷹、提督さんが沈み……

「戻れ北上!! 今ならまだ間に合う!! 球磨!! 戻ってこい球磨!!! 返事しろ!! 俺の隣に戻ってこい!!! 俺のそばにいろ!!!」

もはや海面から首だけ出した球磨が立ち止まり、少しだけ振り向いた。

「ハル……ごめん。約束守れなかったクマ」

……

……

……

「……ル……起き……だいじょ……クマ? おき……マ」

妖怪アホ毛女の名にふさわしい感情の籠った声が聞こえ、俺の重い脛は無理矢理に開かれた。テーブルに伏せて寝てしまっていたらしい俺の頭はぼんやりしていて、頭に霧がかかったように意識がハッキリしなかった。

「ん……ん……球磨か?」

「大丈夫クマ? 汗びっしりだクマ」

「お、おう……」

確かに顔から汗をかいていた。ちくしょう。妙な夢を見たせいだ。あんな轟沈を予感したような不吉な夢をこんな時に見せやがって

……。

球磨は俺の異変で目が覚め、俺を揺さぶって起こそうとしていたらしい。何でも息苦しうなりにながら、舌つ足らずな滑舌でみんなの名を呼んでいたようだ。

「なんか怖い夢でもみたクマ?」

「あ、……ああ、大丈夫。なんでもない」

言えん。みんなが海に沈んでいく夢でうなされただなんて言えん。ついでに言うと、こいつにだけは心配をかけられん。こいつは皆の前では気を張るが、俺の前では気を緩める。ならば気を緩める相手の俺は、こいつに弱いところを見せるわけには行かない。

しかも冷静に考えると、これは夢でしかない。だから心配する必要もないし、妙に怖がる必要も何もないわけで。

……あ、だけど一個だけ疑問がある。

「球磨」

「クマ?」

「お前……俺となんか約束してたっけ?」

「約束?」

「うん」

夢の中で球磨は『約束は守れなかった』と言っていた。俺にそんな覚えはないが……

「んー……特に何もしてないクマね」

「だよな……」

「どうかしたクマ?」

「いや……」

なんださっきの夢は……不吉過ぎる。今までいろんな悪夢を見てきたが、あんなに不快で気持ち悪い夢は初めて見た。ただの夢だ。夢なんだこれは。

——外に出ろ

不意に、木曾……キソーの声が聞こえた。

「キソー?」

「お前も聞こえたのか?」

「？ ハルも聞こえたクマ？」

今の声がこの妖怪アホ毛女にも聞こえたのか。……いや、今までなんとなくそう感じる瞬間はあった。こいつは俺に言わないだけで、俺と同じように、かつて沈んでいった自分の仲間の声が聞こえていたんだ。

「ああ聞こえた。『外に出ろ』って」

「クマも聞こえたクマ」

——急げ

「わかったクマ」

球磨は立ち上がり、俺の手を取って外に出ようと入り口まで向かった。おれは今まで球磨を膝枕をしていたせいもあって足が上手く動かせず、球磨の機敏な動きについていけずに足がもつれて倒れそうになった。

「おつとつと」

「大丈夫クマ？」

「おう」

少し足を屈伸する。幾分感覚が戻ってきた足に安堵し、改めて球磨に手を引つ張られて外に出た。

外はすでに明るくなっていた。おかげで、街灯がなくなるとも周囲が見渡せる。海に目をやると、水平線が遠くまで繋がっているのが、なぜか今日に限って、とても印象的に見えた。

「外に出たけど……どうすりゃいいんだ？」

「わかんないクマ……」

俺の手を握る球磨の手に力が籠り、俺も同じく球磨の手を強く握り返す。さっきの悪夢のせいで不安感が拭えないが、手から伝わる球磨の感覚が、俺の胸の不快感を少し沈めてくれた。

——ドックだ

再びキソーの声が聞こえた。球磨に目をやると、俺と同じく、目が『聞こえた』と意思表示をしていた。

「ドックだな」

俺と球磨は手を繋いだまま、ドックへと急いだ。

ドックの前にたどり着くと扉はすでに半開きになっており、ドックには明かりが点いていた。ドックの中から提督さんの叫び声が聞こえる。球磨がドックの扉を開き、俺と共にドックに入った。

「川内ー、しっかりしろ川内!!」

提督さんがドックの中で、必死に叫んでいた。

「提督さんー!」

提督さんの元に急いで駆けつけた俺と球磨が見たのは、提督さんに抱きかかえられた、川内の無残な姿だった。服はボロボロで、肩の那珂ちゃん探照灯は血まみれ。左腕に搭載された小さな砲塔は、そのほとんどが折れるか壊れているかして、ひと目で使い物にならないと判別出来る損傷。本人は頭から血を流し、右目は頭からの大量の出血でもはや開けないほどになっていた。

「川内!!」

「あ、ハル……ごめん……ショルダライト……壊しちゃった……」

「んなもんどうだっていい!!」

「何があった? ビス子はどうした?」

「ごめん……こつちにとんでもない数の敵艦隊が迫ってる……」

「?! なんて連絡しなかった?!」

「ジャミングされてたみたいで……私もビス子も、無線が全然通じなくて……」

「ビス子はどうしたクマ?」

——あなたは鎮守府に戻ってこのことを伝えて。私は出来るだけ時間を稼ぐわ

「そう言っつてビス子はその場に残った……でも敵の数がものすごいから……多分もう……」

あのアホ……暁ちゃんの分まで生きるんじやなかったのか妖怪国籍詐称女……! 生き抜いて自分のダンナを探すんじやなかったのか……!!

「敵の数はどれぐらいだ……分かるか?」

両肩をわなわなと震わせながら、しかし努めて冷静に、提督さんが川内にそう聞いた。

「わかんない……とにかくたくさん……ビス子が食い止めようとした艦隊だけでも相当だったし、私を止めようとした敵もたくさんいたし……」

「ここからどれぐらいの距離にいた？」

「わかんない……必死だったから……」

提督さんは、川内の足を見、即座に目を背けた。その後必死に涙をこらえ、川内の肩を抱き、目にかかっていた血を拭ってあげていた。

「川内、俺はお前が命がけで伝えてくれたことをみんなに伝えに行く」

「うん……分かった……ありがとう」

「いや……俺達こそ、お前に感謝する。よく戻ってくれた。よく伝えてくれた」

「……」

提督さんが俺を見た。俺は無言で頷き、提督さんの代わりに川内を抱き支えてやる。入れ違いに提督さんが川内から離れ、俺の耳元で……

「すまん。最期までついてやってくれ」

と言いつ残し、足早にドックを出て行った。その背中からは怒りと、それ以上の悲しみがにじみ出していた。

俺は川内の肩を抱き、球磨と共に手を握ってやった。川内の手は冷たく、すでに力も入っていない状況だった。抱き寄せて分かったのだが、川内の背中がボロボロで肌が露出していた。その露出した背中の肌は傷だらけで、肩に回した俺の手にべっとり血が付いた。いつもの川内から察するに、とても綺麗な肌の背中だったろうに……それが今は見る陰もない。

「いたたた……ニツヒツヒ……球磨……ヤキモチやいたらダメだよ……？」

「その暴言は今回だけ特別に許すクマ。でも治ったら張り倒すクマ」
「うん。……ハル、あとでシャンプーお願いね。夜戦で汚れちゃった」
「任せろ。ついでに今日はがんばったご褒美にカットもやってやる。べっぴんにしてやる」

「ちゃんと足の裏もかいてよ……左足はかゆくないから、今日は右足

「がいいな……」

俺と球磨は、川内の左足に目をやった。彼女の左足はもう二度と、主機を装備することは出来なくなっていた。

「……分かった。今日だけは却下しないでかいてやるから。だからちゃんと店に來い」

「……そっか。これが……神……通が……アキツグ……さんに……」

「? 川内?!」

「神通……那珂……あり……が……これ……で……やせ……」

急に、川内の顔が穏やかになった。静かに両目を閉じ、俺の胸に静かに頬を寄せて、その口元は微笑んですらいた。

「……気が変わったクマ。さっきの暴言ゆるさんクマ」

「……」

「今から折檻するクマ。熱い折檻をするクマ。だから起きるクマ」

「よせ球磨」

「川内ー。起きるクマー。これから折檻するクマよ? イヤなら起きるクマー」

球磨が川内の血まみれのほつぺたに触れ、血を拭っていた。そのまま川内の手を握り、必死にぶんぶんと上下に振っていた。

「もうよせ球磨」

「いやだクマツ。川内は寝てるだけクマ! ……ひぐつ……起こすクマ!!」

——姉の最期を看取ってくれてありがとうございました

うるせえ。見たくないもんを見させるな。本人が惚れた男でもない俺に、背中剥き出しの自分の姉を抱かせるな。看取らせるな。

——ありがとう 那珂ちゃんからもお礼を言うね

お前はあとではったおす。球磨と俺が絶対はったおす。……嫌だったら自分の姉をなんとかしろ。川内を助ける。

「神通も那珂ちゃんもクソたわけたこと……ひぐつ……言ってるクマ……川内。このまま起きなかつたら……ひぐつ……張り倒すクマよ?

「もうやめろ球磨ツ……」

俺が抱いている川内の身体から、急速にぬくもりが無くなって冷たくなつていくのが分かった。それは、川内の手を握っている球磨にも伝わっているはずだ。

「やめろつて」

「イヤだクマ!! 川内は狸寝入りしてるだけクマ!! ……ひぐつ……妖怪夜戦女が沈むはずないクマ!!」

「……」

「せんだーい! 起きるクマー! 今晚球磨と夜戦演習やるクマー! ひぐつ……夜戦クマよ? 起きるクマー!! ……ひぐつ」

球磨は必死に川内の手をぶんぶん振り、川内の狸寝入りをなんとか邪魔しようとしていた。だが、川内が目を開くことはなかった。

7. 最後の客

俺は提督さんに無理を言っつて、川内に死化粧を施した。川内をバーバーちよもらんまに運び、球磨に頼んで川内の服を着替えさせてもらった。その後散髪台のソファに座らせ、限界までリクライニングを倒す。そして顔をキレイに拭いてやり、顔についた傷を化粧で隠して、頬にチークを塗ってやった。

「……よし」

化粧が終わった川内の顔は、本当に穏やかだ。血色もよく見える。今にもあくびしながら起きてきそうなほどに……よく見たら胸が上下して寝息が聞こえてきそうなほどに、キレイになっていた。

「……なんなら起きてもいいぞ川内。いま起きたら夜戦も付き合つてやる」

俺としてはかなりの大サーブスをふりまいたつもりなのだが、やはり川内の耳には届かなかったようで……彼女が起きて『ヤーせーんー!!!』と大騒ぎすることはなかった。あの、暗闇でも眩しく光るフラッシュライトのような笑顔を彼女が見せることは、もうない。

カランカランという音が鳴り、球磨が店内に入ってきた。他のみんなと川内をどう葬るかの話し合いをしてきたそうだ。

「終わったクマ?」

「んー」

球磨は俺の隣に来て、川内の顔を覗きこんだ。

「……なんか信じられないクマ」

「何がだよ」

「川内、寝てるだけみたいクマ。張り倒せば起きそうダクマ」

「気持ちはわかるけどな。寝かせといてやれ」

口をとがらせ、悔しそうにアホ毛をぐにぐにと動かしながら、球磨は川内のそばまで歩いてくると、彼女の頭を優しく撫で始めた。川内が息を引き取った直後の動揺した球磨の姿は、もうなかった。

「川内、どうするか決めたか?」

「水葬にするクマ。海なら、みんないるから」

——だってみんなと行かなきゃ。みんなが待ってるから

フと、夢の中で無表情な球磨が呟いた一言を思い出した。『待つてるみんな』って死んだ奴らか？ 待つてるってどういうことだよ。待つてるわけないだろうが。妙なことを俺に吹き込むな。

「……そか」

「……せんだーい。お別れだクマ。先にみんなのどこに行ってるクマー……フラッシュライトみたいな眩しい笑顔ももう見れないクマね……」

化粧する前、球磨が服を着替えさせるときに一瞬川内の横つ腹が見えたが、肌が白くてキレイだった。背中もきつと同じように真っ白でキレイな肌だったろうに……何も出来なくてすまん川内。出来れば背中傷もキレイに隠してやりたかったが……

「ちよつとごめん川内」

一応川内にことわりを入れ、肩の那珂ちゃん探照灯のスイッチを入れてみる。血をキレイに洗い落とした那珂ちゃん探照灯は、俺がスイッチを入れると無事に光った。よかった。壊れてはないようだ。

次に、右足に取り付けられた神通の探照灯のスイッチを入れる。こちらも問題なく光った。

「よし。これならまた夜戦が出来るな」

「よかったクマ。……せんだーい。またバリバリ夜戦が出来るクマよー？」

球磨が川内の頭を優しく撫でながら、そう呼びかけた。その姿は、川内の返事を待つかのように見えた。

不意にカランカランとドアが開き、北上が入ってきた。北上もいつもと変わらないようには見えるが、目が少し赤い。俺の見てないところで、川内の死を悼んでいたようだ。

「球磨姉、終わった？」

「さつき終わったクマ。そっちの準備は出来たクマ？」

「出来たよー。……あ、ハル」

「んー？」

「さつき提督が呼んでたよ？ 川内の水葬は私たちに任せて、執務室

に行って」

「んー。分かった」

未だに川内の頭を撫でている球磨のそばに行き、俺も右手で川内の頭を撫でた。サラサラでストレートな髪の毛の感触が心地いい。髪もカットしてやりたかったな……

「川内、これでお別れだな。暁ちゃんによろしく言っといてくれ」

俺の左手を球磨が掴んだ。その手には力がこもってなくて、悲しみとか郷愁とか不安とか……そういう繊細な感情がイヤというほど伝わってきた。俺は球磨の手を強く握り、その不安を出来るだけ打ち消してやろうとしたが……俺にそんなことが出来ただろうか。

「じゃあな川内。また会おうな。次はお前の姉妹の紹介をしてくれよ」

後のことを球磨たちに任せ、俺は店を出た。俺は、川内の力になれただろうか。『せめて逝く時はキレイに』と思って川内の死亡粧をしたが、それは果たして、川内にとってうれしいことだったのだろうか……疑問は尽きない。

執務室に向かう途中、海を見た。今日の天気は曇りだが、海は風で波も静か。川内とビス子が亡くなったこと以外は、いつもの、穏やかな鎮守府と変わらない。

「……なんでいつも通りなんだよ」

これが、夢の中の時みたいに海が真っ赤に染まっていたり、大嵐で海が大荒れだったりすれば、まだ終末感が漂っていたのに……これじゃあいつもの鎮守府じゃないか。いつもの、いつも通り終わって、いつも通りの明日がやってくる、いつも通りの鎮守府じゃないか……少し足を伸ばして、加古の昼寝ポイントに向かった。さすがに今日は加古もここにはいない。灯台を見下ろすと、加古と北上、そして球磨の三人が、川内の遺体をボートに乗せて出発していくのが見えた。すぐそばの海域に川内を葬るという話だった。

四人の姿を昼寝ポイントから見送った後、俺は改めて執務室に向かった。執務室の前に到着し、ドアをノックする。いつもと変わらない日常。

「とんとん。提督さん、ハルです」

「入ってくれ」

提督さんの許可を経て、執務室の中に入る。執務室内には、険しい顔をした提督さんが、一人で自身の席に座っていた。隼鷹はいない。川内が命がけで伝えてくれた情報を元に、周囲の索敵をしているようだ。

「敵はどうです？ 来てるんですか？」

「まだ到着まで時間はあるが、隼鷹がかなりの数の艦隊を確認した。こつちにまつすぐ向かってきているあたり、ここに来るのは確実だろう」

「……やっぱり、ここを狙ってるんすか」

「恐らくは。ビス子が相当に足止めしてくれたようだ」

「ビス子……」

提督さんの話によると、恐らく前回の合同作戦の報復だろうという話だった。この鎮守府は、前回の合同夜戦作戦に参加した鎮守府の中でも、比較的作戦海域に近い。もしあの作戦の報復に出るとすれば、戦力も乏しく、地理的にも最も近いこの鎮守府を自分も狙う……と提督さんは言っていた。

「SOSは送らないんですか」

「送った。援軍が到着するまで鎮守府を死守し、何としても持ちこたえろとの命令だ」

「いつ到着するんすかその援軍は……」

「速やかに出撃準備に入る……だそうだ」

「なんででしょうか……説得力、ないっすね」

「俺もそう思うよ」

俺はもちろん、提督さんも笑わない。以前に提督さんから聞いた話だと、この鎮守府は、軍からしてみれば優先度の低い鎮守府だったはず……だから資材も回してもらえず、経費もほとんど認められず、こんなにボロボロになるまで追い込まれても、何も援助がない状態だったはずだ。

だとすれば、提督さんが言う通り、その援軍も期待できないのでは

ないだろうか……。

「ハル」

「はい」

「この鎮守府の責任者として、キミに命令する」

「はい」

次のセリフは、俺が今まで接してきた、朗らかで人当たりのいい、優しい提督さんとは思えないほどの、厳しい口調だった。

「灯台のそばに小舟を準備させた。それに乗って市街地に行け。井上さんが待っている。そしてそのままこの鎮守府から出て行け」

「はい？」

「聞こえなかったか？ 出て行け。そして顔を見せるな」

……いやだ。俺は最期までここでみんなと一緒にいたい。

「前にも言ったはずですよ。却下です」

「ダメだ。出て行け。復唱しろ」

「断ります。おれは軍人じゃない。あんたの命令に従う義務はない」

「軍人でなくともこの鎮守府のメンバーである以上、俺の命令には従う義務がある。さっさと復唱しろ。そしたら出て行け」

ふざけんな提督さん。そんなもん却下だ。どんな状況であれ、出て行くという選択肢はない。おれは最期までこの鎮守府にいる。

「んなもん糞食らえだ。復唱だ？ ふざけんな。俺は軍人じゃない。

じい様の代から床屋だ。床屋の俺に、あんたの命令を聞く義理はない」

「……ここは戦場になる。市街地にも避難勧告を出した。今市街地は避難が始まつてるはずだ。お前も一緒に避難しろハル」

「お断りです。ここは俺の家だ。俺の仲間がいる。家族と言える奴らがいる。提督さん。あんたもその一人だ。離れたくないんだよ俺は。最期までみんなと一緒に」

不意に、少量の火薬が弾けたような、『パン』という乾いた破裂音が鳴り響いた。足元を見ると、縁が焼け焦げた小さな穴が床に開いている。

火薬のような匂いが鼻をついた。提督さんが拳銃を俺の足元に向

けていて、その拳銃の銃口から煙が上がっていた。

「……もう一度言うぞ。この鎮守府から出て行け」

「……」

「次にまた却下だとか言い出したら、容赦なく撃つ」

「……却下ですよ。いくら拳銃向けられてもね。床屋を見くびんな」

提督さんは、今まで見たことないような恐ろしい眼差しで、俺を睨みつけていた。だが俺も引かない。しばらくの時間、おれと提督さんは互いを睨み合っていた。提督さんの拳銃は終始カタカタと震えながらも俺を狙いすましていたが……

「やっぱこんなじや避難してくれないか……柄じゃないしな……」

ついで俺にその銃弾が届くことはなかった。提督さんは、自分の机に拳銃を置いた。

「ハル……」

「はい」

提督さんは静かに席を立ち、俺のそばまで来ると、俺の肩に手を置いた。その顔にさつきまでの厳しさはなく、どちらかというと、わがままを言う自身の息子に困り果てた、一人の父親のような顔をしていた。

「どうあっても出て行ってはくれないか？」

「当たり前です」

「なあ……親友として頼む。出て行ってくれないか？」

「……なんでだよ提督さん。親友だったら俺のわがまま聞いてくれてもいいだろ」

「……親友なら、俺のわがまま聞いてくれてもいいだろ？」

「……」

俺の肩を掴む提督さんの手に力が入った。

「……なあハル、聞いてくれ。俺達は軍人だ。俺はもちろん、隼鷹や球磨……艦娘たちも、軍人だ」

「……」

「俺達の仕事はな。戦うことじゃなくて、守ることだ。自分が守りた

いものを確実に守ることが仕事だ」

「……守ればいい。俺のことも守ればいいだろ。俺のそばで守ればいいだろ」

「ダメだ。それは現実じゃない。それではお前は、戦いに巻き込まれる可能性がある。そうなれば、俺達はハルを守れなかつたことになる」

「……だったら確実に守れよ……」

「分かっている。だからお前には、出て行って欲しいんだ。俺達に、ハルを確実に守らせて欲しいんだ」

言葉の端々に、提督さんの覚悟が見え隠れしていた。俺は提督さんの優しさを含んだ覚悟と気迫に、涙が抑えられなくなっていた。

「頼む。出て行ってくれ。俺達にハルを守らせてくれ。俺達の気持ちを汲んでくれ」

「……提督さん、なんで逃げないんだ?! とんでもない数の敵が押し寄せてきてる……こっちの戦力はまるでない……援軍も来ない……逃げればいいだろ!!」

「……それじゃあみんなを守ることが出来ない。ビス子が命がけで艦隊を足止めした意味がない。川内が命がけでそのことを知らせてくれた意味がない」

「ビス子や川内はあんなたちに死んでほしくないから命がけで知らせたんじゃないのかよ?! だったら逃げろよ!!」

「ダメだよ。まだ市街地の避難が終わってないし、なにより俺達がこので逃げたら、戦火は市街地まで及ぶ。市街地も守るのが、俺達の仕事だ」

今更ながら気付いた。俺の肩を掴む提督さんの手は震えていた。本当はきつと、提督さんも怖いんだ。俺や市街地を命がけで守る決意をしている提督さんでも、やはり怖いんだ……

それでも提督さんは、震える手で俺を力づけ、自身に鞭打って立ち向かおうとしている。命を投げ捨てて、自分の仕事をしようとしている。

そう考えると、確実に生きることが出来る選択肢があるのに、『ココ

に残る』と駄々をこねている自分が情けなくなってきた。俺に何か出来ることがないか考えたが……俺にできることなぞ何もなかった。俺は所詮、床屋でしかなかった。

「……俺は……何かできる事はないんですか……この鎮守府のために」
「逃げてくれ。そして生き延びてくれ」

俺の肩から手を離し、提督さんは自分の机に戻って引き出しを開けた。そしてその引き出しから写真を一枚取り出し、それを俺に見せてくれた。1番楽しかった瞬間を切り取った写真だった。

「……これを」

「これは……秋祭りの時の……?」

「ああ。ここにきてくれた記念に、持って行ってくれ」

写真には、おれがここに来た時のままのみんなが、元気に写っていた。暁ちゃんとビス子、川内も元気な姿を見せていた。ほんの数週間前のことのはずなのに、もうずいぶん昔のことのように感じた。

「……いやだ。あんたが持つててくれ。こんな最期の頼みみたいなのとするな」

「頼むよ」

「……いやだ!!」

いやだ。受け取れない。受け取りたくない。受け取ったら、この鎮守府での生活が思い出になってしまう。いやだ。これからもここでみんなと過ごしたいのに、これじゃあ一生の宝物になってしまう。日常のままにしておきたいんだ。

一向に受け取ろうとしない俺を見かねて、提督さんは俺の懐のポケットに写真を入れてくれた。この鎮守府での生活が、思い出になっってしまった。一生の宝物になってしまった。俺の鎮守府での生活は、たった今終わってしまった。バーバーちよもらんまは今日、閉店する。

「……分かった。俺は出て行く。でも提督さんも約束してください」
「何をだ?」

「絶対に生き延びて下さい。スイートハニー隼鷹と一緒に、生き延びて平和な世界で暮らして下さい」

人と話をしていると、『それはウソだ』とすぐに見破れる言葉がある。たとえば母親にイタズラが見つかった時、『怒らないから本当のことを言いなさい』と言われる。子供心にこの言葉は、すぐにウソだと分かる。

「……ああ。約束する。必ず生き延びるよ。そしたら今度は、球磨も入れて四人で酒でも飲もう。四人で、月を眺めて波の音を聞きながら、うまい酒飲もう」

俺は提督さんのこの言葉を、すぐに嘘だと見破ってしまった。でもそれが提督さんに伝わらないよう、努めて安心した素振りを見せた。「……やつと今日、タメ口で話してくれたな。ありがとう。うれしかったよ」

執務室を出る寸前に聞いた、この提督さんの感謝のセリフが、俺が聞いた提督さんの最期の声だった。こんなことで感謝してくれるような人なら、もつと早くタメ口をきけばよかった。そのことが、俺の中で小さな後悔として残った。

その後、荷物をまとめるためにおれは一度店に戻った。いくら早急に避難といっても、最低限持つていかなければならないものもある。まずはじい様から受け継いだカミソリ。そして球磨がずっと店の中で過剰な湿気を供給していた霧吹き。

「……そうだ。シザーバッグとハサミ……」

シザーバッグを忘れないようにバッグ入れようとして、以前に球磨が描いたイラストが目に入った。俺が初めて球磨のアホ毛の処理にチャレンジして失敗したその日から、妖怪アホ毛女は時間を見つけては、俺のシザーバッグに一人また一人と、この鎮守府のメンバーの似顔絵を描き足していった。

急いで準備しなきゃいけないというのに、妙に懐かしい気持ちに再燃して、俺はシザーバッグのイラストを眺めた。俺のシザーバッグには、球磨を筆頭に北上や隼鷹、加古……そしてビス子や川内、暁ちゃんの似顔絵が描かれている。俺がここに来て間もない頃の、俺が知っているメンバー全員が、この中に揃っていた。

懐の中に手をつ突っ込んだ。懐には、さつき提督さんから譲り受けた

秋祭りの時の写真が入っている。このシザーバッグと写真は、絶対に持ち帰らなくてはならないものだ。俺がここに来た証だから。素晴らしい仲間と共にこの鎮守府で、床屋として充実した日々を過ごしてきた証なのだから。

感傷に浸っていると、カランカランという音が鳴り、店の入口が開いた。

「ハルー」

「おう。妖怪アホ毛女」

入り口に立っていたのは、妖怪アホ毛女だった。

「髪を切って欲しいクマ」

「……ん？」

「髪を切ってシャンプーして、耳掃除して欲しいクマ」

俺は覚えている。バーバーちよもらんまではじめてシャンプーしたのは、この妖怪アホ毛女だった。暁ちゃん、加古と共にこの店の立ち上げを手伝ってくれ、そのお礼にシャンプーしてあげたのが、このバーバーちよもらんまの華麗な歴史のはじまりだったんだ。

「……最初の客が最後の客か」

「んふふー。そうクマ」

俺の返事を待たず、球磨は散髪台に座った。俺は球磨が落書きしたシザーバッグを腰に回し、キャスター付きの椅子に座って球磨の背後に回る。

「で、妖怪アホ毛女。今日はどうする？」

「ハルのセンスで整えるクマ」

「了解した。アホ毛は？」

「任せるクマっ」

「シャンプーと耳掃除も？」

「全部やるクマっ」

了解した。このバーバーちよもらんまの最後の客だ。いっちょ気合を入れてやったらもうじゃないか。

まず最初に、球磨の髪をシャンプーする。シャンプー台で仰向けにし、顔をタオルで隠し、湯加減を見て髪を洗ってやる。

「球磨ー」

「クマ?」

「どこかかゆいところはありますかお客様ー?」

「左足の裏の親指の付け根から5ミリほど下がったところあたりが痒いクマ」

「分かってると思うが却下だ」

「……たく。最後まで融通の効かない床屋だクマっ」

「言ってる妖怪足の裏女」

シャンプーが終わったら、毛先の傷んだ部分をカットしてやる。霧吹きでアホ毛をほんのりと湿らせ、ハサミを入れてみた。

——さくっ

あの時と同じ感触が俺のハサミに走ったが、その直後、後ろ髪の一部がアホ毛と化してびよんと立ち上がり、自身の存在を周囲にアピールしていた。

「……最後まで切れなかったな」

「ぷぷーっ。球磨のアホ毛を切ろうなどとは片腹痛いクマっ」

「うるせー妖怪アホ毛女」

「クマクマっ」

引き続き、球磨の毛先を整えていく。静かな店内には、ハサミを動かすちよきちよきという音が鳴り響いている。いつも以上に静かな店内だ。

いつもこの店内は賑やかだった。客の数こそ少なかったが、毎日のように北上が長ソファに寝転がってマンガを読みふけり、加古が空いた散髪台を倒して眠りこけていた。ドアが開いたかと思えば暁ちやんとビス子が『一人前のレディー!!』と誇らしげに声を上げ、夜になれば酒をかついで隼鷹がやってくる。夜十時を過ぎれば川内が『やせーん!!』と騒ぎたて、この店が静かになることはなかった。毎日が賑やかで、俺は毎日みんなに振り回されていた。

「なー。球磨?」

「クマ?」

「楽しかったな。バーバーちよもらんま」

「そうクマね」

特にこの球磨というやつは、おれを終始振り回し続けた。常に霧吹きを片手に店内を歩きまわっては俺と店に過剰に湿度を供給し続け、俺のボケと妄想に必要以上に激しいツツコミを入れ、大掃除をサボりたいが為に営利誘拐まがいのことをしでかし、初対面から何度も俺の腹にコークスクリューパンチを突き刺した妖怪アホ毛女。

そして、肝試しの時は俺を守ってくれた。暁ちゃんが亡くなった時は、みんなをフォローし、俺の前でだけ泣いた。合同作戦の時は、勘違いして早とちりした俺を抱きとめ、涙を拭いてくれた。

気がついたら、こいつは常に俺の隣にいた。どれだけ大暴れして大怪我しても、俺の隣に帰ってきた。そのアホ毛をうにうにと動かしながら、俺の手を取り、俺と一緒に歩いてくれていた。俺が油断した時には、こいつは妖怪浴衣女や妖怪ハニカミ女に変身して、俺に核ミサイル級のダメージを与えてきた。

いつも俺の目の届くところにいて、一番俺の目を引く笑顔で、俺の手を取り、引っ張って、振り回していた。

いつまでも振り回していて欲しかった。こいつに手を引っぱられ、困らせられ、ツツコミを入れられ……そして隣で笑っていて欲しかった。一緒にいたかった。

「なー。球磨?」

「クマ?」

「やっぱりお前も戦うのか?」

「そうクマね」

「逃げないのか?」

「うん」

「なんでだよ。死ぬかも知れないだろ?」

「……」

「俺の隣にいてくれよ。お前と一緒にいないとつまらないよ」

「……球磨も、ずっとハルの隣にいたいクマ。ハルの隣で笑っていたいクマ」

そっか。俺の片思いじゃなかったんだな。安心した。よかった。

「でもダメクマ。逃げたくないクマ」

「どうしてだよ?」

「球磨はみんなを守りたいんだクマ」

「みんなって?」

「北上、隼鷹、加古、提督……市街地のみんな、川内が助けたミアとリリー……」

「……そうだな。みんな大切だな」

「それにみんなの思い出が詰まった鎮守府……」

「……」

「あと、バーバーちよもらんまとハル」

球磨らしい返答に、恥ずかしいような嬉しいような、複雑な感情を抱いてしまう。でも悪い気はしない。

知ってるか? あの肝試しの時、お前が単装砲を構える音が、めちゃくちゃ心強かったんだぞ? お前のぬくもりが、どれだけ俺に勇気くれたことか……あの日お前が俺におぶさってなかったら、神社を見つけた時に社に突撃なんて突拍子もないこと出来なかったんだぜ?

「うるせー。お前に守られんでも力強く生きていけるわ」

「安心したクマ。その調子で元気で生きていくクマよ?」

「黙れ妖怪アホ毛女。なに最期の別れみたいな事言ってるんだ。お前も一緒に決まってるだろ」

「……」

「こっちは惚れた女と一緒に生きていきたいんだよ」

「……うん」

最期にもう一度、アホ毛にハサミを入れた。さくつという手応えと共に切られたアホ毛は地に落ちたが……

「……やっぱダメか」

「んふふー。修行が足りんクマっ」

やっぱり新しいアホ毛がびよんと立ち上がった。俺とアホ毛の戦いもこれで終わり。結果は全敗という散々な結果だった。床屋としては恥ずべきことだが、なぜか俺はアホ毛に最期まで勝てなかったこ

とにホツとした。

カッツはこれで終了。最後に耳掃除をしてやる。

「ほら。早くこつちこい」

「クマッ」

惚れた女の耳を、膝枕で丁寧に掃除してやる。少しだけ涙で視界が滲んだが、努めて視界が歪まないように気をつけながら耳掃除を続けた。

「……ハル？」

「んー？」

「泣いてるクマ？」

「アホ。ローションこぼしたんだよ」

両耳が終わり、ローションでキレイにしたところで終わり。最後のお客様。お疲れさまでしたー。

「クマ……」

「終わったぞー」

「クマッ」

球磨は俺の膝から身体を起こし、そのまま俺の右隣に座った。こいつはいつも、こうやって俺の隣にいてくれた。

「ハル」

「ん？」

球磨が左手で俺の右手を強く握った。その手は少しカタカタと震えているように感じた。

「ちよつとだけ……抱きついていいクマ？」

「……俺も、球磨を抱きしめていいか？」

「うん」

球磨の返事が終わる前に、球磨の身体を抱き寄せて思いつきりキツく抱きしめた。

「……痛いクマ」

「……だったら離れろよ」

「……ヤダクマ」

球磨もまた、俺の首に手を回し、おれを思いつきり抱き寄せていた。

「……いてえ」

「だったら離してもいいクマ?」

「……やだ」

「わがままな床屋だクマ」

「うるせえ」

少しだけ手の力を抜き、球磨の身体を離す。球磨も同じタイミングで力を抜き、ほんの少しだけ離れた。その後、今度は互いに顔を近づけ、唇を静かに触れ合わせた。

「ん……」

しばらくそうした後、どちらからともなく唇を離れた俺達は、また力を込めて互いの身体を抱きしめる。唇の余韻はしばらく残った後、粉砂糖のようにひんやりと消えた。

「……突然なんてことしてくれるクマ」

「うるせー。お前だって受け入れた癖に」

「クマっ……」

「……球磨」

「クマ?」

「俺はお前が好きだ」

「球磨も……ハルが好きだクマ。ハルとずっと一緒にいたいクマ」

「俺もだ。……だから絶対に俺の隣に戻ってこい」

「うん。必ず戻るクマ」

「戻ったら、好きナだけ霧吹きを吹きかけろ。足の裏もかいてやる。」

「……好きナだけキスしてやるから」

「うん」

そうしてしばらくの間、互いに相手の感触を身体に刻み込んだ後、俺達は身体を離れた。長ソファから立ち上がり、俺達は手を繋いだまま、入り口のドアを開ける。ドアから離れたところには、すでに鎮守府の残りのメンバーが球磨を待っていた。

「球磨姉、散髪終わった?」

みんなの中でただ一人、入り口のそばで待っていた北上が、俺達のそばまで来た。北上は両手両足に魚雷発射管を装着していた。すで

に敵艦隊が近くまで来ているのかもしれない。

「うん。終わったクマ」

球磨が俺の手を離し、俺と向かい合った。その顔には、さっきのような不安はなく、いつもの妖怪アホ毛女と変わらない笑顔があった。「ハル、ありがとクマ。もうすぐここは大変なことになるから、ハルも早く逃げるクマよ?」

「……分かった。お前たちも、どうか無事で」

「うん。みんなと一緒に、ハルの隣にちゃんと帰るクマ」

「信じてるからな」

「クマクマっ」

「北上」

「んー?」

「お前も必ず戻ってこいよ」

「ハル兄さんの頼みとあらば、この北上さん、きいちゃいませよー」

いつもと変わらない脱力っぷりで、北上がそう答えた。

「ハル!! ハロウインの時はありがと!! 今度はみんなで飲もうぜ!!」

おう。次はみんなで飲めるように、お前が好きなだけかっぱかっぱ飲めるように、樽酒で準備してやるぜ隼鷹。提督さんによるしくな。

「あの枕、古鷹の膝枕には負けるけど、いい枕だったよ! ハルと一緒に過ごせて楽しかった! ありがとう!!」

うっせえ妖怪ねぼすけ女。最後みたいなセリフを吐くな。これからもバンバンあの枕で寝てくれなきや、俺泣いちゃうからな。

「みんな! 今はおれこの場を離れるけど、おれ戻るからな! バーバーちよもらんまに戻るからな!! したらみんなのシャンプーしてやるから! みんなのカットしてやるからな!! だから、ちゃんと頑張れよ! 負けんなよ!!!」

「楽しみにしてるクマ!!」

「球磨! そしたら俺の隣にいろよ!!」

「了解だクマ!!!」

皆に最後の挨拶を告げ、俺は提督さんから聞いていた脱出ポイント

に向かった。去り際にもう一度だけ振り返った時、俺は最期の戦いに挑む、7人の艦娘の後ろ姿を見た。

鎮守府を脱出した後、おれはモーターボートで市街地に向かった。提督さんが整えてくれた手はずだと、確か市街地で井上さんが待つてくれているはずだ。

市街地の港に到着すると、井上さんがミアを抱きかかえて待つてくれている。奥さんとリリーはすでに避難済みらしい。

「井上さん！」

「提督さんから話は聞いてます！一緒に避難しましょう！」

井上さんはそういつて、俺のボートを港に接岸させる手助けをしてくれた。

「うにゃー!!」

「こらミア……なんでハルさんが来た途端に……」

なぜかミアが、俺の姿を見るたびに暴れ始めた。抱きかかえる井上さんの手をねこぽんちでぽんぽんと叩き、なんとかして地面に降りようとごそごそと動いている。

「……やっぱ嫌われてるんですかね、俺」

「いや決してそんなことは……こらッ！」

ついにミアは井上さんの手から飛び出し、トコトコと俺の方に向かって歩いてきた。なぜか井上さんの手から飛び出た瞬間、ミアは静かになった。

「？」

「どうした？」

ミアが俺の足元まで来た。俺が片膝をついてしゃがみ、ミアに手を出した途端……

「う……」

ミアは俺の膝から肩に飛び乗り、俺の頭にぼすつと優しく前足を乗せてくれた。

「……」

「にゃ」

「うう……」

「ハルさん？」

ミアの優しいねこぱんちの感触が胸を優しく駆け抜け、我慢していた俺の心を決壊させた。

「うう……うあああ……みんな……みんなあ……」

「にゃー……」

「ハルさん……」

ちくしょう……なんでこんな終わり方なんだ……俺のこれまでの人生の中で一番輝いてた時間のはずなのに……なんでこんな終わり方なんだ……

俺がああ場所を離れるときは、もっと優しさに満ち溢れた瞬間になるはずだったのに……バーバーちよもらんまが閉店するときは、きつと『寂しくなるねー』『でもまた鎮守府においでよ』『ハル、元気で!!』と笑顔に溢れたみんなに見守られ、優しく祝福された瞬間になるはずだろう……断じてこんな……こんな絶望に塗れた終わり方になるだなんて認めたくなかった。

「みんな……ごめん……俺だけ逃げて……」

「にゃ……」

「提督さん……隼鷹……加古……北上い……どうか……どうか無事で……」

ミアが俺の顔に頬ずりしてくれた。そのぬくもりは俺を元気づけ、励まそうとしているように感じた。

ああ場にみんなを残してしまった後悔が、ここにきて爆発した。みんなを強引に連れて来ればよかった……提督さんのお願いを無視してああ場に残ればよかった……みんなに守られるだけじゃなくて、俺も店を守ればよかった……みんなと一緒に楽しく過ごす毎日を守ればよかった……みんなの隣にいればよかった。

球磨が隣にいない……それがこんなにも心細くて寒いと思わなかった。ああ時……別れ間際の時、強引に連れて来ればよかった。もしくは、強引にああ場に残ればよかった。……どっちでもいい。みんなと一緒にいられるのなら……球磨の隣にいられるのなら、それよかった。

「球磨……球磨あ……!!」

……だが、どれだけ後悔してももう遅い。俺はみんなを置いて逃げてしまった。俺の鎮守府の生活は終わってしまった。楽しい日々は思い出になっちゃった。球磨の隣から離れてしまった。

だからせめて……せめてみんな生き延びてくれ。暁ちゃんやビス子、川内のように俺の前からいなくならないでくれ。生き延びて、また俺に元気な姿を見せてくれ。俺に髪を切らせてくれ。『足の裏がかゆい』と言って俺を困らせてくれみんな……。

球磨、絶対に生き延びて俺の隣に帰ってきてくれ。腹パンしてもいい。アホ毛が切れなくてもいい。霧吹きも許す。だから俺の元に戻ってきてくれ。俺の隣からいなくならないでくれ。俺と一緒にいてくれ。ずっと一緒にいさせてくれ。さっきの続きをさせてくれ。

「ちくしょう……なんでだ……なんでこんな終わり方なんだ……!!」

「ハルさん……」

「戻ってこいよ……!! みんな戻れ……つまんねーよ……一人だと寒いんだよ……」

「にや……」

「こいよ球磨……寒いよ……」

一刻も早くその場から逃げなければいけないというのに、俺は暫くの間、まったく動くことが出来なかった。ただその場で、ひたすらにみんなの名前を呼びながら、泣きじゃくることしか出来なかった。

それが、鎮守府の床屋ばーちよもらんまの最終営業日になった。鎮守府はその日、壊滅した。

8. 約束の行方

鎮守府壊滅のニュースを伝えるテレビの電源を切った後、俺は畳の床に寝転がって天井を眺めた。年季の入った天井からぶら下がる蛍光灯のカバーには、少しだけホコリが溜まっていた。

あの日、鎮守府を無事脱出した俺はそのまま実家に戻った。オヤジと母ちゃんはずびっくりしていたが、俺が事情を話すと、何も言わず俺を迎えてくれた。

その日のうちにテレビでは、鎮守府が陥落したニュースが流れていた。ニュースによると、俺が市街地から離れてすぐに敵に攻めこまれたらしい。数時間の戦闘の末、致命的な損害を被った敵深海棲艦の艦隊は撤退。しかしそれと引き換えに、鎮守府は壊滅したそうだった。

ニュースによると鎮守府にいた人員の生存はほぼ絶望的とのこと。周辺地域には生存者はいなかったそうだった。

——ハル……ごめん。約束、守れなかったクマ

あの晩見た夢は、これを俺に伝えたかったのだろうか。あの日以来、妖怪アホ毛女のこのセリフが頭から離れず、これを言い放った球磨の見えないはずの無表情が、眼の奥にこびりついていた。

あの日以来、何事にもやる気が出ない。幸いにも貯金はあるから、当面の間金に困ることはないからまだいいが……あの日以来、おれは実家の中でずっとゴロゴロしていた。

あの鎮守府での生活は、俺が思っていた以上に俺に染み付いていたようだ。例えば食事。母ちゃんの料理がまずいというわけではないのだが、提督さんの料理の味を知った今、どうも母ちゃんの献立に不満が溜まっていく。母ちゃんが悪いわけじゃないし、むしろありがたいことなんだから文句なんて言っていないし感謝しているが……

夜十時になっても、鳩時計しか鳴らないのが物足りなかった。

「……あんなにうるさかったんだから出てこいよ川内……」

毎晩毎晩夜十時頃に問答無用でうちに来て、『やせーん!!』と騒ぐ川内がないことに違和感しかなかった。十時前になると反射的に身構え、十時を過ぎても川内の叫びが聞けないことに愕然とした。あん

なに煩わしいと感じていた川内の叫びがないことが、こんなにも寂しいことだとは思わなかった。

風呂に入れば入ったで、足を伸ばせないことに不満が募る。

「あー……足伸ばしてえく……」

ボディーソープじゃなくてせっけんて身体を洗いたいと思つたし、風呂場が狭いのにも違和感があつた。

「あー……ラムネ飲みてえ」

風呂上がりにラムネが飲めないのも、どうにも納得がいかなかった。今日は思い立つて近所のスーパーにラムネを探しに行ったが、どこにもラムネは売ってない。

「ラムネぐらい置いとけよ……」

近所の店をしらみ潰しに探し、おばあちゃんが店番をしている小さな駄菓子屋でやっとラムネを見つけた。

「ほい。100円ねー」

「んじや500円から」

「はいよー。じゃあお釣り400万円ねー」

おばあちゃんの年季の入ったボケを受け流しつつ、ラムネを開けて飲んでみる。

「……なんかちがう」

俺の気のせいなのか……それとも銘柄が違うのかさっぱりわからない。でも、鎮守府で毎日飲んでいたラムネに比べて、なんだか味気ない気がした。

やる気が萎えた俺は、そのままじい様の墓参りに向かった。毎年命日には墓参りに向かつていたが、今年は鎮守府でバーバーちよもらんまを経営していたせいで、まだ墓参りが出来てなかったことを思い出したのだ。

随分久しぶりに見るじい様の墓は、けっこう苔むしているように見えた。これもわびさびみたいなものだから年寄りのじい様も悪い気はしないだろうと、ゴミ以外はあえて片付けずにいる俺はものぐさでしようかじい様？

「じい様。俺さ。この一年弱の間、軍事施設で店出してたんだぜ」

随分久しぶりとなる、じい様への近況報告。俺は、目の前の墓石にどっかりと座っているであろうじい様に、鎮守府での生活を色々と報告した。じい様の戯言から名前を取ったバーバーちよもらんまの開店、シャンプーすれば足の裏がかゆくなる面白い奴ら、この歳で出来た親友、そして心から惚れた女性……報告したいことが山のようにあった。

「そいつさ。人と話すときに語尾に『クマ』って変な語尾つけるんだよ。俺の腹に何発もコークスクリューパンチを浴びせてきたし、誘拐されたこともあったなあ……」

当たり前だが、じい様は何も言わずに聞いてくれた。

「楽しかったなあ……バーバーちよもらんま……」

朝に見たニュースが、頭をかすめる。『生存者は絶望的』という言葉、俺はその時はノーリアクションで受け止めた。だが時間が経つごとに、その言葉はじわりじわりと俺の意識を侵食していった。

生存者は絶望的……つまり、誰も生き延びてないってことだ。

「んなことあるわけないだろ……球磨は俺と約束したんだぞ」

——ハル……ごめん。約束、守れなかったクマ

うるせえ。あれは夢でしかないわ。あいつは生きてる。そもそもあの夢は、球磨と約束を交わす前に見た夢じゃねーか。

じい様の墓参りから戻った俺は、再び自分の部屋に籠ってテレビを見る。飽きもせず、何度も何度も鎮守府崩壊のニュースが繰り返し伝えられていた。報道陣が敷地内に入ることを許されたそうだ。崩壊した鎮守府の様子が映されていた。

「……店はどうなった？」

瓦礫の山と化していた鎮守府施設が映され、宿舍や執務室がすでにボロボロに崩壊している様が見て取れた。その山の中に、ほんの一瞬だけ、バーバーちよもらんまのポールサインが見えた。

『見て下さい。床屋の跡地でしょうか。こちらの瓦礫の中にはポールサインが倒れています』

ニュースキャスターが戦争の悲惨さを伝えるためなのか何なのかは知らないが、崩壊した俺の店の瓦礫を手に取り、必死に何かを伝え

ていた。俺には、キャスターの言葉がまったく耳に届かなかった。

フと、画面の端つこの方に、昼寝ポイントが映った。本当にチラツとだったからハッキリとは分からなかったが、昼寝ポイントはなんとか被害を免れたようで、あの大きな桜の木が無事だったのが見えた。「そつか……ハハ……加古、昼寝ポイントは無事だったみたいだ……よかったな」

一つでも俺の知ってるものが無事だったということが、妙にうれしかった。

「よかった……無事だったんだ……ひぐつ……」

そしてその日も俺は何もせず、母ちゃんの晩飯を食った後、そのまま眠った。

翌日。そろそろ何かを始めないとマズい。貯金はある。新しい店でも始めようか……そんなことを考えながら、昼飯を食い終わったときのことだった。

——ハル お客さんよ

聞き覚えのある懐かしい声が聞こえ、俺の意識が昼飯を食い終わった皿から離れたとき、家のインターホンが鳴り響いた。

「はいはい？」

一瞬出ようかどうか迷ったのだが、曉ちゃんに事前に告知されてしまったのだから、ここで出なければ気持ちが悪い。俺は皿を台所に置き、そのまま玄関へと向かった。

「やー。ハル兄さん。久しぶり」

「お前……」

意外だった。開いたドアの向こう側にいたのは、妖怪おさげ女の北上だった。

北上を部屋に上げ、茶を準備してやる。北上は俺の部屋に入るなり、『か〇〇りサ〇〇ス』の単行本を本棚から束で取り出し、畳の上に寝転がってそれを読み始めた。

「お前変わってないな」

「だってまだこれ読み終わってないもん。あの日にハルがくれた本は全部燃えちゃったしさー。続きが読みたかったんだよ」

「……とりあえず茶を淹れてくるから待ってけ」

「ありがとつ。ハル兄さん」

お茶とお茶請けを持ってきた俺は、それを北上に振る舞ってやりながら部屋の入口を背後にして座る。北上は俺が茶を運んでくるやいなや、マンガを読むのをやめて姿勢を正し、お茶とお茶請けに手を伸ばした。

「よくここが分かったな」

「まあねー。ハルが来る前に、みんなでハルの情報は見てたからね」

「……それを覚えたつーのか？」

「んーん。それもあるけど……あの日、戦いが始まる前にね。提督が言ったんだよね」

——執務室に、ハルの履歴書を隠しておいた。

生き残ったら、その情報を辿ってハルの実家に行け。そしてハルに会え

今後のことは、ハルに力になってもらえ

なるほど。それでここが分かったのか……俺は提督さんにみんなの未来を託されたってことなのか……

「そして来たのが、お前ってわけか……」

「そうだよ。球磨姉じゃなくてごめんねー」

北上の『球磨姉』という言葉に、心臓を鷲掴みされたかのような不快感が俺を襲った。

「……球磨はどうした？」

北上は静かに茶をすすり、ほっと一息ついた後、お茶請けに手を伸ばした。

「うん。そのことも合わせて、あの時のみんなのことを知らせようと思ってる」

「そっか……あーいや、話さなくていい」

「まーそう言わずに聞いてよハル兄さん」

「うるせえ。兄さんって言うな。聞きたくない」

今まで目を背けていた事実正面から向き合わなきやいけないのが怖い。他人事のように淡々と伝えてくるニュースからの情報じゃ

ない。信頼できる北上の口から、あの日のことが語られることが怖くて仕方がない。

そんな俺の葛藤を知ってか知らずか、北上は涼しい顔で、すらすらと話し始めた。

「提督はね。三式弾の雨で焼け死んだよ。最期に隼鷹の名前を叫んだ」

うるせえ。それ以上しやべんな。

「加古は隼鷹を庇って蜂の巣になって沈んだ。古鷹と同じ目を怪我してたよ」

黙れ北上。

「隼鷹は最期にたくさんの艦載機を召喚して、敵の大半を……」

「うるせえ黙れ妖怪嘔吐き女」

気がついた時、俺は立ち上がっていた。そしてウソばかりつらつらと並べ立てるこの女の胸ぐらを掴み、北上の顔を自分の顔のそばまで引き寄せていた。

「さつきから黙って聞いてりやウソばかりつらつら吐きやがって。言っているいい冗談と悪い冗談の区別もつかないのか!」

「ごめんねハル兄さん。でもウソじゃないんだ」

鎮守府で過ごしていたときと同じ笑顔のまま、北上の目から涙がポロポロ流れた。

「……聞きたくないのはわかるけどさ」

「……」

「でもさ。ハルには知って欲しいんだよ。みんなの、あの日のことを。鎮守府のメンバーで……私の義理の兄さんのハルには……」

「……」

分かっている。分かっているんだ。こいつがウソなんて言っていないことぐらい気付いている。最初から信用している。

俺は、認めたくないんだ。あの鎮守府にいたみんなは生きていて、どこかで楽しく過ごしているって思い込みただけなんだ。だからニュースで『生存者は絶望的』って知らせを聞いても、『嘘だ』と思つて頭から否定していた。頭では理解したつもりでも、心で反発してい

た。まったく受け入れなかったんだ。

「……すまん。北上」

「気にしないでいいよ。むしろね。そんな風に思ってくれてうれしいよ」

「そっか……ありがとう」

「どうする？　続き聞く？」

「頼む」

「分かった」

俺に掴まれて少し乱れた胸ぐらを整え、北上は再び話の続きをしてくれた。隼鷹は、通常ではありえない数の艦載機を召喚して空に放つた後、力尽きてフラフラになったところを砲撃され、沈んだそうさ。「でもさ。敵をかなり沈めたんだよ。おかげでなんとか生き延びただよねー」

「そっか。空母の役目を果たしたんだな隼鷹は」

北上曰く、隼鷹が艦載機を空に放った時、かつての空母たちの姿が見えた気がしたそうさ。ひよつとすると、飛鷹や瑞鳳といったかつての仲間が力を貸したからこそ、通常ではありえない数の艦載機を召喚出来たのかも知れない……と北上は語っていた。

「ここまで話して、北上は押し黙った。おいどうした北上。」

「ん？」

「ん？　じゃないだろ。お前の姉ちゃんはどうした？」

「んー……」

北上の顔が少し曇ったのが分かった。ほっぺたをぽりぽりとかき、目に涙を一杯ためて、言おうか言うまいか迷っている感じだった。

「んーとね……」

「……」

「最後まで……ハルとの約束を守ろうとしてたよ？」

あのアホ……!!

「必死にね。『ハルの隣に帰るクマ!!』って言いながらね。頑張ってたよ？」

この瞬間、俺の望みは絶たれたと思った。部屋の片隅に乱暴に置い

たままの、あの時の荷物が目に入った。……いや正確には、荷物に紛れたシザーバッグが目に入った。球磨が描いた鎮守府みんなの似顔絵が、どんどん歪んで見えてきた。

「ちくしよ……ちくしよ……ッ」

「艦載機に狙われても、砲撃で狙われても、頑張つてたよ？」

「球磨……球磨あ……!!」

「必死に頑張つてたからさ……後で、球磨姉を怒らないであげて」

「ふざけんな怒るに決まってるだろ!! がんばっただけじゃ意味ないってお前ら軍人なら分かってるだろうが!! ちゃんと結果を出せよ!! 俺の元に戻れよ!! 隣にいろよ帰つてこいよ妖怪アホ毛女アアア!!」

約束しただろうが……お前言っただろ『ずっと一緒にいたい』って。『ハルの隣で笑っていたい』って言っただろうが!! なんで約束を守らないんだ!! 散々っぱら俺のこと振り回しておいて無責任に俺だけ置いて行きやがって……

「んーとね……」

北上がまだ何か言おうとしている。これ以上俺に報告することつてなんだ？

「……まだ何かあるのかよ北上い」

「えーと……怒らないで聞いて欲しいんだけど……」

「あ?」

「まー……確かに私の言い方もまずかったかもしれないけど……」

なんだ？ 今一話が見えてこない……北上は目に涙を一杯溜めながらも、赤いほつぺたを人差し指で困ったようにポリポリとかいていた。

「なんだよ……ハッキリ言えよ……」

「んーとさ……」

——ク……クマ……

聞き覚えのある声が聞こえた。聞きたかった声が今、背後から聞こえた。俺は、背後を振り返った。そしてすぐに立ち上がり、そこに立っていた女を抱き寄せ、そのまま力いっぱい抱きしめてやった。

そこにいたのは、床屋の俺に切られたがつてるとしか思えない……
でもついに切ることは叶わなかったアホ毛を持った女で……

「は、ハル……」

「お前……球磨だよな？ 球磨でいいんだよな？」

「く、球磨だクマ……」

霧吹きで必要以上に周囲に湿度を補充し、俺のポケと妄想に過剰な
ツツコミを返し……

「球磨……球磨……！」

「ハル。約束は守ったクマよ？」

営利誘拐まがいのことをしでかし、俺の腹にコークスクリューパン
チを突き刺した回数は数知れない……

「球磨!!」

「ハル!!!」

俺の隣にいつもいて、危ない時は俺を守ってくれた、俺が惚れた女
性の……

「ハル！ ただいまだクマ!!」

「おかえり!! おかえり妖怪アホ毛女!!」

妖怪アホ毛女こと、球磨だった。

「なんで北上と一緒に部屋に入ってたんだよ……！」

「は、恥ずかしかったクマ……」

「？」

「あ、あんなことしたあとで……家の前まで来て急に恥ずかしくなっ
たクマ……」

「あんなこと？」

「えーと……最後の散髪……クマ」

球磨はそういい、顔を真っ赤にして俯いた。……やめろ妖怪アホ毛
女。そんな反応されたら思い出してこっちまで恥ずかしくなる……。

「だ、だから先に北上に入ってもらったクマっ」

「アホ……」

「でも会いたかったクマ……早く隣に帰りたいかったクマあ……」

「俺もだ……好きだ……大好きだ球磨!!」

「球磨も……ハルが大好きだクマああ!!」

もうあれだ。北上の紛らわしい話し方も、この妖怪アホ毛女のアホみたいな言い訳も、何もかもどうでもよかった。球磨がここにいる。球磨が俺の目の前にいる。それでよかった。

「球磨姉はね。約束を守ったよ。だから次は、ハル兄さんが約束を守ってあげて」

9. 店の名前は……

昔からうちのじい様と懇意にしていたという不動産屋の紹介で、俺は新たなテナントを借りることが出来た。大家との度重なる交渉の末、元々の賃料からかなり抑えたりリーズナブルな金額で借りることが出来たのは幸いだ。

北上が生還し、俺の隣に球磨が戻ったその日のうちに、俺は新たな店を作る計画を立てた。球磨と北上は身寄りがない。軍に戻ることも考えたそうだが、それは俺が制止した。

「ハル―。球磨たち、軍に戻ったほうがいいクマ?」

「私もそれ考えてるんだよね」

「なんでだよ?」

「球磨たちはずっと軍にいたから、普通の生活ってよくわかんないクマ……」

「私たち、何ができるかなんてよくわかんないし……」

「特に何をやってもいいとは思うけど、軍に戻るのはやめろ。それは俺が提督さんに怒られる」

俺は、提督さんが戦後の艦娘の処遇を心配していたのを覚えていた。こいつら艦娘に、戦後の平和な世界を生きて欲しいと思いなから、現実問題として雇用や社会生活の面での心配をしていた。

確かに軍に戻れば楽だろう。今まで軍の中で生活してきていたのだから、それがそのまま今後も続くだけだ。今までの生活と何も変わらない。

でも俺は、それは提督さんへの裏切り行為に思えてならなかった。提督さんがあの心配をしていたということは、逆に言えば、艦娘の軍への復帰はまったく考えてなかったということになる。ならばあの人の親友として、二人のことを託された俺が、提督さんの意に沿わないことをするわけにはいかなかった。

——ありがとう ハルに任せて正解だった

そう言ってくれると、親友になった甲斐がありますよ提督さん。

——あたしたちの分まで幸せになりなよ

任せろ。お前と提督さんが成し遂げられなかったことは、俺たちが代わりに成し遂げる。隼鷹たちの分まで。

というわけで、俺は二人を当面の間養う決心を固めた。

「とりあえず二人はここに住んでバイトでも探せ。俺はまた店を始める」

「わかった」クマツ

北上は割とすぐにバイトを見つけてきた。なんでも隣町にもうろくした爺さんが経営している昔ながらの喫茶店があるらしく、そこでバイトをすることに決めたようだ。

「ねえねえハル兄さん」

「なんだよ。お前がハル兄さんって呼んできた時は悪い予感しかしない……」

「隣町だから通勤が大変なんだよねー……あー……足が欲しいなー……」

「……俺が昔使ってた原チャリがあるから、それ乗ってけよ」

「あ、いいの？」

「それよりお前、免許は大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫。なんとかなるから」

そういつて北上は、ヘルメットをかぶって原チャリにまたがり、軽快なエンジン音を鳴らしながらジト目で走っていった。

「……なんであいつ、原チャリに乗る時ジト目なんだよ？」

「球磨は北上の姉ちゃんだけど、さっぱり分からんクマ……」

球磨はしばらくバイトを探していたようだが、それよりも俺の新店舗の方に興味が移ったようで……

「仕方がないからハルを手伝ってやるクマツ」

と言い出し、今では俺の新しい店の開店準備を手伝ってくれている。おかげで店作りを任せることが出来、俺としては大助かりだ。

一度、開店準備の合間を縫って北上がバイトする店に一人で顔を出してみた。どうも客の少ない喫茶店のようだが、おかげで北上のゆるい接客も店に合っており、評判がいいらしい。

「ところでさ、ハル兄さん」

「ん？ なんだよ？」

「ちゃんと球磨姉との約束は守ってあげた？」

「霧吹きはこの前俺の頭にさんざん吹きかけてたな」

「それじゃなくて」

「足の裏はまだ搔いてないぞ？」

「もひとつ」

「……なんで知ってる？」

「さーてねー。ねー大井っちー？」

「恐るべき姉妹間連携だ……」

「っーかね。球磨姉がそう言っただけで頑張ってた」

「？ あのアホ毛女が？」

「うん。私をおんぶしながら『帰ってハルにいっぱいチューしてもら

うんだクマツ!!』って叫んで頑張ってた」

「あのアホ……」

なんっー恥ずかしいことを……。ついでに聞くところによると、球磨だけでなく北上も、沈んだ子たちの声が聞こえていたそう。だが最近はずっと聞こえなくなったと言っていた。

「まーいいんじゃない？ 心配事がなくなっただけでしょう」

「俺の心配事はお前のことで鰻登りだけだな」

「えー？ 私のが気になってんの？」

「アホ」

「でも残念だねー。私は人のものに手は出さない主義なんだよ」

「義理の妹に手なんか出すかっ」

「やっとならなくて認めてくれたねー」

北上は、俺の店の隣に喫茶店を出したいと言っていた。こいつなら、そう遠くない将来に実現しそう。それまで店をしっかりと続けないとな。

そうして数週間後、晴れて店は完成した。理由があつて開店祝いにかけてしたのは、喫茶店に向かう途中に寄った北上ただ一人。

「ハル」

「ん？」

「店の名前……」

「言うな……」

店の看板を見た俺は、北上と共に絶句した。俺は、自分の店に『バーバーちよもらんま鎮守府』という名前をつけ、工務店にもそのままの名前で看板を作るように依頼したはずだ。デザインイメージを見ても問題なかったし、引き渡しの時も問題なかったはずなのだが……

「いやハル兄さん……『バーバーちよもらんま鎮守府 だクマ』って名前はさすがに自分の嫁を鼻糞しすぎだと思うよ？」

そう。実際に開店当日……と言っても正規の開店日はまだ先だけど……の今朝、看板を見て絶句した。いつの間にやら看板に余計な一言が追加され、シザーバッグに描かれていたものと同じクリーチャーのイラストが看板を賑わせていた。そのため看板のセンスのよい配色やデザインが台無しになっていたのだ。

まあ、あの文を見る限り犯人は誰か分かってるし、この方が個性が出ていいかもな。

「球磨姉に甘いねーハル兄さんは」

「アホ」

「いやハル兄さんはいいだろうけどさ。この隣に店を構える予定の私は今から戦々恐々だよ。私の店にも余計な一言が加わりそう……」

「その頃には妖怪アホ毛女も落ち着いてるだろう」

「本当にそう思う？」

「思えん……」

その後北上は『んじやあとでねー』といい、なぜか相変わらずのジト目でパールパールと原チャリのエンジン音を周囲に轟かせながら、先に喫茶店に向かった。

俺はというと、そのまま店に入って開店準備をすませ、客の第一号を待つ。第一号は決まっている。あの時の客第一号にして、足をかいてやる約束をしたあいつだ。

カランカランというドアの音がなり、その第一号の客が入ってきた。俺は、嫁作の落書きだらけのシザーバッグを腰に巻き、第一号の客を出迎えた。

「いらっしやいませ。……妖怪アホ毛女ああああ!!」
「来たクマ!!」

「今日こそはそのアホ毛!! 切らせてもらうからなあああああ!!」
「切れるものなら切ってみるがいいクマああああ!!」

店内に響き渡る、俺と球磨の叫び声。そして球磨の手に握られた霧吹きによって、過剰に店内に供給されていく湿気。少しだけお互い素直になったけど、あの時のまま変わらない俺たちの関係。この店の空気感は、あの時のままだ。

確かに今のバーバーちよもらんま鎮守府には、開店後に店に来ては『一人前のレディー!!』と大騒ぎする二人組はもういない。暇を見つけては散髪代のソファを占拠してうとうと居眠りする奴もいなければ、夜に『やせーん!!』と襲い掛かってくる奴も、一升瓶片手に『ヒヤッハアアアア!!』と騒ぎ立てる奴も、もういない。

それに、俺たちにはもうみんなの声は聞こえない。轟沈したかつての仲間や、俺とともにかけがえのない毎日を過ごした仲間たちの声は、もう俺の耳に届くことはない。

みんなに会えない。そしてみんなの声も聞こえない。これは寂しいことなのかもしれない。あの鎮守府での思い出は、キラキラと輝く宝石のように今では感じられる。そんな日々になると、今のこの状況は寂しいものなのかもしれない。

でもいい。あとは俺達が、みんなの分までこの平和な生活を送ることが出来ればそれでいいんだ。あのみんなが命と引き換えに守ってくれた平和な毎日を、残された俺たちがみんなの分まで堪能すれば、きつとそれでいいんだ。

「そのアホ毛だとドレス着た時ベール付けられんだろうが!!」

「そんなにベールが好きならハルがドレス着てベールつければいいクマツ!!」

「男がドレスなんて聞いたことねーよ! お前はどうすんだよツ?」

「球磨は燕尾服を着るクマツ。キリッ」

「あ……」

「クマ?」

「すまん……カワイイと思ってしまった……」

「き、急にそういうこと言うのやめるクマっ……」

「お、お前こそ顔真っ赤にしてアホ毛をグニグニさせるのはやめろ……」

恥ずかしそうに顔を真赤にしてくねくねとうごく球磨を無理矢理座らせ、アホ毛を切った。

——さくっ

しかし、いつかのように後頭部からびよんと立ち上がるアホ毛を前に、俺は一時間後に迫った写真撮影に遅刻する覚悟を決めた。先に喫茶店に向かって準備してくれてる北上に連絡しておかなければ……

——ぶぷっ…… 末永くお幸せに

なんだか懐かしい誰かの声が聞こえた気がして背後を振り返るが、誰もいない。でも俺が振り向いたその先には、なんとなく賑やかで懐かしい、あの頃の雰囲気か漂っていた。

「どうかしたクマ?」

「いや、誰かいたような気がして」

「ぶぷー。アホ毛すら成敗出来ないハルの不甲斐なさを誰かがあざ笑いに来てるんだクマ!!」

「黙れ妖怪アホ毛女!!」

「クマクマっ」

終わり。

番外編　　く最期く
帽子

雲ひとつない快晴の中、私はいつものように確保した資材を満載したドラム缶を2つ引つ張り、波の穏やかな海上をひたすら走っていた。

あの秋祭りからもう一週間ほど経つ。毎年のことだが、秋祭は本当に楽しかった。電の浴衣も着ることが出来たし、雷が残してくれた大きなうちわでハルたちに風のおしおきをするこも出来た。

「そういえば、去年は響もいたんだっけ……」

フとそんなことを思い出しながら、私は海上を進む。響が轟沈してまだ一年経ってないことに驚いた。体感としてはもう何年も前に轟沈してしまった気がするんだけど……

響が轟沈した時のことは今でもよく覚えている。戦火が激しさを増し、司令官が次第に苦い顔をしながら私たちの報告を受けるようになった頃、響は遠征任務中に轟沈した。

——私のことを、いつも本当の名前で呼んでくれて、ありがとう

響の最期の言葉を思い出し、目頭が少し痛くなった。雷が轟沈し電が轟沈した頃、私は響と『二人の分まで生きよう。最後まで生き残ろう』と約束した。その約束を交わした途端、響は私を残して轟沈した。「そっか……響が轟沈してまだ一年経ってないんだ……」

響が轟沈したあの日、私は執務室で、一人で声を上げて泣いている司令官を見た。何度も何度も『済まない』といい、涙で顔をぐしょぐしよにしながら、小さな子供のように嗚咽している司令官を見て、響は司令官に大切にされていたんだなあという実感が湧いた。私たちは、こんなにも司令官に愛されているんだなあと思えた。

ならば、私はみんなの分まで生きようと決心した。たった一人の第六駆逐隊になってしまったけれど、響との約束を守り、もう二度と司令官を泣かせたりしない。だからみんな安心してね。この一人前のレディーは、もう決して司令官を泣かせたりしないから。

そんな決意を胸に秘めて、まだ一年弱。去年の今頃は、響と一緒にこんな風にドラム缶を抱えて遠征任務に出ていることを思い出し、胸が締め付けられる思いがした。少しだけ目頭が熱くなり涙が溜まってきたが、今日の天気は快晴。こんな天気のいい日に泣いていては、一人前のレディーにはなれない。そう思い、私は涙が零れないよう、上を向いてお天道様を眺めた。

「眩しい〜……」

今日のお天道様はとても機嫌がいいらしい。季節は秋だから風は冷たいが、お天道様は夏のように元気を振り絞り、私と海を照らしている。

「小島もいっぱいあるし、どこかで一休みしていこうかしら。……でも一人前のレディーなんだから、さぼったりしたらダメよね。早く帰らなきゃ」

あまりにもぽかぽかと暖かく、冷たい風が気持ちいいため、そんなことを考えてしまう。ここらは小島が多い。陸に上がれば昼寝も出来る。こんなに気持ちいい天気なら、誰だつて昼寝がしたくなるだろう。鎮守府に戻ったら、司令官にいっぱい褒めてもらった後、加古と古鷹のお気に入りのある場所でお昼寝でもしようか。そんなことを考えながら、私はお天道様を眺めていた。

「……あれ？」

異変を感じた私は、眩しいのをこらえてお天道様をよく見た。お天道様の眩しさに紛れて、黒い点が一つ見えた。その黒い点は、空中でゆつくりと円を描いている。

「……？ なにかしら？」

足を止めることなく、上空の黒い点を観察する。お天道様の眩しさに紛れているので今一分かりづらい……見間違いか気のせいかもしれない……まぶしすぎて黒い点が見えているだけなのかも……

「……?!」

私があの上空の黒い点の正体に目星がついたのと、私の頭に徹甲弾が直撃したのは同時だった。私はその勢いで大きく背後に吹き飛ばされてしまい、ドラム缶から手を離してしまった。

「いたた……帽子?! 響の帽子は?!」

自身の頭に響の形見の帽子がないことに気付いて、私は慌てて周囲を探した。響の帽子は私から少し離れたところに落ちていた。今にも海中に沈んでしまいそうだったが、既の所で回収できた。幸いなことに、徹甲弾による傷は見当たらなかった。

安心したのもつかの間、第二撃の徹甲弾が再び私の眉間に直撃した。再び背後に吹き飛ばされた私は周囲を見るが、敵らしき姿は見えない。ここからは見えないほど遠くにいる敵からの砲撃……ということは、相手は戦艦クラスの深海棲艦だろうか。ここまで正確無比な砲撃をしてくるあたり、やはり頭上でくると円を描いている黒い点は深海棲艦の観測機で、観測射撃を行っているに違いない。

——暁、体勢を立てなおして

聞き覚えのある声が耳元で聞こえ、私は脳震盪でグラグラする頭を抱えながら立ち上がった。主機の出力を上げてその場からすばやく離れた時、私がいた場所に第三撃の徹甲弾が着弾した。あのまま呆けていたら、私は確実に轟沈していた。

響の帽子をかぶり直し、私は前方を睨んだ。小島の陰に隠れていたのだろうか。周囲には駆逐艦と軽巡洋艦が合わせて4体、私を囲むように陣形を組んでいた。敵艦隊の砲塔が、こちらに狙いをつけているのが分かる。

——背後にも気をつけるのよ暁!

分かっているわよ雷。私だって艦娘だし、何より一人前のレディー。こう見えて戦闘経験も豊富なんだから。

主機の出力を最大まで上げ、私は全速力でその場を離れた。駆逐艦の私は、スピードなら誰にも負けない。たとえ頭上から観測されているとしても、私のスピードなら偏差射撃は難しいはずだ。距離を詰めている駆逐艦や巡洋艦も、私のスピードに照準を合わせることは難しいはず。逃げに徹すればなんとかなる。

——暁ちゃん 右から魚雷が来ているのです

電の声が聞こえ、右から接近している魚雷に気がついた。かなりきわどいところで魚雷を避け、逆に私が魚雷を放つ。放った魚雷は敵駆

逐艦の一体に直撃し、大破させた。

——砲撃も来てるわよ!

ありがとう雷。私はその砲撃を避け、今の砲撃の主と思われる軽巡洋艦に砲撃仕返した。私の砲撃は相手に着弾し、相手は中破。

いける。これなら押しきれられるかもしれない。倒せなくてもいい。この場から逃げおおせて、無事に鎮守府に戻ることが出来ればそれでいい。私は全速力で小島の陰に逃げ、上陸して身を隠し、鎮守府に通信を送った。

「司令官?」

「おお。どうした暁」

「ごめんなさい。今敵と遭遇して、資材を手放してしまったわ。持つて帰れないかもしれない」

「お前は大丈夫か?」

「暁は大丈夫。でも資材が……」

「そんなもんでもいい。敵の規模はどれぐらいだ?」

「駆逐と軽巡が合わせて4体。見えないところに戦艦が1体いるわ」

「分かった。ビス子たちを至急向かわせる。それまで耐えろ」

「わかったわ! なんせ暁は一人前のレディーだから」

「頼むぞ。信じてるからな一人前のレディー!!」

司令官への連絡も終わり、私は林の陰で三人の到着を静かに待つことにした。このままここに隠れ続けていれば、ビス子たち三人が到着するまでは持ちこたえられるはずだ。ひよつとすると、私を見失った敵艦隊も、諦めて撤収するかもしれない。

だが、私のそんな甘い目算は通用しなかった。

不意に、私の周囲に生える木々が燃え出した。空を見ると、夏の花火がすぐそばで爆発したかのように、土砂降りの雨のように火が降り注いでいた。

「三式弾?!」

しまった……相手に戦艦がいたことを忘れていた。相手は私が小島に逃げ込んだことを見破り、その小島を三式弾で火炙りにする作戦に出たようだ。

——逃げて暁！

雷の助言に従って、私は即座に小島から離れて海に出る。

——まだ観測機は飛んでるのです　気をつけるのです

電の言った通り、上空ではまだ観測機が円を描いてこちらを観測している。思いつきり蛇行しながら小島を離れる。相手の偏差がズレ、私は寸前のところで相手の砲撃をかわしていった。

いける。これならいける。妹たち三人が私を支えてくれている。これなら逃げられる。あとはうまく砲撃を避け続ければ……

——暁!!

「え?」

響の叫び声が聞こえ、私は足元を見た。私の足に吸い込まれるように、魚雷が向かってきていた。

「魚雷!!」

私の主機に魚雷が命中し、主機が機能を停止した。私は爆発の勢いで海面をバウンドして転げまわってしまい、響の帽子を汚してしまっただ。

——足を止めないで暁!!

雷の悲鳴のような警告と、私の艀装が爆発したのは同時だった。敵艀艦の観測射撃が私の艀装に直撃したようだ。艀装が壊れた。これでは反撃が出来ない。敵の戦力を削れない。

軽巡と駆逐の砲撃も始まった。はじめこそ距離を測り損ねた砲撃で私に当たるとはなかったが、私は今動くことが出来ない。次第に砲撃は挟叉となり、私の身体を捉え始め、私の身体に直撃していった。主機を動かしてみるが、さっきの雷撃のせいかほとんど稼働しない。かろうじて海面に立っているのがやっとの状態だ。

「負けない……私は絶対に帰るんだから……一人前のレディーなんだから!!」

敵の砲撃が、私の身体に容赦なく突き刺さっていく。響の帽子だけは傷つけないように……響との大切な約束の証だけは、絶対に何があっても守らないと……

——こつちだ暁

——電が暁ちゃんを引っ張るのです

気のせいだろうか、あの時と変わらない姿の響が、私をなんとか立ち上がらせようと、必死に私を抱きかかえようとしていた。轟沈する前の元気な姿の電が、泣きながら私の手を取ろうと必死にがんばっていた。

——私が暁のこと守るんだから！

私と敵の間に立ちふさがるように、雷が大の字になって私を身を挺して守ろうとしていた。だが敵の砲弾は無情にも雷の身体をすり抜け、私の身体に新たな傷をつけていくだけだった。

三人の妹は、私を助けようと必死に頑張ってくれている。ならば一人前のレディーの私が諦めるわけにはいかない。

「大丈夫！　暁は一人前のレディーなんだから！　みんなのところに帰るんだから……鎮守府に帰るんだからッ!!」

私は最後の力を振り絞り立ち上がった。砲撃は止まることなく私の身体を打ち抜いていくが、雷が身を挺して守ってくれている。電が私の手を引っ張ってくれる。響が私の身体を支えてくれている。

みんなが私を助けようと頑張ってくれている。だったら私は生きて鎮守府に戻らないと……みんなが助けてくれたことを、みんなに伝えないと……ハルに自慢するんだ……司令官に教えてあげるんだ！　三人が助けてくれたって、妹たちが助けてくれたって、司令官に自慢するんだ!!

煙を上げ、もはや雀の涙ほどの推進力すら出ない主機をフル回転させ、私はその場から離れようとした。砲撃が一層の激しさを増した。魚雷が迫っているのも見えた。それでも私は、退避を止めなかった。寸前の所で魚雷をかわし、砲弾を紙一重で避けた。

だが、そのままバランスを崩して倒れた私の視界に、自身の主機が入った。主機が動かない理由が分かった。主機を含めた私の両足は、すでに海中に沈みつつあった。

「せめて……せめて響の帽子だけは……!」

帽子を脱ぎ、それが傷ついてしまわないよう、大切に抱きかかえて守った。

——暁ッ!!

周囲を飛び交う砲弾の動きが止まり、それらが私の方を向いた状態で宙に浮いたまま停止していた。不思議に思った私は、周囲を見回し、背後を振り返った。その時、私に迫っていたのは一発の砲弾だった。砲弾は私のおなかに直撃し、そのまま私を突き破って海面に着弾した。

私は、逃げ切ることが出来なかった。響との約束を守ることはもう、出来なかった。

私の身体が下半身まで海に飲み込まれた頃、私を囲んで砲撃と雷撃を続けていた敵艦隊が次々に撃沈されていった。はじめ私は意味が分からなかったが、もはや胸元まで沈み込んだ私の手を、泣きながら必死に引っ張っているビス子の姿を見て、やっと助けが来たことが理解出来た。

「待って！ アカツキ!! 沈んじゃダメ!! あなたは一人前のレディーなんですよ?! 行っちゃダメ!! 行かないで！ アカツキッ……!!」

ビス子が、そのキレイな顔をぐしゃぐしゃに崩してポロポロ泣きながら、私を必死に海から引っ張りだそうとしていた。子どものように泣きわめきながら私の手を引くその姿は、あの時の司令官を私に思い出させた。

——諦めちゃダメだ暁!

——私たちが下から押し上げてあげるから!

——だから暁ちゃんはんぼって帰るのです!

もう海中深く沈んだ私の身体を、響たち三人が必死に押し上げようとしていたが、私の身体が沈むのは止まらなかった。首まで沈んだ私は、ビス子に響の帽子を託した。

「ビス子……ビス子は一人前のレディーなんですよ?」

「あなたもでしょ?! だったら沈まないで帰りなさい!」

「んーん。暁はもうダメ。だからこの帽子をお願い。大切にしてくね」

「そんなこと言っちゃダメ! 帰るのよアカツキ! 私と一緒に帰って、ハルに膝枕してもらおうの!! 提督が作ってくれた美味しいお子様

ランチ食べるのよ!!」

「ごめんなさいビス子。元気でね」

響の帽子をビス子に託し、もう何もすることが無くなった私は、そのまま全身を海に飲み込まれた。泣かないでビス子。あなたみたいな一人前のレディーに涙は似合わないわ。私も笑顔であなたと別れるから、あなたも笑って？

——ごめんなさい暁 助けてあげられなかったわ

いいのよ雷。身を挺して守ってくれたあなたは一人前のレディーよ？

——暁ちゃんごめんなさいなのです 守ってあげられなかったのです

泣かないで電。あなたの気持ちはお姉ちゃんに伝わったから。お姉ちゃん怒ってなんかないわ。

——ごめん 約束を守らせてあげたかった 私も暁に、約束を守って欲しかった

私こそ、約束を守れなくてごめんなさい。でも、私は響に……みんなに久しぶりに会えて、とても嬉しかったわよ？ 出来れば司令官にこのことを伝えたかったけれど……みんなに会えたことを、司令官に教えてあげたかったけど……

……あ、みんなに別れの言葉が言えなかったな……司令官、一人前のレディーがいなくなったからって、子どもみたいに泣かないでね？

加古？ あんまり寝てばかりいちやダメよ？ 北上さん、マイペースもほどほどに。川内さん、もつとおしとやかになれば一人前のレディーになれるわよ？ ハルと球磨、いつまでも仲良くしてね。……ビス子、一人前のレディーのあなたと一緒にいられて、とても楽しかったわ。

みんな、今までありがとう。少しさみしいけど、暁は一人前のレディーだから大丈夫。

それに暁には、響も雷も電もいるから。だから慌てて来ちゃダメだからね。

終わり。

閉じた門

敵駆逐艦の甘い砲撃をかわし、私は反撃を行った。その直撃を受けた敵は大破炎上し、そのまま轟沈。これで20体目の深海棲艦を沈めたが、敵の数は一向に減る気配がなかった。

今晚の哨戒任務の担当は私と川内の二人だった。二人で哨戒任務に出て、いつもと変わらないルートで哨戒をこなしていく私達。規定の時間に近づき、そろそろ帰投しようかと彼女と話をしていた最中、私達は鎮守府に迫る敵艦隊を多数の敵艦隊と遭遇した。

「ちよつと……ヤバイよビス子……無線が通じない……」

「ジャミングでもされてるのかしら……ならば直接鎮守府に戻って伝えるしかないようね……」

私たちは、すでに上空の観測機に補足されている。いつ観測射撃が行われてもおかしくない。しかしあの観測機は、見覚えがある気がする……。

上空で旋回する観測機あの動きと見た目……喉まで出かかっているが思い出せないこの違和感は、一隻の敵戦艦の姿を確認したときに鮮明に思い出した。

「あの夕級……!!」

その姿を見た瞬間、私の全身の毛が逆立ち、肌が粟立ち、血液が逆流したことを感じた。私の大切な親友、アカツキを轟沈にまで追い込んだ張本人の夕級だった。

「センダイ。あなたは鎮守府に戻ってこのことを伝えて」

「え……でもビス子はどうするの?」

「……私はできるだけだけ時間を稼ぐわ」

センダイに言い放ったこの言葉は、半分は本当だ。二人で鎮守府に戻るより、一人はここで足止めをしたほうがいい。そしてその役目は軽巡洋艦のセンダイよりも、戦艦である私の方がふさわしいだろう。

だがそれ以上に、私は利己的な理由でこの場に残ることを決めた。

あの日、私は轟沈していくアカツキを、ただ泣きながら見守ることにしか出来なかった。その様子を、恐らくはほくそ笑みながら高慢に眺

め、やがて背を向けて去っていった忌々しい夕級……私はあの日、自分自身にある誓いを立てた。そしてつい最近、それを球磨とハルに言い放ってしまったばかりだった。

——アカツキの仇は取るわよ キチンとね

「ありがとうビス子。絶対に鎮守府にたどり着く。だからビス子、沈まないでね」

「私はあなたよりも夜戦が得意なのよセンダイ？」

「そうだったね……なら心配ないか！」

「そうよ。それに私は、アカツキと合わせて一人前のレディーなんだから」

「分かった！」

「だからあなたも、絶対に沈んだらダメよ。必ず鎮守府にたどり着くのよ」

「分かってる！　じゃあねビス子！　またあとで!!」

「ええ。またあとでね!!」

私はウソをついた。恐らく私は、この戦いで沈むだろう。このことを知った時、センダイは怒るだろうか……ウソをついた私に、『またあとでって言ったじゃん!!』と怒ってくれるだろうか……大好きな鎮守府の仲間たちは、私が鎮守府に戻らないことを、憤慨してくれるだろうか……

——暁は今怒ってるわよ　ぷんすか

……今、この帽子の元の持ち主の声が聞こえ、私の無謀な戦いに怒りを顕にしてくれた。……それだけで私は、何万もの味方を得た気がするほどに心強くなる。アカツキが見ていてくれる。一人前のレディーが、私のことを見守ってくれている。

私の元を離れて全速力で鎮守府に戻ったセンダイを、数隻の敵駆逐艦が追跡しはじめた。今の私を無視してセンダイを追うことなど許さない。敵の位置確認をすることなく撃ちだされた私の徹甲弾は、正確に数隻の駆逐艦に直撃し、撃沈した。

「さあ……あなたたち……門は閉じたわよ……私を素通りしようとする者は敵味方の区別なく撃沈するわ!!」

私は戦いの狼煙を上げた。その瞬間、夕級の残虐な笑みを含めた吐息が、その口から漏れだした。

そうして私は数時間に渡り、この海域に立ちふさがって敵艦を撃沈し続けた。砲撃してきた巡洋艦は逆に砲撃で打ち抜いた。雷撃してきた駆逐艦も砲撃して撃沈した。ヲ級が艦載機を飛ばせば、逆に近づき、その巨大な頭部に砲塔を突き刺して、内部を三式弾で破壊した。視界に入った敵は、撃沈して撃沈して撃沈した。

戦闘中、アカツキが常に私をアシストしてくれた。

——左に敵がいるわよ

大丈夫。ちゃんと見えてるわアカツキ。

——足元に気をつけて

D a n k e。魚雷の回避行動に移るわ。

もう何時間、こうして敵を撃沈しつづけただろうか……次第に空は明るくなり、夜戦だったはずのこの戦いは、すでに昼戦となりつつあった。

すでに何十、何百と撃沈したつもりだが、一向に敵の数は減らない。周囲が明るくなってきたことで、敵艦隊の全貌が次第に見えてきた。敵は水平線をうめつくすほどの数で、私の視界いっぱい広がっている。

長時間に渡るたった一人の戦いは、私の体力を徐々に奪っていた。体力が落ちれば感覚も鈍る。そうなれば動きも鈍り、結果的に私の身体に傷が増えていく。敵巡洋艦と駆逐艦の攻撃は次第に私の動きを捉え始め、そして徐々に私の体力を奪っていく。敵の砲撃の10発に1発が命中し始め……5発に1発になり……やがて2発に1発になっただけだった。

敵の砲撃の1発が主機に命中した。主機が煙を上げ、推進力を失った私は敵に取っていい的になってしまった。敵艦たちから容赦なく撃たれた砲弾の雨は、私の機装を突き抜け、身体に突き刺さっていた。

——ビス子!!

大丈夫よ。私が閉じた門はこの程度では開けられない。それにね。

あなたの仇を取るまでは、私は沈めないの。

「沈むわけには行かないのよ!!」

艦装の中で無事な砲塔を動かし、それを夕級に向けて照準を合わせた。残りの砲弾は1発。この三式弾は、あなたのために取っておいたのよ夕級。たとえば私が動けなくなり、他の深海棲艦を見逃すことになったとしても、あなただけは必ず沈める。

「喰らいなさい!!」

私が砲撃しようとしたその瞬間、私の艦装が爆発した。艦装が敵の駆逐艦に狙い撃ちされたようだ。引き金を引いても三式弾は発射されない。

「Scheisse……!!」

何度も砲撃しようと引き金を引くが、ガチリと音を立てるだけで、三式弾は発射されない。この間にも、敵の砲撃は容赦なく私に降り注いでくる。私の艦装はついに損壊し、身体から剥がれ落ち、海中に没していった。

「……!!」

もはや私を守るものは何もない。敵の攻撃が一層激しさを増した。砲弾が私の身体をめぐり続け、雷撃が私の左足の主機を破壊した。爆撃が私の髪を焼き、アカツキの帽子に傷をつけていった。

「……」

——ビス子!! もういいわよ! もう逃げて!!

あなたの忠告は少しだけ遅かったわアカツキ……私はもう動けない。

——なんで?! あきらめちゃダメよビス子!!

身体が透き通ったアカツキが私の身体にしがみつき、必死に私の身体を引っ張っているのが見えた。アカツキ、私の足を見てみて。すでに沈み始めてるでしょう?

——まだ大丈夫よビス子!! だってまだ動けるじゃない!!

私は海面に両膝をついた。もう立っていられない……立ち続けることすら困難になってきた。視界が次第に狭まり、少しずつ身体が海に吞まれてきているのが分かった。

『無茶はやめるクマよ?』

こんな時にクマの忠告を思い出すとはね……狭まってきた視界の中心には、アカツキを沈めた夕級の姿が見て取れた。その夕級はニタニタと笑いながら私に静かに砲塔を向け……

——避けてビス子!!

1発の徹甲弾を私に向けて撃った。私に放たれた徹甲弾は、そのままつすぐに私に向かって来て……

「ガフツ……」

私の左胸を貫いた。

「カハツ……カハツ……」

私が閉じた門はこじ開けられた。左胸を貫かれた私はそのまま立ち尽くし、その横を深海棲艦たちが次々とすり抜けていった。

——ビス子! ビス子!!

私の隣で、アカツキが私にしがみついて泣きじゃくっている。

「カハツ……カ……」

夕級がニタニタと笑いながら、ゆつくりと私に近づいてきた。その夕級の姿を見た途端、アカツキは夕級に向かっていき、必死に夕級を制止しようと、その足にしがみつき、進行を邪魔しているのが見えた。

——ビス子に近づかないで! ビス子は一人前のレディーなんだから!!

あなたなんかとは違うんだから!! 暁の友達なんだから!!

だが、アカツキの身体は夕級を掴むことが出来ず、彼女は夕級を制止することは出来なかった。夕級は私の元まで来て立ち止まり、一層凶悪な笑みを浮かべた。

両膝をついた体勢で海面に立っている私だが、すでに私は沈没が始まっている。私の下半身の半分が海に呑まれた状態だったが、夕級は私の頭を掴み、無理矢理に海から引きずりだした。

——ビス子!!

そのまま夕級は、自身の砲塔を私の眉間に密着させた。その顔をニタツと歪ませ、砲塔から徹甲弾を装填した音が聞こえた。

この瞬間を、私は待っていた。

「Jetzt!!!」

夕級の砲塔が火を拭くその直前、私は夕級の砲塔に強烈な掌打を当て、砲塔を右にずらした。その瞬間砲塔から徹甲弾が発射されたが、それは衝撃で私の右耳の鼓膜を破っただけで、砲弾そのものは海中に消えた。

隠し持っていた三式弾を、動揺してうろたえている夕級の口に無理矢理に捻り込む。

「言ったでしょ……あなただけは絶対に沈める！」

夕級の口から飛び出た三式弾を、喉の奥に押しこむように右拳で殴りこむ。その直後三式弾が発火し、夕級を爆散させた。

——ビス子！　ビス子!!

すでに上半身まで沈み始めた私の元にアカツキが駆けつけ、私の身体を必死に支えようとしていた。

——止まって！　ビス子ダメ!!　一人前のレディーなんでしょ?!

……あの時と立場が逆ね……今度は私が沈む番だわ……あなたの隣に行くわね。

——ダメ！　暁はまだビス子と会いたくないんだから!!

球磨との約束を守らなきゃダメ!!　帰らなきゃダメ!!

ごめんなさいアカツキ……私は一人前のレディーではなかったみたい……クマ……無茶をするなというあなたの忠告……聞かなくてごめんなさい……でも後悔はないわ……

「……ドライマイスター……全然食べきれてないわね……」

ハルからもらったドライマイスターのチョコをほとんど残したまま沈む形になってしまったことを思い出し、ハルへの罪悪感が少し芽生えた。こういったところが半人前のレディーとでも言うべきなのかしら……すでに首まで沈んだ私はそんなことを思い、やがて全身が沈んでいった。

——ビス子……

ごめんなさいアカツキ。……でも私はうれしいわよ？　あなたの仇を取れたし、足止めも出来た。後悔はない。

それにね。私はあなたに会いたかった。会って、この帽子を返した

かったわ。

——私は、ずっとあなたと一緒にいたのよ？ それに、その帽子はあなたに上げたのよ？

分かった。分かってたわアカツキ。……でも私は、あなたの声が聞きたかったの。あの楽しかった日々のようにあなたの姿を追いかけて、あなたの隣に立ちたかった。だから私は後悔はない。ドライマイスターのチョコを食べきれなかったことは残念だったけど……

……センダイはちゃんと鎮守府に辿りつけたかしら。大丈夫よね。あのセンダイなら、たとえ包囲されたとしても包囲網をくぐり抜けて鎮守府まで辿り着いてくれるわ。そうすれば、私達の勝ちよ。

……あ、でもハルとクマの将来の姿が見られなかったのは残念ね。あの二人をからかうのは楽しかったわ。提督とジユンヨウの二人も楽しかったけど。私はマンを見つけることが出来なかったけれど、提督とジユンヨウ、クマとハルには、幸せになってほしいわ……四人の幸せな姿、見たかった……

……でもまあいいわ。あの二組なら、きつと賑やかで楽しい家庭を築けるものね。私が逆に悔しくなるほどに、幸せな家族にきつとなれるわよね。私が見ていなくてもきつと。

みんな……あとは任せたわ。あなたたちは、どうか生き抜いて。そして私やアカツキ、沈んでいったみんなの分まで、幸せになってね。終わり。

私が守っていたもの

主機をフル回転させ、私は鎮守府を目指し全速力で走る。敵の数は果てしない。今はビス子がなんとか抑えてくれているが、ビス子もいずれ突破されるだろう。それまでになんとか……少しでも距離を稼がないと。

私は今日、ビス子と共に出た哨戒任務で信じられない光景を見た。深夜の海の闇に紛れて、尋常ではない数の深海棲艦の艦隊が、鎮守府に向かって迫りつつあった。

「センダイ。あなたは鎮守府に戻ってこのことを伝えて」

「え……でもビス子はどうするの？」

「……私はできるだけだけ時間を稼ぐわ」

私には分かる。きつとビス子は、自身が轟沈する覚悟で、あの場所に残ることを選んだんだ……。

敵の旗艦と思われる夕級を見た途端、ビス子の顔が変わったことに私は気付いた。……ひよつとすると、あの夕級が暁ちゃんの仇なのかもしれない。ビス子が暁ちゃんの仇を取りたがっていたのはよく知っている。

——ええ。またあとでね!!

ビス子のバカ……あんなへたくソなウソをつくだなんて……あんな本当は轟沈する覚悟のくせに……命と引き換えにしても暁の仇を取りたくて、あの場に残ることを買ってでたくせに……

それなのに、あんな笑顔でストレートにウソをつかれたから、私は気付かないフリをすることしか出来なかった。……見てなさいよビス子。帰ってきたら、夜戦演習で張り倒してやる。

私の鼻を、何かがかすめた。左右を見ると、左右に一体ずつ駆逐艦のハ級が迫ってきていた。私を左右から挟撃するつもりらしい。

「甘い!!」

左肩に取り付けた那珂の探照灯で、左側で並走するハ級の目をくらませた。と同時に進行方向に魚雷をばらまいて雷撃。左側にいたハ級を撃沈させた。

——姉さん

つづいて姿勢を低くする。と同時に私の頭頂部を1発の砲弾がかすめた。偶然ではない。肌に伝わる感覚が、私に敵の次の行動を教えにくれた。そのままの姿勢で私自身は急減速。と同時に敵の進行方向に魚雷をばらまいた。数秒の間の後、私がばらまいた魚雷はもう一体の駆逐八級を撃沈した。

「今の私に夜戦で勝てるなんて思わないですよ?!」

再び主機をフル回転させ、私は再度トップスピードで鎮守府に帰投した。

——姉さん 敵に包囲されつつあるから気をつけて

懐かしい声が聞こえた。かつて鎮守府において最強の軽巡洋艦として君臨した私の妹、神通が私をフォローしてくれている。

——今晚のセンターは譲るよっ

同じく、妹の那珂が激励してくれる。態度こそふざけた那珂だったが、その夜戦の実力は本物だった。最強の妹たち……これほど心強い存在はない。今の私なら、きつと鎮守府にたどり着ける。大丈夫だ。

——姉さん 空から雷撃機が来ます

分かつてる。すぐに対空戦闘に入り、私はすべての雷撃機を撃墜した。

——重巡が進行方向を塞いでるよ!!

大丈夫。私は肩と太ももの探照灯を同時に点灯して進行方向をふさぐ重巡り級を照らした。目を潰されたり級は取り乱し、その隙をついて単装砲を乱れ打った。リ級の撃沈を確認。

——姉さん足元!

主機をフル稼働させ、私は空高くジャンプする。と同時に私が立っていた海面に水柱が立った。

「雷撃? でもどこから……」

着水して周囲を見回す。目立った敵はいない。いるのは少し離れた位置にいるヲ級と、その周囲にいる駆逐艦たち……距離的に少しおかしい気もするが、今の攻撃はあいつらの雷撃だったのだろうか……。

「まあいつか。……行くよ!!」

再度、主機の回転を限界まで引き上げ、私は鎮守府に向かう。さっきの瞬間の交戦の後、敵が手を出すことはなくなったが、手を出してこないというのならそれは好都合だ。今の内にめいっばい距離を稼がせてもらおう。

鎮守府の中でも最強と言われていた妹の神通は生前、ハルの前任者にあたる美容師のアキツグさんと、恋に落ちた。

『アキツグさんと、正式に……お付き合いすることになりました……』
『え?! そうなの?! よかったじゃん神通!! 二人とも仲良かったもんね!!』

『那珂ちゃんは……羨ましいけど……アイドルに恋愛はご法度なんだよっ』

『それはあんたの都合でしょ……でも、アキツグさんが私の兄さんになるのか……』

『いや姉さん……姉さんから見たら弟になるんじゃない……』

『あそつか……あ! てことは、神通!』

『アキツグさんと結婚するつもりだね?!』

『え……いや……あの……プロポーズ……されました……』

那珂と共に、幸せそうな神通の姿を見ることが楽しく、また相手のアキツグさんも、とても私たちによくしてくれた。あのまま妹は、幸せになってくれるものだとはばかり思っていた。

ある日、神通は轟沈した。侵攻してきた屈強な敵艦隊を食い止める作戦で、私と那珂の目の前で轟沈していった。

鎮守府に戻った私達を、アキツグさんは激しくなじった。

——なんでお前らが生きてて神通が沈んでるんだよ!

神通助けてこいよ!! 早く行けよッ!!!

あの時の彼を責めるつもりはない。誰しも最愛の人を理不尽に奪われれば、誰かにその責任を取らせないと心のバランスを保つことは難しい。アキツグさんはあの時、私と那珂をなじらなければ、きつと壊れていた。だから私たちは、アキツグさんを悪く思うことはなかった。

神通を失ったアキツグさんは、やがて鎮守府での居場所がなくなつたと錯覚し、完全にやる気を失つて鎮守府を出て行つた。『川内、那珂ちゃん……あの時は酷いことを言つてごめん。……でも、来なければよかつた。こんなに辛い思いをすると分かつていたら、来なかつた』
『そう言い残して、アキツグさんは失意のまま鎮守府を去つた。』

『那珂……私はさ、もうこんな思いはしたくない』

『そうだね。……那珂ちゃんも、もうイヤ……』

『私達で助けられる命は……もう絶対にこぼさない』

私は、もう二度と神通とアキツグさんのような犠牲者を出すまいと誓つた。那珂は志半ばで轟沈してしまつたが、私は那珂の分まで鎮守府の皆を守ろうと二人に誓い、那珂と神通の探照灯を受け継いだ。

それからもうかなりの月日が経つ。そのあとやってきた床屋さんのハルは、球磨とともに仲良くやつてくれている。球磨もそんなハルとともに楽しそうに日々を過ごし、二人の姿は生前の神通とアキツグさんを彷彿とさせるほどに微笑ましい。……夜戦には全然付き合つてくれないけれど。その度に胸がチクチクするけれど。

一方で、提督は隼鷹と結ばれていた。ある日の朝、顔を真っ赤にした二人から……

『昨日……ケツコンした』

と報告され、私たち鎮守府のメンバーは皆、二人のことを祝福した。その後も色々とおつたが、二人の愛情は今もしっかりと育まれている。

その二組を見るたび、私は神通とアキツグさんを思い出した。神通が生きていれば、この二組のように、今も仲睦まじく幸せな毎日を過ごしていたのかも知れない……私のせいではないというのは分かつてる。でも私は、提督が隼鷹に怒られて嬉しそうに悲鳴を上げる姿を見るたび……球磨とハルが楽しそうに口喧嘩をしているのを見るたびに、神通とアキツグさんの幸せそうな笑顔を思い出さずにはいられなかつた。

今、私の大好きな仲間たちの命運が、私の頑張りにかかっている。確かに私は今、たくさんの深海棲艦に追いついてられ、周囲を包囲され

ている。恐らくは、目視出来る数以上の艦隊に囲まれていることだろう。

ならば少しでも早く、私は鎮守府にたどり着かなければならない。あの時のようなことは……神通を失い、アキツグさんから笑顔を永遠に奪ってしまった失敗はもうイヤだ。繰り返さない。絶対にたどり着く。この事実を鎮守府のみんなに伝える。私が鎮守府のみんなを守る。笑顔を守り通す。

——姉さん……様子がおかしい

神通が私の耳元でそう言い、警戒を促した。確かに周囲を敵に包囲されていることは雰囲気ではつかめているが、私と距離を取り、一向に攻撃してこないことに対して、私は疑問を抱いていた。

——周囲の警戒を怠っちゃダメだからね！

分かっている。でも何よりも、少しでも早く鎮守府に戻らないと……ジャミングが一向に解けないことから考えても、きつとまだ包囲されている可能性が高い……

不意に、出処不明の魚雷が前方から迫ってきた。冷静に魚雷の隙間を縫って回避する。

——左右からも来てるよッ！

減速し、左右の魚雷をやり過ぎそうと主機を逆回転させた。スピードが急激に下がったことで、相手の魚雷の進行ラインから外れることが出来た。

——背後からも！

「せわしないッ……!!」

再度主機をフル回転させ、私は再び海面から跳躍した。どこから飛んでくるのか分からず、正確無比な狙撃で私を狙ってくるのはきつと潜水艦。

「まずい……爆雷もソナーもないし……なにより夜に潜水艦の相手をするのは……!!」

空中から海面に着地したその時だった。私の着水地点から、たくさんの潜水艦の腕が伸びてきて、私の左足を掴んだ。

「クッ……!!」

私の足を掴んだ潜水艦たちは、そのまま私を海中に引きずり込んだ。私は水中で単装砲での砲撃を試みるが、水中では威力が出ない……いけない……このまま海中に引きずり込まれるわけには……

直後、私を海中に引きずり込む潜水艦の一人の手に、魚雷が掴まれているのが見えた。そいつはその魚雷を、私の左足の主機にそのままぶつけた。

巨大な水柱が上がり、その勢いで私は海中から海上に脱出することが出来た。すぐさま立ち上がろうと足に力を入れるが、左足に力が入らない……踏ん張りがきかず、立つことが出来ない。

——姉さん……左足が……

「言わないで神通!!」

言うことを聞かない左足を無視し、右足だけで強引に立ち上がった私は、そのまま右足の主機だけをフル稼働させ、再び鎮守府に戻るべく、海上を走った。

しかし、たった一つの主機だけでは出力が出ず、さっきまでのようなスピードを出すことが出来ない……

——爆撃機が来てるよ!!

空を切る甲高い不快な音が私に近づいてきた。身をよじって爆撃を回避したいが、主機が一機だけではそれもおぼつかない。うまく回避行動が取れない私に、ヲ級の爆撃機の正確無比な爆撃が炸裂した。

「アアアアアアッ?!」

爆撃機の爆撃は予想以上に痛く、私の背中と後頭部を焼いた。でも止まらない。止まってやらない。

——また横に雷巡がいるよ!!

背中と左足の痛みに耐えていたことで一瞬反応が遅れた。いつの間にか私と並走していた雷巡ヲ級が、私に砲撃をしてきた。

「……ッ!!」

寸前で直撃は避けたが、砲弾は私の頭部をかすめ、髪と皮膚を少しこそげとっていった。おびただしい量の血が頭部から吹き出し、那珂の探照灯をべつとりと汚した。

「……だったら……!!」

右ふとももの神通の探照灯を照射し、千級の視界を奪った後、腕の単装砲を乱れ撃つ。それでも弾幕が足りないせいか、私の砲撃に臆すること無く迫ってくる千級。自身の右腕に装着された巨大な口のよくな艦装で私を噛み砕こうと、その右腕をこちらに突き出してきた。反射的に突き出してしまった私の左手を啜え込み、噛み砕いて咀嚼するその寸前……

「……負けないッ!!」

左手の単装砲を乱れ打ち、千級を内部から砲撃する。轟沈を確認したのち、私は再度右足の主機だけをフル回転させ、鎮守府に戻る。チラと左腕を見ると、左腕に装着されているいくつかの単装砲は、すべて破損してしまっていた。

止まらない。これぐらいのことで止まってやらない。私は鎮守府に戻る。たとえどのような目に遭っても……私は、私が助けることができる人たちは、絶対に助ける。

「……ス子! 川……定時連……は……た?! 返……ろ!! ……とも!! 返……ろ!!」

唐突に、とぎれとぎれながらも鎮守府との無線通信が復活した。周囲を見るとすでに夜が明け明るくなっていたが、周囲にすでに敵影はなかった。私のことを追跡することを諦めたのか、それとももう充分に損傷を与えたという判断なのかは分からないが……

「提督! 提督!! 返事して!! 敵艦隊がすぐ近くにいます!!」

「……わか?! 返事……く……内!! ビス……事をし……!! ……だ!!!」

だめだ。私の通信機が壊れたのか、まだジャミングが生きているのかは分からないが、私から提督に通信を送ることが出来ない。ならばなんとかしても戻らなければ……

提督の悲痛な叫びを聞きながら、私は鎮守府を目指す。少しずつ鎮守府が見えてきた……しかしここにきて、私は気力が尽きかけてきた。感覚のない左足の代わりに、右足の主機だけを稼働させてここまですぐで立ち続けていたが……

——姉さん もう少しです

私はそのまま、海面に倒れ伏してしまった。右足の様子が目に入った。何度見ても見慣れない光景が展開されている。私の足は沈み始めていた。

——アイドルは諦めない!!

「当たり前でしょ……ここまで来たんだから……ッ!!!」

沈みつつある右足の主機にあらためて火を入れ、フル回転させた。もう起き上がる力もない。でももたついていたら私は轟沈してしまう。私は海面に倒れ伏したその姿勢のまま、目の前まで迫った鎮守府のドックへと入った。

ドックに入り、その通信機を使って執務室に通信を送った私は、万が一にも身体が水没してしまわないよう、なんとか水上から陸に上がり、提督が来るのを待った。しばらくして乱暴にドック入り口のドアが開き、血相を変えた提督が私の元に駆けつけてくれた。

「川内!! 川内!!!」

伝えないと……敵艦隊が迫っていること……ビス子が残ったことを……伝えないと……

提督が私を抱きかかえたところで、ハルと球磨もやってきた。この二人……私は呼んでないのに、なんでここにこれたんだろう……

「あ、ハル……ごめん……シオルダーライト……壊しちゃった……」

「んなもんどうだっつい!!」

ハルの姿を見て、反射的に謝罪の言葉が出た……今回、ハルがくれたシオルダーライトがなければ、私はここまで帰ってこれなかったのかもしれない……それなのに私は、シオルダーライトに血をつけて使った物にならなくしてしまった……そのことが、どこかでひっかかっていた。

「川内! 何があった? ビス子はどうした?!

「ごめん……こつちにとんでもない数の敵艦隊が迫ってる……」

「?! なんで連絡しなかった?!

「ジャミングされてたみたいで……私もビス子も、無線が全然通じなくて……」

事の次第を説明した後、提督は私のことをハルに任せ、ドックを出

て行った。これで提督は、ここに迫ってくる敵への対策が取れる。よしんば対策が充分でなくとも、市街地のみんなやハルたちを逃がす余裕が出来る……

私は、私にとって大切な人たちのことを守ることが出来た。私にとつて大切な人たちが守りたいものを、守ることが出来た。

その場を離れた提督の代わりに、ハルが私を抱き寄せてくれた。ハルが私の肩に手を回したせいで、私の焼けただれたむき出しの背中にハルの手が触れた。そんなところ触ると血で汚れるのに……それに傷も痛む……でも、不思議と悪い気はしない。傷の痛みが気にならないほど、全身に安らぎが広がっていく。

「いたたた……ニツヒツヒ……球磨……ヤキモチやいたらダメだよ……？」

口をついて出た一言だった。球磨と仲の良い男性にして、恐らくは球磨の将来のダンナ様……そんな人に抱かれて安らぎを感じてしまった私は、悪い子だろうか……

「ちゃんと足の裏もかいてよ……左足はかゆくないから、今日は右足がいいな……」

「……分かった。今日だけは却下しないでかいてやるから。だからちゃんと店に來い」

なんとなく気恥ずかしくなり、シャンプーした時に右足をかいてもらうことを約束した。私の左足はもうかゆくなることはない……恐らくは今日シャンプーした時にかゆくなるのは、きつと右足だろうか……ら。

ハルは、私の右足をかいてくれると約束してくれた。そしてその瞬間、私は胸にとても心地よい暖かさと、大きい充足感や安らぎ、心地よさ……そういったもので満たされたことを感じた。

……今わかった。そつか。きつとこれが、隼鷹が提督に感じて、球磨がハルに感じて、神通がアキツグさんに感じた……私が守りたかった気持ちなんだ……こんなに温かいものだったんだ……こんなに心地いい気持ちを、守れたんだ……。

「神通……那珂……あり……が……これ……で……やせ……」

目を閉じる寸前、自然と頬をハルの胸に寄せてしまい、球磨への罪悪感と、それ以上の安らぎに身を委ねながら目を閉じた。ごめんね球磨。でもこれで最期だから。もう二度とこんなことしないから、今だけ許して。今だけハルを感じさせて。

思い出してみれば、今回の戦いは夜戦だった。大好きな夜戦で、大好きな人たちを守ることが出来、自分が何を守りたかったのかも分かった。私の最期は、きつと、悪いものではなかったはずだ。

だから私は、もう充分だ。

「せんだーい！ 起きるクマー！ 今晚球磨と夜戦演習やるクマー！

ひぐつ……夜戦クマよー？ 起きるクマー!! ……ひぐつ」

ごめんね。私はもう充分満足したよ。大好きな夜戦を駆け抜けて、大切な人たちを守ることが出来た。大切な気持ちに気付いて、それを守っていたことに満足したよ。

だから球磨、夜戦はもういいよ。私は先に逝くね。

——姉さん お疲れさまでした

んーん。確かにさっきの戦闘は激しかったけど、私は満足だよ神通。……それに、例えば死ぬ寸前だったとしても、神通がアキツグさんに抱いて気持ち、私も感じる事ができた。大切なものに気付いたんだ。それを守れていたことがうれしかったんだ。悔いはない。

——遅かったね 残念だったね

残念なんかじゃないよ那珂。私は満足してる。その気持ちに気付けたこと、そしてみんなのその気持ちを守り通せたことにね。……ただ、確かに少しだけ遅かったけど。私は気づくのが遅かったけど。

さあ、私は胸を張って、暁とビス子に会いに行こうかな。

加古、あんた夜戦で私と同じぐらい強いんだから、たまにはしゃきつとするんだよ？ 隼鷹、提督、どうか幸せに。でもケンカはほどほどにね。

北上、アンタとは一度夜戦で決着つけたかったけど……まあいいか。アンタは強かった。球磨、ハルと幸せになってね。ハルを幸せにしてあげてね。

……ハル。もし次があるのなら、その時は……球磨じゃなくて、私

が最初にハルを出迎えてあげても……いいかな。
終わり。

同じことが出来た

『古鷹!!』

『加古は私が守る……だから安心して』

『ダメだよ古鷹!』

『大丈夫。私の艦装はがんじ……』

『古鷹アアアアア!!』

昔のことを思い出した。私はあの時の古鷹と同じく、乱れ飛ぶ敵の砲弾をその身で受け止めている自分が少し気恥ずかしくなり、自然と笑みが溢れた。

提督が三式弾で焼かれた後、呆けていた隼鷹はやがて我を取り戻し、一心不乱に呪文を唱えた。隼鷹はこの戦いのキーだ。彼女がその強大な陰陽術でたくさんの艦載機を召喚することが出来れば、この鎮守府を埋め尽くす敵の包囲網を破り、敵を撤退させることが出来るのかもしれない。

「出来るだけ隼鷹を守るクマ。隼鷹が艦載機を召喚出来るかがカギだクマ」

ハルトとの最期のふれあいが終わった後、いつものように頼もしい顔に戻った球磨は、私と北上にだけそう告げた。球磨は、この戦いを潜りぬけ、ハルトの元に戻るつもりだ。その気迫は凄まじく、今も妹の北上と共に、死なないように……というよりも沈められる前に相手を沈めて少しでもダメージを減らそうと、敵陣のどまんなかで、たくさんの敵に囲まれつつも暴れまわっている。

一方で、愛する男の残酷な最期を経て、隼鷹はしばらくの間使い物にならなくなっていた。気持ちは分かる。あれだけ互いを愛し合っていた二人だ。その相手が理不尽に……しかも残酷に奪われてしまったては、その士気もきつと消沈する。

「古鷹が轟沈した時の私もそうだったな……」

隼鷹はうつろな眼差しで空を見ていた。まるであの時の私のようにだと思しながら、私も敵を一体一体、確実に倒していく。

「隼鷹! そろそろしっかりするクマ!!」

敵の駆逐艦を一体撃沈しながら、球磨がそう叱咤していた。違うんだよ球磨。確かにそのとおりだけど……今はそんなこと考えてられないんだ。愛する人をあんな風に奪われてしまったんだ。たとえば本人にその気はなくても、気持ちが折れてしまうんだよ。

——でも加古は立ち直ったよ

ずっと聞きたかった声を聞いた気がして、砲撃の傍ら振り返った。ひよつとすると姿が見えるかも知れない……あの、黄金に輝く優しい眼差しをたたえた姉の姿をもう一度見ることが出来るのかも知れない。……そんな淡い期待を胸に秘めて振り返ったが、やはりその姿は見えなかった。

「……いるわけないよね」

さっきの古鷹の声は、きつと空耳だ。そう思い、砲撃を続行した。私の姉だった古鷹は、自己犠牲心の強い、とても優しい人だった。泣いてる子がいれば、必死に激励しようとして、段々感化されて一緒に泣き出すような……落ち込む子がいれば、なんとか激励しようとかんばるうちに、感化されて一緒に落ち込んだじやうような……そんな人だった。

あの日……私の最も大切な姉だった古鷹は、敵の砲弾の雨あられにさらされた私と敵艦隊の間に立ちふさがり、私の代わりに敵の砲撃を一身に受け、轟沈した。

『古鷹!! なんで?! 逃げればよかったじゃん!! 私を置いて逃げればよかったのに!!』

『んーん……私は加古のお姉ちゃんだから……守りたかったんだ……』

『そんなの関係ないよ! 私のミスなんだから……!』

『えへへ……お姉ちゃんらしいこと……出来たかな……?』

少しばかり昔のことを思い出した後、再度隼鷹の様子を伺った。さっきまで魂の抜けた眼差しで空を見ていた隼鷹の目に、光が戻った。隼鷹は立ち上がって私のそばまで来た。その目はキツと前を向いていた。

「ごめん加古。待たせたね」

「もういいの?」

「ああ。今はやらなきゃいけないことをやるよ。提督とは、その後で会えばいい」

戦いが終わった後、隼鷹が何をするつもりなのかは敢えて聞かない。少なくとも今は隼鷹の目に光が宿った。それでいい。今はそれだけでいい。

「加古、頼みがある」

「ん?」

「あたしはこれから艦載機を召喚する」

「だね。空母はそれが……仕事だツ……!」

「制空権が取れば、あんたなら観測射撃も出来る。それまでの辛抱だ。それまであたしを守ってくれ」

言われなくとも、すでにそのつもりさ隼鷹。球磨も北上も、生き残るためにその作戦で動いてくれる。あとはあんたが艦載機を召喚してくれば、それでこの作戦は完了だ。

「オーケー。隼鷹は召喚に専念して。私たちが指一本触れさせない」
「ありがと。恩に着るよ加古」

隼鷹が巻物を広げ、艦載機召喚の準備に入った。その様子が敵にも伝わったのだろうか。駆逐艦の何体かが隼鷹に狙いを定めたのが見えた。

「球磨!・北上!!」

「クマ?」

「ん?」

「隼鷹を守るよ! そいつらを頼む!!」

「りようかい」だクマー!!」

隼鷹に狙いを定めた駆逐艦を撃沈する二人。二人は敵陣の真ん中でわざと注目を浴びて、隼鷹から注意を逸らさせる役目を引き受けてくれた。二人は敵陣のどまんなかで、球磨は砲撃で、北上は魚雷で次々と敵を撃沈していく。

一方、隼鷹のそばで私も砲撃を敢行し、敵を一体一体始末していった。いくら球磨と北上の二人が敵陣でヘイトを集めてくれていると

いっても、やはり敵にとって一番の脅威は、艦載機を多数召喚できる隼鷹だ。何体かは球磨と北上をすり抜け、こちらに砲撃をしてくる。それらを潰し、隼鷹を守るのが私の仕事だ。

「残りは私に任せて、あんたたちは敵陣を引つ掻き回すんだ！ 隼鷹が艦載機を召喚するまで絶対に持ちこたえるよ!!」

「任せて」

「だクマツ!!」

こうして、召喚中の隼鷹を守ることに、私達は全力を注いだ。

数分の間、球磨と北上は敵陣の中で大暴れしてくれていたが、それでもやはり敵の数は多すぎる。すべてのヘイトを二人に向けることは不可能な以上、あぶれた敵は私が始末するしかない。砲撃をされれば……

「……チツ!!」

私は一瞬の隙をついて隼鷹に向けて放たれた砲撃を……

「ぐあッ……」

「加古……!」

私の全身で受け止める。隼鷹が召喚術に集中出来るよう、守らなければ……もし隼鷹が中破でもして召喚術が不可能になったら、この戦いを生き延びることは不可能だ。

「……大丈夫。あんたは私が絶対に守りぬく。だから早く艦載機を呼んで」

「……分かった」

1発の砲撃を許してしまったその隙をついてさらに、隼鷹めがけて砲撃の雨あられが襲いかかった。私はそれを、全身で受け止める。たとえ1発でも、絶対に隼鷹に届けさせはしない。

「やめるクマ!!」

「加古を狙うやつはやつちやうよ!」

私に砲撃を敢行するやつらを次々に撃沈していく球磨と北上だが、敵の数があまりに多すぎる。砲弾の雨あられは一向に止まない。次々に撃たれた砲弾は私の身体に食い込み、傷を作っていた。

「古鷹……」

つい、口をついて出た。今の私と同じように、一切の砲撃を私に着弾させることなく、すべてをその身に受けて轟沈した古鷹……あんたも、今の私と同じ気持ちだった……？

——そうだね きつと同じだったと思うよ
そつか……へへ……なんかうれいな……

敵の砲撃は未だ止まない。隼鷹は一心不乱に召喚術の詠唱をしている。

「?!」

私の左目に徹甲弾が飛んできたのが見え、私は反射的に頭を動かしてしまった。徹甲弾は私の左目のまぶたをかすめて皮膚を破り、私の目からは大量の血が吹き出た。

——古鷹?! 大丈夫?!

大丈夫。古鷹と同じ左目に傷が入ったんだ。これで私も、オツドアイになれるかな……

こんなことをぼんやりと考えている間も、私の身体には容赦なく敵の砲撃が突き刺さる。あの時の古鷹のように、私は絶対に隼鷹を守りぬく。あの時古鷹に助けられた私が、今度は古鷹と同じ方法で仲間を守れていることが、なんとなくうれしかった。

次第に身体に力が入らなくなり、視界が狭まってくる。私の視界の左半分はすでに潰れてしまっているが、そこからさらにぼんやりと狭まってくる視界の先には、古鷹がいた。

「古鷹……?」

私の視界の先にいる古鷹は、あの日のように私に背中を向け、身体を大の字にして、私を砲撃から守るように立っていた。砲撃はその身体をすり抜けて私の身体を傷つけていたが、古鷹の背中は、確実にそこに存在していた。

「古鷹……そこにいるの?」

——ごめんね加古 今の私じゃ、加古を守れない

そんなことない。今もこうして私を守ってくれている。私の心が折れないように、私の心を支えてくれている。だから私は、心が折れずに隼鷹を守れているんだ。私が一人で隼鷹の盾になったら、

きつともう私は轟沈していた。古鷹と一緒に隼鷹を守ってくれているから……私を支えてくれているから、私は隼鷹を守れているんだ。

——そっか よかった

あの時のように、私の前に立っている古鷹が振り返り、微笑んだ。……その笑顔が見たかった。ずっと、その笑顔に会いたかった。あの日突然いなくなってしまうたその笑顔を、私はもう一度見ることが出来た。

だったら……私は、まだがんばれるよね。

「まだ寝ないよ！ 私を眠くするにはぬるい砲撃だ!!」

出来る。今の私なら、隼鷹を守り通せる。古鷹がそばにいるのなら、私はいくらでも強くなれる。足が沈み始めてるが気にしない。私の今の仕事は隼鷹の盾になることだ。なら、足ぐらい沈んでもいい。

隼鷹の呪文の詠唱が終わり、彼女の身体が眩しく輝いた。その瞬間、広げていた巻物からおびただしい枚数の人型の式神が飛び立ち、それらが艦載機となって空を埋め尽くした。

「まだだ!! まだ呼べてない!!」

隼鷹がそう叫び、巻物がさらに輝く。そして、さらにその数倍のおびただしい数の人型が飛び立ち、それらが艦載機となって大空を飛び立った。

「ものどもかかれええええ!!」

隼鷹はたくさんの艦載機を召喚し、周囲の敵艦を次々に撃沈し始め、空を覆っていた敵の艦載機を撃墜し始めた。今まで絶望的だった戦況に光が刺した。このまま行けば、制空権も奪取できることだろう。これだけの艦戦に守られれば、再度制空権を奪取されることはないはずだ。

それに、隼鷹は同時に信じられない数の艦攻、艦爆を召喚している。これで、敵の大半を撃沈出来るはずだ。これで希望は繋がれた。この戦いに勝ち、生き残れる可能性が上昇した。……私以外は。

もう、私が観測射撃で敵の数を減らさずとも、充分に敵の戦力を削ることが出来るだろう。私は……私と古鷹は、隼鷹を守り通した。私たちの仕事は終わった。

急に私の全身から力が抜けた。隼鷹を守り通したという安心感のためか、足の力が抜け、朦朧とした意識を覚醒させ続けた身体中の痛みもやわらぎ、次第に眠気が襲ってきた。

「へへ……よかった……隼鷹……」

「ん……？」

「ありがと……こんなにやってくれるとは思わなかった……」

「あなたのおかげだよ……あなたのおかげで、みんなを召喚できた……」

「そっか……よかった……」

隼鷹からの言葉は素直にうれしいものだったが、今はもう単純に眠い。立っているのも大変になってきた。立ち続けることすら困難になった私は、そのまま仰向けに海面に倒れた。

海面に倒れたのに、自分の頭が妙に高いことに気付いた。加えて、頭に伝わるこの懐かしい感触とぬくもり……狭くなった視界で空を仰ぐ。私の顔を覗きこむ、懐かしい古鷹の笑顔がそこにあった。

——加古

「古鷹……私、あの時の古鷹みたいに……がんばれたかな……？」

——うん 加古ががんばってくれたから

隼鷹さんも、みんなを呼ぶことができたんだよ？

「そっか……幻じゃないのか……」

狭くなった視界に古鷹と共に写ったのは、大空を飛び交うたくさんの艦載機と、懐かしい空母たちの顔ぶれだった。そっか……隼鷹は、艦載機じゃなくてみんなを呼んだのか……懐かしいみんなを、呼んでくれたのか……

「だからあんなに……たくさんの……艦載……機が……そっか……」

大空を飛び交う艦載機に手を伸ばす。はるか上空を飛んでいるはずの艦載機に手が届きそうで……でも決して届くはずもなく、掴もうとした私の手は、何も掴むことが出来なかった。

古鷹、なんかすぐく眠くなってきた。

——そっか……加古、がんばったもんね

うん……どうしてだろう。古鷹が沈んでいった時はあんなに怖

かったのに、今自分の身体が沈んでいくのは全然怖くない。むしろ満ち足りた気持ちで眠ることが出来る。

「古鷹……いつもみたいなのに、私達が大好きな桜の木の下で、今日も一緒に寝ようか……」

私を見下ろす古鷹が、泣きながら満面の笑みで何度も頷いてくれた。不思議だな……古鷹の膝枕で眠るのは随分久しぶりのはずなのに、まるで昨日も一緒に寝たような感覚がする……

「加古!!」

「沈んじやダメクマ!! みんなで帰るんだクマ!!」

うるさいな……これから古鷹と一緒に昼寝するんだから邪魔しないでよ球磨……それに私、大好きなあの場所で、古鷹と一緒に寝るだけさ。それぐらいいいじゃん……寝かせてよ北上……

「加古……ありがと……またあとで……」

うん。ちよつと寝たらまた会いに行くよ隼鷹。

「あ……ハルごめん。枕もう使わない……」

フとハルにもらった枕のことを思い出した。困ったことに、ハルの枕はもう二度と私は使わないであろうことに気付き、胸がチクリと傷んだ。

——ハルさんに悪いことしちやったね

いいさ。次会った時、私が謝るよ。なんとなくだけど、ハルならきっと許してくれる。『そら姉ちゃんの膝枕には負けるわ』って笑ってくれるよ。ただ、謝るのはずっと先の話になるだろうけれど……

——ごめんね 守ってあげられなくてごめんね

膝枕しか出来なくてごめんね

古鷹が謝ることなんて何もないよ。それに、私は満足してるんだ。隼鷹を守って……あの時の古鷹と同じことが出来て、それでまた古鷹と一緒に眠れるんだ。こんなうれしいことはないよ。沈んでいく身体に感じる、海の冷たさも心地いいぐらいさ。心地よくて眠くなってくるほどに、私は今気持ちいいんだ。

球磨……私はこれから、ちよつと長い昼寝をするよ。球磨とハルの幸せな姿は多分見れないな……起きる自信ないや……でも、二人は幸

せになるって分かりきってるから、心配はしてないよ私は。

北上、私の分まで、二人の幸せを近くで見守ってあげて。報告は急がなくていいよ。むしろいらぬ。私の分まで見ててくれればそれでいいから。だからのんびり、じっくり二人に付き合っただけ。

隼鷹……先に寝て待ってるわ。あんたはちゃんと提督と一緒に来てよ？ じゃないときつと提督泣いちゃうから。あの人、あんたのことが本当に大好きだから。

んじやあみんな……おやすみ……古鷹、寝よっか。

——うん 加古……おやすみ

終わり。

あたしの望み

『隼鷹。俺と一緒に……人生を歩んでくれないか』
嘘つき。

『隼鷹は俺の天使！ マイスイートハニー隼鷹!!』

一緒に人生を歩いてくれるって言ったじゃん。

『隼鷹!! 愛してル!! ……だカラ……絶対二沈むなあああアアア
ア!!!』

あんたが先に死んでどうするの……あんたが隣にいないと……あたしは……

おびただしい数の敵艦隊に包囲された絶望の状況の中、あたしはそれ以上の絶望に突き落とされ、呆然と空を見上げて提督の残滓を探すことしか出来なかった。

この防衛戦において、提督は私たちと一緒に最前線で指揮をとることに固執したが、それをあたしたちは拒否した。

「隼鷹……俺はお前たちと一緒に戦いたいんだ」

「ダメだよ。指揮官が前線に出て方が一死んだら、勝てる戦いも勝てなくなる」

「……」

「提督、あたしたちはね。ただ守るためじゃないんだ。球磨も北上も加古も、守るだけじゃなくて、生き残ることを考えてるんだよ」

「……わかった」

最終的に提督は渋々執務室での指揮を呑んだ。これで提督は守れる。あたしが沈んでも、あたしが愛する男はこれで守ることができる。……その時はそう思った。

だが実際の戦闘はそう甘くはなかった。執務室で指揮を取っていた提督は、戦闘が始まってまもなく、三式弾の雨に射たれた。対策は万全だったはずだが……資金に乏しく設備の維持管理に難があったためか……執務室は三式弾の雨で崩壊し、中で指揮を取っていた提督を容赦なく潰し、焼いた。

私の耳にこびりついて離れない、愛する男の断末魔の通信……提督

『ほう』

『一つは、提督と一緒に、平和な毎日を通す』

『いいね。実現させよう』

『もうひとつがさ。死ぬ時は轟沈じゃなくて、今みたいに……惚れた男の腕の中がいいな……なんて』

『……』

『ほら、艦娘つてさ。死ぬ時は海の上じゃん。そうじゃなくてさ』

『聞かなかったことにしてやるから、二度とそんな話をしないでくれ』

その望みは、もう叶うことはない。なぜならあたしが愛する男は、私より先に逝ってしまったから。

別に深い意味があつて言ったわけじゃない。ただどのような形であれ、死ぬ時はこの男に抱かれて死にたい。提督に最期を看取って欲しい。提督とケツコンして何度も彼に抱かれるようになり、この人に最期を看取ってもらいたい……そう思うようになった。

提督がこの話を聞きたがらなかった理由はよく分かる。彼はもつと前向きな話が出たかっただけだ。あたしたちの無事と幸せを願ひ、そのためならどれだけ上層部から煙たがられようと実現してしまう提督は、あたし達を本当に大切にしてくれていた。

自身が『それがみんなのためになる』と思えば、提督はどんな苦労も厭わなかった。どんなに司令部に煙たがられ憎まれようと、何度も何度も頼み込み美容院を建てた。以前に率いていた鎮守府では、解体処分された艦娘たちの処遇改善の上申書を常々出していたとも聞く。彼はそんな人だ。軍人としての厳しさより、人としての優しさと朗らかさが似合う男だった。

そんな彼が、最前線に建てられたこの鎮守府を任されたのは……ある意味では彼を疎ましく思った司令部の意趣返しかもしれないし、ある意味では名采配といえた。この激戦区……次々と仲間が沈んでいくこの環境下で、皆がそれでも希望を持って戦ってこれたのは、彼の功績が大きい。

そんな提督に、あたしが人生のパートナーに選ばれたことが、あたしにはとてもうれしかった。女性として魅力的な子ならもつと他に

もいたし、彼に惹かれる子も決して少なくない中で、彼はあたしを選んでくれた。

『ねえ飛鷹?』

『んー?』

『えとね……』

『なんなのよ急にかしこまって……隼鷹がそんな態度とるだなんて怖いわね……』

『プロポーズされた……』

『え……提督から?』

『うん』

『ホントに?!』

『う……うん』

『よかったわね隼鷹!』

『ありがと……』

提督からのプロポーズを受けた後、そのことを真っ先に伝えた飛鷹は、自分のことのように喜んでくれた。『妹と義理の弟を守るためにも、私はこれからも頑張らなきゃね!』と張り切り、次の日から提督にも姉の顔を見せ始めていた。

その後、飛鷹が轟沈し、他の空母のみんなも轟沈していき……最後に残ったあたしは、皆の艦載機を受け継ぎ提督と共に生き抜いて、平和な世界で幸せに生きようと決意したのに……皆の分まで、提督と幸せになろうと決心したのに。

——いつまで腑抜けてるのよ!

懐かしい声が耳元で聞こえた気がした。いつも私のことを心配してくれていた、姉の飛鷹の声だ。もう長い間聞いてなかったのに、今も鮮明に思い出せる飛鷹の声が聞こえた。

『飛鷹?』

——提督にはいつかまた会える それよりも今は、自分の仕事をしなさい!

……そうだね。提督にはまた会える。すぐかもしれないし、すぐじゃないかも知れない……でもきつとまた会える。ならば今は泣い

てる場合じゃないね。今は戦う時だね飛鷹。

改めて戦場を見る。球磨と北上が敵陣に切り込み、加古があたしを守っている。三人の連携を見るに、目的はあたしの防衛。……ならばあたしが取るべき行動はひとつだ。そしてそれには、加古の協力が必要だ。

加古に近づく。加古は球磨と北上が倒しそこねた敵艦を正確に打ち抜いていた。近づくあたしに気がついた加古の目にはまだ光が宿っている。加古もまだ、この戦いを諦めてはいない。

「ごめん加古。待たせたね」

「もういいの？」

「ああ。今はやらなきゃいけないことをやるよ。提督とは、その後で会えばいい……加古、頼みがある」

「ん？」

「あたしはこれから艦載機を召喚する」

「だね。空母はそれが……」

あたしの方を見ることなく、冷静な砲撃を敢行し続けている加古。今も球磨が撃ち漏らした敵を一体、重巡の強烈な砲撃で始末していた。

「仕事だッ……！」

「制空権が取れば、あんたなら観測射撃も出来る。それまでの辛抱だ。それまであたしを守ってくれ」

うぬぼれでもなんでもない。この絶望的な状況をひっくり返せるのは、空母であるあたし以外にいない。

「オーケー。隼鷹は召喚に専念して。私たちが指一本触れさせない」

加古は笑顔でそう答えてくれた。ありがと。恩に着るよ加古。それじゃあやろうか。

飛鷹譲りの巻物を大げさに広げ、あたしは召喚術の準備に入った。加古が球磨と北上に指示を飛ばし、あたしを敵から守ってくれる。おかげであたしは召喚術に専念が出来る。ならばあたしは、一秒でも早く術を完成させよう。あたしはただひたすらに詠唱を続け、術の完成を急いだ。

「ぐあッ……」

加古の悲鳴が聞こえた。詠唱を中断するわけには行かないが、そうも言ってもらえない。加古を見ると、彼女はあたしを撃ってくる敵艦隊の前に立ちふさがり、その砲撃の一切をその身で受けて、あたしを守っていた。

「加古……！」

「……大丈夫。あんたは私が絶対に守りぬく。だから早く艦載機を呼んで」

分かった。あたしは自分の仕事をする。この大空を、あたしの艦載機で埋め尽くす。

——がんばって

飛鷹の声が再び聞こえ、あたしに力をくれた。詠唱が完了し、召喚する準備が整った。

「いくよ飛鷹」

——ええ

いつの間にかあたしの背後に立っていた飛鷹と共に、巻物を翻した。その途端、巻物からあたしのヒトガタが飛び立ち、それらが大空を駆け巡って艦載機に変化した。艦戦が敵艦載機を次々と撃墜していき、艦攻と艦爆が敵艦隊に向かって飛び立っていった。

——隼鷹!!

分かっている。これで終わりじゃない。あたしはまだ呼べる……飛鷹がいるなら、まだ呼べる!!

「まだだ!!… まだ呼べてない!!」

再度巻物を展開し、あたしは飛鷹と共に艦載機を召喚した。……それは、空母みんなから預かった艦載機と、それにこめられた、みんなの気持ち。

「ものどもかかれええええ!!」

私の背後に、かつて共に戦った空母たちの姿を感じた。彼女たちは矢を構え、からくり箱を開き、たくさんの艦載機を空に放ってくれた。

——数が少なくても精鋭だから……!!

ありがとう……瑞鳳の天山は本当に心強いよ……

——攻撃隊発艦!!

——サーチ・アンド・デストロイ!!

ありがとう千歳、千代田……やっぱりあんたたち、仲いいね……

——アウトレンジで決めるわよ!!

そうだね瑞鶴……あんた、アウトレンジにこだわってたもんね……

——行くわよ! 全機爆装!!

飛鷹……私の姉……やっぱあんた、頼りになるわ……

あたしが呼んだ……いや、みんなが発艦させたおびただしい数の艦載機は、大空を埋め尽くしていった。瑞鳳の天山と瑞鶴の彗星が敵艦隊を次々と撃沈し、千歳と千代田の艦戦が敵機を次々と撃墜していった。そして飛鷹が放った艦爆たちも、敵艦隊を次々と撃沈していった。

その身で砲撃を防ぎ続けた加古が倒れ、防いでくれていた砲弾のすべてがあたしの身体に命中しはじめた。でもね。もう遅いよ。あたしは自分の仕事をした。あとはあんたたちが沈むのを待っただけさ。

確かに、今のあたしは気力が尽きて動けない。砲撃を身をよじって交わすことすら不可能だ。このまま、いずれ沈むだろう。限界以上の艦載機を召喚し、かつての仲間を呼んだんだ。仕方ない。もう立ってるだけの元氣すらないよ。

……でも、あんたたちの負けだ。あんたたちは、あたしたちに負けたんだ。あたしたちが呼んだみんなに負けたんだ。

この艦載機たちはあたしが呼んだんじゃない。あたしが呼んだみんなが放った艦載機だ。だからあたしを沈めても無駄だよ。あたしたちは勝った。

「へへ……よかった……隼鷹……」

「ん……?」

「ありがとう……こんなにやってくれるとは思わなかった……」

すでに息も絶え絶えの加古が、あたしに向かってそう言ってくれた。何言ってるんだ。あんたのおかげだよ。あんたのおかげで、みんなを召喚することが出来た。

「そっか……よかった……」

あたしの言葉を聞いて満足したのか……それとも安心したのか、加古はそのまま仰向けに倒れた。砲撃で潰されたのだろうか……姉の古鷹と同じ左目が潰れていた。こんなになってまであたしを守ってくれたおかげで、あたしはここまでのことが出来た。加古、ありがとう。

「加古……ありがと……またあとで……」

もはや気力も尽き、動くことも、敵の砲撃を回避することも出来なくなつたあたしは、ほどなく轟沈してしまうだろう。加古、あとでじっくり礼を言わせて。提督の元に行く前に、酒でも奢らせて。

加古が海中に沈んでしばらく経つた頃、大幅に頭数を減らした敵艦隊が、少しずつ撤退していくのが見えた。それにつれて、大空でひしめきあつていたあたしたちの艦載機が次第に姿を消していく。数枚のヒトガタは元の紙に戻つて私の元に戻ってきたが、行き場をなくしてやがて着水し、ふやけて沈んでいった。

ヒトガタが行き場を失くした理由は明白。あたしの巻物はすでに海中に没し、あたしもまた、限界まで気力を使い果たし敵の攻撃にさらされた結果……身体の半分以上がすでに沈んでいるからだ。

「隼鷹ー」

「沈んじやダメクマあああッ!!」

ズタボロになつた二人の姉妹があたしの元に駆け寄ってきた。よかった……あんたらは無事だつたんだね……

「二人とも……ハルに……よろし……」

二人は急いであたしの元に来ようとしたみたいだけど、あたしに気づくのが遅かつたみたいだ。二人はタッチの差で、あたしの轟沈に間に合わなかつた。必死に伸ばした二人の手は、あたしに届くことはなかった。あたしは冷たい海の底に沈んでいった。

——隼鷹、お疲れさま

飛鷹たちこそ……ありがとう。みんなのおかげで、北上を助けることが出来た……球磨を惚れた男の元に行かせてやる事が出来た。どれだけ感謝しても足りないよ。ありがとう。

——隼鷹 俺は言つたはずだ 生き延びると言つたはずだ

提督……あんたこそ、あたしとの約束を破ったくせに……あたしはあんたの隣に行くよ。それが約束だからね。

——……生き延びて欲しかった

いいよ。あとは球磨と北上に任せよう。あたしたちが成し得なかったことは、きつと球磨とハルが成し遂げてくれる。そして二人の行く末は、きつと北上が見守ってくれる。だから大丈夫。あたしたちの希望は、三人に託そう。

……思い出した。結局あたしは、この男の胸で死ぬことは出来なかった。あたしの希望をさりげなく叶えた川内が羨ましい……あたしも惚れた男の腕の中で死にたかったな……こんな冷たい海の中じゃなくてさ。

——すまない……

いいよ。仕方ない。だから提督。寒くならないように、またいつもみたいにあたしを抱いてよ。

——短い時間だったが……隼鷹とともに歩いて幸せだった

あたしもさ。あんたの隣にいられて、とても楽しかったよ。でもね。あたしはまだまだあんたのそばから離れないよ。そういう約束だからね。

さーて……提督。あんたの天使の隼鷹さんがこれから帰るよ。惚れた男の腕の中にね。

終わり。

番外編　く夜戦トーナメントく
お姫様はハル

『ハルは大至急執務室に来てくれ。繰り返す……』

午前中の営業が終わって午後の開店までの間の休憩中、一人で居住スペースでごろんごろんして遊んでいたら、こんな緊迫感に溢れた提督さんからの放送が鎮守府に鳴り響いた。

「なんだなんだ？」

はて……何かマズいことでもやらかしたか？ ひよつとしたら金の計算が合わないとか提督さんが時々俺にくれる食い物のちよろまかしが上層部にバレたとか……？ まあここでうだうだ考えていても仕方ない。不安を抱えながら執務室に向かう。

執務室に向かう途中に気付いたのだが、鎮守府内に誰もいない。いつもなら昼寝ポイントを通れば鼻の頭にちようちよが停まっている加古が居眠りしているし、元氣いっぱいの暁ちゃんとビス子が走り回っているんだが……今日の鎮守府は水を打ったように静かで、聞こえてくるのは波の音ぐらいだ。

ついでに言うと、いつもならだいたいこの時間には店に来て霧吹きで店内に過剰に湿気を供給している妖怪アホ毛女すら姿を見せていない。一体何があったというのか……ひよつとしてこの静まり返った鎮守府内と何か関係があるのか……

「とんとん。提督さん。ハルです。着ましたよー」

『来たか。入ってくれ……』

執務室のドアをノックし、中にいるであろう提督さんに声をかける。心持ち声に緊張感が感じられるのは、多分俺の気のせいではないだろう。

執務室のドアを開ける。

「あ、来たクマね」

「やっと来たわねハル……」

「待ちわびたわよ！ ふんすか!!」

鎮守府内が静まり返っている理由がよく分かった。艦娘は全員、この執務室にそろっていた。彼女たちは自身の席に座る提督さんを囲むように立っていて、表情は皆一様に険しい。……隼鷹と北上以外は。

「それじゃまるで私が間抜けみたいじゃん」

「だってお前、実際いつもの緊張感ゼロな表情じゃんか」

「来たかハル……」

どっかの特務機関の司令のようなポーズで机に肘をつき、実に険しい顔をしている提督さん。こんなに苦悩した表情を浮かべる提督さんも珍しいな……

「何かあったんすか？」

「ああ……」

提督さんが額に冷や汗をたらしながら説明してくれた所によると……本日、暁ちゃんとビス子の両名によって、ある上申書が提出されたらしい。

「はあ……上申書ですか」

「ああ。読んでみるか？」

「いいんですか？」

「いいよ。別に機密ってほどではないしな……」

そう言いながら、提督さんは一枚の書類を俺に手渡してくれた。『上申書』と言うからには正式な書類なんだろうが……

その自称『上申書』には、こんなことが書いてあった。

上申しよ

最近、かんむすのみんはたるんだと思います。

このままたるんでは、一人まえのレディーにはなれないです。

ついては、れん度向上とみんなの気のひきしめのため、

なによりも一人まえのレディーとなるため、

今日のよる、やせん演習をかねたトーナメント大会を行うことを上申します。

かしこ

○月○日 あかつき びすこ

「……ビス子」

「何よ?」

「この上申書き。お前も連名なんだよな」

「そうよ」

俺の問いに悪びれる風もなく……むしろ誇らしげに髪をフアサツとなびかせたビス子。……なんだこの小学生の絵日記みたいな紙は。軍人ではない……それ以前にサラリーマン経験すらない俺でも、これが正式な書類の規格からはみ出たものであることが分かる。

大体、上申書の最後を『かしこ』で締めくくるってどうなんだよ。そらあ暁ちゃんどビス子は女だから『かしこ』を使う事自体は間違いではないけど、そのかしこ自体上申書にはいらなないよなあ? これじゃ書類つっより、ちよつとだけ背伸びしたお手紙だよなあ?」

「で、これがどうしたんすか?」

「ああ。書式はどうあれこのような上申が出た以上、無視するわけにもいかない。ひいてはハルの許可を得た上で、今晚夜戦演習を兼ねた一対一の夜戦トーナメント大会を行おうと思っている」

そんな提督さんの説明を聞きながら、『そういや昔、ロックなBGMに乗せてランスでド突き合う面白いトーナメント映画があつたなあ……』なんてのんびり考えていた。ロック・ユー!

……いやちよつと待て。

「? 提督さん、一つ聞いていいですか?」

「いいよ」

「なんで俺の許可がいるんです? 艦娘たちの夜戦演習の話つてことは、鎮守府の運営に関わることですよねえ?」

「だなあ」

「だとしたら俺はまったく関係ないですよね。そらあ演習だけどイベントみたいなものだから見物ぐらいはするかもしれませんが……」

「……」

提督さん、なぜ俺から目線を外すんですか。

「おい球磨」

「クマ……」

お前もなぜ俺と目を合わせないんだよ妖怪アホ毛女？

「教える隼鷹」

「夜戦だからあたしや関係ないし〜。他の子に聞いて」

「北上」

「私も辞退したからパス。他の子に聞いて〜」

なんだ？ なぜ誰も理由を話そうとしないんだ？

「誰か説明してくれ。トーナメント大会大いに結構だが、なぜ俺の許可がいるんだよ？」

「つーん……」

「ぷーい……」

「クマ……」

「ぐふふふ……」

「くかー……」

知らんうちに鼻ちようちんを生成しながら居眠りし始めた加古と薄気味悪い笑みを浮かべる川内以外の全員が俺から目をそらしている。……なんだなんだ？ 俺のあずかり知らないところで一体何が起こっているんだ？

「まあいいじゃんいいじゃん。ハルが『いいよー』って言ってくれれば、夜戦できるんだしきー」

素晴らしいながら川内が気安く俺の肩をバンバン叩いてくる。いや待て。そういう問題じゃない。

「提督さん……」

「ハル。何も言わず、やってもいいと言ってくれないか？」

「いやだから、そこでなんで俺の許可があるんすか……」

やはり核心に触れると皆俺から目をそらす……一体何なんだこれは……ええい仕方ない。

「……あー、はいはいわかりました。許可します。やっていいですこれでもいいですか？」

「?!」

「クマツ?!」

「よしッ！ これで夜戦がッ!!」

「これで一人前の!!」

「れでいー!!」

「ぐー……」

「まあ仕方ないわな」

「あー……オーケーしちゃった……」

呆れ果てる隼鷹と北上以外の反応は様々……夜戦だから大喜びしてる川内はまあいつもどおり。加古は聞いてるんだか聞いてないんだか分からんレベルで鼻提灯をふくらませていて立ったまま熟睡中。暁ちゃんどビス子はなんだかガッツポーズして、球磨に至っては戦闘意欲満々といった感じでアホ毛がまつすぐに天を突いていた。

「やっちゃったねハル兄さん」

「兄さんはやめろ北上。つーか何なんだよこれ。なんで俺の許可がいるのかそろそろ話してくれてもいいだろう?」

「えーとね……このトーナメント大会、優勝したら賞品が出るんだけど……」

困ったような……でも内心かなり呆れ果てているような表情を浮かべてほっぺたをぽりぽりとかきながら北上が説明してくれた。

「その賞品つてのが、『ハルに膝枕で耳掃除してもらう権利』で……」

はい? 俺が? 優勝者に?

「そ」

「膝枕?」

「やー」

「んで耳掃除?」

「ハルの膝枕は暁がもらったわ! そうすれば暁は一人前のれでいー!!」

「グヒヒヒヒヒ……やせん……これで夜戦が……!!!」

「ハルの膝枕は渡さんクマ……!!!」

拍子抜けしたというか何というか……そんなものためにみんなこんなに目くじら立ててるのか……。

「すまんハル。俺もみんなを止めたんだが……」

「いや別にいいですけど……みんなそんなに膝枕やって欲しいんすか……」

「皆それぞれに目的はあるが……少なくとも暁とビス子はハルの膝枕が目的だな」

提督さんの視線につられて俺も暁ちゃんとビス子を見た。二人してガッツポーズを決め、『これで優勝して膝枕してもらえれば一人前のれでいー……!!』と声を揃えてつぶやいてやがる……なんで膝枕されたら一人前のレディーなんだよ……

「なにッ?! ついにハルが膝枕を呑んだ?!」

みんなからワンテンポ遅れて加古の鼻提灯がパチンと割れ、急な目をクワツと見開いてそんなことを叫んでいた。加古さん、あなたみんなのリズムに乗れてませんよ……

「いやハル、ホントすまん」

「いやだから別にいいですって」

あまりに申し訳無さそうに頭を下げる提督さんが不憫に思えてきた。別にそんなの気にしなくていいのに……

「そうなの？ 俺はまたてつきり膝枕は球磨だけの特権だと思ってたから……」

「隼鷹」

「ん？ どうしたー？」

「昨日の夜提督さんが俺の店に電話かけてきて、お前のことを可愛い可愛いって4時間ぶっ続けでノロケてきたぞ。ダンナをなんとかしろ」

『またそんな恥ずかしいことを……!!』『ぐ、誤解だッ?!』と夫婦喧嘩を始めた提督さんと隼鷹は置いておいて……みんなそれぞれ目的が違うってどういうことだろう？

「球磨」

「クマ？」

「お前、いつも膝枕で耳掃除してやってるよなあ？」

「そうクマね」

「んじやお前、なにが目的なんだよ？」

別になんでもない他愛無い質問のはずなんだが……急にほつぺたを赤くして口をとんがらせ、この妖怪アホ毛女はそつぽをむいた。

「き、拠点防衛戦だクマツ」

「? 意味がよく分からん……」

加古は加古で何か目的があるみたいだな……

「私はハルの膝枕で昼寝してみて、一番好きな膝枕と比べてみたいんだよ」

ものすごくキラキラした清々しい表情でそう答える加古の背後に、赤面してうつむいている古鷹の姿がうつすら見えたのは黙っておこう……つーか寝るってどういうことだよ。耳掃除して終わりじゃないの?」

川内は……

「ぐふふふふふふ……夜戦……演習とはいえ夜戦……!!!」

言わずもがなってやつですかね……

そんなこんなで各々の思惑や欲望が錯綜したまま解散し、時が刻一刻と過ぎていく。トーナメントの開始時刻は午後7時。夜戦というほど夜ではないが、日が落ちるのが早くなった結果、今ではそんな早めの時間でも充分暗い。これなら夜の哨戒任務にも支障はないだろう……という提督さんの了承を得ない艦娘たちの独断でその時刻になったそうだ。提督さんの威厳、まるでなし。

「えこひいきは駄目だクマ!!」

球磨はそんなことを言い出し、今日の晩飯は球磨から席を離して北上と二人で食べることにした。えこひいきって何だ? つーかなんで球磨とメシを食うのがえこひいきになるんだよ。

「球磨姉も意地があるんだと思うよ?」

「さっぱり意味が分からん。そもそもあいつは参加しなくても無理矢理俺に膝枕させてるじゃんか」

「乙女心が分かってないねーハル……」

「?」

離れたところで周囲に殺気を振りまきながら飯を食ってる球磨に、自然と目が行く。時折こつちに目を向け、俺と目が合うとぶいっと

そつぽを向いている妖怪アホ毛女。なんだよ。意地張ってないでこつち来ればいいじゃんか。

……あ、そういえば。北上は辞退していたことを思い出した。

「北上、お前はなんで辞退なんだよ？」

「あれー？ ひよつとして私に膝枕したいの？」

「アホ」

「出てもいいんだけどね。……でも私は人のものには手は出さない主義なんだー」

「それはそれで意味が分からん。ずず……」

「ずず……あーお味噌汁おいし」

北上と息の合ったタイミングで味噌汁をすすりつつ、周囲を見る。飯を食いながら鼻提灯を出したり引つ込めたりしている加古以外は、皆一様に周囲を牽制しながら飯を食っているようだ。普段は仲良さそうに一緒にいる暁ちゃんどビス子ですら、今日は『一人前のれでいーは暁なんだから！』『私の方が一人前のれでいーよ!!』と言いつつ合いながらの殺伐とした夕食を繰り広げている。

一方で、別の意味で周囲を牽制している子もいる。

「ぐふふふふふふ……夜戦……夜戦だよ……待ちに待った夜戦が……!!」

危険極まりない表情でよだれを垂らしながら白飯をかつこむ川内。みんなと比べても明らかに異彩を放った雰囲気の中、川内の姿を見て、俺は不安しか感じなかった。

「なあ、もし川内が優勝しても、やっぱり膝枕で耳掃除やるんだよなあ？」

「そらそうでしょー。なんたって今回の大会の目玉賞品だからね」

北上にそう言われ、再び川内の方を見る。自身の身体の内側からほとばしる情動を抑えきれないという感じで、わくわくそわそわしながら魚の煮付けを食べていた。確かに視線は煮付けに向いているはずなのだが、なぜか俺の方向から見て、その焼き椎茸のようにキラキラと光り輝く両目は、焦点が合っていないように見えた。

「川内は純粹に夜戦がやりたいから参加するんだよなあ？」

「本人そう言ってたからねえ」

「……だったらいいんじゃないの？ 耳掃除しなくてさ……」

「それは本人に言いなよハル……」

かくして夕食が終わってしばらく経過した午後7時。艦娘たちの意地と欲望に塗れた夜戦トーナメントが始まった。

隼鷹に案内されて会場である屋外演習場に向かう。ちょうど小学校のグラウンドがそのまま海になってる感じで、ズタボロながら照明もついている。おかげでもう暗いのに、割と周囲が見渡せる程度には明るい。

「はい。んじゃハルはあそこに行つてねー」

そう言われて案内された場所は、秋祭のやぐらを再利用した小高い特等席のようになっていた。どうして秋祭りのやぐらの再利用だと分かったのかというと……

「あ……」

『第一回やせんトーナメント大会だクマ』と書かれた看板の裏を見ると、『あきまつりだクマ』と書かれていたからだった。

「はい。それじゃあトーナメント大会はじめるよー」

「解説は北上と隼鷹でお送りするぜヒヤツハアアアアア」

「ウオオオオオオオオオ!!!」

出場選手5人しかないはずなのに、どこから聞こえたんだ今の地響きにも似たうねりのような雄叫びは……ちなみに今回の大会の唯一の見物客にして、優勝者に贈られるトロフィー的役割である俺は、なんだかよく分からない豪華なソファに座らせられている。この椅子、なんか見覚えあるんだけど……この、少し古くて色あせてるけど、座るとフワツと身体を包み込んでくれる感触なんか特に。

「それ、執務室のソファ。さつき提督がひーこら言いながら運んでたよ」

冷めた顔でしれつと中々ひどいことを隼鷹が言いやがった。お前手伝ったんだよな？

「やだよ重いし」

「お前と提督さんの家庭は間違いなくカカア天下だな……」

「ウオオオオオオオ!!」

おいお前ら。なんでそこで雄叫びあげたんだ。

「そしてその提督さんはどうしたんだよ北上」

「えーとね。なんか『催し物なんだから夜店でも出したいなあ』て言っただけけど、隼鷹が『いらない』つて一蹴しちゃって、シヨック受けて執務室にこもってるみたい」

——隼鷹のバカアアアア!! 隼鷹のバカアアアアアアん!!!

恐らく執務室で隼鷹に対して呪いの言葉を吐き続けているであろう提督さんに、俺は少なからず同情した。

「はーい。それじゃあ大会開始にあたり、トロフィーにして今大会のお姫様、ハルに一言もらいましょー」

北上がそんなことをのたまいやがり、急に俺にマイクを向けてきやがった。なんだそりや。一言なんて何も考えてないぞ。何言えはいんだよ北上い。

「適当にあることないこと言つときやいいんだよ」

んな無責任な……

『あー……オホン。みんな、がんばれ』

何も思いつかないので、とりあえずありきたりなことを皆に言ってみる。

「ぶーぶー!! もつと面白いことを言うクマー!!」

「そう……だー……ぐう……」

「いいからやせーん!!」

「そんなんじや一人前のレディーにはなれないわよー!!」

「だったら暁が一人前のれでいー!!」

皆口々に思いつく限りの罵倒を俺に浴びせてきやがる。なんで唐突に一言振られた上にこんな罵倒まで浴びなきやならんだ……しかもお前ら、膝枕して耳掃除して差し上げる俺に対してそんな言い方ないんじやない?

……仕方ない。俺もお姫様といえども男だ。ここは腹をくくるしかないだろう。

「優勝した人は、あたしが膝枕して耳掃除してあげる……だから……」

だからみんながんばって!! (陸奥(だから誰だ?) みたいな色っぽい声)

俺のセクシーなボイスは想像以上によく響き渡り、その途端会場は水を打ったように静まり返った。その後選手たちの方から聞こえてきたのは、落胆のため息。

「うーわ……そら私の目も冴えるわ……」

「……はあく。ハルには失望したクマ」

「いいから早く夜戦!!」

「そんなんだからハルは一人前のレディーになれないのよ……シヤイセツ……」

「ハルも落ちぶれたものね……暁の方が一人前のれでいーよ……」

艦娘のバカアアアアア!! 艦娘のバカアアアアアアアん!!!

その後、傷心の俺をほつといて組み合わせ抽選会が行われた。出場選手はトータルで5人のため、一人はシード扱いとなる。

第一試合 暁 vs ビス子

第二試合 川内 vs 加古

第三試合 球磨 vs 第一試合の勝者

第四試合 第二試合の勝者 対 第三試合の勝者

こんな感じの試合運びとなる。妖怪アホ毛女はシードか……中々の強運の持ち主とか何というか……というかむしろここは、暁ちゃんとビス子のくじ運の悪さが問題なのか。

そして、5名の選手たちの名誉や意地……欲望……突き上げる情動に塗れた、激しくもしよぼい夜戦トーナメントが始まった。

一人前のれでいーvs海の向こうから来た日本人

「ちよつとー！ 私はヤパーネリンじゃないわよ!! れっきとしたどいつちゅよ!!」

「嘘つけ!! 生粋のドイツ人が『わらび餅が食べたいわ……あのねつとりとした感触が官能的よね……』とか言うわけ無いだろうが!!」

「梅干し食べて『故郷ドイツのグロスムター（おばあちゃん）を思い出す味ね……私艦娘だからグロスムターなんていないけど』とかわけわかんないコメントを残すドイツ人なんていないクマツ!!」

「ちよつとー！ ビス子の相手はこの暁よ!!」

演習場に入ってきてトーナメント表の自身の名前を見るなり、ビス子たちが俺に噛み付いてきた。いいねえ。暁ちゃんもビス子もやる気満々で大変結構。言われっぱなしは癪なので言い返したが、その心意気や良し。ちなみにこの煽り文句を考えたのは俺だ。中々の仕上がりになったと自負している。

『さて、選手入場も終わったところで、そろそろはじめるよー』

北上の声でアナウンスが入る。突貫のイベントの割に結構本格的だなあ。鎮守府全域放送をここで行うのもけっこう大変だったろうに……なんてことを思いながら、互いに戦闘意欲満々のビス子と暁ちゃんをのほほんと眺める俺。あの二人、俺を奪い合うために戦うんだよなあ……いいなあ……お姫様ってなんだか楽しいなあ……

『ルールは簡単。一対一の夜戦演習を行って、相手が大破判定、もしくは相手に“まいった” “ごめんなさい” “こんな格好イヤだあ” 的な降参をさせると勝ちです』

『制限時間が過ぎても決着がつかなかった場合は、損小具合の低い方が勝ちになるよー』

『艦装は装備できる物なら何を使っても自由。それで勝てる自信があるなら爆雷やソナー、ドラム缶やおにぎりで戦ってもいいよー』

『あと北上、あんた明日の昼戦演習で張り倒す』

『降参の言葉に“早く修理したーい”も付け加えます』

『分かればよろしい』

『まあ戦っても負ける気しないけどね』

『いい根性してるじゃないか北上い』

新たに勃発した北上と隼鷹の遺恨を尻目に、今、一人前のれでいーこと暁ちゃんど、ドイツから来た日本人ことビス子の、血沸き肉踊る戦いが始まるのだった……!!

「ビス子……勝ってハルに膝枕してもらうのは暁よ!!」

「負けられないわアカツキ……たとえ親友のあなたにでも、譲れないものはある!!」

『じゃあはじめるよ。やつちやつてー!!』

北上の合図と同時に、演習場の照明が落とされた。と同時に演習場全域は暗闇に覆われ、比較的明るいこっちの観覧席からは、演習場の様子が分からない。

『やああ!!』

『ふおいやー!!』

ただ、時々演習場の中で『ボン』という砲撃音と共に光が一瞬だけ輝き、二人の姿がちらつと見える瞬間がある。恐らくその時、二人が砲撃しているのだろう。加えて、時々水柱が上がっているからなのか、こちらにまで海水が飛んでくることがあり、おかげで俺は水も滴るいい女になってきた。ここまで水しぶきが飛んで来るってすげえな。

それにしても……演習とはいえ戦闘をはじめて見ているわけだが……こんなに迫力あるとは思わなかった。実戦もこんな感じだとすれば、時々妖怪アホ毛女が大怪我して帰ってくるのもうなずける。音だけでも、艦娘の戦いつて凄まじいつてのがよく分かる。

『一人前のおおお!!』

『れでいいいい!!』

二人ともまけんな。がんばれ!

「ハル」

いつのまにやら、提督さんがコーヒーと皿いっぱいシュークリームを持って俺の傍らに来ていた。どうやらお姫様である俺に、試合観戦中のおやつみたいなものを作ってきてくれたようだ。なるほど。

これはちよつとしたマリー・アントワネットな気分だ。試合が楽しければシユークリームを食べればいいじゃない、的な。……違うか。

「ああ、提督さん。塞ぎこんでるって聞いたから心配してましたよ」

「心配かけてすまん。一通り泣いたあとな、みんなのためにシユークリーム作ってたんだ」

そう言つて演習場を眺める提督さんの目は、少し赤く腫れていた。正直そんなことで大の大人が目を赤く腫らすほど泣くつてどうなのよ……と思つたが、それは黙つておいたほうが良さそうだ。

「……ん、うまい。やつぱさすがつすね提督さん」

「ありがと。で、状況はどうだ？」

『今んとこ五分五分だねー。夜戦だからお互い相手の攻撃喰らつたら一発大破だし、二人とも慎重に動いてるみたい』

「へー……そんなもんなの？」

『そうだよー。夜戦になれば、私だつてビス子を一発で倒せるからねハル兄さん』

「こんなところでいちいち自分の有能さをアピールせんでよろしい」

そうして俺達が高みの見物をしている間にも、暁ちゃんとビス子の戦いは続く。『ドカン!!』というハデな砲撃音と同時に暁ちゃんの『もう許さないんだからああツ!!』という雄叫びが聞こえたところで、北上のアナウンスが入った。

『ストップ。暁が大破しちゃつたんで、ここで試合終了ー』

直後、照明が演習場を照らした。その時演習場には、海面にぺたんと女の子座りしている暁ちゃんと、その暁ちゃんに向かって砲塔を向けて立っているビス子の二人が照らしだされた。

「ぐーやーじーいー!!!」

「やったわ!! これで一人前のレディーに一步前進ね!!」

勝者にも敗者にも、平等に賛辞は贈られるべきだ。二人共、お疲れ様。

「でもアカツキ……さすがね。何度もヒヤリとさせられたわ。いくら私が夜戦が得意だと言つても、やつぱり貴方達には敵わないかもしれないわね」

「……んーん。やっぱりビス子は一人前のレディーよね。この暁に勝ったんだから、ちゃんとハルの膝枕と耳掃除をゲットするのよ?」
「ええー! 約束するわアカツキ!!」

うん。戦いのあとはお互いを讃え合う……素晴らしい精神だ。賞品が俺の膝枕と耳掃除つつーのがなんとも哀しいというか情けないというか……かくして第一試合終了。勝者は日本から来た青い目の日本人・ビス子となった。

「ヤーパーンから来たヤパーネリンってそのままじゃない! 私はどいつちゆだつて言ってるでしょ!!!」

妖怪夜戦女 V S 桜の木の所で眠る獅子

「なんか加古の煽り文句がシュツてしててかっこいいクマ……」

「そうか？」

「クマッ」

まあなあ。『獅子』なんて単語を選んだんだからけっこうかっこよく映るのかもしれないな。

「ふっふーん……川内、重巡洋艦の本当の力、見せてやるからね」

二人はすでに演習場に入っている。加古は腕を組み、自信満々にそうやってのけた。俺が付けた煽り文句はあながち間違いではないよ。うで、今の加古はまさに眠る獅子の如き貫禄に満ちあふれている。

『艦種的に考えたら、今のメンバーの中で一番夜戦が強いのは加古だからね』

艦娘のことにやや疎い俺に対し、アナウンスの形で北上がそう教えてくれた。なるほど。ということは、実は今回のトーナメントの優勝候補筆頭なのかもしれないな。

一方……

「ハアア……ムハアア……早く……早く合図をオオ……夜戦……ムハアア……夜戦は……」

川内は暴走した汎用人型決戦兵器みたいな前傾姿勢で肩で大きく息をしつつ、焦点の定まらない目で加古を見ているようだ。……提督さん、川内はあれですか？ 夜戦中毒的な何かなんですか？

「なんか最近、輪をかけてひどくなってきた気がするな川内は」

「そうなんすか？」

「ああ」

自身の顎をさすりながら不思議そうにそう言う提督のそばには、顔を真っ赤にして申し訳無さそうに佇んでいる神通と、その横でアイドルスマイルを周囲に振りまきながらぴるんぴるん回っている那珂ちゃんがあつすら見えた。

「ちくしょう……張り倒してえ……ッ!!」

「んお？」

『じゃあ第二試合はじめるよ。やっちゃってー!!』

『いくよおおおおおお!!』

『やせええええええええ!!』

ついに第二試合の火蓋が切って落とされた。照明が落ちる寸前の二人の姿は、まさに威風堂々な女戦士と、危険極まりない夜戦変態とでもいえばいいのだろうか……なんかそんな風にしか形容できないんだけどいいのだろうか……。

『いいんじゃない? 川内も楽しそうだしさー』

『いいならいいんだけどな……』

そして、今回の試合は、先ほどの第一試合と根本的に違うところがあった。

『ふんっ』

『や……ちよっ……』

『ふーん!』

『ごおのっ……変態野郎ッ……!!』

『ふーん!!』

『ちよっ……スカートひっぱら……やっ……』

……提督さん、あの二人は暗闇にかこつけて、一体何をやってるんでしょうか。

「元々川内は主機をフル活用したアクロバティックな動きが得意だ。加古の周囲を動きまわり、翻弄しているのかもしれない。スカートひっぱったりして」

ものすごいドヤ顔でそう言う提督さんだが、内容が内容だけに素直に感心できん。翻弄するのはいいとしても、なぜスカートを引っ張るのか……

「こんのおおッ!! 放せッ!!」

「ふんッ?!」

「捉えたッ!!」

今まで翻弄されっぱなしだった加古の、自信と覚悟に満ちた一言がここまで届いた。これで決まるか?!

「?!」

「ぶっ飛ばす!!」

しかし妖怪夜戦女は甘くなかった。

「探照灯照射ッ!!」

「まぶしッ?!」

突如として加古に浴びせられる強烈な光。二人から遠く離れたこちらにまで届くほどの眩しさを誇る探照灯だ。それを至近距離から直撃でくらった加古はひとたまりもないだろう。光ったのはほんの一瞬だったが、目を押えてうずくまる加古の姿は、その一瞬のうちにハッキリと見えた。

「目がああッ!!」

「突撃ッ!!」

そして『ドカン』と鳴った砲撃音。今の音は川内なのか加古なのか……

『ストップ。試合終了ー。加古が大破判定を受けたので、勝者せんだーい』

演習場の照明がついた。そこにいたのは、始まる前の変態的な姿勢とはうってかわって、自身の腕に取り付けられた単装砲を構えた凛々しい姿の川内と、その前で海面で大の字になって倒れている加古の二人だった。

「参ったあく……さすが川内。スカート引つ張られた時はどこの変態だと思ったけど……」

「まあね。下手の横好きじゃカッコつかないからね! でも加古も強かったよ!!」

「へへ……そら重巡だもん」

「さすが古鷹型!!」

そういつて互いの健闘を讃え合う二人。戦闘中こそ変態色の濃ゆい内容だったが、終わってみればやはり気持ちのいい清々しい二人だったな。

さて次の試合は……

「クッククック……格の違いを見せつけてやるクマ……!!」

ハル、将来の危機

『次の試合は、ハルの膝枕を狙うみんなにとっては憎きラスボスの登場だよー』

「誰がラスボスだクマツ!!!」

怒髪天を突くともいいたげにアホ毛をまつすぐ上に伸ばした妖怪アホ毛女が、北上のアナウンスに噛み付いていた。その姿はどう見てもラスボスにしか見えない。

対する第一試合の勝者ビス子は、いくら国籍を詐称しようが日本人になりすまそうが、やはり綺麗な青い瞳と金髪を称えた白人。まさに妖怪アホ毛魔王とファンタジー世界からやってきた正義の騎士ビス子の一騎打ちとでも言うべきか……

「もういいわよ……ヤパーネリンでいいわよ……私、どいつちゆなの……」

「クツクツクツ……ここに来て戦意喪失したクマ?」

「そんなわけないでしょ!! ハルの膝は明け渡してもらおうよ!!」

「あの膝は球磨の膝だクマ! 誰にも渡さんクマツ!!」

『……と言われていますけど、言われたハル兄さん、感想は?』

「いちいちコメントを求めんでもええわ……」

あんなことを堂々と言われても、こっちが恥ずかしい……

「お姫様だなあハル。ニヤニヤ」

「隼鷹、さつきから提督さんがお前のこと可愛い可愛いって……」

「すいませんハルさんやめてくださいおねがいます」

それはまあ別にいいとして、なんつーか第一試合のときよりも気合というか何というか……さすがに気迫が違ってきてるなあ。特に球磨。珍しいぐらいに戦闘意欲が満々だ。

「クマ……いや、ここはあえてクマ・ヨシダと呼ばせてもらおうわ!!」

「……?!」

「あなたの将来は祝福してあげる……でもね……ハルの膝枕だけは、譲れない!!」

『ねーねー。ヨシダって?』

「俺の名字だよ……お前らいつつもハルハル言つて俺の名字が吉田だつて忘れてただろ……ビス子はよく覚えてたな……」

しかしなんつー恥ずかしいことを……。だが、そんな揺さぶりである妖怪アホ毛魔王が多少なりとも動揺なんてするはずもなく……

「クッククック……そんなことで動揺するほど、球磨は甘くないクマッ」

「?!」

「今、ハルはお姫様クマ。ということは……」

「……!!」

「そう!! ハルの方こそ、『球磨型軽巡洋艦・ハル』と呼ばなければならぬクマツ!!」

うわー……。いやだ……。お姫様だけではいざしらず、俺、艦娘になるのか……。しかも球磨型か……。

「し、しまった……。この一人前のレディーであるビス子が……。このよくな単純なミスを……。!!」

お前もしまったじゃないだろビス子。何についてしまったんだ。何が単純なミスだったんだ。後でいいからゆつくり聞かせろ。

「むははははは!! 一人前のレディーが泣くクマアアアツ!! ハルはこの栄えある球磨型軽巡洋艦の六番艦になるクマツ!!」

提督さん……。俺もう帰つていいすか。明日の準備ありますし。

「駄目だハル。お前はこの戦いの発端。すべての戦いを見届ける義務があるッ!」

「めっちゃカツコイイことをドヤ顔で言ってますけど、発端は暁ちゃんどビス子の上申書ですからね? その辺勘違いされちゃ困りますよ?。」

『じゃー煽り合いはその辺にしろいて、そろそろ第三試合は始めるよ。やっちゃつてー!!』

「行くわよクマツ!!」

「クマアアアアア!!」

漫才としか思えない二人の寸劇も終わり、演習場の照明が落とされる。その直後から、演習場にドカンドカんと休むこと無く轟く砲撃

音。これは……

「他の試合に比べると予想以上に激しいな」

「ですね。二人の気迫が伝わってきます」

『フオイヤー!!!』

『舐めるなクマアあああ!!!』

あれだけアホな寸劇をやったくせに、戦いとなると二人は気性が激しいんだなあ。

「クマツ!!」

「クツ……まだやれるわよ……フオイヤー!!!」

「被弾クマツ?!」

今『被弾』で聞こえた気がするけど大丈夫か……??

「心配はいらん。演習用の模擬弾だから大丈夫だ」

「ホツ……そうですか……」

『なにになに? 自分の姉さんが心配なのハル?』

「アホ。……姉さん?」

『だってハル、球磨型軽巡洋艦六番艦になるんでしょ? ハルが妹になるのか……』

「よし。姉そっくりのアホ毛をこしらえてやるから、あとでちよもらんまに來い」

『やーだよ』

そうこうしている間にも試合は続く。心持ち、二人の砲撃の回数が少なくなってきた。……すんげーどうでもいいツツコミなんだけど、北上と隼鷹、解説として機能してなくね?

『だってしょうがないじゃん隼鷹酔っ払ってぐでんぐでんになってるし』

『ヒヤツヒヤツ! 試合を見ながら一杯つてのもオツでいいねえ』

!!

「……だからさつきから隼鷹は黙ってたのか……」

「そろそろ決着だな」

「なるほど」

『さすが提督。こつちからじゃわかんなかったよ』

おいどうした解説・北上。仕事を放棄するな。

「これでダス・エンデよ!! フォイヤツ!!」

「甘いクマツ!!」

「しまッ……?!」

「クマアアアツ!!」

周囲に『バクウアアアアン』という、トンカチでフライパンを思いつきりぶん殴ったような音が鳴り響いた。なんだこの音。今まで聞いたことないような……

『ストップ。試合終了ー。ビス子が大破判定を受けたので、勝者は球磨姉ー』

演習場の照明がついた。その時演習場に立っていたのは球磨。そしてそのそばでは、さっきの暁ちゃんと同じように、ビス子が海面にぺたんと女の子座りをしていた。

「……やられたわ。まさか素手で艦装を壊せるとはね」

「球磨は張り手には自信があるクマツ」

球磨のそのセリフを聞いて改めてビス子の艦装を見ると、主砲の部分にちようど球磨の手ぐらいの大きさの手形がくつきりついていて……俺って、常日頃あんな強烈なツッコミ受けてたんだ……。今更ながら空恐ろしくなった……。つーか頑丈だなあ俺って。

「さすがね。……よかつたら私にもそのやり方教えて」

「いいクマー」

ビス子は素直に負けを認め、球磨はそのビス子の手を取り、自身の技術を素直に伝える。うん。いかに勇者と魔王の戦いといえど、試合が終わればノーサイド。互いの健闘を讃え合うその姿は清々しい。

さて。次はいよいよ決勝戦。妖怪アホ毛魔王vs妖怪夜戦女。一体誰がこの組み合わせを予想したであろうか……。世紀の妖怪大戦が、今始まる……!!!

「ムハァー……夜戦……早く私に、次の夜戦をオオ……!!!」

「クツクツクツ……ハルを明日から球磨型軽巡洋艦六番艦にするクマ……!!!」

誰かー。助けてー。私、このままだと男なのに艦娘にされちゃう。

助けて！。

決勝戦・ラストバトル

長かった……暁ちゃんとビス子……二人のわがままから端を発し、そしてこんな一大トーナメント大会が開催され、お姫様ハルの膝枕と耳掃除をかけた艦娘たちの戦いは、この決戦ですべてが終わる……。」「長かったクマ……血の滲むような努力……終わりの見えない戦いの連続……ここまで長かったクマ……」

「おい」

「そしてこの戦いに勝利した球磨はついにハルを手に入れ、新たな球磨型軽巡洋艦六番艦・ハルとしての新たな艦娘人生を……」

「送るわけがないだろう。いい加減妄想もそのへんにしておけ妖怪妄想女」

「そう言ってもらえるのも今のうちだクマ。クツクツクツ……」

もうホントに悪の総大将に変貌を遂げてしまった妖怪アホ毛魔王は、演習場から卑猥な眼差しでおれの全身を舐めまわすように凝視していた。そんなに俺を艦娘にしたいのか……

「えー！　ハルが艦娘になるのー?!」

「ヒヤッヒヤッヒヤッ!!　ハルは婿養子になるのか!!　これは新しいタイプの二人だねえ提督~!!」

「だなあ。普通の人間が艦娘と婿養子で結ばれたらどうなるんだろうなあ」

「わかんないね〜！　でもまあハルが実践してくれるよ〜」

「俺も相手がお前なら……マイスweetハニー・隼鷹!!」

「あーはいはい。提督さんと隼鷹はよそでやってくれ。暁ちゃんもあいつの戯言を本気にしないでくれ」

「くかー……」

試合が終わった子たちが俺と提督さんの周囲に集まって、みんなで提督さんのシュークリームに舌鼓を打ちながら球磨と川内の試合を今か今かと待ちわびる。待ちくたびれたせいなのか、加古は手すりにもたれかかって鼻ちようちんを膨らまし、暁ちゃんは俺の膝の上にもちよこんと座って一人前のれいでいーらしく慎ましやかにしていた。

「俺の膝って賞品なんだけど……いいのかな……暁ちゃん乗つけて
て」

「いいのよ！ だって暁は一人前のれでいーなんだから!!」

『まあいいんじゃない？ 誰も文句言ってるないし』

『お前ら膝枕以外にはえらくアバウトだなあ』というツツコミが喉
まで出かかった。俺の膝に価値があるんじゃないやなくて、膝枕に価値があ
るってことなのか……。

一方のビス子は意外にも腕を組み、真剣な眼差しで球磨と川内の方
を見ていた。やっぱり暁ちゃんと同じ一人前のれでいーだとしても、
そこは分別ある戦艦。球磨との戦闘で自分の課題も見え、あとは球磨
と川内の戦いから何か得ようとしているようだ。

ビス子がかぶつぶつ言っている。耳をそばだて、ビス子のセリフ
を聞いていた。

「さすがクマね……まさか球磨型軽巡洋艦の艦娘をこんな形で建造す
るつもりだったとは……男を艦娘にしようというその発想……恐れ
入るわ……さすがヘンタイ国家ヤーパーンの艦娘とでもいうべきかし
ら……」

お前、根本的に間違ってるぞ……。

一方で演習場を見ると、球磨と川内が睨み合っている。……いや、
球磨は不敵な笑みを浮かべ、川内は焦点の合わない眼差しで前傾姿勢
で発作を抑える危ないジャンキーみたいな感じとでも言うべきか。

「クツクツクツ……この球磨の野望のため、川内には地べたを舐めて
もらうクマ……」

きやー。やめてー。誰かタスケテー。このままじゃ私、艦娘にされ
ちやうわー。

「シュコー……ムハア……早く……早く夜戦を……!! オウフツ
……ファゴオ……」

ごめん。申し訳ないけど、あいつには助けてもらいたくないな……
誰でもいいから川内以外がいいなあ……膝枕なら喜んでやったるか
らさあ……

「クツクツクツ……川内……その夜戦でのアクロバティックな動き

……あっぱれだクマ」

「ムフウ……コポオ……」

「でも川内……残念ながらこの球磨……すでに対策はできているクマツ!!」

『それじゃあ泣いても笑ってもこれが最終戦! やっちゃってー!!!』

北上の合図と同時に照明が落とされ、演習場が真っ暗になった。ここまででは今までの試合とまったく同じ。……だが、今回は違った。

「クマツ!!!」

球磨の雄叫びとともに『パシユツ』という音が聞こえ、同時に演習場がものすごい明かりに包まれる。恐らくは、さっきまで演習場を照らしていた照明以上の灯だ。

「うわっ!!」

「ムハハハハハ!!! これで川内のアクロバティック夜戦は封じたクマツ!!!」

「クツ! そんなバカな……これじゃ夜戦がツ……!」

「ヌハハハハ!!! 夜戦の出来ない川内なぞ恐れるに足らずだクマア!!!」

狼狽えながら周囲をキョロキョロと見回す川内とは対照的に、自身の右腕とアホ毛で高らかに天を指し、誇らしげに笑う球磨。

「そうか! 照明弾!!」

「これなら川内のアクロバティック変態挙動を抑制出来る!!!」

「考えたわねクマ……」

『さすが球磨姉……我が姉ながら恐ろしい……』

……お前らホントにそう思ってる? 身軽なら別に明るくなっても身軽に避ければいいんじゃないの? それとも違うの?」

「クツ……これでは私は実力がツ……!!!」

おいマジかよ。単に明るくなったただけなのに何頭押さえて苦しもうにしているんだ川内。

「覚悟するクマアアア!!!」

対照的にもう完全に悪の総大将と化した妖怪アホ毛魔王は、雄叫びを上げながら川内に突撃していった。

「クッ!!!」

川内は翻り、球磨の突撃を紙一重で躲すと、球磨のショートパンツに手をかける。……だがしかし。

「……?!」

「クッククック……無駄だクマツ!!!」

絶望の表情を浮かべる川内と、凶悪な笑みをこぼす球磨。球磨が至近距離で単装砲を乱れ打ち、川内はとっさに球磨のショートパンツから手を離して距離を取った。

「マズい……これでは……!!」

「対策は取っているといったクマ!! 球磨がはいているのはスカートではなくショートパンツ……」

「……?!」

「いくら引つ張られようと、戦闘行動に支障はないクマツ!!!」

すんげーかつこよく聞こえるセリフ回しだけど、内容をしっかりと把握すると馬鹿馬鹿しいことこの上ない。

『提督、どういうこと?』

「川内は暗闇にかこつけて相手のスカートを引つ張って翻弄することで隙を作る作戦を展開していたが、球磨が身に着けているのはショートパンツ。いくら引つ張られようが脱げることもパンツが晒されることもない」

『つまり球磨姉は……そこまで読んでショートパンツを履いていたってこと?』

「……恐らくない」

『さすがクマね……』『球磨のやつ……やるな……』『これが……一人前のれでいー……』『くかー……』とみんな口々に球磨の作戦を絶賛している。でもさー。気のせいだと思いますよ。だってあいつ、いつもショートパンツじゃん。

つーかき。誰も突つ込まないけど、スカートじゃなくてショートパンツで防ぐことが出来る川内の作戦にも問題があるんじゃないの?

「クツ……突破口が……!!!」

「ムハハハ!! いままで逃げきれるか見ものだクマツ!!!」

「ならば探照灯を……!!」

「この明るさで探照灯なぞ役に立たんクマアアツ!!」

球磨の周囲をすばしこく動きまわる川内と、その川内を単装砲で急ぎ立てる球磨。おつ。なんだか急にガチ戦闘みたいになってきたぞ。

「クツクツクツ……川内」

「?!」

「川内はすでに球磨の手中……その動きはすでに捉えているクマツ!!」

「クツ!!」

よく見たら、球磨から川内に向かって海面を走る数本の白い線が見えた。なんだありや？

『魚雷だよ。球磨姉は川内の進行方向に魚雷を撒いてたんだね』

「なるほど。やっぱ突然のガチ戦闘だな」

川内もそれに気付いたのか、驚異的な跳躍力で海面から飛び上がり、錐揉み回転をしながら球磨の魚雷を避けた。

「もらったクマ!!」

「なっ……?!」

待ってましたと言わんばかりに、球磨の単装砲が空中の川内に向かって火を吹いた。数回の砲撃音の後……

「ウアアアアア?!」

川内はそのまま背後に吹き飛んで着水。数回バウンドした後、体勢を立てなおして海面に立つ。球磨を睨む川内はもはや絶体絶命。

『提督?』

「空中での姿勢制御は難しい。ましてやあのようにジャンプしては身動きを取ること也不可能だ。それで球磨は、わざと雷撃で相手をジャンプさせ、そこを狙ったのだろう」

『これが……これが球磨姉……』

確かにこれは頭脳プレイだ。それは素直に認めよう。でも北上。お前いい加減提督さんと解説変われ。お前より提督さんの方がよっぽど解説してるじゃんか。

「ハアハアハア……やるね。さすがは球磨型軽巡洋艦のネームシップ

……」

「川内も思った以上にしぶといクマね。さすがは川内型軽巡洋艦のネームシップだクマ。クッククック」

「……」

「でもこれでおしまいだクマツ!!!」

球磨が海面に何かを撒き、それらが海中で川内に向かって進行したのが分かった。あれは魚雷。球磨は身動きの取れなくなった川内に、魚雷でとどめをさすつもりだ。

あー……俺は明日から球磨型軽巡洋艦になるのかー……六番艦かー……球磨と北上に姉貴ヅラされるのかー……

『やったねハル。今日からハル兄さんと呼ぶのはやめるよ』

「最初からやめろ」

『そのかわり、明日から私のことを北上姉って呼んでもいいから』
「断固拒否だ」

果たしてこれで雌雄は決めるのか……このまま優勝は球磨となるのか……?!

「球磨。さすがだね」

「クッククック……」

「でもね球磨……一つ忘れてるよ」

「クマ?」

「これは夜戦……たとえ照明弾で無理矢理に昼戦のシチュエーションを作っても……」

あれ……気のせいかな? 演習場が少し暗くなってきたような?

「しまったクマ?! このままでは照明弾が……?!」

「これは夜戦!!」

「き……消えるクマツ?!」

「私の大好きな夜戦だあああああッ!!」

突如として、さっきまであれだけ眩しい光で照らされていた演習場が、再び暗闇に包まれた。

「一体何がッ?!」

「き、消えたクマツ?! 照明弾が……?!」

「この瞬間を!! 待ってたよッ!!」

皆が空を見上げる。さつきまでまばゆい光で演習場を照らしていた照明弾が、今は暗闇に紛れて輝きを失っていた。

「そうか! 照明弾の時間切れか!!」

『? 提督、どういうこと?』

「川内は照明弾の時間切れを待っていたんだ。照明弾さえ消えれば、まさに夜戦。川内の独壇場だ……!!」

確かに頭脳プレイの応酬で、とても白熱してると思いますよ。それからあみんも『こ、これがネームシップ同士の戦い……』『二人共……さすがね……』『これが……一人前のれでい……!!』『ん……むにやむにや……』で感心するさ。……でもさー。

「ふーん!!」

「あ……ちよ……ゴムのびちやう……クマツ」

「ふーん!」

「ひあつ?! おなか触っちゃ……だめク……」

「ふんつ!!」

「ヴオオオオオオ?!」

……なにやってんの? ねえ提督さん、何して遊んでるんですかあの変態たちは?

「恐らくだが、球磨が履いているショートパンツのゴムを引つ張ったり冷たい手で球磨の腹をちよんとつついたりして、隙を作っているんだろう」

「そんなもんなんすか?」

「冷たい手で腹を突つつかれるというのは意外と嫌なものだ。現にマイスイートハニー隼鷹も、俺が腹をちよんつつつついたら変な声を出す」

「なるほど」

めっちゃ男前な顔でろくろを回す手つきをしながら余計なことを口走った提督さんは、突如シラフに戻った隼鷹に連れて行かれた。その後やぐらの裏から『余計なことを何度も口走るのはこの口かッ……!!』『ひゅいまひえんひゅんひょうひゃん……ひゅいまひえん……!!』

という慟哭が聞こえてきたので、提督さんは隼鷹に血祭りにあげられているようだ。俺しーらないつと。

「クマアアツ!!」

「ふんっ?!」

「もう一度照明弾を撃つクマツッ!」

「させないツ!!」

球磨の最後の反撃か? ここに来て球磨の雄叫びが聞こえたが

……

「探照灯照射!!」

「ヴオオオオオ?!」

やはりガチ夜戦となると川内に一日の長あり。とっさに探照灯を球磨に浴びせて相手の視界を潰した後……

「これで決めるツ……!」「このまま……!」

「突撃ツ!!」「撃つクマアアア!!」

『ズドーン!!』という一発の単装砲の音が周囲に鳴り響いた。

『ストップ!!』

果たして……勝者はどっちだ……照明が点き、演習場が明るく照らしだされた。

『球磨姉が大破判定を受けたので、勝者はせんだーい!!』

演習場で最後まで立っていたのは、肩で息をし、魚雷を逆手で構えている川内だった。何この子。試合前と違ってめっちゃ凛々しくてカツコイイんですけど。

一方、球磨の姿はなかったが、代わりにショートパンツを履いた下半身が海面から突き出て痙攣していた。なんだか出来の悪いスケキヨみたいに見える。あのスケキヨがきつと球磨なのだろう。

「ハルー。職業調査の時も言ってたけど、スケキヨってなに?」

「今度金田一耕助でもみよつか暁ちゃん」

川内は息も絶え絶えでスケキヨの元へ行き、そのスケキヨを海面から引っ張りだした。

「球磨……さすが軽巡のオーパーツだね……どっちが勝ってもおかしくない試合だったよ」

「ぐ、ぐやじいグマア……でも、さすが川内クマ。夜戦じゃ勝てないクマ……」

「んーん……私もヤバかった……」

途中はなんとも締まらない試合だったけど、最後はお互いの健闘をたたえ合って終了。みんなからは惜しみない拍手が沸き起こる。

二人共お疲れ様。素晴らしい試合をありがとう。そして今回のトーナメントの出場者のみんなもお疲れ様。みんなの戦いは素晴らしかった。たとえ動機は不純だったとしても。

……そして川内。お前のおかげで、俺は球磨型軽巡洋艦にならなくて済んだ。心から礼を言う。ありがとう川内。……ありがとう。

ハルの膝は誰のモノか

「な……なんか緊張するね……」

晴れてトーナメントも終わり、演習場は今急ピッチで片付けに入っているそう。その間優勝者の川内は、賞品である俺の膝枕での耳掃除を堪能するってことらしい。

『まー大丈夫だと思うけどさ。傷心の球磨姉はこのまま片付けが終わったら夜間の哨戒任務に行かせるよ。あとは私に任せて、川内の方をよろしくー』

『ハルを球磨型軽巡洋艦にする球磨の野望がアアアア?!』

北上のこの一言で、球磨はそのまま急遽夜間の哨戒任務の担当となった。まあこの場にいたら、あの妖怪アホ毛女は余計な騒動を起こしかねんからな。肝試しの時の理不尽な振る舞いは忘れん。

というわけで、今俺と川内はバーバーちょもらんまに戻ってきて、いつもなら北上が寝転がってる長ソファに二人で座っている。道具は準備してあるから、あとはいつでも始められるわけだが……

「そういうこと言うから、逆に緊張しちゃうんだと思うぞ?」

「そ、そうかな……」

優勝者にして稀代の変態、そして俺の救世主の川内は俺の左隣でガッチガチに緊張していた。おい。さっきまでの伸び伸びとした変態具合はどこいったんだ川内。

「とりあえず寝っ転がってみたらどうだ?」

自分の膝をポンと叩いて自己アピールしてみよう。だから顔真っ赤にするのやめろって……耳まで真っ赤にされると、こっちまで恥ずかしくなってくる……。

「……」

「……」

「……んー……っ!」

「?」

「じゃあ……失礼しますッ!」

ついに観念したのか、川内は俺の膝に頭を預けてきた。んー……ま

「だちよつと緊張してる？ まあいいか。」

「んじやいくぞー」

「よしこい！ これも夜戦ツ!!」

そんなこと考えてると、自分の中に眠る変態夜戦女の血が騒ぎ出すぞ……。まあいい。おれを艦娘化という未曾有の危機から救ってくれた英雄だしな。気合を入れて耳掃除してやるとしよう。

いつものように最初は耳の中の汚れ具合を観察した後、川内用の耳かきで耳の中をかきかきして差し上げる。

「せんだーい」

「んー？」

「ありがとなー。さつきは」

「んつく……。何が？」

「川内が妖怪アホ毛女を撃退してくれなかったら、今頃俺は球磨型軽巡洋艦六番艦・ハルになってるところだったよ……」

「それもちよつと見てみたかったけどねー。……んつく」

「不吉なことを言うのはよせ」

左が終わつたら右。川内。はんたーい。

「はーい……」

川内の緊張もだいぶほぐれてきたみたいだ。この時間帯にしては珍しく落ち着いた声をあげる川内を見て、なんだかそんなことを考えた。

「ねー。んつく……。ハル？」

「んー？」

俺の腹に顔を向けている川内が、顔を動かさず、目だけ俺の方に向けた。耳掃除をやってる側としては、時々川内が身をぐつとよじらせるのが恐ろしいが……。幸いなことに、まだ痛い部分を耳かきで突いたりはしていないらしい。

「球磨にもさ。いつもこうやって耳掃除やってあげてるの？」

「だな。あいつは言い出したら聞かんから……」

「目に浮かぶよ。でもさー」

「ん？」

「球磨だけ……んっ……特別扱いかー……」

「特別扱いっつーか厄介払いみたいなものだな」

「またそういう照れ隠しを……んつく」

「どこらへんが照れ隠しやねん……そういや川内は別に耳掃除が目当てじゃなかったよな?」

「まあ半分は夜戦が目当てだったけどね。でも」

「ん……」

「んくっ……もう半分は、ハルの膝枕にちよつと興味があったからかな」

「マジかい……」

「うん……」

「そら光栄というか何というか……でもこんな野郎の膝でええんかい……」

「でも今日はお姫様だったんじゃんハル」

「だな。そればかりは否定できんわ」

右耳も耳かきでかきかきし終わったら、今度はローションを浸した綿棒で両耳を拭いていく。

「もうやり慣れてるだろうけど、ちよつとひやってするかもしれんぞー」

「はーいりようかいいいいいい!!?」

「あ、すまん。痛かったか?」

「いや、そうじゃなくて……ッ!?!」

「ならよかった」

俺は別段特別なことをしているわけじゃないし、川内だって俺の耳掃除が初めてなわけじゃないんだが……

「んんんん……んんー……ッ」

「大丈夫か?」

「だいつ……じょうぶ……だから……ッ」

とこんな具合で、終始体をこわばらせていた。左耳をやるときなんかは、わざわざソファと俺の足の間に手を突っ込んで、なんかギューって俺の足にしがみついていたし。

そんな見慣れない様子の川内の両耳も、丹念にふきふきし終わった。川内。お疲れ様でしたー。

「ふい〜おわったー……」

終わった途端に川内は全身から力を抜き、俺の膝枕からどかないまま、仰向けに寝転んでいた。初めて耳掃除した時の球磨みたいにクツとはしてないけど、なんだか耳掃除する前より疲れてるような……まああれだけ体をこわばらせてたんだ。仕方ない。

「よかったですか？ お嬢様？」

「うん！ ありがとう！ ……あーそれから」

「次耳掃除してもらうときは、私は散髪台のシートでいいや」

「そうしてくれ。やっぱ野郎の膝枕で女の子の耳を掃除するのはな」

「んーん。そうじゃなくて……」

ん？ 川内は何が言いたいんだ？

「あ、あとさ。明日は球磨が哨戒任務から戻ってきたら耳掃除してあげなよ。多分せがんでくるから」

「分かった。妖怪アホ毛魔王の耳も明日綺麗にするよ」

「そうしてあげてー！」

そういい、いつもよりも若干赤みがあったフラッシュライトのような笑顔を向けて俺を見上げる川内は、その後、一向に俺の膝枕からどこうとしない。

「ねえハル？」

「んー？」

「私さ。夜戦の連続でちよつと疲れた……」

「だろうなあ。あんなに激しい演習してたんだから」

「だからさ。……もうちよつと、寝っ転がっていい？」

「暁ちゃんも俺の膝の上に座ってたしなあ。大丈夫だろ」

「ありがと」

そんなわけで、俺の膝枕独占タイムを延長した川内は、その後俺と暫くの間、なんでもない話をしていたわけだが……

「ハル……」

「ん？」

「ごめ……ねむ……」

と、俺の膝の上でうとうとし始め、完全に落ちてしまうその寸前に……

「ヒヤッハアアアアアア!!! どうだーせんだーい!!!」

「ひやあああッ!!」

「おーう隼鷹、いらっしやーい」

突如訪れた隼鷹の雄叫びにびっくりして飛び起きていた。

その後はいつものように酒盛りとなった。いつもと違うところは、提督さんが隼鷹と一緒に来てて、口のところがえらく腫れて、アナゴくんみたいな唇になっているところだ。なんでも、隼鷹から酷い折檻を受けた結果そうなってしまったと、提督さんは涙目で答えていた。

そして翌日……

「ハルっ!! 球磨の耳掃除をするクマツ!!」

深夜の哨戒任務から帰ってきた球磨はアホ毛をまっすぐに伸ばし、帰ってくるなり朝飯も食わずにそう言ってきた。はいはい。今日は貸し切りにしてますよ。

「むふー。今日はゆっくり耳掃除をしてもらうクマー」

「昨日は俺を球磨型軽巡洋艦にしようとしてたくせに……」

球磨を店内に招いた後、俺はポールサインの回転を止めて今日の営業が終了したことを告げる。きつとこの妖怪アホ毛女は俺の膝枕で耳掃除中にそのまま寝るだろう。そしたら俺は身動きが取れなくなる。そうなってもいいように、先に貸し切りにしてしまうことにする。

「ふわあく……ハル、早くするクマツ」

「はいはい……」

自分を窮地に追い込んだ魔王と、自分を助けてくれたヒーロー。その二人の耳を丹念に耳掃除したお姫様なんて、歴史上俺一人だけなんだろうなあ。そんなことを思いつつ、やっぱり耳掃除の途中で寝てしまった球磨の頭を撫でてしまう俺だった。

「ハルの膝は……球磨の膝だ……クマ……スー……」

「何言ってるんだか……」
終わり。

番外編　く喫茶店のマスターく 前編

季節は冬。いつもとは少しだけ違う緊張感を胸に秘め、僕は今、ある喫茶店の前に立っている。持ち物はいつもと同じだが、今日の僕は、ある決心を胸に秘めて、この場所に来た。

この喫茶店『ミア&リリー』に僕が気付いてから、もう一年ほど経つ。初めて来たのは、当時好きだった女の子にヒドい振られ方をし、家に帰る気にもなれなくて外を彷徨っていた時だった。その日僕は、本当に何も考えず『ちよつと入る……』ぐらいの気持ちでそのお店のドアを開いた。

店内はとなり町にあるおじいさんが営んでいる古い喫茶店のようにノスタルジーとアンティーク溢れた内装で、こじんまりとしていてとても落ち着いていた感じた。ドアを開いて店内に入った瞬間……
「いらっしやーい」

マスターと思しき女性の、やる気ない歓迎の挨拶が聞こえた。見ると一人の女性がカウンター席に座っていた。その傍らには山のように積まれたマンガ本。20冊ぐらいはあったかな……

店内の、外からあまり見えない席に座る。なんとなく、戦前の日本のハイカラさのようなものを感じられる内装の雰囲気心地よさを感じながらメニューを見ていると、さっきの女性がお水を持ってきた。……今となつては慣れたことだけど、その店員さんは営業スマイルなんてどこ吹く風で、ちよつとジト目だった。

「注文決まったら呼んでねー」

「あ……注文、いいですか？」

「決まった？」

「はい。えと……コーヒーを」

「りようかーい」

随分と気の抜けた接客をしてくるおさげの店員さんは、僕の注文を受けて調理場に引っ込んでいった。最近では珍しい、あの接客する気

ゼロのやる気ない接客態度に少々の驚きと心地よさを感じたことを、僕は今でもよく覚えてる。

席から少し離れた窓から外を見た。冬の為なのか……それとも他に理由があるためか……外の景色はなんだか灰色のように見えた。道行く人々の中には色鮮やかなファッションで身を包んでる人もいるのに、それすらも色あせて見える。その日の僕の世界は、確実に色を失っていた。

「ほい。おまたせー」

店員さんがコーヒーを持ってきてくれた……と思つてカップの中をよく見たら、コーヒーじゃなくてなんだかカフェオレのように見える。あれ？

「あのー……」

「んー？」

「すみません……頼んだのコーヒーなんですけど……」

「あー、いいのいいのどうせ暇だし。それとも甘いのって苦手？」

「いえ、好きですけど……でも……」

「だったら飲んじやつて。お姉さんのおごりだから」

「はあ……」

勝手なことを言うだけ言つて、その店員さんはピラピラと手を振りながらカウンターに戻り、またマンガに没頭し始めた。なんだか不思議な人だなあ……

店員さんが持ってきたカフェオレのカップを、両手で包み込むように大切に持つ。熱さが手に伝わり、さつきまで外の灰色の世界にいて冷えきっていた両手を無理矢理に温めてくれた。

火傷しないように注意しながら、一口だけカフェオレに口をつけた。その途端、コーヒーの香りと優しい甘さが口に広がっていく。口に含んだ温かいカフェオレは、手だけでなく、僕の身体にもとても熱くて、僕の胸を温めてくれる。

「ほっ……」

自然と溜息が出た。その時、僕の胸に突き刺さっていた何か気持ちの悪いオリのようなものが取れたかのように胸が軽くなることを感

じ、それがカフェオレの心地いい温かさと甘さのおかげだと気付くのに時間はかからなかった。

「あ……」

再び外を眺める。外を寒そうに歩く女性の手には、真っ赤な手袋がされていた。僕自身の世界に、ほんの少しだけ色が戻った瞬間だった。

さっきの店員さんを見ると、やっぱりマンガを読みふけている。最初は僕の妙な雰囲気を感じてコーヒーじゃなくてカフェオレを作ってくれたのかと思っただけ……別にそんなことはないようで、僕の方に興味があるわけではないようだ。

……もつとも、今はそれがありがたいけれど。何か優しい言葉をかけられてしまったら、僕は泣いてしまふけれど。

そのまましばらく優しいカフェオレを堪能したあと、店員さんにお会計をお願いした。店員さんは読みかけのマンガを開いたまま、今時珍しい年代物の木製のレジをのんびりと打ってくれた。店内に鳴り響くタイプライターのような打鍵音が、僕には心地よく感じた。

「あの……」

「んー?」

「カフェオレ、ごちそうさまでした。でもなんで?」

「んー……よくわかんないけど、なんとなく甘いのが良さそうな顔をしてたから……かな?」

「僕、甘党に見えますかね」

「そういうんじゃないかねー」

唐突に、店内に黒電話のベルの音が鳴り響いた。これも今時珍しい。でも僕が知っている黒電話の呼び出し音とはだいぶ違って、音が控えめにされている。だからかもしれないが、その音をうるさいとは思わず、懐かしさと変な可笑しさだけが印象に残るような、そんなベル音だった。

「あ、ちよつとまってねー」

「はい」

僕に断りを入れた後、店員さんは電話に出た。『ちよつとまってね』

と言われたことが、僕には妙に嬉しかった。知り合いではない、まったくの他人と少し話が出来ることが、今の僕にはありがたかった。優しくされたくはなかったけど、なんとなく誰かと話したい……そういうめんどくさい状況だった。

「はい。どうしたの？ ……えー……自分で取りにきなよー……」

店員さんは本当にめんどくさそうに……僕の方に向けている背中から『うわー……めんどくさい……』というオーラを振りまきながら電話で受け答えをしていた。

「んー。分かった。待つてるから」

一通り受け答えをした後、店員さんは受話器を置いてこっちに戻ってきた。……なんというか、とてもめんどくさそうな、どよんとした顔をしていた。

「ごめんごめん。で、なんだっけ？」

「あ、いや……甘党に見えますかーって」

「あーそうだった。んー……なんでだろうね。私もよくわかんないな。嫌だった？」

「いや全然イヤじゃないです。むしろうれしかったです」

「ならよかったよ」

これは本当に素直な気持ちだった。店員さんがサービスしてくれたカフェオレのおかげで、僕の見える世界に色が戻った。胸に溜っていた嫌な気持ちも、たった一口の温かいカフェオレのおかげで溜息と一緒に出ていったのは、とてもありがたかった。

「よかったらまた来てね。お客さん少ないけど、いつでも開いてるから」

「うん。また来ます。店員さんはいつもいるんですか？」

「そうだよー。ここ、私の店だから」

そっか。この人、やっぱりこのお店のマスターなのか。店員さん……マスターに別れを告げ、コーヒー代だけを払って店を出る。ドアを通る時……

「あ……すみません……」

僕よりも背の高い、だいぶ年上の男性がすれ違いで店に入ってきて

た。その男性は僕に笑顔で軽く会釈すると、そのまま店内の方に入っ
ていき、マスターと二言三言、楽しそうに言葉をかわしていた。

「ごめんなー」

「いやー、別に謝らなくていいけどさー……」

とても親しげに話す二人の光景が、自分には手に入れることの出来
なかったものだど気付いて、あの時の僕は少し落ち込んだものだっ
た。あの時の二人、お似合いの二人だったなあ……。

その日を境に、僕はこの不思議な喫茶店『ミア&リリー』に足を運
ぶ機会が増えた。何か嬉しいことや悲しいことがあったとき、何かを
なしとげた時、何かに失敗した時……

「あ、いらっしやーい。今日も勉強？」

「はい。試験近いんで」

「あそ。がんばってねー」

何かを頑張りたい時や、単純にお昼ご飯が美味しかった時……足繁
く、このミア&リリーに通うようになった。

窓から少し離れた指定席に座り、参考書とノートを広げる。試験が
近い。自分の家で勉強すれば余計なお金がかからなくてリーズナブ
ルなんだけど……

「ほい。〴〵注文のコーヒー」

「ありがとうございます」

「んじやーがんばってー」

マスターが素晴らしい、去り際に角砂糖を一つコーヒーに落ととして
いってくれた。このミア&リリーのノスタルジーで落ち着く雰囲気
と、マスターのこの決して踏み込んでこない優しさや気遣いというも
のが、僕にはとても心地よかった。

「ほい。じゃあコーヒー一杯で400円だよー」

「じゃあ500円から」

「まいどー。お釣りが……ん？」

いつも通りなら、ここでお釣りを受け取って終わりのはずだったん
だけど、その日はちよつと違った。その日、マスターは僕にお釣りを
渡しながら、妙に顔を覗き込んできた。いつものジト目で。

「んんー？」

「……………ど、どうかしたんですか？」

「……………」

不意にマスターが、僕の髪に手を伸ばす。突然のことで僕は何も反応出来ず、ただただされるがままに、マスターに髪の毛先を触られることしか出来なかった。

僕の前髪の毛先を少しいじった後、今度は僕の頭のとっぺんに手を当て、髪を乱暴にくしゃくしゃと乱してきた。マスターのこの行動は失礼極まりないんだけど、不思議とくしゃくしゃされてるのが心地いい。

「な、なんなんですかっ」

「髪伸びた？」

「へ？」

「ほら。初めて来た時はもうちよつと短かったような……………」

確かに初めてきた時から数ヶ月経つけど、僕はその間まだ一回も髪を切つてなかった。マスターは僕が初めて来た時のこと、覚えててくれたのかな。

「あ、は、はい。初めてきたときからまだ一回も髪切つてないです」

「やつぱり。そろそろさつぱりしてもいい頃かもね」

「そ、そうですか？」

「うん。まあどつちでもいいけどね」

「はあ……………」

「ちようど隣が床屋だし、よかったら切っちゃってもいいんじゃない？」

なんだか珍しくマスターが僕にちよつかいをかけてきているような……………いや、別に気にならないから散髪はまだいいかなーなんて思ってるんですけど。

「そかなー。私はさつぱりしてる方が好きだけどね」

そう言われて、不思議と『んじゃ切るか』と決心してしまった当時の僕は単純でしようか……………。

後日、僕はミア&リリーに入る前に、その隣の床屋の入り口の前に

立った。『バーバーちよもらんま鎮守府だクマ』てのもなんだか妙な名前だ。考えてみればこの店、数年前からここに店を構えてることを思い出した。妙な名前だったからまったく行く気になれなくて、ずっと気にしてなかったんだけど。

ガラス越しに店内の様子を探る。お店の中には、いつかマスターと楽しそうに話をしていたあの背の高いカッコイイ男性がいて、静かに掃除をしているようだった。そっか。あの人床屋さんだったのか。マスターの恋人とか家族とか、そんな感じの人なのかな？

今なら他にお客さんもないし、待たされないで散髪出来そう。意を決して入り口を開くと、カランカランという音が店内に響き、床屋さんが静かにこつちを見て微笑んでくれた。

「はい、いらっしやいませ」

「はい、あ、あの、髪を切りに来ましたっ」

「かしこまりました。それじゃこちらへ」

床屋さんは実に柔らかく優しく対応してくれ、僕を散髪代のシートに座らせると、自分はキャスター付きの椅子に座って僕の髪を観察し始めた。

「結構伸びてますね。どういう髪型にするか決めました？」

「え、えーと……」

初めて来た美容院とか床屋って緊張する。髪型の指定とか全然やったことないし、よくわかんなくて……。

「えーと……」

「？」

「さっぱりさせたいんですけど……お、おまかせって出来ます？」

「かしこまりました。んじゃ適当に短くしちゃいませよっか」

『ちよつと失礼……』と言いながら僕のほっぺたを少しさわり、『今日は髭剃りはいらさないですね……また次の時にでも』と床屋さんは言い、僕の散髪が始まった。

散髪中、床屋さんは静かにチョキチョキと僕の髪を切っていた。表情はとても真剣なのに、目の感じはとてもやわらかい、とても優しい感じのする人だ。散髪中特に話しかけてくることもなく、柔らかいけ

ど真剣な表情で終始髪を切り続けていた。おかげで僕の緊張は最初だけで、散髪が始まって数分後にはリラックスしはじめていた。

「……髪の長さはこんな感じでいいですか?」

「はい。ありがとうございます」

「んじやシャンプーしちゃうんで、シャンプー台に移ってください」

言われるままに案内されたシャンプー台に向かい、シートに座る。床屋さんがやってきてシートのリクライニングを倒し、床屋にしては珍しい仰向け式のシャンプー台でシャンプーしてくれた。

「お湯の温度は大丈夫ですか?」

「はい」

「かゆいところはないですか? 足の裏以外で」

これは床屋さんなりのジョークなのかな? 乗つといた方がいいのかな?

「え、えーと……右の足の裏の……」

「却下ですよ」

酷い……僕は床屋さんのボケにボケ返したただけなのに……。でもこの床屋さん、優しかったりかっこよかったりするだけじゃなくて、けっこうフランクな人みたいで安心だ。

こうしてシャンプーが終わった後、散髪台に戻って髪を乾かしてくれる。その最中、お店の入り口が開き、白いセーラー服と HALF パンツを履いた3歳ぐらいの男の子がお店に来た。よく見たら、えらくご立派なアホ毛を携えてる子だった。

「とうちやーん。今日も父ちゃんのお仕事見てていくまー?」

「母ちゃんの口癖を真似るのはよせ。今はお客さんいるからまた後でな」

「その父ちゃんのしごとっぷりが見たいくまー」

「お客さんいるんだから……」

床屋さんの子どもと思しきこの子と床屋さんの会話がおかしい。この子の変な語尾はどうやら母親譲りのようだ。……ひよつとしてマスター? でもマスターそんな口癖言ってること見たこと無いしな……家族の前でだけ言ってるのかも?

「僕はいいですよ。あとは髪乾かしてくれるだけだし」

「いいんですか(くま)?」

息ぴったりの親子の反応に笑ってしまう。この床屋さんといいミア&リリーのマスターといい、人の緊張をほぐす天才なんじゃないかと思うことが今でもある。

「それじゃあがんばってサービスします。髪乾かしますね」

「かわかすくまー」

「お前は黙ってなさい」

「ゴメンナサイダクマ」

「ぶっ……お願いします」

床屋さんは手際よく髪を乾かしてくれ、もののついでにとワックスでスタイリングしてくれ、男の子の方はそんな父親の仕事っぷりを興味津々といった具合で見つめていた。よく見たら、時々アホ毛がぴくんと動いていた。

男の子からの至言『母ちゃん譲りのアホ毛はいいくま?』をさらりと受け流し、床屋さんは僕の髪を整えてくれた後、両肩をぽんと叩いてくれた。

「ほい。終了です」

「ほっー」

心地よいインパクトを受けて、リラックスしていた身体が覚醒した。なんだかずっと髪を切っていてもらいたい。ずっとこの空間にいたいと思わせてくれるような、そんな時間だった。

「ありがとうございます。よかったですらまた来てください」

「またくるくまー」

とても優しい二人のお礼を受け取ったあと、僕はそのままミア&リリーの方にも足を運ぶ。居心地がよくとても優しい床屋を教えてくださいました。お礼をマスターに伝えるためだ。ちよっただけ残念だけど。あんなに優しくしてお似合いな人と結婚して、あんなに可愛らしい子どもがいたってことが、心の何処かで少しだけ寂しかったけれど。

ミア&リリーのドアを開ける。いつものようにカランカランと音がなり、店の奥からマスターのやる気ない『いらっしやーい』て声が

聞こえてきた。

「ああ、いらつしやい。髪切ったの？」

「はい。マスターおすめのおとなりで切ってきました」

「そっかー。どうだった？」

「よかったです。床屋さんも優しいし」

「だよー」

いつもに比べてちよつとだけらんらんとした眼差しで僕の髪型を見るマスター。自分の旦那さんの仕事っぷりが気になるのかな？

「うん。やっぱり短い方がさっぱりしていいじゃん」

「そ、そうですか？」

「うん。今の方が私は好きだよ？」

そう言つてマスターは屈託なく笑つてくれる。そんな顔されると、妙にドキドキしてしまう。いつもリラックスさせてくれるこのお店の空間とマスターの態度が、今日は妙に僕を緊張させてくる。いけない。この人は旦那さんもいるし、お子さんもいるのに……。

「あ、あの……お子さん、可愛かったです」

「へ？」

「お子さん。おとなりの床屋さん、旦那さんなんですよね。お子さん、旦那さんの仕事っぷりが見たいって言つて、ずっと一緒にいました」

緊張して変な話を振つてしまったッ！ ヤバいッ!!

「ぶっ……」

「ま、マスター？」

「ぶぶっ……私とハル兄さんが……夫婦か……」

僕の血迷つた発言を聞き、マスターは急に吹き出してケラケラと笑い始めた。

「えーと……ぶぶっ……隣の床屋さんとは、別に夫婦じゃないよ？」

「そうなんですか？ でも前に仲良さそうに話してたし……」

「ちよ……やめて……腹痛い……ひー……面白い……」

マスターは苦しそうにヒーヒー言いながらそう教えてくれた。おとなりさんとマスターがご夫婦だと言うのは、どうやら僕の早とちりのようだ。

でもだつてあのアホ毛の子、なんとなくだけどマイペースなところがマスターそっくりなんだもん。あんなにそっくりだったらマスターの子だと思っちゃうよ……マスターもそんなに笑わないで下さいよ……。

「やめてくるし……ひー……これ以上は……クマ姉に怒られる……」

「？ クマ姉？」

「そ。隣の床屋さんの奥さんで、私の姉。だからお隣さんと私は兄妹……ぶふおっ……ひー……」

「そ、そうなんですか……」

「しかしこれは……あとでハルに報告しとこ……」

この、僕の目の前で今まで見たこと無いほどに楽しそうな顔のマスターを見て、なんだかとても恥ずかしいような……でもお隣さんとはご夫婦じゃなくて兄妹と知って、なんだかちよつとホツとしたような、不思議な感覚を覚えた。

同時に、この人のことをもつと知りたいたいという気持ちちが芽生えた。今までは、このマスターのいるお店の心地よさに惹かれて、僕はお店に顔を出していた。

でも多分……いつの頃からかそれが、この人への興味に変わっていったんだ。僕は、この人のことをもつと知りたいたい。友達になりたい。この人ともつと仲良くなりたい。

「あ、あの……」

「ひー……ひー……ん？」

「ぼ、僕は桜庭智紀（トモノリ）っています！」

「おお。トモくんか。常連さんになってくれてけっこう経つけど、初めて名前を覚えてくれたね。私もトモくんの名前を知りたかったんだ」

マスターにそんな風に思ってもらえてたなんて、なんだか胸が温かい。店内は全然暑くないのに、なんだか顔がカッカカッカしてくる。「私は北上。トモくんよろしく」

一通り呼吸困難と闘いながら笑い続けたマスターは……北上さんは、その後僕に自分の名字を覚えてくれた。その時なぜか少しだけ、

店内がグレーに染まった気がした。

「……」

「ん？　どうかした？」

「あ、いえ。なんでもありません。北上さんよろしく」

「うん。……んで、今日はどうする？」

「えと……んじやカフェオレお願いします」

「ほーい。んじやいつものとこで待っててね」

僕はフルネームを教えたのに、北上さんはファーストネームを覚えてくれなかったことに、僕はほんの少しだけショックを受けたみたいだった。外の風景よりも店内の方が少しだけグレーに見えたのは、きっとそれが理由だったんだろうと、今では思う。

後編

名前を教え合ったその後も、僕は足繁く北上さんのミア&リリーに通い、その度に少しずつ北上さんと会話することがちよつとした楽しみになっていた。おかげで少しずつだけど、北上さんのことを知ることが出来た。

その日は、ぼくが来店した時北上さんはマンガを読んでいた。

「いらつしや……ああ、トモくんか」

「はい」

「んじゃーいつものとこ座っててー。私はここでマンガ読んでるか
ら」

北上さんの名を知ってしばらく経った頃から、北上さんは店にいる客が僕だけの時はあまり接客しなくなってきた。特にマンガを読んでいる時なんかは、本当に愛想程度の挨拶しかしてくれない。

「北上さん」

「んー？」

「えーと……注文いいですか？」

「んー」

「えーと……コーヒーを……」

「……」

「……」

「……」

「……自分で淹れます」

「んー」

さらに北上さんは、マンガに集中し始めるとあまり僕にかまってくれなくなる。その割には、他にお客さんがいる時はマンガに集中してても呼ばれたらちゃんと反応するくせに……。

「北上さん」

「んー」

「はい。カフェオレいれましたよ」

「んー」

こんな感じで、僕が気を利かせて北上さんの分のカフェオレを淹れても全然気にしてない感じ。その割に僕がカフェオレをそばに置いたら、すぐに手を伸ばして飲み始めるんだよね。

さらに……

「トモくん」

「はい？」

「私、おなかすいたなー」

「はい」

「でも、読んでるマンガが今ちようど盛り上がってて目が離せないんだよねー」

「はい」

「……」

「……」

「……」

「……クロックムツシュでいいですか？」

「んー」

こんな感じで、時間帯によってはついに自分が食べる軽食まで僕に作らせるようになってきた。おかげで今なら、お店のメニュー一通り、レシピを見ないで作れる自信がある。

今日作るのはクロックムツシュ。食パンでハムとチーズのサンドイッチを作り、それが分解しちゃうないようにパンの周囲をフォークでギュツと押さえてあげる。バターをひいたフライパンでそのサンドイッチをカリツと焼き上げれば完成だ。知らない内に手際良くなっている自分が、いいんだか悪いんだか……ついでに言うと、自然とサラダまで作るようになってる自分がイヤだ。

……でも。

「……」

あれだけ真剣にマンガ読んでる北上さんの顔が見られるなら、別にいいかな。

「はい。出来ましたよ北上さん」

「んー。ありがとう」

あ、ありがとって言ってもらえた。

「ん……おいし。トモくん腕上げたねえ」

「全部北上さんのフリーダムな振る舞いのせいですけどね」

「そっかそっか。んじやその調子でこれからもよろしくー」

「マジですか?!」

僕は北上さんに、お店のアルバイトか何かだと思われているのだろうか……。

隣の床屋さんにも僕は足繁く通うようになっていた。通い始めて分かったんだけど、店主のハルさんはとても腕がいいにも関わらず、代金はリーズナブルでとても通いやすい。

ついでに言うと、ハルさんの人柄もとても温かく、話してみるととても朗らかでフランクな人だった。時々店にいる息子さんもとてもかわいらしく、ハルさんと息ぴったりな漫才を見せてくれるので楽しい。今日もお子さんは店に来ていて、ソファに座って足をぶらぶらさせながら海の図鑑を食い入るように見ていた。

「そんなわけで最近、お店のメニューほとんど作れるようになったやいました」

「本人から聞いてるよ。災難だね」

「僕の話が出るんですか?」

「うん。おかげでマンガに集中出来るってさ」

「そ、そうですか……」

「しかし……ぶふっ……」

「?」

「ああごめん。なんだか昔を思い出してさ」

「?」

ハルさんが言うには、ハルさんが奥さんと出会った時、四六時中奥さんに振り回され続けていたそうさ。口喧嘩は当たり前で、時には腹パンされたり、誘拐(?)されたこともあったなあ……とケラケラ笑いながら話してくれた。

「それでなんだか昔の俺とアイツみたいだなあって思ってたさ。やつぱ姉妹なんだね」

「へえ〜……」

「多分ね。北上はトモに甘えてるんだと思うよ」

「そうなんですか?」

「うん。北上ってさ。最初の頃はそんなに踏み込んでこなかったでしょ。気を使っってはくれるけど、一線は引いてるっていうか」

「そうですね」

「その分安心出来る相手を見つけると、すごく甘えたくなるんだろうな」

北上さんは僕に甘えてるのか……うーん……その割には客を客だと思っけない仕打ちの数々はヒドいと思うけれど。

「ハルさんの奥さんもそんな感じだったんですか?」

「アイツは北上とはちよつと違うけど……でも俺に色々やらかしてきてたのは、きつと俺に甘えてたんだと思うな。今なら分かるよ」

「ハルさんの奥さんって、どんな人なんですか?」

「妖怪アホ毛女」って言えばいいかなあ……」

「?」

毛先を整えてくれた後、今日は髭剃りもしてくれる。髪を切つているときのハルさんはとてもフランクだけど、髭剃りをしている時のハルさんはとても真剣だ。とても優しい顔つきをしているハルさんが、その時だけはとても真剣な眼差しで、話しかける隙をこちらに与えないほどの気迫を感じる。

「……」

「……」

これは後で北上さんから聞いた話なのだが、ハルさんの奥さんはデモンストレーションでハルさんに顔剃りをしてもらった時、ハルさんのこの真剣な顔を見て、ハルさんを意識し始めたそうだ。

「……」

「……」

でもこれなら分かる。髭剃りをしている時のハルさんは本当にカッコイイ。お子さんもさつきまでは凶鑑を見ながら足をぶらぶらさせていたのに、今では食い入るようにハルさんを見ている。子供な

がらに、ハルさんの気迫が分かったようだった。

「……ほい終わり。おつかれ」

「ほっ。おかげでさっぱりです。ありがとうございます」
「いいえー。こちらこそいつもありがとうございます」

お子さんがソファから降りてきて、ハルさんの足元まできた。とてとてと歩く姿が可愛らしい。歩く度にアホ毛が揺れてるように見えるのは、僕の気のせいなのかな？

「トモー」

「んー？」

お子さんが僕の顔を見てニパツと笑いながら僕の名を呼んだ。とてもカワイイ子だけどもあまりハルさんには似てない感じがするから、きつとお母さん似なのだろう。髪もハルさんとはちよつと違って、茶髪でもふもふつてしてるし。

「いつもありがとうだくまー」

「うん。また来るね。ありがとう」

「まつてるくまー」

「待ってるから。またいつでも来てくれ」

「うん。ハルさんありがとう」

……あ、そういえば。ハルさんに聞きたいことがあったんだ。

「ハルさん」

「ん？ どうかした？」

「北上さん、僕にファーストネーム教えてくれないんです。『下の名前教えてくれませんか？』て聞いても、『北上だよ？』としか言ってくれなくて……」

「あー……」

「何か理由でもあるんですか？」

「まあ……ね」

ハルさんのその反応を見て、何か重大な理由があることを僕は察した。ファーストネームを人に話せない理由って何だろうか……てか、そんな理由ってあるのかな……ひよつとして、この人たち家族ぐるみでスパイとか?! ……まさか。

「……分かった。明日にでも北上に会うといいよ。北上には俺から言っとく」

「何か秘密でもあるんですか?」

「秘密って言えば秘密なのかなあ。本人そんなに気にしてなさそうだけど」

「?」

「ただ、北上のことを俺が話すわけにもいかないし。直接本人に聞いてみて」

「はい。ありがとうございます」

そして次の日。いつもの時間にミア&リリーを訪れると……

「おっ。いらっしやーい」

「こんにちは北上さん」

「うん。待ってたよー」

北上さんがいつものように、マンガを読みながら対応してくれた。最近は何だかんだで毎日講義が終わったらここに顔を出してるから、北上さんもこの時間に僕が来るのが分かっているのか……最近は何が来てもマンガから目を離そうとしない。

「早速だけどトモくん。私ちよつと小腹がすいたんだよね」

「……ここ、喫茶店ですよね?」

「うん」

「僕、客ですよね?」

「うん」

「北上さん、マスターですよね?」

「うん」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ピザトーストでいいですか?」

「よろしくー」

僕が押しが弱いのか、それとも北上さんが押しが強いのかは分から

ないけど……なんだかもう、ホントここの店員みたいになってきたな僕は……。

いつの間にか準備されていた僕専用のエプロンを身に付け、カウンターに立つ。厚切りの食パンに十字の切り込みを深めにいれ、トマトソースとチーズをトッピングしたら、その上に細切りベーコンとピーマンの輪切りを乗せる。

「チーズは多めですか?」

「んー」

トースターで焼いてるピザトーストが焦げないように注意しつつ、自分用と北上さん用にコーヒーを淹れる。同時にミルクを温めてカフェオレ用に準備しておいて、あとでコーヒーと合わせ、北上さんのカフェオレの完成だ。

——チーン!!

ピザトーストが焼きあがった。店内にチーズの焦げたいい匂いが漂ってる。

「北上さん、出来ましたよ」

「んー」

マンガに夢中で生返事の北上さんのそばに、ピザトーストとカフェオレを置いてあげる。今更ながらピザトーストだと漫画本が汚れるんじゃないかとちよつと心配したが……

「北上さん」

「んー?」

「ピザトーストだから、気をつけないとトマトソースで本汚れちゃいますよ?」

「よゆー」

北上さんは器用にピザトーストを片手で切り分け、指にソースがつかないように持って口に運んでいた。

「よく片手でそんな器用なこと出来ますね……」

「まあ汚れてもいいんだけどね。これ中古本だし」

「そうなんですか?」

「うん」

北上さんが一つ目のピザトーストを食べているうちに、ウエットティッシュを準備してあげる。一つ目を食べ終わった北上さんは、何も言わず僕が準備したウエットティッシュを一枚取り、それで指を拭いていた。

「んー。トモくんありがと」

「いいえ」

「腕上げたね」

「そうですか?」

「うん」

そう言われると悪い気はしないんだけど、順調にここの店員の道を歩んでいるような気がして……それはそれで別にいいけれど……でもなんだか釈然としないというか……。僕はそのままエプロンを外さず、調理に使った器材を洗うべく、シンクの蛇口をひねって水を出し、包丁をその水でゆすいだ。

「あーそうだとモくん」

「はい?」

「ハル兄さんから聞いたよ。私が下の名前を教えてくださいって気にしてるんだって?」

不思議とそう言われると、なんだか自分が駄々をこねてるみたいでちよつと恥ずかしい……。でも北上さんは、そんな僕の葛藤を知ってか知らずか、マンガから目を離さず、僕の返事を待たずに話し始めてくれた。

「ハル兄さんからは何か聞いた?」

「いえ何も。本人に直接聞いてくれて」

「そっかー」

北上さんの、マンガのページをめくるペースが目に見えて落ちた。僕の間隙からは、北上さんの表情が本に隠れて見えなかった。それは偶然なのか意図的なのかは分からない。でも北上さんは、なんとなく自分の表情を僕に見られたくないのかなと思ってしまった。

「私さー。艦娘なんだよねー」

「はあ……艦娘……ですか」

「うん」

艦娘つていえば、けつこう前から深海棲艦とかいう化け物と戦ってる人たちのことだったよな確か。数年前に他の県の海軍施設が崩壊したただかの事件が起きた時、艦娘つて人たちのことがちよつと話題になった覚えがある。詳しくはよくわからないけど。

「だからさ。私つて下の名前がないんだよ。無理矢理にフルネームを言うとしたら『重雷装巡洋艦・北上』だから、ある意味『北上』が下の名前なんだよね」

「……」

「それにさ。かつては私、深海棲艦つて敵と戦ってたんだよ。何体も沈めたよ。それこそ、何体も何体も殺したよ」

「……」

「でもね。後悔はないよ。戦争だったし。私もたくさん仲間を……深海棲艦に殺されたし……大切な場所や大切な人たちを守るためだったから」

「……」

「怖くなった？ 無理しなくていいよ？ 気持ち悪かったら、もう来なくてもいいし」

ハルさんは、一つ間違えていたようだ。ハルさんは『北上はそんなに気にしてないんじゃないか』つて言ってたけど、それは間違いだったみたいだ。

今、北上さんは冷静に……いや冷静を装いつつ僕の返事を待っている。僕に表情を見られないようにマンガで顔を隠して、声色も努めていつも通りの声色になるようにがんばっているけれど……

けど、マンガを持つてるその手はほんの少しだけ震えている。声色だって、毎日声を聞いている僕には分かる。北上さんが緊張しているのが分かる。

でも正直なところ……北上さんには悪いけど、僕にはそれが重大なこととは到底思えない。

「えーと……北上さん」

「んー？」

「ごめんなさい。僕にはいまいちよくわかんないんですけど……とりあえず一つ質問があります」

「なに？」

「大丈夫だと思いたいんですけど……念の為」

「うん」

「とりあえず、僕と仲良くはしてくれませんか？」

「……」

北上さんが艦娘つてことがどれだけ重大なことなのかは僕にはよく分からない。深海棲艦と戦う存在で軍所属つてことだったはずだから、きつとたくさんの敵の命を奪ったというのは事実だろう。そして、仲間もたくさん死んだということも事実なのだろう。

でも僕にとつては、それは言うほど難しい問題つてわけではなくて……。なんとというか、誰だつて悩みや苦しみは持っているはずで、北上さんの場合はそれがたまたま、自分は艦娘だつて悩みただけの話で……。

「ごめんなさい……なんかホントによくわかんなくて。突然そんなこと言われても、僕はよくわかんなくて」

「……」

「でも、これからもここで僕と仲良くしてくれるかどうかは僕には一番問題つていうか……僕は、ここに来て北上さんと話して、こうやってピザトースト焼いてあげたりカフェオレ作ってあげたり、逆に、北上さんが僕のコーヒーにしれつと角砂糖いれてくれたり、時々気を利かせてコーヒーのオーダーをカフェオレにしてくれたら……それが出来るかどうかによつほど大切なことつていうか……」

「……」

「ごめんなさい。頭悪くてよくわかんないです。こんなことしか言えなくてごめんなさい。でもなんか……今の話聞いて、北上さんひよつとして仲良くしてくれなくなっちゃうんじゃないかとか、いなくなっちゃうんじゃないかとか変なこと考えちゃつて」

こんな時に気の利いた一言が何も思い浮かばない自分がとても情けない。頭が混乱して自分が何を言っているのかよく分からなくて、

おまけに変なこと口走りながら涙もポロポロ出てきて情けないやら恥ずかしいやら。

北上さんがページをめくる音が止まった。幻滅させてしまったんだろうか。それとも呆れられてしまったんだろうか。

「ぶっ……」

「？ 北上さん？」

「なんでトモくんが謝ってるのさー？」

「へ？」

よくわからないけど、北上さんは怒ったり呆れたりとかはしてなかった。肩がわなわなと震えてたのは、どうも笑いをこらえてただけみたいだった。北上さんはマンガ本をカウンターに置いてやっど僕に顔を見せてくれた。その顔はいつもの笑顔で、ほんの少しだけ目が赤くなっていた。

「ぶっ……トモくん」

「ふあい」

北上さんはニコニコ笑いながら、僕にウエットティッシュを差し出してくれた。

「ほい。涙拭きなよ。ついでに鼻も」

「ふあい……でも」

「んー？」

「ウエットティッシュで涙って拭いていいんですかね？ 鼻かんでもいいんですかね……？」

「わかんないけど……いいんじゃない？」

「ふあい……」

北上さんが差し出してくれたウエットティッシュで涙を拭いた。拭いたところがひんやりとして気持ちよく……でもなんだか濡れてて気持ち悪くて。でも仕方なくそのまま涙を拭いたティッシュで鼻をかんだ。

「ぐすっ……ちーん」

僕が鼻をかんだ反動で姿勢が前かがみになったとき、北上さんが立ち上がって僕の頭をくしゃくしゃしてくれた。

「……」

「びつくりさせちゃってごめんねトモくん」

「いや、僕こそごめんなさい。気の利いたこと言えなくて。せつかく真剣に話してくれたのに、こんなバカみたいなことしかいえなくて。ぐすっ」

「んーん。北上さんはね。トモくんの気持ちがうれしかったよ。ありがと」

「……」

「とりあえずさ。私がトモくんのことを拒絶することはないから」

そっか。それならよかった。僕の見える景色から、色が無くなることはきつともうないだろう。僕の目からは相変わらず涙が流れていたが、それは混乱や悲しみ、情けなさから来る涙ではなく、北上さんの言葉を受けての嬉し涙だった。

「だってさ。トモくんいたら私、マンガ読むのに集中できるからね」

僕の涙は半分乾いた。

「えー……北上さん……本気ですか……」

「本気だよー。いつもありがとね。そしてこれからもよろしく」

「うう……北上さん、僕、ここの客でいいんですよね？」

「そうだよ？」

「んで、北上さんはこのお店のマスターですよね？」

「そうだよ？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……はい。分かりました」

「ありがとね♪」

まあいいけど。北上さんのお店に来られるなら……こうやって話が出来たら、この人と一緒にいられるのなら、それぐらい別にいいけれど。

……そして今日。僕はある決意を胸に秘め、このミア&リリーに来

た。事前にバーバーちよもらんま鎮守府で髪を整え、北上さん好みのさっぱりした髪型にしてもらい、髭も剃ってもらって準備は万端だ。

ハルさんの店を訪れた時、僕は何も言っていないのにハルさんは開口一番『よし今日は気合いれるぞー!!』と言い、とても丁寧に、今までに見たことがないほどに真剣な眼差しで髪を整え、髭剃りしてくれた。シャンプーしている間の顔は見る事が出来ないもので分らないけど、恐らくはいつも以上に気合が入った表情で洗ってくれているのだろう。

「はい終わり！ 男子力が上がったよ!!」

「ほっ！ そ、そうですか？ ありがとうございます」

着ている服のセンスもいいハルさんにそう言われると自信が湧く。お子さんが僕の顔を見てニパツと笑って声をかけてくれた。

「トモ。さんぱつしたトモはかつこいいくまー」

「ほんとに？ ありがとう」

「ほんとにだくまっ。きつと母ちゃんもほれるくまー」

「それはまいったな。トモが俺のライバルか……」

いやいや勘弁してくださいよ……ハルさんの奥さんって会ったことすらない人なのに……

「大丈夫。うちのカミさんと北上は人のものには手は出さない主義だから」

「？」

「うちのカミさんがトモにほれるっつーことは無いってことだよ」

「はあ……っ？」

ハルさんが言っていることがいまいちよく理解出来ない。人のもの？ だからカミさんは手を出さない？

ハルさんの元に、息子さんが走ってきた。息子さんはいつものようにアホ毛をピコピコと動かしながらハルさんの足にまとわりつき、楽しそうにはしゃいでいる。

「トモ。勇気が出ることを教えるよ」

「はいっ？」

ハルさん……まさか今日、僕が何をするつもりなのか見抜いている

のだろうか……？

「まあ多分、気付いてることだろうとは思うけど……」

「はあ……」

ハルさんはお子さんの両肩に手を起き、僕の方に身体を向けさせた。

「北上とうちのカミさんは……球磨って言うんだけど……二人は、姉妹だ」

「はい。前に聞きました」

「つまり、この子の母親……俺のカミさんは、艦娘だ」

「……」

「大変なこともあったし、辛いこともたくさん体験したよ。でも今は幸せだし、カミさんもきつとそう思ってくれてる」

確かにこの言葉は、僕に勇気を与えてくれた。

「だろ？」

「はい」

やっぱりこの人、僕がこれから北上さんに会う目的に気付いてるのかな……？

「どうだろうね？ ニヤニヤ」

「いや、絶対に気付いてるでしょハルさん」

「うん」

『応援してるよ』『がんばるくまー』という親子の温かいエールを受けた後、今度ハルさんのうちに遊びに行く約束をして、ばーばーちゃんもらんま鎮守府を出る。その後そのままミア&リリーの前に立って、僕は入り口の取手に手をかけた。

「おっ。いらっしやーい」

いつものように、やる気ない……でも僕の耳にとても心地よい声が聞こえた。北上さんはいつものように、20冊のマンガ本を傍らに置いてカウンターでマンガを読んでいたようだった。

「北上さんこんちわ」

「ほーい……あーとところでトモくん」

「はい？」

「私今、ちょうどおなかすいてるんだよね」

「はい」

「……」

「……」

「……」

「……ミニホットドッグでいいですか？」

「あと、冷たい飲み物も」

「冬なのに……アイスカフェオレでいいですか？」

「ありがとね♪」

カウンターに立ち、エプロンをつけて調理に入る。ロールパンを4つ準備して包丁で切れ目をいれ、キャベツの千切りとボイルしたソーセージをはさみ、トースターで少しだけ焼き目をつけてあげる。

北上さんは相変わらずマンガを読んでいた。店内に静かに鳴り響く、トースターのタイマーのジジジという音と、ページをめくる音。

「北上さん」

「んー？」

「今日はお話があつてきました」

「奇遇だねー。私もトモくんに話があるから待ってたんだ」

トースターで焼き色をつけている間に、グラスを2つ準備して氷を入れ、濃い目に入れたコーヒーと冷たい牛乳を注ぐ。ガムシロップを入れてほどよくかき混ぜ、アイスカフェオレが2つ出来、一つは北上さんの前に置いた。北上さんは僕がカフェオレを置くやいなや、手を伸ばして一口飲んでいた。マンガを読みながらなのに、正確にグラスに手を伸ばして掴んでいた。

「北上さん」

「んー？」

「北上さんは、僕にとって大切な人です」

「……奇遇だねー。私も」

チンという音がなり、いい具合にミニホットドッグに焼き色がついた。それをお皿に盛り、北上さんの前に差し出した。

北上さんはマンガから目を離さずに僕が置いた皿からホットドッ

グを一つとって、それをむしゃむしゃ食べていた。いつかのように、やっぱりマンガに隠れて北上さんの顔が見えない。

「北上さん」

「んー？」

「僕は北上さんが好きです」

「……」

北上さんが一個目のホットドッグを食べ終わったのが分かった。マンガを閉じ、いつもの表情で北上さんが自分の指をぺろつとなめている。指についたケチャップを舐めとっているのかな。

「トモくん」

「はい」

「球磨姉と会ったことある？」

「ハルさんの奥さんですか？」

「うん」

「ないです」

「んじやさ。今晚ヒマ？」

「はい」

「んじやさ……ハル兄さんと球磨姉に、会ってもらえる？」

「……と、突然ですか？」

ハルさん。ハルさんのうちに遊びに行くのは、案外と早いタイミン
グになってしまいました。でも……

「いいのいいの。私の大切な人なんだから」

「で、でもやっぱり突然会うなんて緊張しますよ。何話せばいいのか
……」

「あることないこと適当に話しとけばいいんだよ。ハル兄さんとその
カミさんだよ？」

「うう……」

「トモくん」

「はい」

「……ありがとね。これからよろしく」

ハルさんには、いい報告が出来そうです。これから北上さんと二人

で、ハルさんご夫婦にあることないこと報告していきます。
終わり。